

南園會誌

第十九号



山口縣立萩高等女學校

南園會

南園會誌

第九十號



山 口 縣 立 高 蕨 女 學 校

# 目次

## △口 繪

- 一、第十八回同窓會總會出席者……………(コロタイプ)
- 一、南園會東京支部發會式記念……………( )
- 一、本科第十一回卒業生(其の一)……………( )
- 一、同……………(其の二)……………( )
- 一、實科第十九回卒業生……………( )

## △卷頭題言

- 一、一路光明を眼ざして……………會長 筒井捨次郎……………一頁

## △教 の 園

- 一、女子體育の諸問題……………特別會員 土屋 滿美……………三頁

## △修學旅行記

- 一、修學旅行記……………(各學年生徒)……………〇頁

## △文 の 園

- 一、作 文……………(各學年生徒)……………元頁

## △縁 の 園

- 一、詩、和歌、俳句、川柳……………(本二、三、四、實二生徒)……………三頁
- 一、朝鮮より……………福岡 さと……………九九頁
- 一、朝鮮より……………金井カメ子……………一〇〇頁
- 一、南園の昔様へ……………阪口たか子……………一〇一頁
- 一、東京市より……………山根 サト……………一〇三頁
- 一、撫順より……………河村千代子……………一〇三頁
- 一、臺北市より……………山内 喜代……………一〇五頁
- 一、東京市より……………中村かつ子……………一〇七頁
- 一、新春を迎へますに……………堀 よし子……………一〇八頁
- 一、就きまして昔様へ……………岩武 哉……………一〇九頁
- 一、悲想の巷……………松岡 綾子……………一一一頁
- 一、漫 歩……………大谷 ハツ……………一一二頁
- 一、旅……………岩武 正子……………一一三頁
- 一、雜 詠……………福井 靜子……………一一三頁
- 一、れわれのまゝに…………………………

- 一、冬の夜の點景……………境 千代……………一二三頁
- 一、亡き祖母の御案よ何處に……………内山 恭子……………一二四頁

## △學校記事

- 一、學校日誌抄…………………………一二五頁
- 一、卒業證書授與式…………………………一二三頁
- 一、學藝部だより…………………………一二九頁
- 一、南園婦人文庫だより…………………………一三二頁
- 一、運動部だより…………………………一三三頁
- 一、第十八回同窓會總會の記…………………………一四九頁
- 一、南園會東京支部發會式に就て…………………………一五二頁
- 一、昭和六年度南園會歳入歳出豫算書…………………………一五五頁
- 一、昭和五年度南園會歳入歳出決算書…………………………一五七頁
- 一、會 告…………………………青紙

## △會員名簿

- 一、特別名譽會員…………………………一頁

- 一、名譽會員…………………………一頁

- 一、特別會員…………………………一頁
- 一、舊特別會員…………………………二頁
- 一、校外會員…………………………三頁
- 一、在校會員…………………………四九頁

曉 雞 聲

御 製

ゆめさめて我世をおもふあかつきに

長なきとりの聲そきこゆる

皇后宮御歌

有明の月なほのこる空までも

のさかにひゞくにはとりの聲

皇太后宮御歌

くらきよにまよふ心をさまさむと

曉はやく鶏のなくらむ



茶屋川會樂會同月十年六和昭



昭和六年菊花落る  
日、東京府前田豊  
作氏邸に於て、南  
園會東京支部めで  
たく産聲をあげ、  
清香飄然たる大廣  
間て和氣識々の裡  
に慶會、一同喜に  
輝ける光景。(上)

宏莊なる前田邸庭園に  
於て一同記念撮影。順  
掛の中央の方は南園會  
特別名譽會員久原會夫  
東京  
人、右向つては前田  
令夫人、左は藤野舊特  
別會員(元本校教諭)  
右端は前田家御主人。



柴田 直代 笠置 先生  
 長井 密子 池上<sup>ニ</sup>キ子 長谷川<sup>ノ</sup>久<sup>エ</sup>  
 藤田 文子 藤田 實子 岩本 林子 岡田 先生  
 藤田 文子 藤田 實子 岩本 林子 岡田 先生  
 深井 子<sup>云</sup> 河野<sup>ノ</sup>ク子 森川 秀子 池上 先生  
 七俵 先生 黒瀬 子鶴子 中原 隆子 佐久間 千代子 棚田 先生  
 岡村<sup>ノ</sup>キ 橋本 貞子 中村<sup>ノ</sup>キ子 藤田 元子 神田 先生  
 藤村 多喜 玉井 節子 藤田 翠子 中野 友子 吉原 先生  
 富田 千恵子 渡邊 野<sup>ノ</sup>ヨ子 室谷<sup>ノ</sup>キヨ子 原東 葛子 今城 先生  
 長谷 喜代子 淺野 愛枝 金子 恭 川上 翠子 田端 先生  
 井町<sup>ハ</sup>ル 伊東 昌子 本永 松江 田中 操 北野 先生  
 藤田 先生 内山 恭子 山本 祐子 内山 貞子 王置 先生  
 有田 先生 官野<sup>ヒ</sup>サ子 吉田 花子 金子 光代 河内 先生  
 安藤<sup>ノ</sup>久<sup>エ</sup>



山本 丕子 笠置 先生	竹田 貞子 河村 總江 服部 富實子 河合 先生	山本 美智 齊藤 雪子 田北三年子 岡田 先生	山本 昌子 北野 先生 池上 先生	阿武トシ子 今道 先生 伊藤 先生	末岡 益子	松浦 幸子 横山 藤美子	岡崎 文枝 神田 先生	吉原 先生	中野 先生	今城 先生 秋山 先生	三好 喜代子 坂本 展子	岩武 哉 齊藤 信子	岡崎 文枝 神田 先生	櫻長井 先生	阿武トシ子 石光 幾代子 三好 勝子	山縣 貞子 岡村 喜久子 守田 律子	今城 先生 秋山 先生	末武 貞代 田坂 千鶴子 三好 喜代子	岩崎 民子 田淵 先生	藤田 先生	竹原 珍子 上利 光子	中村 静子 宮内 信子 有田 先生	尾崎 谷茂 藤 高杉 愛子 河内 先生	玉置 先生	七俣 先生	藤田 先生
大島 季子 末光 紹代子 龍美タミ子	松浦 富枝 龍美 雪子 上田 昌子 北野 先生 池上 先生	福間 正子 松浦 幸子 横山 藤美子	堀田 文子 岩武 哉 齊藤 信子	岡村 孝子 山縣 貞子 岡村 喜久子 守田 律子	末武 貞代 田坂 千鶴子 三好 喜代子	石光 幾代子 三好 勝子	阿武トシ子 石光 幾代子 三好 勝子	岡村 孝子 山縣 貞子 岡村 喜久子 守田 律子	末武 貞代 田坂 千鶴子 三好 喜代子	竹原 珍子 上利 光子	中村 静子 宮内 信子 有田 先生	尾崎 谷茂 藤 高杉 愛子 河内 先生	玉置 先生	七俣 先生												



二の共(月三年六和昭)生業卒回一十第科本



- |       |       |             |       |       |
|-------|-------|-------------|-------|-------|
| 子島 栄生 | 瀧田 栄生 | 引津登引源 高登 豊生 | 正富 栄生 | 阿部 栄生 |
| 曾根 豊生 | 土味 栄生 | 中林 輔生       | 菅内 豊生 | 菅田 栄生 |
| 末丸 貞升 | 峰山 美雄 | 山本 久生       | 岩瀬 勇生 | 田所 栄生 |
| 谷原 英生 | 末岡 幸生 | 田邊 千雄生      | 三戸 孝生 | 森山 栄生 |
| 岡村 幸生 | 山崎 貞生 | 岡林 啓生       | 中田 豊生 | 今泉 栄生 |
| 岡本 久生 | 谷本 豊生 | 三浦 豊生       | 幸湖 幸生 | 中野 栄生 |
| 藤田 文生 | 岩丸 貞生 | 岩瀬 豊生       | 岩本 久生 | 吉原 栄生 |
| 藤間 五生 | 岩部 幸生 | 岩山 久生       | 岡本 文生 | 幡田 栄生 |
| 大似 豊生 | 末武 豊生 | 岩崎 幸生       | 岡本 久生 | 岩田 栄生 |
| 岩部 富生 | 岩崎 幸生 | 土田 昌生       | 岩瀬 幸生 | 岩江 栄生 |
| 山本 美生 | 岩崎 幸生 | 田井 三生       | 岡田 栄生 | 岡田 栄生 |
| 岩田 貞生 | 岩崎 幸生 | 岩崎 幸生       | 岩崎 幸生 | 岩崎 幸生 |
|       |       | 山本 久生       | 岩崎 幸生 | 岩崎 幸生 |

河合先生 笠置先生  
 中原 増  
 矢次 清子 岡田先生 岡田先生 岡田先生  
 佐々木初代 藤井玉子 田中照子 北野先生 伊藤先生  
 三浦富美子 熊野實江 福永權榮 今道先生 池上先生  
 岸千代子 弘津静子 田村高子 大田ヒサ子 七俵先生  
 須山マサ子 中村セツノ 阿部スミ 東野幸子 神田先生  
 藤村静代 金子信子 寺戸ハルノ 香原菊枝 吉原先生 桜井先生  
 田村トキエ 大山玉代 大田タミ子 田中敏子 今城先生 中野先生  
 三浦鳩子 三隅田貞子 金子芳子 永田常子 秋田先生  
 藤田ヒサ子 植村春子 小野村清子 吉岡トキヨ 田淵先生  
 藤田千代 都築松代 吉崎久子 山本照子 有田先生 藤田先生  
 藤田先生 藤田先生 西村正子 栗佐著子 河村先生  
 玉置先生



## 卷頭題言

### 一路光明を眼指して

會長 筒井捨次郎

温き父母の懐に無心夢中に其日くを楽しく暮らして来た諸子も、自覺の光さし初むる青年時代に進むがまゝに種々の感想が湧き起ること、思ふ。友人隣人の言動と其の眞意、知れる限りの人々の様々の生活、新聞紙、世間話等によりて報ぜらるる種々雑多の社會的出來事、考へれば考へる程興味もあるが不可解の事が多い。修身のお話、お寺の説教等で聞いた様に善人も必ずしも榮えない。悪人らしく見える人でも相當に榮えて居るものもある。一代の尊敬を集めた人にも、いろ／＼な批評が耳に入る。平生此人こそと信頼せる長上友人の言動にも疑へば多少の疑點もある。時には絶對的に信頼せる兩親と雖も、自分を十分に理解して呉れないこともある。社會にも美しき光明の半面がある。と共に醜い暗黒の半面もある。理想の人は現實の世界には見當らない。世は目明千人、盲千人と言ふが目明は少なくて却つて盲が多い。従つて世に立つには幾分の表面的の體裁を飾る必要もあり、人と交るには己れを正解せしむるだけの技巧も要る。斯く眼覺めて見れば、表裏を厭ひ、技巧を惡み、單純明快一本調子を至上とする純なる青年男女の心には人生は呪しきものさへ見える。社會は居るに堪えない所さへ感ぜられる。此處に於て深く物を考へる若人は必ず一大懷疑に陥るのが常である。多感なる青年男女が深き悩みに沈むことが多い。鋭敏にして純な心の持主たる若人の間に往々譎激なる思想の蔓延するものも亦かゝる所に根ざすことが少くない。古來此の時代を人生の危機と言はれて

居るのも一面かゝる事情があるからである。

然れども純なる我が南國の乙女達よ、深く／＼考へて多少とも此の悩みを體驗した私の言に耳を傾けよ。これ乏しき私のみの考へでなく、幾多老先輩の悲痛な告白の結晶である。教へられ、導かれて僅に見出した正しき道である、と私は信じて居る。

如何にも日に晝夜あり、物に陰陽あり、天象にも晴曇がある。理想の世界は到底人類のユートピアで現實の世にあるものではない。併し自然は嚴肅にして少しのこまかしもない。天は盲目の縁で決して不明ではない。ただ一路光明を眼ざして進め、恰も暴風に屈せず、花が光を追うてその笑顔を太陽の方へ向けるが如く、又よく酷寒に堪へて一路春を眼ざして進む若葉の如く、光明のある所に必ず汝の心の闇を照らす光もある。我等日本人が太陽を憧憬し、之を以て至上神とし、我等が祖神、天照皇太神の靈として之を欣求せる如く、何處にか光明を求め之に向つて一路邁進せよ。これ我等の祖先が多年の經驗より得たる貴き道である。而して己れも明き清き直き誠の心を以て一切萬物に對へよ。これ所謂惟神の道で我が大和民族の幾萬年來體驗の結晶である。此の明るき清き直き誠の心こそ光明の源泉で畢竟我等の外に認める光明は此の心の反映に過ぎないのである。即ち清水の如く澄んだ心、水晶の如く一切の不純なき魂こそ我等の身の内に輝く太陽で、之を蔽ふ不平、不満、我儘、利己等の暗雲を拂へば常に赫々たる光を仰ぐことが出来る。時至らず嚴冬の寒氣に遇ふことあるも必ず新春の來るを信じ強く固く己れの太陽を守り一路邁進せよ。この大信念、この大精進こそ我等の祖先の遺せし訓へで古來偉人聖者のたどつた道である。

明治天皇御製

さしのぼる朝日のごとくさわやかに

もたまほしきは心なりけり。

## 教の園

### 女子體育の諸問題

特別會員 土屋 滿 美

一、不愉快なる生活、能率の擧がらない生活

昭和の今日尙「女子體育など……」と言つて其の不必要を説く人が尠くないことは甚だ遺憾な事である。おまへは大きくなつたから少しは家事の手傳をしなければいかんと言つて、體育の爲めの時間等は遊びの時間、贅澤な時間のやうに考へられて、一個の完成された女性是最早一家の中に封じ込まれてしまふ。女は料理や裁縫、作法、其他茶、生花、琴、三絃等が堪能であれば一人前だと言ふ。之等が結婚の第一條件にあげられ、身體的方面は只、外觀的に觀て健康であれば其れて簡單に済んだ。

人生生活の基となるべき體育に就いて、社會人も婦人其の人も案外無關心、無自覺であるため、今日尙歐米婦人に比し遙かに體質、體格、體力が劣り、従つて生活能率が低下し、常に神經衰弱、胃病、結核等の病に冒され、毎日不愉快、不幸なる日を送る婦人が多く、之等の病氣にたふれることは、文明國として憂慮すべき大問題である。

二、運動競技選手は夭折するか

「運動競技選手は夭折する」と言ふ事は眞實でなく、机上の空論、推論に過ぎない。之の問題は體質の弱い者が運動して死亡することを意味する言葉である。即ち生來體質の弱い、しかも遺傳的に疾病に冒され易い素質を有する者が

選手にならなうがため試合の一月位前から急に猛練習を始め、ゲームが終れば練習を中止し、或るときは暴飲暴食をなし、不節制なる生活をし、誤まつたる運動練習をなしたるため、發育の停止する時期にたふれるのが多いのである。生來體質の強い、しかも遺傳的に疾病なく長命の系統の者が、いくら猛練習をし、學校卒業後運動を止め、一定の職業に就いても尙元氣で病氣に冒されることなく、在校時代より以上の能率を挙げ、活動を續けて居る者が多い故に一概に運動選手は夭折するとは言へない。夭折すると言ふことは諸々の關係があつて一概に言へないが、要は其の人の體質の如何、其の人の運命の如何によることである。

女學校に於て運動選手を選定するに就いても、注意すべきは選手としての體格に適合するか否かと言ふことである。「在校中運動選手であつたから夭折したのだ」と社會人から非難されることがまゝある。

女子は春季發動期になると、各方面に男女の差別が著しく發揮され、特に十六七歳になると著しく脂肪が生理的についてくる。(脂肪過多は病氣で生理的でない)。此の時代に何等特別なる運動競技の練習をしなくても一向脂肪のつかない生徒がある。之等脂肪のつき方の少ない者は多くは呼吸器型で、呼吸器病に冒され易い體質の所有者である。しかるに之等脂肪のつかない生徒に特別な運動練習を行はせなくても彼は走高跳が上手であり、ランニングが早かつたり、跳躍力が強かつたりする。故に遂知らず知らずのうちに運動選手になつたがものである。やがて之等の生徒が卒業後夭折すると、一も二もなく在校中の運動選手になつたことをにくみ、學校をのらふことになる。

世界的選手人見嬢が昨年の初秋、二十五歳を一期とし偉大なる好績を残して夭折した。彼嬢は岡山高女在學中よりテニスの選手として、卒業するまで毎日火の出る様な練習を續け、岡山縣に於けるテニス界のナンバーワンであつた。卒業期近づくに従つて陸上競技界に其の天稟を發揮し、三回まで歐洲の天地に活躍し遂に世界的選手となり、今尙萬人の破ることの出来ない多くのレコードを残して居る。

彼嬢がブラークへ或は「アントワープ」へ、獨逸へ、巴里へ各地の大會に出場し、偉大なる闘志フラインディングスプリントを發揮し、我國女性のため大氣焔を擧げ得たるは全く運動競技の賜である。彼嬢が十年間の長い間、グラウンドに於て陶冶されたスポーツ精神と、強き信念とは萬人を統制する大なる力の發揮である。

多くの婦人は外國へ旅行すると言ふことに於てすら早途中に於て感冒にかゝるとか、胃腸を害するとか、其の他の病に冒されて目的を達するまでに行かない。

彼嬢の死は運動をした所以に非ずして全く多忙なる彼の生活が其の死の最大原因である。常に運動競技をなし居たる故あれ丈の活動、あれ丈の多忙なる生活を今日まで繼續し、容易く難事をきりぬけてくることが出来たのである。「ブラーク」へ入つて戦の最中彼嬢は數回に渡る各種の注射をして戦ひ、遂に榮冠を得るにいたつた。ブラークから歸國するや席のあたゝまる日なく、地方の講演に或は各地の實地指導に、多くの後輩の養成に務め、責任を重んじ我國女子體育界のため犠牲的に奮闘して來たのである。

此の如く常に多忙な生活を送り、責任を重んじたため、彼の死を早からしめたので、彼の死は決して運動したる爲、選手となりたる所以でないことは明白である。

勿論今日運動選手と言つても諸々差別を生じて居る。

世界的か、或は日本的か、地方的か、或は其の學校のみの小さき選手が將又種目によつては、陸上競技、水泳、排球等に分類され、一概に運動選手と言つても範圍が擴く多種多様である。従つて其の運動の方法に於て練習振りも、同じ學校、同じ種類の選手にしても程度を異にしてゐることは當然のことである。

彼嬢が死して以來、我が國女子體育界の發展に女子競技界に一大頓挫を生ずる機運の生じたことは、誠に我が國女子體育進展上遺憾なることである。

### 三、運動競技は女子特有の美德を損ふか

世の中には研究の不充分から表面に表はれたる極く僅少なる二三の弊害を見、之を誇大して非常に有益なるものでも一概に有害物と見做してしまふ例が多々ある。

前述の選手問題を始め、其の他現代の女子體育に就いて、世人の考へ方の次に似た點が多々ある。

例へば女子に運動競技を行はせると動作が亂暴になり、言葉遣ひが悪くなり、且つ我國女子特有の優雅な感情や柔順、貞淑の美德を失ふと言ふのである。之れは勿論全部に對する批評でない。此の事が眞實とすれば一つは指導者の

指導方針の誤れること、一つは運動競技を行ふ女子其の者がスポーツの本質及び任務の無自覚無知識の爲めである。女子が體育によつて柔かなる均齊的な體養つてこそ、はじめて優雅な容姿も生ずるもので、基礎が養はれてゐなければ眞に優雅な動作は出来ないものである。しかし若し誤つて女子の運動も、亦男子の夫れと相等しきものであるとするならば、或はかうした心配、問題も必要であるかもしれないが、決してさう考へる必要はない。

本當に正しく考へられる女子體育は、本當に女らしい氣品と、明るい無邪氣な心情を陶冶し、更に強壯なる身體と調和されたる動作とを養つて、我國婦人特有の美德を一層向上せしむることである。

#### 四、女子が體育運動をすれば醜くなるか

女子が體育運動をすれば手や、足が太くなつて醜くなると言ふ考へが、未だ社會の一隅に残つてをることは甚だ遺憾で、女子體育進路を阻むべき一大癘である。

勿論體育運動を行へば手も足も、頸も、腹も、頭も太くなり、且つ強くなる。然し之がため醜くなると言ふことはない。若しも之が事實とすれば其れは運動の仕方、方法を誤つてをるので注意すべきことである。

女子肉體美の理想的標準とされる古代ギリシャのヴァイナスの像のあの均齊的な發育は、體育に依つて養はれたものであることは今日立派に證明されて居る。

容貌は粉黛を以て美化し得ると考へる人があれば大なる誤である。運動場は不老長壽の道場である許りでなく、唯一無二の美容所である。長くて細き頸を太くし、青白い血貧顔を血色付け、太き短き脚をすらりと矯正し、O脚X脚を正しくし、狭い貧相な胸、蚊のなくやうな小さな呼吸を太く丈夫にし、神經衰弱、陰鬱なる思想を明るく清く、無邪氣にすることが出来るのである。

かつてフランスから日本婦人をモデルにしたい爲にわざ／＼來朝した有名な畫家が、日本婦人の眞の美人は之を漁師の妻女等に於てのみ見出すと言つたと言ふことである。のび／＼とした肢體、潑瀾たる元氣、そして鮮やかな健康それこそ美的要素の第一條件である。

#### 五、太つて居るのが肉體美か

此の「美」と言ふことはすべて主觀的であるからフランスの畫家が眞の美人は漁師の妻女に見出すと言つても或る人は之れを美人に非すと否定するかもしれない。

しかし美の標準は大體決まつて居る。此の美の中には人間自體に存する美と、自然美とがある。

此の人間自體に存する人性の美に就いては色々標準を異にした時代があり、或る時はこの肉體美を呪ふべきものとした時代もあり、亦之に反して肉體美を美の極致として嘆稱した時代もあつた。希臘人の如きは最も此の肉體美を賞したものである。

此の如く美の欲求上その標準を異にしたことは、其の時代人の思想に依つて美の解釋上に相異があつたためである現代文明人の欲求する人性の美は合理的な美でなくてはならぬ。一體此の人性の美と言ふものを分つて男性美と女性美との二つに分けることが出来る。

男性美とは男性特有の美で、女性美とは女性特有の美で、何れも男女共通しない獨占的異性美である。又此の男女兩性美から二つの美に分つことが出来る。一つは精神上に現はれる精神美、他は肉體自身に表現される肉體美である。肉體美は肉體より發する有形的な美で、之れを二つの美に分つ事が出来る。一つは外形美と他は内容美とである。

外形美と言ふのは筋肉とか身體各部の均齊的な美である。

内容美とは身體各組織の身體組織特有の美なるが故に、各器官の機能の美、即ち健康美である。

外形的の美は更に動的の美と、靜的の美との二つに分つことが出来る。容貌とか身體各部の均齊的發達の美は靜的の美であり、肉體が活動する刹那々々に於て表現さるべき美は動的の美である。

立てば芍薬、坐れば牡丹

歩く姿は百合の花

此の歌の意味も此の動的の美を表現して居り、水泳の上手な飛込み、正しランニング走法、しどやかなお菜くみ、すべて此の動的の美である。

斯く人性の美を考察し、美の上より體育の任務を論じて見れば、體育は精神美及肉體美の表現が主たる任務とも言

へる。

肉體美の表現は身體の外形の美、内容美の完成で調和的美である。換言すれば、解剖的、生理的の美の表現で即ち解剖的に言へば、筋肉骨格の附着の具合、身體各部の均齊的發達、生理的に言へば筋肉の光澤、色等の美である。故に身體の優美を表現せんとするならば、先づ身體の内容美、外形美の養成に努めることが緊要である。

六、女子の理想的肉體はヴァイナスの像か

ギリシヤのヴァイナスの像に基いて近代の彫刻家、生理學者が理想的女子の身體を構成した標準を擧ぐれば、

「身長は五呎五吋  
體重は一三五ポンド  
臂を左右に伸ばし中指より中指までの長さ五呎五吋（身長大）

手の長さ其の十分の一  
足の長さ其の七分の一

胸の直徑は身長五分の一

會陰より地面までの距離は會陰より頭の尖端までの距離に等し

膝は恰度會陰と踵との中間

肘より小指までの距離は肘より胸の中間までの距離と同様

頭の尖端より臍までの測定は足の長さと同様

頸と腋下の間は同距離

腰の周圍は三十九吋

胸圍は三十四吋

上臂十三吋 手頭六吋

脚の排は十四吋半

股は二十五吋 頸は八吋」

であると發表して居る。

又田口博士は西洋婦人と日本婦人の上半身及下半身の調和的發達を比較して居る。

	身長	頭高	上肢	下肢
西洋婦人	1m615	0.196	0.663	0.823
日本婦人	1.462	0.226	0.653	0.750

西洋婦人は手脚が長く、頭が小さく「スラリ」とした體格であるが、日本婦人は身長が低く、脚が特に短く、不格好に出来てゐる。

一體身體各部の均齊的發達、即ち、外形的肉體美は上半身と下半身の具合によつて判定されることも言へる。

明治天皇御製

なまたけはすなほならなむうつせみの世にぬけいでむ力ありとも  
いとまなき世にはたつともたらねの親につかふる道な忘れそ  
たらねの親につかへてまめなるが人のまことの始なりけり  
世の中の風にこころをさわがすまなびの窓にこもるわらはべ  
ひとりたつ身になりぬともおほしたこし親の恵をわすれざらなむ



## 修學旅行記

### 本科第一學年

#### 深川地方へ

本一 綿津和枝

修學旅行！ 私共が夢にまで見て待った其の日は来た五月十六日。私等一年生百五十名は、三隅山莊を見學して、それから深川の大本寺までゆくのである。

躍る胸をおさへながら、友と一緒に寄宿舎を出て玉江に向ふ。空を仰いで見る。「大丈夫かしら、今にも降りさうね」。誰か氣遣はしげに言つた。空はどんよりと曇つてゐて、旅行にはふさはしくない日だ。

玉江驛より汽車に乗る。岩國の三年生と同じ列車だったので、かなり込んだ。汽車は青葉の山の間を、氣持よく走り出した。しばらく行くうち細雨が車窓へ、ぱら／＼とたゞきつた。「おや、たう／＼降り出した」。と思つて、窓外の田圃を見ると、ほつ／＼とたくさんの波紋をつくつてゐるではないか。皆は氣遣はしく腫を見

合はせた。しかし、さすがは楽しい修學旅行だ。車室はうれしさうな笑ひ聲でみなぎつてゐる。

三隅驛で下車する。三年の方が窓から、しきりに白いハンカチをふつてゐられる。が、其の汽車は白い煙と大きい響だけをのこして行つてしまつた。雨がはげしく降り出してゐる。三隅山莊に向つて歩み出したが、雨が降り風が吹くので大困り。これが麗かなお日和だつたら、どんなに愉快だらうかと思つて歩んだ。山莊まではかなり遠い。雨はつのもり風は益々荒れだした。やつと山莊にたどりついた時は、誰も随分ぬれてゐた。山莊では雨が降つてゐる爲に、十分見學することは出来なかつた。しかし、雨が降り風が吹いて、清風松がうなり、附近の木々ざわめいて、どこか威厳があり、すこみがあつて、英傑村田清風先生をしのぶによかつた。前庭の尊理堂、高田松、楠公梅、吉野櫻、清風先生之碑、禮拜所等を見學して、眞に先生の高風を欽仰した。

やがて山莊を辭して正明市驛に向つた。もう此の時の天候はさながら悪魔が怒つたやうだつた。傘等は少しも開かれないやうに荒れだした。大分列を正して歩いたがたう／＼かなはなくなつて、こゝから正明市まで約一里弱であるが、みんな走るこゝになつた。私は中山さんと

有田さんと三人連立つて一生懸命に走つた。雨はたゞきつける。風は吹きまくる。うつかかりしてゐると、はね飛ばされさうである。もう水たまりも草の中もかまはずに無茶苦茶に走つた、走つた。さうしてたうとう正明市驛までついた。

全身づぶぬれ、襦袢からズロースまで、びつしよりとなつて、脊中は丁度河か瀧のやうに、しづくがたら／＼と流れる。髪からもカバンからも水が垂れて、驛の待合室は、私達の爲に全く水だらけとなつた。一生懸命に走つたので道では汗がたくさん出て、少しも寒くなかつたが、驛でちつとしてゐるうち、だん／＼寒さを感じてきた。ぬれた着物が、びつたりと體へ巻きついて、ちよつとも動くと、冷さがち／＼と身にしむ。ほんたうにどうなるかしらと思つてゐると、先生が「このまゝ、大塚寺へゆけば、みんな風邪を引くから今日はこゝから歸りませう」とおつしやつた。ほんたうに此のまゝで行つたら病氣になつてしまふし、又面白くもない。

みんなこゝから汽車に乗つて歸ることゝなつた。かへりの汽車には、宇部高女の人多数に乗つてゐられた。やはり旅行に来てこんなお天気では悲しいだらうと思つた。

汽車の中でお辨當を食べた。玉江で下車し、それから自動車で寄宿舎へ歸つた。丁度午前十一時頃だつた。

ほんたうにつらい遠足だつた。こんなひどい目にあつたのは始めてだ。しかし今ちつとかうして、思ひかへしてみると、何ともいふことの出来ぬうれしさ、愉快さがこみ上つてくる。私でも、あんな苦しさに耐へることが出来たのだ。

一生忘れられぬ此の遠足の目よ。永久に、楽しい思ひ出とされて、私の頭の中へ残ることゝ思ふ。

#### 深川地方へ

本一 松浦八重

青葉かをる六月四日、私達一年生は先回の旅行の仕直しに、大塚寺へ行くことゝなりました。旅衣もいごからやかに、塵まだ立たぬ朝まだき躍る胸をおさへながら、玉江驛へと急ぎました。何ともいはれぬ嬉しい氣持がします。空までが私達の喜びを共にしてくれるやうに、刻一刻と晴れて参ります。驛には早や七八人來てゐられましたが、追々皆集つて來られました。

先生始め生徒一同プラットホームに出て、しばし待つ内に、汽車は黒煙をはいて、私共の前に止りました。

奈古大井方面から乗つてこられた人々は、にこ／＼と車窓から顔を出してゐられます。知り合ひの友を呼びつ呼ばれつして車中の人になりましたのは、七時七分の事で御座いました。活気に満ち／＼たる我等を運べる汽車は、轟々と凄じき音をたて、軋り出しました。

左に青い山、右に廣々とした青藍色の海を望みつゝ、汽車は三見をこえ、三隅を通過しました。先達て此處から正明市までの間雨風はげしき中を、種々の困難をおかして通つた事が思ひ出されます。他の友も同じ思ひであつたのでせう。互に此の前の旅行に難儀した事を語りつゝ其の走つた路を指さしたり、或は車窓にもたれて、なつかしげに正明市驛を眺めたりするものもありました。正明市驛で美禰線に乗換へ山の中の方へと進み入り、やがて目的の驛、長門湯本で下車したのは八時二十一分でした。それから温泉町へと進みました。町へ入ると、真中に川が流れてゐます。左岸の方を歩いて行く内に、深川焼賣店を見ました。深川焼は、毛利輝元公が朝鮮から連れかへれる陶工李勺光をして、古窯跡を検せしめて、再興せしめられたもので他國ではこれをも秋焼といつてゐるさうです。此處の近所の橋を渡れば直ぐ右手に温泉が御座います。此の温泉は鹽類性硫黄源泉で、リウマチ

と。戦師は

「此の清らかな地をけがす恐れがあるから、こゝから八町離れた所にして下さい」

といはれると、老人はこれを承知したが、暫くすると山も林も震動し、電光がびか／＼と發しました。おどろいて見るに凡そ十丈餘の瀧が懸り、老人は額に法衣をいたゞき雲をけつて去つて行きました。後數日たつと果して山下に温泉が湧き出ましたさうであります。これが深川温泉です。それから幾百年たつても絶えず湧き出て、貴い方や遊覧の人を初め、病人等も引續き來て今日の繁華をなして居るのであります。此の温泉の傍を通り小山の上に登つて住吉大明神の社で休息して後、一同は大寧寺へと向ひました。路傍に首無し井戸があります。此の井戸は大内義隆公が逃れてこられて、井戸へのぞかれたら體は映つたが、首が見えなかつたので、もうどこまで逃げてもだめだと觀念された井戸ださうです。其の先の方には義隆公兜かけの岩もあります。大寧寺に着くとすぐ晝食です。親しき友四五人と樹下に席をとつて、携へてきた御饗當を聞いておいしく愉快に戴きました。それからあちらこちら遊び廻つてゐる内に

「お集りなさい」

スヤケド、タムシ、關節炎、キリキズ、中風、ヒゼン其の他一切の病によいさうです。此の温泉の起原について次のやうな傳説があります。

大寧寺三世の住職、定庵禪師が、厚狭郡松庵に居られた時、明神がしばし現はれて、法をきかれました。後禪師が大寧寺に轉ぜられてからも、明神は時々此の家に來られて、法を問はれました。或夜晴れて、月はよく冴えあたりにも居らず、峰の松の音ばかり靜かに聞えてゐる時、禪師が弟子を連れて、鐘樓の西の方に行かれました。するとひよつこり一人の老人が現はれました。見れば大きな岩の上にすわつてゐます。禪師が

「お前は普通の禪法を問ふものではあるまい。名を言へ」

と言はれると、其の老人は

「松風の聲の中なるかくれ家に今も昔も住吉の神」

と歌ひ更に

「法衣を下さじ」。

と言ひました。禪師が直ちに投げられると深く體をいつて、

「御恩返しに私はこの地に温泉を湧き出させて多くの僧たちが身を清められるのに便利にしよう」

といふ先生のお言葉を聞いて、お寺の中へ入り、池上先生からお話を承りました。其のお話によると、此のお寺は永享年間（約五百年前）大内氏の支族管頭弘忠の開祖で、開山は石屋眞梁禪師であります。天文二十年（約三百五十年前）大内義隆共の臣陶晴賢の反逆に遭ひ山口から逃れて此の地に來りしも敵の追撃が急なので、防ぐに術なく遂に當寺に於て「討つ人も討たる人も諸共に如露亦如電應作如是觀」といふ辭世の歌をのこして自刃せられました。其の子義尊及從臣冷泉隆豊等多數が殉死しました。冷泉隆豊は無念の餘り腹を切り、腸をつかみ出して天井へ投げ付け、壯烈の最後を遂げました。此の變の時七堂伽藍が悉く焼けたが、後毛利元就之を再建し寺領五百石を賜ふに及び又舊觀に復し、幾多の高僧が輩出したことでもあります。お話を聞いた後寶物を拜觀しましたが、羅漢様の像をはじめ毛利元就公輝元公の書かれた歌や名人の描いた繪畫など澤山にありました。それから境内の高い所の綠林の中にある義隆父子及び殉死の將士の墓に參つたが、義隆の墓には其の辭世の歌も刻んでありました。しばらく休憩後驛へと向ひ、三時七分の汽車に乗り、思出多き長門湯本を後にして歸途につき四時二分玉江驛で下車しました。人員調がすんでこゝで解

散となりました。それから吾家に歸つたのは午後五時頃でした。此の日の旅行はまことに愉快でありました。

## 本科第二學年

### 秋芳洞探勝記

本二 高崎千壽子

時計の音も嬉しさに夜のとばりをやぶつた。

今にも泣き出しさうな空模様だ。自分までが又泣きさうだ。「降りはずまいか」。不安の胸をおさへて登校した。皆さんの嬉しそうな顔。學校中笑顔で一ばいです。雨氣のさしたどんよりした空模様の中を午前七時半十二臺といふ自動車は列を正して勢よくぶー／＼と爆音をならせながら動き始めた。學校へ、「行つて参ります」。をしていよ／＼秋芳洞へと出發した。車はまはりの物を蹴飛ばす勢で一刻々々目的地へ近づきます。雨は次第にひどく降出した。路の兩側には水田があり、野があり、山があり、清い小川もあり、皆思ひ／＼の着物を着て悠然と控へてゐる。所々には誰かに忘れられたかの様に薄桃色の山つ／＼が咲きこぼれてゐる。折柄の雨に若葉は新緑の色が一層目立つて見える。阿武川の河中はだんだん狭く

なつて行くのを感じる。濁水が川もせましと急ぎ足で流

れて行く、何とも言へぬ野趣に満ちた繪の様な風情である。時折冷たい風がさつと吹くと窓のすきからしぶきが飛込んで思はず顔を見合す、又外では若葉が頭をすれ合す。車内では思ひ／＼の面白い談笑に耽りつゝ秋芳洞に着いた。一回元氣よく下車した。雨はうつつ程ひどく降つてゐる。宿屋でいろ／＼入洞準備をし先生は身輕さうな御支度に、私達は舞踊でもする様にスカートをたくり足の裏のいたくなる様な草履をはき大へん滑稽に見えた。先づ最初に驚かされたのは大量の水が滔々と大きな音をたてながら瀑布となつて流れ出てゐる。洞内はとて／＼想像だもすることの出来ない大きさで、ごろ／＼といふ物凄いや音がし暗黒の世界へ電燈がさう／＼と異様に光つてゐる。案内者は平氣で洞内を我が物顔に歩いてゐる。足本はなんだか氣持の悪い程びしょ／＼して寒さを感じる。いろ／＼物凄いや有様や、不思議な事や、珍らしい物等見聞して、いよ／＼洞内の見學を終へ、入口に達し明るい日光に浴した時には本當に太陽の有難さを感じた。考へて見るに今日の旅行は空は泣いても私達には實に嬉しい有效な旅行であつた。私の特に驚いたのは自然の力の偉大さです。

人間の想像も及ばぬあの一大奇工を現出した自然の妙技、見る度、聞く毎、感歎詞を發せずには居られせん此の様な偉大な力のある大自然の前には、誰しも人間の如何に小さく貧弱なかを感じるであらう。

## 本科第三學年

### 岩 國 へ

本三 長山菊代

旅行！ 何と楽しみのある愉快な言葉ではないか。

學生時代にとつて、何が一番楽しいかと問はれたならば誰しも旅行だと答へるだらう。

宿泊旅行！ これは私達が女學校に入學して以來初めて味はふ喜びであり、楽しみであつた。

旅行そのものゝ雰圍氣の渦の中にあらゆる好奇心が互に交錯して、明るい嬉しい感覺に陶醉しながら、幼い子供の様な喜びに浸つてゐた。

五月十五日、待いに待つた旅行は來た。目覺時計が五時を知らずべく朝の靜寂を破つて鳴り出した。私は驚いて飛び起きた。やつぱり氣に掛るのは天氣だつた。起きるが早い、外に飛んで出た。昨日まで日和であつたの

に今朝は何故だらう、空は墨を流した様に眞黒で、一つの星すらも出でゐない。そして今にも泣き出しさうな天氣だつた。それでも旅行の喜びに落ちつかずそはそはしてゐる中に、時計ははや六時を指したので、挨拶を残し「氣を付けて行つていらつしやい」と慈愛に満ちた母の聲を後で聞きながら、いそ／＼と家を出た。その頃より今にも泣き出しさうであつた空は、たうとう我慢が出来なくなつたのか、はつりはつりと降り出して來た。

六時半奈古發の列車に打ち乗り、長い旅路へでも志す様な氣持で萩町にもおさらばをした。いつもは早い汽車も今日はいつになくのろくて仕方がない。

七時七分我等一行を乗せた汽車は汽笛一聲玉江驛を迂るが様にはなれた。なつかしい指月の山も玉江の大橋も見えなくなり、汽車は西へ／＼と突進した。

雨はいよ／＼激しく、横なぐりに車窓をたたく。天候が悪い故、邊りの景色が見難く、従つて誰も誰も口の運動が頻繁である。

まごらかな幾つものグループからは愉快相な喜びに満ちた笑聲が起り、雑話の聲が高まつてくる。

間もなく汽車は正明市に着いた。先づ正明市で乗りかへて、厚狭に向つた。それから約二時間ばかり揺られて

厚狭に着いたと同時に、又車中は大騒ぎとなり、我先きにと下車し、山陽本線に乗り込んだ。やはり木線だけあって、その混雑は非常なもので、空席を見出すのに困難だった。

雨に煙つて眠つた様な瀬戸の海！ 邊の山の名も瀧の名も知らないで過ぎて行く、序幕もなく、説明もない映畫の風景が私の目前に展開して行く、雨の爲に葉卷の煙の色に似る山。渺々とした海原。描き出した様な島々。無限の情趣が味はれる。

午後一時三十三分三田尻驛着。雨はいよ／＼本降りとなり、それに風さへ加つて大變な暴風雨であつた。それで私達一行は自動車にて毛利公爵邸に向つた。

公爵邸は多々良山の麓にあつて、庭内は宏潤林泉の美を極めて筆舌の及ぶところではない。しかし雨のために十分視察出来なかつた事を誠に残念に思ふ次第である。三時三分三田尻を發して、いよ／＼岩國に向つた。そして麻里布驛で乗りかへ、一休みする間もなく岩國に着いた。麻里布より岩國までは十分とはかゝらないのである。夕暮近き六時頃、目的地たる岩國の土を踏んだ時の私達の喜びは、何にも譬へようがなかつた、雨は相變らず岩國の町にも降つてゐた。

けく湯に浸る。お湯から出て錦帯橋の上に立てば、雨はいつしかやみ、さうと吹き来る涼風はほつた面をひやりと打つて、岩國の夜は靜かに深み行く。

十時半頃寢に就くべく我も我もと床に就く。廣い部屋もさすがに多人數の者によつて、うづめられてゐる。大きな頭、小さい頭か、それ／＼行儀よく蒲團の端から覗いてゐる。

けたまゝまい汽笛が聞えて來た。もう大分更けたらしい筋向ひにねてゐた一人が寢がへりをした利那に、左の手が今寢つかうとする私の枕の傍に投げ出された其の手に小形の腕時計が今宵のタイムを忙しうに刻んでゐる。目が益々さえて眠れない腹立たしさに蒲團を引被つて無理に寢つかうと努むるのだった。

さうして何時とはなしに夢路を辿つてゐた。かくして樂しかつた旅館の一夜は明けた。

雨はぬぐつた様にからりと晴れて、木々の緑は滴るばかり、錦帯橋が一際澄えて麗しい。

午前六時半宿を出發して吉香神社に参拜した。境内には櫻が多く、櫻の花の満開時はどんなに美しいことだらうと想はれた。それから紅葉公園に行つた。紅葉といふからさる紅葉が多くあるのだらうと思つてゐると紅葉は

一行は自動車で指定の旅館に走つた。驛より大分遠く離れた頃、悠然と構へた錦帯橋を見る事が出来た。私達は橋の前の海部旅館に、一先づ落ちついた。旅の夕べの暮足早く、夜のさばりは岩國の町に垂れ初めた。

靴下を脱いで、どつかと腰を下して脚を機の上になげ出した氣持よき！

平和の一夜を——團體としての旅行の一夜を此の宿であかすと言ふ喜びが部屋に満ちてゐた。

空腹に御飯を戴いて、やうやく落ち付いた氣分になる事が出来た。

さて其の次はお風呂である。タオルを肩に引っかけ、三々五々と友と一緒に階下の風呂場に急ぐ。

素裸になつて、ざぶ／＼と音がしたかと思ふと、湯中の人となつた。長々と體を延ばした時の氣持——旅ならではの味はふ事の出来ない嬉しい情緒がひしひしと迫つて來る。

ふる／＼と顔をなでる。そして顔を上げると、友の視線と私の視線が衝突して了つた。うふ………思はず吹出した。しかし何を笑つたのか、さつぱり分らない。

語り合ふ旅の疲れを友と自分、お湯の中で淋しく微笑む、ひねもすの汽車の旅に疲れた自分の身も今宵は安ら

餘りなく、二本ばかり目に見えただけだった。

八時二十六分いよ／＼岩國の町にもおさらばをして麻里布に向つた。先づ麻里布驛で下車し、自分達の持物を前の旅館にあづけ、ほか／＼と暖い春の日光を浴びながら、驛から程遠からぬ人絹工場へと向つた。

あゝ其の建物！ 偉大な建物、私達は先づ驚きの聲を發した。しばらくたつた後二階の會議室へ導びかれて、木材のバルブより絹糸となるまでの有様、工場内の様子等の活動寫眞を見せてもらった。時間の都合上工場内を見學出来なかつた事は實に残念で有つた。

十一時半頃見學を終へて、いよ／＼萩に歸るとなるのもう少しの様な、又早く歸りたい様な氣で一杯だった。

六時半頃玉江驛着、長い旅から初めてなつかしい古里に歸つた様で、一入指月の山も、清い流れの阿武用もしたはしく思へた。

楽しみに待つてゐた旅行も無事にすんだ。第一日は雨の旅だった、しかしこれも深い印象の一つとして皆さんの心にささまる事だらう。

### 萩より岩國へ

本三 岩本フミヨ

我等一行を乗せた汽車は、午前七時七分汽笛一聲玉江驛を出立した。天は無情で、ぼつり／＼涙を落し始めた。右に見ゆるは萌黄や緑の滴る指月山、汽車は相島、其の他六島を右に見てまっしぐらに正明市へ！

汽車は尙雨と若葉を分けてまっしぐらに進んだ。窓を拭きして眺める景！遠き山々は霞み、笠笠つけ、田を耕し、春雨の中にて野良仕事をする農夫を見、田舎を想像させたのは、確に三隅であつたらう。「ブオー」、それは正に正明市に着いた事を知らせた。懐しい橙畑も、指月山もたうに其の姿を消してゐた。乗換の時、反對の方向に行つてしまはるものも、ちよつと滑稽だつた。大分嵐になつたらしい。無情の雨は旅行の氣分を全く腐らせた。

三十分も待つたらうか、汽車はまた。煙を残して厚狭へ！吉則をすぎ、伊佐に近かつた頃、川の水面を掠めて躑躅と藤が伸よく咲き、田の苗は其の色を増してゐたのは、ちよつと萩等では見られない光景だつた。此の頃だつたらしい、口の運動の始まつたのは。雨の爲に外の

景色の見えないのも我等をさうさせた一つだつた。厚狭に着いたのは正に九時五十分。「厚狭、厚狭」と呼ぶ誰かの聲に詮方なく下る。目ざす地へ行く汽車に乗換へた時は、夢の國へでも行くかと思ふ。車内はかなり混雑し、朝鮮人の多い事は、旅なれぬ我等にとつてかなり目を見張らせた。セメント製造で名高い小野田の會社を見る事は、我等の期待してゐた一であつた。宇部、厚東を過ぎ

阿知須、嘉川、小郡あたりは見た事のない様な廣い田ばかり。麥も穂を出し、其の實を揃へて共に雨の中に立つてゐた。四辻の少し向ふであつたらうか、長澤の池があつた。車中の人の話によると、宇部の常盛に次ぎ、縣下第二位の話であつた。周圍四軒、水清く、それを巡る山々は何れも低く、丈の低い松が氾濫するやうに植ゑつけてあつた。意地悪の雨もいつしか休息の態度になつて心を塞いでゐた雲を大分拂ひのけてくれた。但しさうした事はほんの一瞬だつた。大道に着いた時、ふと思ひ出したのは繁枝の松原の事であつた。字の如く枝の繁つた松が打ちつゞいてゐるとか、然し視線を遮つては霞があつた。かうした事は歸りの心を樂しませるだらう。鹽田で名高い三田尻で汽車を捨て、自動車にて毛利公爵邸に赴く。邸内廣瀾林泉の美を盡してゐる。畏くも明治天皇

九州大演習御統監のため行幸の御途次及び大正天皇九州大演習御統監を終へさせられ、御還幸の際御駐蹕遊ばされた。東佐波合にある國分寺は、聖武天皇の御代國々に國分寺を置かれたもの、一である。天平十三年の創立にして、本尊は藥師如來である。其の後數度の火災があつて今は舊觀を留めざれど、尙防府平に於ける大偉觀だ

降雨烈しいため、唯扉を見て行き過ぎた。酒垂山にある松崎神社は縣社にして、菅公を祀る。毛利公爵邸よりの歸り、大雨を冒して參る。社殿は輪奐の美があつて、樓門あり、廻廊あり、拜殿あり、神殿がある。位置同山の山麓を占め、眺望の美を併有してゐる。國道に面する大華表の右側には一千年祭の記念碑がある。碑の文字は右栖川宮威仁親王殿下の御揮毫になる。神殿の西方に聳ゆる春風第一樓は、海山萬里の遊景を賞するに足る。昔菅公此の地に繋船の當時は防府一面大海にして、今の社は入海に突出せる岬であつたが故に、松崎の名があると云ふ。唯汽車に乗る事のみ急がれて直ちに自動車に立戻り蘇鐵の前にある三田尻驛へ！驛にて汽車の來るのも待遠く、約二時間してまた車中の人となつた。富海も期待してゐた一であるが嵐のためか、白帆の微か水平線の彼女に浮んでゐる様な女性的の景は少しもなく、唯全體と

して溜多く、怒濤を見るだけだつた。汽車は尙海岸通りを西へ！

福川には鹽田多く、三田尻の鹽田を想像させた。徳山には海軍燃料廠、中學校、高等女學校等がある。海軍燃料廠は、朝鮮寺洞及び大嶺の石炭を原料としてブリケット製造に従事し、尙鯉油の研究に従事してゐる。車窓より見える多くのタンクは、重油貯藏用タンクである。櫛が濱をパスし、下松に行けば工業學校がある。近くに宮の洲海水浴場がある。緑松を戴ける砂州遠く海中に突出す。

虹ヶ濱の青松を右に見て過ぎ行けば島田がある。一帯に桑畑多く、鹽市場がある。鶴で名高い八代村に近きと。次の岩田驛より約五軒の西北なる束荷村は、實に明治の大政治家伊藤博文公の孤々の聲をあげられし所である。柳井、大島、麻里布を過ぎて、目ざす岩國の地を夢の如くに踏みしめて居た時は、もやは電燈の光も、しよんばりと、往交ふ人も少ない雨の往來を力なく照らしてゐた。

X X X X X X X X

## 本科第四學年實科第二學年 京阪地方修學旅行記

萩より神戸發まで

本四 天野 紀子

五月三十日、あゝこの日、私達はどんなにこの日を一日千鈞の思ひで待ち惚けたことか。

伊勢、京都方面へ一週間の修學旅行、其れに前後して試験やお裁縫等色々になる事はあつたのだが、私達の歡喜と希望に張り切つた心では、其れさへ何でもない事の様に見える、全く有頂天になつて了つた。

其の日、三十日の午前五時半、各々つゝみきれない希望に面を輝かせて學校に集合、それより中野先生の御注意があつて後、一同歩調も軽く萩驛へ向つた。

午前七時二分、私達の溢れるばかりの喜びを乗せて汽車は、わざ／＼見送りに来て下さつた先生方に送られ静かにプラットフォームを離れた。

車中ほどのグループからもさうも楽しさうな笑聲が溢れて、汽車は三見、正明市と次々に進んで行つた。

やう／＼トランプ遊びや窓の景色にも見あきた頃、汽

車は下關驛についた。構内を通つて關門連絡船乗場へ出て、それよりランチで門司港近く碇泊して居るバイカル丸に乗船した。この船は大阪商船の大連航路の汽船で總噸數五千五百噸であるが、もう皆洋行でもする様な氣ですつかり夢中になつてしまつた。甲板で記念寫眞をとつて後私達の三等船室へ下りて何だか臭いお晝食をした、めた。

船が下關を出帆したのが正午、午後一時頃税關の係員の手荷物検査を受けた。斯う云へばいかにも仰々しいが實は持物の表に唯検査済の紙をべた／＼とはつてもらつただけだつた。

海上はぼんやりと霞んで其の上甲板は少し寒かつたから、有名な瀬戸の海の景色も物かは、私達は船室でござ／＼しながら、變に氣取つて葉書を書くやら、乗り合せた外人にサインを求めめるなど思ふさま愉快な旅行氣分を味はつた。

夕食は五時半。潮風呂を浴びてさつぱりした氣持で甲板に出て見た。湯上りの上氣した頬に夕方の潮風が心地よかつた。空は沖のはてまで薄暗い雲が幾重にも垂れ下つて居たので、美しい落日は見る事が出来なかつた。しかし私達は、落ち着いた空と水の美しさを見た。空一面

の鉛色の雲は、西の方わづかに太陽の沈む所をほんのりと紅に彩られて居た。それが、全く無氣味なくらゐ波のない海に映つて神秘そのものの様な眺だつた。私達は、丁度北極の永遠の氷の上に住む白熊が、あの神秘的なオーロラを見る時の様な敬虔な氣持でそれを眺めた。

夕やけの色がだん／＼薄れて、反對に海からは濃い夕闇の忍びよる頃、今まで輪投や鬼ごつこに興じて居た人々もみんな騒ぐのをやめて、輪を作つて談笑をしはじめた。私達は二三人で、口頃好む淡い哀愁にみちた歌を、刻一刻暗くなつて行く海に向つて静に／＼歌つたりした

就寝時間が來ると、班長に呼ばれて不承々に船室に下りたが、いよ／＼寝る時になつて場所がせまいだの、私はあの人と寝たい等と色々ないざござが有つて、やつと堅い枕に就いたのはよいが、そこは疲れた體と體をやすませるにはあまりに場所が窮屈なものと、耳ざはりなエンジンチンの響きに妨げられて、私は容易に寝つかれず、自分一人犠牲になつたつもりで、たうとう船室を抜け出してしまつた。

甲板に出て見ると何時の間にか暗れたのか、十四夜か五夜の月の光が、あたりに遮る雲もなく、峻峻と眠つた様な深夜の海をてらして居た。

それ／＼に光り方や、色の違つた燈臺、行き違ふ汽船の窓々の明、又月光の中に飄に浮ぶ數多の島々や、物語めいた眞黒な帆を張り青い燈火をつけた漁船等、夜もすがら眺めたことは、後日これ等を思ひ起しても尙其の印象は腦裡にはつきりと浮び出る事だらう。

やがて明方近くなり、赤味を帯びた月が靜に海に落ちて、東の方から黎明の光が空に海にひろがつて、次第に島と海、海と空の區別がはつきりと表れ、それ等の總てが靜な夜の眠から目覺める頃、私達歡喜に溢れた修學旅行第二日の夜は明けはなれた。

刻一刻登る太陽の美しさ！ 其の爽快さ！ 其の明るさ！ 一年中山から山へ朝日を迎へ夕日を送る私達のまじ味はつたことのない、たまらなく新鮮な感じの朝だつた。

朝食をすまして再び甲板に出て見た時には、太陽はかなり水平線を出離れて居た。六時頃右手の海には、昔から數多の歌に詠まれて名高い淡路の島が朝霞の間に薄の様にほの見える、その前を思ふさま朝の潮風をはらんだ無数の白帆が、さわやかな朝日をばつと反射していかにも輕やかに往來して居た。實際蓬萊島とやらの景色もかばかりかと思はれる程、優しい美しい眺だつた。



夢うつゝの三時頃、火事々々の聲に眠い眼をこすつて起き出して見れば、半意識の脳膜にはつきりと映する火焔のもの凄き、つい五六町先と見えます。旅へ来て火事に合ふも何の因縁かと淋しい氣持になりました。

午前五時、古帝都の朝日が向ひの念珠屋の軒先を桃色に染めて、夜は全く明けはなれました。午前七時二十分宿を立ち出て、東本願寺の側を通り抜け、古の朱雀大路に出ます。桓武帝當時の大路は三十間餘りの大道で、その果に羅生門が屹然と青空に聳えてゐましたと云ふ、今は面影もさめず僅か三四間の路幅で活氣のない通でした三十間の大通と云へば異國の歴史にも古今通じて無いさうです。光榮ある日本文化、宏大無邊の桓武天皇、おゝそれは我等大和民族の大いなる誇りでありました。

やがて條屏廻る樓門が古雅な容姿で端然と五月晴の空のもとに控へてゐます。條屏は御所、本願寺等の外は作ることを許されてゐません。樓門を入れれば右手に公孫樹の大樹が鮮やかな新緑を以て地上を掩うてゐました。御堂に上れば正面にゆるく立ち上る香の煙、御佛の慈悲圓

満の御顔は拜まれぬまでも只有難きに深く、頭が下りました。この力この偉大な力が、我等罪深き衆生を救つて下さる御佛の力なのです。

廻れば書院で、鶯張りの廊下の微妙な音律に耳を傾けつゝ行くに、秀吉の伏見桃山城をこゝに移轉したもので雁の間、菊の間と並んでそれら、襖に雁の繪、菊の繪がそのかみの名工によつて描かれてゐます。見上げる廊下の格天井は花づくしとて紅白とり、の花が百二十三十本の彩色には白は水晶を、紅は赤珊瑚の粉末で又縁は緑青を集めたものさうで、今なほ華麗な色を呈してゐます。秀吉の豪放な氣象の一端が窺ひ知られるではありませんか。右轉すれば三の間二の間の間一の間とあり、一の間は元豐太閤の居室で一段と高くしつらへてあり、今は皇后宮の玉座となるのださうです。欄間も金色燦爛たる透彫りです。廊下の鴨居の上の壁は一面に芒の穂波です。海北幽齋の筆になる世界の名畫で、根本より穂先まで七尺餘あるのを一氣に書き上げたとい聞けば、その勢力の絶倫なのに驚かされるばかりです。その果に武藏野の名月が靜に姿を現して、肅條とすら悲しき武藏野の秋景色であります。

左手の庭は龜の庭とて石を以て龜の形をつくり、その

上に老松が四五本おもむろに立つてゐます。縮少されてはゐるものゝそれでも世に名高い庭園ださうです。

大廣間に出ます。鴻の間といひ上段三十八段、下段百六十二段、上段の向つて右手は秀吉が後陽成天皇をお迎へする爲に更に一段高く作つてゐます。今も天皇の玉座となるさうです。床の間は狩野探幽二十八歳の時の筆と言ひ傳へられてゐる大畫で、今も猶畫中の人物が動き出しさうでした。其の他左甚五郎の大作鴻の欄間、了慶の描いた錦鷄鳥の格天井等、名人の醸し出した氣韻偉力に一月も二月も否何時までも浸つてゐたい様に思ひました。一世の英傑秀吉の形成した桃山時代は日本美術の充實時代だった。うす暗さその殿堂の奥深く永久の春を誇つてゐる。

爆發させたい様な深い感激に觸れて、電車に乗れば街路はすゞかけの葉薫る初夏であります。烏丸丸太町で電車を捨て、一行は御所拜觀へと向ひます。御苑は晝猶靜で、松と芝生の清楚な緑は白砂と相映して、入る事一步にして身の縮まる様に思はれました。行手には建禮門が巍然と空を突き、扉は條屏で清い小川がその周圍を流れてゐました。西に廻り清所門より入ります。皇居の御門には、この外に正南にある建禮門、東の建春門、西の宣

秋門、北には朝搦門があります。西にはその外に私達の入つた清所門と乾門とがあります。

先づ御車寄を拜します。菊の御紋章燦然と日に輝き、素木香のの神々しさ。次に月華門より紫宸殿御前に到ります。廣い御庭は箒目正しく、十八段の御階の前に右近の橋、左近の櫻があります。右近の橋は丁度花盛りで馥郁たる香を漂はせてゐます。紫宸殿は御階の次が雨の廂で、その次が身舎です。茲に高御座、御帳臺が置いてあります。その後の賢聖の障子は支那の聖人三十二人を描いたものです。その後は北廂であります。日華門を出て賢所御前の儀を行はせられた温明殿を拜します。温明殿は神社と同じ構造になつてゐますが、その時は蔽があつて分りませんでした。次は小御所。小御所の向ふは御學問所です。小御所の御襖は光明天皇の御好による極彩色でした。こゝを拜し清涼殿に行きます。こゝは昔天皇の起臥あそばした御殿で、只今はその名残を止める位に縮少されてゐます。それでも北廂の次に晝御座があります。御帳臺の帳は深く垂れてゐましたが中は高御座と同じださうです。こゝには昆明池の障子、荒海の障子があります。昆明池の障子は見學出来ませんでした。荒海の障子は見せて貰へるこの事でどんなものか大きい期待を



もつて、争ふ様に見ますと只一べんの墨繪であります。見る人より見たらさぞかし良いものでせうが私達には手長足長の奇妙な畫の様に思はれました。又瀧口や吳竹、皮竹も名のみで、殿上の間は板の間に薄べりが敷いてあり、机が二脚に御椅子が一脚で誠に殿上人のゆかしかりし昔が偲ばれました。

日の御廟在せし御所とは如何に華麗なもので思つてゐましたのに、たゞ白木の御造作で拜みまつる我等は深き御皇恩に涙ぐむばかりでした。それだけ御所には奥床しさと崇高さが籠つて居ました。何處にも見る事の出来ない尊き清さがありました。

御所より北野神社へ向ひます。北野神社は日本最古の天満宮ですがに境内一ぱいの人出でした。北野神社前から自動車で田舎道を金閣寺に向ひます。麥畑や古風な家並は懐しい萩を思ひ出させました。やがて松杉の鬱然と繁る小徑を少し入れれば廣い庭園が眼前に開けて、苔蒸した金閣寺が古の面影に時代色をつけて私達の目を射ました。當時としては随分立派な贅を盡したものでせう。今は滅び行く我が身を憂ふる如く凋落の淋しさが高樓の邊に漂つてゐました。それで上層に上る事は出来ませんで廂に残る金箔を見上げて過ぎました。夕佳亭の萩の遣

ひ柵も南天の床柱も噂程ではありませんでした。要するに金閣寺の印象は豫想の大き過ぎたからかつまらぬものに思はれました。

出町柳から、比叡山行の電車に乗つた。御躰當は八潮でした。め、十二時二十分發のケーブルカーに乗つた。ケーブルカーは階段の様になつて居て一番下から一番上は見えない位に傾斜してゐます。ごご／＼引上げられる様な、落ちて行く様な、擦られる様な、本當に不思議な感じでした。比叡山は唐人山を三つも重ねた様に高い山です。その八分目の四明獄につくま、山舎に見える京の町に最後の袂別をするのでした。深い憧れだつた京都はやはり私達の期待に背きませんでした。京都のブローイルはネオン、ライトに彩られた夜ではありません。静かな／＼晝、それも人通の少い古風な家の立ち並ぶ場末の町に、桃割姿の娘さんが縮日傘片手にポックリの音に耳を傾ける情景です。五月雨そぼ降る街路樹の蔭をたどり行く素足の美しさです。霞むばんぼりの灯影に京訛りを響かすだらりの帯の舞妓姿です。

眼界遙か見える京の都は薄紫の陽かげらふに包まれた夢です。すべての時代の藝術を秘めてゐる日本の史實です。静止して居る美しさ、京都は眠つてゐます。京を離

れたくないと思ふこの想ひは誰しもの胸にあつたに違ひありません。しかし私達は午後の日盛りにはスキー場を横ざり、木立深い山路を十五分ばかり上り、篠笹繁る赤土の道を二十分程下つて、延暦寺中の講堂に到りました。この邊から根本中堂へかけて幾抱へもある杉の大木が生ひ茂つてゐました。延暦寺は大津に而した比叡山の中腹にありました。根本中堂はぐん／＼下つた窪地にあつて暗い御堂の奥深く法の燈がかすかにゆらめいて、若かりし日の大僧正の端然たる英姿が偲ばれました。杉の並木の盡きた所から琵琶湖の優姿が彷彿と浮び上つて参りました。海と云つても良い位で屈折した曲線は大小の半圓から成り、汀の持つ美しさを遺憾なく發揮してゐます。そしてこんな高所から展望する時にのみ持つ魅力です。楡は新芽をふいたばかりで、黄つばい新緑が暗い緑の縁をくま／＼とつて、初夏の爽涼味が溢満してゐます。現実的な夏雲が午後三時の日射に輝いてゐます。霞に没した琵琶湖を左に見て根本中堂から坂本までケーブル車で下りました。ケーブルカーから降れば耳がかん／＼なつて、話をするのでさへ嫌で堪りません、しかし濱大津へ行くまでの電車の車内が廣く綺麗だつたのと、のんびりした田舎景色とは、私達の氣持を軽くして呉れました。

やがて三時四十分大津驛を發した汽車は、榛の木が多い、田圃の中をひたむきに柘植へ……柘植で乗り更へる頃から汽車は山又山の中を走り続けまゝ。歴しかぶさる様に高い山ばかりです。三重縣々廳所在地の津市へ入る頃から伊勢平野が開けて來ました。水田の水に薄く夕日が映へて、何かなしに親戀しさ人戀しさの情の湧いて來る夕なのです。五十鈴川の清流を渡つた汽車が二見驛へついた時はもう邊が暗くなつて町には灯影が動いてゐました。

二見はさすがに夫婦岩で名をなしてゐるだけに宿屋と土産物を賣る店ばかりで、街路でさへも賑一つないといひたい程綺麗に整頓された町でした。私達の宿は海岸に面し静かで上品です。今夜こそはよく眠られるだらうと思つて宿の玄關をくゞりました。

二見浦着より奈良着まで

本四 山田 康子

しめやかな朝の清い海の氣を吸つて、ざく／＼と白砂の音の快さを靴の裏に覚えながら、海邊を夫婦岩へと進んだ。

高い磯の香は醒めやらぬ私達の心に一種の快感を與へ

た。

天の岩屋——暗い洞の奥深く燈明が瞬いて、何か古の奇しき傳へを物語る様だつた。

それを右に見て進めば、やがて夫婦岩に迫り着く。岩は激浪に洗はれた海岸の浸蝕によつて出来たのださうで大小二つの岩に注連が張つてある。夏至の前後には丁度この間から、日の出を拜むことが出来るさうで、その壯觀は今日のお天氣では拜む事が出来なかつた。

やがてこの海邊の町にも別れを告げて、内宮に参拜するため、参宮電車に身を委ねた。

停留場を出で、廣き道を宇治橋に進めば、森々たる老杉の緑は、そば降る雨にいよ／＼濃く、壓するが如きその緑の奥深く、木葉一つだになき白砂の清浄への道を、頭を下げて一足々々踏みしめて進めば、緑の中を出た五十鈴の流は、清く玉の如く流れてゐた。この清き流に塵想を拂ひ、襟を正して社殿を拜すれば、尊さか、壯嚴と云ふのか、神々しさか、たゞ何か云ひ知れぬ一つの感じがむせぶ様に胸に迫つて来るのみであつた。何事のおはしますかは知らねども感は、我々大和の民たるもの、誰もが味ふ心である。

それより再び電車で外宮に参拜する。

夕闇の迫り初めた猿澤の池を臨めば、池の畔は櫻柳に包まれ、興福寺の五重の塔の倒影、夜更けるにつれて月光電光の夜景が非常に美しい。

やがて就床の時間が来たので、先生の御注意通り床に就いた。中にはまださやつくと言つてさわいで居る友もあつた。それも静まつて、幽寂な奈良に相應しい夢路に入らんとしてゐると、突然勇ましく響くラッパの音に合はせて歌ふ兵隊の聲が、夜の奈良の静寂を破つて聞えて來た。その聲が遠のいて行つた後は、又物凄程の静けさである。いつのまにか、友も私も晝の疲れでぐつぐつと寝こんで了つた。

明けて三日、さわやかな朝の空気を吸ひながら、古の都たりし奈良を見學にと宿を出た。先づ猿澤池の畔で鹿と一緒一同記念の寫眞をとつた。池の西北の角に、大和物語の傳説で名高い采女の社がある。それより春日神社に向つた。

左に荒池瓊珂山を眺めて、一の鳥居をくれば淺茅ヶ原、片岡鷺池、雪消の澤、春日野と連なつて、奈良氣分の横溢した地域である。自然の奈良大公園は、奈良市の四分の一を占め、鹿の群が老杉古松の間、敷連ねられた柔い緑の芝生の中に點在してゐる。閑靜な平和なその風

私共はかうしてお伊勢参をすませ、○時五十分、私共を乗せた汽車は神都の氣分漲る宇治山田を後に、黄ばんだ麥と菜種の中を分けて、どこまでも／＼進んで行く。

やがて私共は、藝術の叢淵我國文化文明の搖籃たる奈良、一千有餘年の遠き昔華やかにしこの都の跡を偲ぶべく奈良驛に下車した。

一步内に入れば、千古の夢を秘めて彼方に霞むならかな山々、長閑さ、静けさ、晩春の奈良に漂ふ懐古の情はひし／＼と胸に迫つて來る。

奈良藩より大阪第一日

實二 虎 竹 華 枝

奈良は歴史の地、美術の地、景勝の地である。六月二日午後三時三十六分。私達一行は此の奈良に着いた。宿から迎へに來た車に荷物を預け、徒歩で古風な奈良の町を左に右見ながら、猿澤池に近い龜佐旅館に着いた。

旅館は待遇もよく、愛嬌たつぷりで迎へて呉れて非常によい感があった。宿で三十分ばかり休息して、五時までの自由外出を許されたので、皆思ひ／＼に外出した。私も二三の友と猿澤池の邊に行き、鯉に魅をやり鹿と戯れなどして宿に歸つた。私達にあてがはれた二階の窓から

景は、歴史物語に詩歌美術を添へてさびてをり人の心を圓滿な、さうして安樂な情趣にひたさせて居る。

二の鳥居を入れば、左右に形様々な石燈籠が、苔むして數限りなく立並んでゐる。その間を鹿が悠然として逍遙してゐるのは、古の大宮人が、優雅な振袖を春風になびかせながら漫歩してゐるのを想像させる。次から次へと起る想像は限りなく美しい。

やがて春日神社についた。時既に初夏!! 燦々と降り注ぐ陽の光を浴びて、滴るばかりに美しい翠緑の間から朱塗の春日神社の社殿が、ちら／＼見えてゐるのは、幽邃閑雅な趣であつて、歴史を憶ふに相應しい。一同拜殿の前にぬかついた。

神社の北側には、やどり木と言ふのがある。それは梓藤、椿、南天、陸英、櫻、楓が一所に寄生した珍しい物で、参拜者の好奇心をそ／＼つてゐる。

春日神社の背後にある春日山は、古來神域として禁獵禁伐を嚴守せられたので、老樹叢蒼として、晝尚暗いまでに繁茂して居る。百人一首の中にある「奈良の都の八重櫻」と言ふ櫻に、昔を偲びつゝ手向山八幡宮を拜し菅公の腰掛岩を見て、嫩草山の麓に着いた。全山青毛氈を敷いたやうに芝生が一面に生えて、如何にも幽雅な和や

かな曲線美を見せてゐる。誠に人一度奈良の地を踏んであの美しい嫩草山に向へば、誰しもくびすを廻らすことの出来ない懐しい感を起さぬものはない。此處で又寫眞をとつて、春を象徴する二月堂、三月堂を拜観して、新緑の下をくゞつて行けば、名物の大鐘樓がある。先づ大きいのに驚かされた。そして落つきのある神秘的その音は、千年前の古都を物語つてゐる。

坂を下ると目の前に高く聳える大きな建物は有名な大佛殿である。木造建築物中世界最大のものであつて、香の煙の立ちこめる堂の中に靜に端坐してゐられる大佛の御姿は、萬人を育む御佛の大愛を如實に表はして居られて、思はず有難いと言ふ念が起り、自然に頭が下つた。古代藝術の粹を集めて造られた此の佛像は、實に偉大なもので、奈良朝が如何に盛であつたか窺はれる。それから南大門の仁王像を拜して、私達は奈良見學の總てを終へた。

午前十一時十五分此の靜かな平和な奈良に限りない名残を惜みつゝ、にぶる足を驛にと運んで、大阪に向ふべく汽車に乗つた。込み合つた汽車に約一時間もゆられて天王寺驛に下車した。

此處は奈良とは全然反對で、道行く人を見ても、奈良

の様に落つきがなく、そはついて見える。

驛より天王寺公園内の、動物園に踏み入つた。色々な鳥や獸が、私達の耳目を悦ばせた。それから大和法隆寺と共に我が國の最初の寺である四天王寺に参つた。名匠左甚五郎の猫の門等を見て、電車の中につめ込まれた。私達が下車した所は、日本一の交通の頻繁な所だと案内人がいつてゐた。成程さうださうなづかれた。真中に立つた交通巡察の指圖に従つて、行動してゐる人、自轉車自動車、電車など非常な敏捷さである。

實に大都會の感を一層深くさせた。宿は道頓堀日本橋の側である。あらゆる光線の明滅交錯する道頓堀の川面に先づ私達の驚異は初る。總ての點に尖端を誇る商店、右を見ても左を見てもカフェーと戲場ばかりの道頓堀、音響と、色彩と光線の入りまじつた大都會の夜景そこには文明の華と文明の毒とが有るであらう。民衆娯樂場のこんなにもジャズ的に進展して行く現代の世相を私達はさう考へるべきであらうか？

かうして享樂の波は夜更けることを知らない。午後十時頃赤い灯青い灯の間を歩き廻りくぐり抜けて宿に歸り、賑やかな大都會の夜景を其のまゝに夢路をたどつた。

## 大阪 第二日

本四 吉賀キミ子

地上の總てを慈愛に満ちた笑顔で擁護する美しい太陽が、しらんぐと東の空を染める五時頃私達は元氣よく起床した。仕度を済ませると朝食までにかかりの時間が有つたので、其の間自由に外出する事となつた。そこで私はお友達四五人と道頓堀や心齋橋を歩いて見た。

昨夜私達一行は之等の街を歩いて、其の華麗さや雑沓に或は驚嘆し、或は讚美の聲を發した。

がしかし此の朝、此處等の街を歩いた時は、眞に一種の悲哀或は零落とでも云ふべきものを感じずにはをられなかつた。

しかし天下に誇る壯大な大大阪であるだけに斯くの如き街ばかりである筈はない。

私達の起床を待たないで、最早日本橋堺筋等には電車は走る、バスは飛ぶ。それ等の街は太陽の昇るにつれて一大修羅場となる。

私達一行は午前八時旅館を出發して電車の人となり、約十五分ばかりして大手前にて下車し、徒歩で目指す大

阪城に向つた。

第一に目を見張つたのは偉大なる樓門であり、堀の石垣である。

あの高く組上げられた堀の石垣、そしてあの有名な振袖石、蛸石、是等の石は一々私達をして嘔然とさせたのである。そして是等の石は先生方の丈の五倍もあるといふ大きい石で、其の大きい石を運搬し、或は數知れぬ石を積み重ねて堀を造つた人力と、經驗より産み出した古人の智力の尊さを想像せずには居られない。是等の事實は今想像するより以上であつたに相違ない。

驚異の目を見張つて中へ進むと、天主閣の跡には今擴大な城が建立される爲工事中であつた。ほゞ城の形には出来てゐた。此の礎は古のまゝで、今も猶堅固なので造りなほすには及ばないさうだ。

これが完成した暁には登閣する事が出来、大大阪の大觀は一望に展開するこの事である。そうして大大阪に、誇るいかなる大廈高樓もマッチ箱の様に見えるさうだが私達は不幸にして天主閣上へ登る事が出来なかつた。

此の煙の都に聳ゆる大阪城を或は禮讚し、或は桃山時代を懐古して、やがて此處を出發して造幣局に向つた。此の邊まで來ると日本第一の工業地だけあつて林の如

き煙突が望まれ、空は一面の煙で霧で、も懸つてゐる様だつた。心齋橋や道頓堀等では、かくした光景は見られない。何故ならば、それ等は歡樂境であり、商業地である。是等の煙突の林の中での生産は、あの華麗な商業地に運ばれるのである。

大大阪は實に此の商工業の連絡によつて繁華を極め、日本第一の商工業地とまで云はれる様になつたのだ。やがて私達は造幣局についた。外觀は私達の想像にそむき、思つたより小さかつた。が内部は實によく整つてゐた。

中は溶解場、極印場、彫刻場、製造場、試験場、精錬場に分れてゐる。

溶解場には金屬をとかす溶解爐が有り、試験場には自動天秤があつた。此の自動天秤は圓形にくりぬいた物を正しい物と重いものと軽い物とに分ける様になつてゐるさうだ。私達は之等の見學を終ると外へ出た。

造幣局は實に寂としたもので、建物外に出ればたゞ私達の話聲と靴音のみだつた。

造幣局の見學を済ますと、私達は再び車中の人となり今度は大阪毎日新聞社に向つた。

目前に聳ゆる八階建の建築……それは私達の求む

る大阪毎日新聞社なのである。私達は第一にバルコニーに案内された。八階建の屋上までだから随分足はたるかつた。がしかし上つた時の氣持は實に痛快だつた。

此の高い／＼屋上より眼下を見下した時は、下に滑走する自動車も電車も丁度玩具位にしか見えなかつた。

家々は皆煤煙によつて黒ずみ、萩の様な清潔な屋根は到底望まれなかつた。時は丁度十一時半だつたのでバルコニーにてお辨當を取つた。又そこで私達一同の寫眞をとつて戴いた上、サンデー毎日まで戴いた。空腹を満たすとバルコニーより順々に階下に降りて中の装置を見學した。

第一に見學したのは電送寫眞だつた。これは電氣作用によつて寫眞を方々に送るので、汽車ならば東京まで十二時間、飛行機ならば一時間半かゝるのを、電送機を使用すれば僅三分位で東京に届くといふ極めて便利な仕掛になつてゐるさうだ。

第二に見學したのは活字場だ。此處は活字が新聞社獨特の能率的配置がしてあつて、活字を拾ふ職工には私達は大きく目を見張つた。澤山の男女が、どの手が一番敏捷かといふ事を競ふが如く夫々の活字を拾つてゐる。早い／＼其の敏捷さには驚かすには居られなかつた。

次は印刷場だ。此處には世界最高速度輪轉機が十二臺高速度輪轉機が十二臺あつた。其の運轉の開始休止、緩急の調節等總て一つのボタンを押すことによつて意のままに操縦する事が出来、新聞の表はれる時にはちやんと四つだ／＼みになつて出て來るといふ實に繊細を極めた機械で、私達が見學した時も物凄くスピードで刷り出されてゐた。其の四つだ／＼みの新聞がする／＼と水の流れる様に出て來る光景は、實にめざましく壯觀なものであつた。新聞社の見學が終ると今度は三越にむかつた。

其の途中、中ノ島の公會堂で一才休む事になつた。此の時もう先刻大毎で寫つた寫眞が届けられた。私達は其の早さには實に驚かされた。

公會堂は現代の美工をこらした建物で、内は大理石とコンクリートにて造られ、大大阪の公會堂としては實に誇るべき建築であつた。この公會堂は一人で壹百萬圓以上の財をなげうつて造られたといふ建物で、設備と云ひ裝飾と云ひ、日本でも屈指の公會堂ださうである。

此處で二十分位休み、午後一時公會堂を出發して中ノ島公園を通過し、三越へと足を運んだ。

十分位経つて目前を仰げば高く／＼聳ゆる摩天樓、これこそ私達のかねて望みにかけてゐた。三越だつた。

此の高麗橋には三越の如き華麗を極めたビルディングばかり立並んでゐた。けれど、それ等の摩天樓は煙の都に聳えてゐるだけあつて總て黒ずんでゐた。

私達は先づ第一にエスカレーターにて三階まで昇ると今度は疲れた足に元氣を附けながらバルコニーまで昇りつた。こゝでも大阪市の大観は一望の内に眺められたやがて此處で六時まで自由行動が許されたので各々内部を歩きはじめた。

内部の装置の美麗さや、雑沓は想像以上では／＼感じ入るばかりだつた。やがて一とほりの買物を済ませると憧れの三越へ最後の一瞥を與へ、電車にて梅田驛に向つたのである。

驛に着くと其の前に聳ゆる八階建の阪急百貨店に行きエレベーターにて食堂へ上つた。驚いたのは食堂の混雑である。隙もないのに人はつめこむといふ有様で、まご／＼してをれば何時までも食べられないといつた様な雑沓である。そこで私達も参拾錢の食券を戴くと、たゞちに隙をねらつて席をしめ、やつと空腹を満たした。それからバルコニーにて午後八時四十分頃まで休む事となつた。屋上より望んだ大大阪の夜の光景は實に美麗であり壯觀であつた。

赤い灯、青い灯、イルミネーション、ネオンサイン、それ等總てが大大阪の夜を飾る装飾の中心である。眼下にみえる曾根崎町には何臺もつゞく電車のきらめきや、自動車の光で實にすばらしい光景を呈してゐた。此の大大は活動の巷だ、そして又享樂の巷だ。がしかし其の享樂は活動あつて後の享樂だ。兎に角大阪は活動の巷だ。

歩く人を見てゐると袂の様に悠長に歩く人は決してみられず歩行は頗る早い。大多數は自轉車で市内を飛ばして居る。

大阪の活動をみた時は誰しも何處が不景氣なのだらうと思ふに思ふだらう。實際私達も何處に不景氣風が吹いてゐるのやらと、よそ事にしか思はれなかつた。工場に於て、商店に於て、そして又交通機關に於て、はかり知れぬ文化の力によつて飾られた大大阪に、或は身の戰慄を覚え、或は讚美し、驚歎し、やがて憧れの煙の都に最後の一瞥を興へて車中の人となつた。列車は午後九時二十分梅田驛より懐しの故郷萩に向つて感勢よく走り出した。

大阪發より萩驛着まで

本四 田中 喜美子

物を預け、同六時十九分ランチにて嚴島へ向つた。

嚴島神社は祭神杵島姫尊、社格官幣中社で、嚴島の周圍は七里三十一町、その北岸に私達のの目的地たる嚴島神社がある。

昔平清盛が安藝の守だつた時、深く當社を尊敬して廣大麗美なる社殿を建立した事によつて世に知られてゐます。爾來幾多の改築を重ね、現存のものは桃山時代に建立になつたもので特別保護建造物の一にして、又此の地方は要塞地帯となつてゐます。

嚴島は日本三景の一として、又史上日本三義戦のあつた所として有名です。世に名高い大島居は當社最大のもので、古來屢々電火風波に破壊せられ、現存のものは明治八年建立になつたもので、之も特別保護建造物です。島居の高さは五丈三尺三寸、上棟の長さ七丈七尺一寸四分、兩柱相隔ること三丈五尺八寸、又中央に掲げてある額は、長さ九尺、横六尺、表面には嚴島神社、内面には嚴島大明神と記し、有栖川熾仁親王の御筆ださうです又廻廊は總て長さ百八間、板と板との間に空所が設けられてあります。之は満潮の時廻廊の上まで水が流れるために、濕氣を防ぐ故をもつて明けてあるさうです。又廻廊の入口の左手には鏡池といふのがあつて、之にはいつ

晝は煤煙の渦巻いた大都市も、夜はイルミネーションネオンサイン等の光に照らされて灯の町だ灯の海だ。數多の光は明滅する自動車走り、電車が軋る。そして都會特有の夜の繁華は次第に更けてゆく。さらば灯の町、灯の海、私達は憧れの町に最期の訣別を興へた。さうした喧噪の町も汽笛一聲次第に遠ざかつてしまつた。さうして其の灯もみえなくなり、眞黒な夜を汽車はひた走りに走る。

突然漁火が沖の彼方にみえる。明石か須磨か、淡路島の魚舟か、何處か私のみなれた景色だ。三見、玉江間の夜の窓外の景色だ。萩、さうした言葉が私の腦裡に閃いた一瞬一寸感傷的な氣持になつてしまつた。

車中の人は皆休む仕度に取りかゝつた。さうして汽車のうめき聲のみ聞え、皆樂しかつた一週間の旅の追憶に樂しい夢路を辿り、眞の闇路を汽車はうめきながら走り走る。

さうして一夜の眠も過ぎ、東の空がほのくさ暁の色をみせる頃、淡い霞はあたりを罩めてゐた。穩かな瀬戸の海に帆船の五六浮んでゐるのも又捨て難いものだつたさうした曉の景色を眺めてゐた時、午前六時十分汽車は宮島着を私達に報じた。下車した一行は、驛前の店に荷

も眞水が湧くところでした。廻廊の終り近い所、之も左手に太鼓橋といふのがあります。全く太鼓橋の様です。岩國の錦帯橋よりも、もつともつと丸く曲つてゐます。之は主として勅使御出入の時の用に供されたさうです。之より紅葉谷公園に行きました。紅葉の若葉香る中を歩む心地は何とも云へぬ新鮮な心持でした。こゝを過ぎ千疊閣を見學しました。之は天正十五年豊臣秀吉の建立になるもので、大小の杓子が奉納してあります。その上手に五重の塔があります。之は應永十四年の建立で、飛驒の工匠の作とかいふことです。時間不足の爲急いで見學し、午前七時四十九分のランチで宮島へかへり、又車上の人となつた。名産を買ふ暇もない忙しさでした。

嚴島は去る、赤の島居はだん／＼と見えなくなつた。豫想以外だつたあの朱色の島居が。

それより汽車は坂道に喘ぎ、平地を走り、うつらうつらとする間に汽車は厚狭へと私達を運んだ。それより鬼笑亭にて晝食をとり、又車上の一員となつた。正明市にて乗り換へ、萩見學の爲に來た山口高女の生徒と共に一路歸萩の途についた。あの懐しい橙が多くなつた。あのオレンジの匂ひが鼻をつく、さうして笠山が、指月山がみえだした、遂に汽車は萩へ私達を運んでくれた。玉江

で少数の人は下車した。萩、萩、驛夫の叫びの中に下車した一行は、先生方や下級生方の出迎をうけた。今まで半眠状態にあつた私には、今旅行して来たといふことが何だか淡い夢の様に感じられるのでした。

此の長途の旅を有意義に愉快に、且つ女學生としての對面を立派にしたといふ事は、諸先生方の一方ならぬお骨折と、個人々々が自重した此の二つが相俟つてできた結果だと思ひます。

待ちに待つた修學旅行も遂に過去の一日となりました。卒業した後も學生時代の面白かつた思出の一つとして、永久に私達の腦裡に残ることでせう。

#### 人情風俗に關する觀察及旅行雜感

#### 本四 大谷 榮子

私達が最も期待してゐた船の旅、それは豫期以上に楽しい愉快なもので御座いました。

湯上りの上氣した頬を夕風に吹かれながら、甲板の上をさるる歩きも又一種特別な感じが致しました。又水平線上遙かに壯麗な麗しい日の出を拜した時、私達は我を忘れて、只讚歎の聲を發しました。深夜の空に煌々ぞ牙え渡る月を、船窓より眺めた時は、何んだか家が戀しい様

見える様な氣がします。

そして月のおぼろ／＼した夕、櫻の花も音もなく散る春の夕、四條大橋の欄干にもたれて、靜かに暮れ行く川面を眺めてゐる美しいだらりの帯の舞子さんの姿が想像されます。

又風俗は上品に思ひました。殊に、若い婦人の着物の柄等、一般につきりして落ち着きがあり、京都特有の優美さがある様に思ひました。

又京都の人は、一體に他の地に見られない落ち着きとせか／＼しない悠長さがある様に思はれます。之もやはり秀麗な山水に恵まれ、且つ古の帝都として閑雅な生活をして来たせいだらうと思ひます。

産物は美術工藝品が多く、その一番をなすものは織物で、特に精巧絢爛な西陣織の名は世界的に有名であります。その他漆器類中でも京人形等趣あるもので御座います。

繁華な京都、美しい京都から急に淋しい二見ヶ浦に来て、何んだか氣ぬけのした様な感じがしなくてもありませんでしたが、やはり海を見付けて育つて来たせい、か、海が懐しくて、二見ヶ浦は本當に心が休まりました。せつかくの日の出を雨の爲裏切られたのは残念でした。

な所謂ホームシックでも申しませうか、センチメンタルな涙が頬を傳はるのを覚えました。

船は安らかに進んで、私達は神戸に上陸しました。さすがは日本一二を争ふ貿易港だけに、港の有様から市街の有様がすつくり異國的で、私達の様な田舎者をして驚異の目をみはらせました。

アスファルトの舗道に、街路樹の緑の影がちら／＼ゆれて、こつ／＼踏んで行く靴の音も軽快に、すつきりして感じられました。右を見ても左を見ても高層な建物ばかり、私達の目には總てが珍らしく思はれました。

元町さすがに賑やかだと思ひました。

憧れの都京都、藝術の都京都、私達の豫想は裏切られませんでした。プラットホームに下り立つた瞬間、親しい懐しい感じがしました。そして落ち付いた所だと思ひました。

古の平安京の地で、一千百餘年間の帝都として、歴史が織りなした幾多の名所舊蹟を見て、古の京都、日本文の中心地たりし京都を切實に忍ぶ事が出来ました。風俗言語は優美、あの鼻へかゝる柔い京言葉聞いてゐると、音楽の様美しいリズムが胸をそゞつて、月光にはのめく東山の姿や、清らかな鴨川のせゝらぎが幻の様に

しかし清らかな、五十鈴川で身を清めて、森々と生ひ茂つた古木の間の清浄な參道を行く時は、此のそば降る雨の爲、一層森嚴な、身内がぞく／＼する様な感じが高められました。濃い緑の間に素朴な白木造の神殿を拜した時は、身が引しまり、只頭が自然に下るばかりでございました。

奈良は歴史の都であり、遊覽の都市であります。今の奈良は奈良朝時代の京東班田の跡で、神社佛閣多く、四時大宮人が櫻かざして逍遙した郊外の地であつたのであります。

七重八重葺引くうちに、千古の夢を秘めて立列んで居る古建築や、日本第一を誇る大公園は、實に奈良市の生命といふべきであります。

興福寺の五重の塔が青葉の間から屹然として聳え、柳の若葉の垂れた猿澤の池水にその影を映した風景は、奈良八景の一に數へられるさうです。

春日神社は奈良公園の中にあり、朱塗の藤原式の優美な建築で、四邊の深緑と大變良く調和して居ります。又形様々な石燈籠の間を悠然として神鹿の逍遙して居る光景は、千年の古都の靜けさを物語つて居ります。

此の奈良の優雅なる氣分は、此の燈籠と、そしてそこ

に群れ遊ぶ愛らしい神鹿との間からかもし出されるのではないでせうか。

#### 東洋のマンチエスター大阪

林立した大煙突からはき出される黒煙は青空をどんよりさせ、家々の屋根もどす黒く煤けて居ります。さすがは日本一の大工業都市であります。

殆んど總てが機械工業であり、京都の工業の藝術的であるのに對して機械的であります。そして靜止的に對して活動的で、めまぐるしいまでにあらゆる物が移動を續けて居ります。

又大阪は水の都であり、八百八橋と云はれる程であります。

風俗は一般に京都に比して優美さに缺け、すつきりした美しさがない様に思ひました。

又大阪の人は、さすがに繁華な商工業都市の人だけに物事が機敏ではあるがその一面落ち着きがなくせか／＼してゐる様に感じました。

私達が阪急食堂へ参りました時も、二階ぶつどはしの食堂でしたが、それが皆満員で、私達は場所に困る様でありましたが、之も亦、あの俗にいふ、「大阪の食ひ倒れ、京都の着倒れ」の諺を良く表はして居ると思ひます。

## 文の園

### 作文

#### 入學のよろこび

本一 瀧野和子

あめでたう、／＼、をあびせかけられる度に、女學校へ入學出来た嬉しきで一ぱいになります。きれいなメタルを胸につけて、光った學年章をとめた時には、心がひどりでにをどります。通學の途中の阿武川の清らかな流れ、窓の外で春を歌ふ小鳥のさへづり、美しくひらいた櫻の花びら、見る物も聞く物も皆私達を祝つてくれて居る様に思はれます。

春霞はいつの間にかあたりをやはらかに包んで、空も海も、山も、春は楽しい夢の様です。草木の芽にも小鳥の聲にも、何と元氣のみち／＼と居る事でせう。ちやうど新學年と言ふ春を迎へた私達の心をはげましてくれるやうに。机の上につき重ねられた新しい教科書、毎日門

やがて夕べのごぼりが、此の大都市をふんわりと包む頃になると、此の大阪は一變して晝間のあらゆる缺點をかくして、美しいネオンサインの輝く歡樂の巷と化するのではありません。

赤い灯、青い灯が川面にちら／＼色を映し、絶え間なく響くジャズの音につれて道行く人々の足どりも軽さうであります。

人、人、人、全く人の波である。晝をあざむくまでに明るいアスファルトの上をすーつすーつと泳いで行きま

す。初夏の一週間を親しいお友達と共に、有意義に、且つ楽しく、京阪地方の名所舊蹟を探り得た事は、私達にとつて大變喜ばしい事でございます。

そして又此の樂しかりし記憶の一つ／＼は、永く／＼私達の胸深く残つて、樂しい語りぐさとなる事でありませう。

× × × × ×

× × × × ×

をくゞつて新しい學校で、おめぐみ深い新しい先生や、やさしく導いて下さる新しいお姉様方にまもられて勉強する事の出来る私達は、ほんたうに幸福であります。

此のよろこびの時にあたつて、私達は新しい希望と覺悟が必要であります。草木の成長や、小鳥の歌聲に負けないやうに、努めなければならぬと思ひます。

#### 秋 月

本一 田中玉江

酔はされるやうな菊の香にさそはれて、思はず庭に出た。

「お、月が」。

新月でなく、満月でもない月が照る。

しかも、くらくらいかげをした月が。

さうだ、去年の九月四日の午後五時。

「祖母危篤すぐかへれ」。

いふ不吉な知らせが、受話器から父へ、

の口から一家へと流れこんだ。

どろいて支度をすませ、午後七時自動車にて郷里の山口さして、萩を出發した。

車窓からながめた月も今夜のやうな月であつた。

月下を北海へと流れて行く阿武川の水は、唯黙々として流れてゐた。

山口について見たら、祖母は既に歸らぬ旅に立つた後であつた。

去年の秋の、こんな出来事を回顧して居る中に、暗いかげをした月は、松の葉かげで見えなくなつた。

哀調をおびた蟲の音がしきりにきこえる。  
新月でなく、満月でもなく、しかも暗いかげをした月の月こそ永久に悲しい思ひ出をさそひ出すであらう

### 秋の感想

本一 金子紀子

あゝ秋、秋、何と心地よい季節でせう。山野の草木は實を結び、或は花を咲かせて居るものもある。あゝ秋は生物の成熟期だ。さうだ、山々の草木はすでに紅葉して秋の山々を色どつて居る。

紅葉する。さういふことは恐らく植物にとつては、今年最後の飾る華やかさであるに違ひない。紅葉したならば間もなく散つてしまふからである。が其の華やかさも、春、百花爛漫として一時に咲き匂ふ櫻の花などにくらべて見ると、其の間はずつと長く長いところのへた、

### 菊

本一 宮野静江

「静ちゃん、有田へ行つて菊を買つておいで。」お母さんはさう言つて私に十錢銀貨を渡された。私はそれを持つて有田へ行きました。廣い菊畑には白、赤、黄色どりの花が咲きほこつてゐる。すが／＼しい菊特有の香が、あたりになゞよつてゐる。清楚で氣高く、まるで女神の様な胸をひろげで空氣をすつてゐる菊。乙女の様な愼まじやかな菊、天皇陛下の御紋章にまでなつてゐる菊、あゝ菊は實に日本のあらゆる花を代表する清い美しい花と云つてよいであらう。

あらゆる人々から賞讃される菊は何と幸福な花だらう。私はそんな事を考へながら、美しい菊に見送られて居た。

### 秋の夕

本一 林ヒサ

つるべ落しの秋の日は、はや暮れて、邊りは次第に暗みの濃さを増して行く。咲き残りの夕顔の花が一輪、夕闇の中に、ほんのりと白く見える。外では、まだ子供が遊んでゐるらしく、時々、さゞめき聲が聞える。ぱつと

りがあると思ふ。春の花は何となくおごり高ぶつて居るやうなきらひがある。それに比べると、秋の花が咲き、木々が紅葉して美しいのは、何となしに人に清楚な、さうしていくらかの淋しみといふ感じをあたへると思ふ。

廣く高く澄み渡つた大空。其の下の清く美しい地上の景色。その景色の中には、あの美しい菊を忘れてはならない。菊の花の美しさは、一面だしかに清らかな感じがする。又野原には可憐な野菊が、しょんぼりと、半ば枯れたやうなすすきと一緒にゆれて居る。これなどは秋の野原のけしきに最もふさはしいと思ふ。さうだ、きつと秋の色々のことゝいふものは、どことなしに只一樣に淋しみといふことを人々に感じさせる無限の力がある。

又秋にとつて缺くことの出来ないものは月である。一點の曇りもなく澄み渡つた大空に冕々として照る清らかな月。さうしてその月下に照らし出ださるゝ地上の世界靜かに眠つて居る地上の世界。實に神々しい感が出る。秋は淋しく靜かであると共に又生物の體質が充實する時季で、我々にとつても、眞にスポーツのシーズンである。私は四季の中で此の秋の生活が一番好きである。

X X X

邊りが明るくなつたと思つたら、電燈がついてゐた。「御飯ですよ」。と、よばれて行くと、もう皆食卓について居られた。食事をすませて、縁側に來て見ると、もう外はまつくらになつてゐた。あちらでは、お父さんが蓄音器をかけはじめられたらしく、靜かな音楽のしらべがきこへる。縁には冕々とした月の光がさしこんで、あたりは曉方の様である。月は次第に登り、今、大きな雲に、かくれようとしてゐる。もう蟲の音も、餘りきく事が出来ない。靜かな宵を照らしてゐた月は、冴えた姿をつひに雲にかくした。つめたい風がさつと頬をなでる。私は雨戸をしめて、靜かに家の内へ入つた。

### 私の家

本一 河野幸子

私の家は大井村の門前といふ所にあります。門前といふとお寺と何か深い関係があるやうに思はれますが、實際深い関係があるのであります。昔は澤山お寺があつたと申します。それで門前といふ名が生じたさうであります。私の家は三方が山に圍まれて門の前だけが道がついて居ります。門の横側は田地で門の前方は皆人家であり



ます。私の家の家族は一時十幾人といふ大家族でありましたが、今は大へん淋しくなつて、私の兄弟と両親と祖父とであります。職業は農耕でありますので、五月の田植、十一月の稲刈等の時には、雇人が澤山で中々忙しいでございます。ところが父はせはしいのにも拘らず、菊の手入などをして居られます。

何どのんきな父さんではありませんか。又父は謡曲、尺八、碁等が大へん好きで、わけても謡曲は暇さへあれば唄つてをられます。お湯に入つても大きな聲を張上げて唄はれます。又碁も好きで何時も近所の叔父さんと夜の更ける事も知らないで、一生懸命です。だから何時も朝寝坊であります。私が時々鼻をつまんで起しますが、「もう少し」と言つて中々起されません。又お姉様はお茶、生花、三味線が好きで、お茶と生花は汽車通ひで上利先生のお宅に通つてお稽古して居ります。又長唄も好きでありますので上利先生の所に行くついでにお師匠さんの所に通つてをります。お祖父さんはお茶と生花が大好きでお姉様と略々同様であります。私は又お祖父さんからいろ／＼な昔話をよく聴かされたものです。そしてそれを樂みにして居りました。私の家は武士だったさうで、刀が澤山あります。あの有名な七卿の中の澤宜嘉

卿が私の家に永らく御滞在になつたさうであります。澤様がお書になつた扁額も掛物もあります。そして澤様の煙管を私のお祖父さんのお父さんが戴いたさうで見せられました。さうしてお祖父さんのお父様は、大へん澤様のお氣に入りで、又鐵砲を撃つ事が大へん上手で、鞆を十羽ねらつたら八羽は落す程の上手であつたさうであります。澤様はよく弓をひくお稽古をなさつたもので、いつもの樂山の頂においてそれをお射になつたさうであります。私はお祖父さんからこんな昔の事をいろ／＼聴かされると、いつも吾家の歴史を床しく感じます。

## 私の家

本一 田村富美枝

私の家は玉江浦の観音院と申す寺で、中渡しの橋よりや、首を右に廻しかげんの所に有ります。

玉江浦一帯は淋しくもない漁村で有ります。私の家はや、小高い所に有りますから、四季の廻ることに其の獨特な景色がよくながめられます。

ことに夏の始めから終りに掛けて、お風呂上りのさわやかな氣持に、糊強な浴衣をひっかけ、涼みがてらに

観音堂の石段に立つと、遠く日本海のあちらこちらに、いきり火が出没して、ちかり／＼とまた／＼く様可愛らしい。

其の頃になると又エビ取り船が阿武川を我物顔にすい／＼と通つて行きます。

又秋には、ものすごい月光の下に阿武川が金色に漣打つて、云ふに云はれぬ美しさなど、まだ土地になれない私に取つては、ほんたうになぐさめの一つで有ります。

私の家は、おちいさんと、おばあさんと私の三人暮しで有ります。

私は今年始めて此の地にまゐりました。

私の泊つて居る寺は以前焼けて、又新に造り變へられたものさうです。

今私のお祖父さんが此の寺の住職でございます。

寺の本堂を通つて、小ささみの階段を上つて後の山に行くと、あまり廣くもないお堂が有ります。

中には観音様が祠つて有ります。

此の観音様はずつと昔、此の部落の人が此の近海で網を打つて引上げると、神々しい観音様が金色に輝いて居られたので、びつくりして、もつたないと思ひ、此の岡に御堂を建て、祠つたものさうです。

此の観音様は海から御上りになつたので、此の漁業部落の信仰のまことになつてゐます。

さうして朝鮮等へ航海する人は、きつと観音様に集つてお經を上げてもらひお通夜をするのがきまりとなつて居るらしくございます。

私の家のお祖父さんは、やきものを集める事が好きでいろ／＼な焼物を集めては一人で楽しんで居られます。

私の寺の後の山の一端に大きい椎の木が有ります。

私は風の日の日曜日などはおばあさんと椎の實をひらつては楽しんで居りましたが、今では其の氣節も行つてしまつて、つめたいこがらしが寺の後の松の小枝をなかにしてゐます。

## 休暇を終りて

本二 石津ヒサヲ

一學期中待つて居た夏休み、長い四十日間も何時か過ぎてしまつた。今ふりかへつて見れば果して何の得る所があつたらうか、家の手傳ひ、勉強、それもしたと云へば毎日行つて來たと云へない事はないけれど、それよりもつと／＼何か深い眞實な物をつかむ事は出来なかつた

らうか、「眞實な物」それは何かわからない。考ふる人により異なるからだ。私は、「生き物の強さ」をつくつく感ずる事が出来た。あの炎天の下で終日働く人、そして昆虫皆生活の爲に強く、雄々しく、あらゆる物を征服せずば止まぬ意気である。道邊の小草でさへ枯れずに太陽と戦つた。私等は人間だ。昆虫にも、小草にもあれだけの力のあるものを、まして私等には、働かなくてはならない。勵まなくてはならない、四十日間の私の生活は餘りに弱かつた。新しい學期は再び起き上つて、炎天にも負けずに戦つたあの蟻の様な、彼の植物のやうな元気で進まなければならぬ。

## 新緑に學ぶ

本二 相木喜美子

六月の太陽は力強く地上を照してゐます。山も木もさうしてあらゆるものは緑色に輝やいて元氣にみちみちてゐます。陰鬱な冬の月と比べてなんと云ふ六月の明るさでせう。この六月の様に明るく緑色のやうに元氣のよい私達、はちきれそうな元氣を持つて愉快に飛び跳ねて見たい氣持が心の扉をたたくのです。けれどこの六月はた

私達を愉快に遊ばさせるだけでせうか。  
いえ、きつこく深い意味があるでせう。頭も精神も明るく元氣にみちみちてゐる時しつかり心を引締めて學ばなければなりません。この元氣にふさはしい六月です。新緑です。あの柔かい葉がぐんぐん繁る頃、もつと進歩してゐなければなりません。植物ですら一心です。まして私達はたゞうか／＼とすごされるでせうか。この新緑は明るく元氣さを持つて私達を勵ましてくれます。教へてくれます。私達はこの新緑を見て學ばなければなりません。あらゆる方面に。

## 暮れる濱邊

本二 山村富士子

姉は一月から病にかゝつてゐます。一時は危険だつたが、だん／＼恢復しまして、今では濱邊を散歩するやうになりました。夕暮近くになると、いつも寂しく一人で行き出かけてきます。私も時々姉の心を思ひやり、一しよ今にも太陽は紺碧に、風いだ海と、白いのがほつかりと浮いた雲との間に半分顔を出してをります。波は靜かに

渚に打ちよせて來ます。太陽の光線を受けて銀色に輝く小浪は、銀色の糸をひくやうに、だん／＼渚に打寄せて來ます。もう太陽も頭を大分ひっこめてしまひました。だん／＼まはりも薄暗くなり、向ふに見えるたくさんの島も、ぼんやりとして所々に岸に向ふ白い帆が我家に向つてかへつてまゐります。

時々名もしれない水鳥が、群をなして、空をかすめて彼方に行つてしまひます。指月山ももう暮れて、堀内の家にはあかりがついてゐます。島はもう暮れて見えなくなりました。白帆は大分岸に近づいてをります。

もう暗くなつたので姉をうながし、砂をぎつ／＼とふみながら、暮れた濱邊をのこして我家にかへりました

## 鉛筆

本二 山田英子

「一寸すまんけど鉛筆貸して呉れん」。「ハン」と何気なく開けた筆入れに、餘りにも圓く、餘りにも念入りにちびらされてゐる鉛筆を見て思はず苦笑した。見れば寒い故か御丁寧に首をちぢめてゐるのや、無慘にもカッブをかみ切られてゐるのさへある。

餘りにも意外な所で、餘りにも正確に、自分の不勉強を見せつけられて自分が恥しかつた。

「万年筆でもい、う、う」。「ハン」と万年筆で用を足した私は、自分の不注意の爲に無慘な姿と化し、又其の使命を果し得なかつた哀れな鉛筆より受けた感動は深かつた。無言の中に訴へる様な其の哀れな姿は、明日からの私に此の様なふしだらはさせないだらう。

## 銃後に在る帝國女子の覺悟

本三 冷泉龍子

寒いシベリヤ嵐は血生臭い氣と、砲彈の香を含んで幾千里の野を過ぎ、山を越え、果ては海を渡つて日毎に私達を激勵さすのであります。

私達は、酷寒零下三十餘度の彼の寒い滿洲の地に、雄々しく正義の剣を取つて、戦つて居られる出征兵士の方の事を思ふときは、本當に乙女ながらも暴虐極まる支那軍に對する憎惡の念と我兵士の方に對する感謝の念が、一時に胸の中に起つて來るのを覺えるのであります。過去數ヶ月間といふものは、殆ど毎日けた／＼ましい號外の鈴の音や、ラチオのニュースにどんなに心を躍らせた事

でございませう。そして何時も十数倍にも餘る大敵を、苦戦全滅に瀕せんとする時に於ても、動せず屈せず意氣と力とで撃退し、奉天を手始めに、近くはチチハル錦州へと目まぐるしい許りのあの連戦連勝の報を得ました私達は、内にいひ知れぬ力強さを覺えると共に、外に諸外國に對して或種の誇を感じたのであります。護國の鬼と化する決心で、勇ましく戰の第一線に立つて活躍し、盡忠報國の誠を致して居られる方々に對して、私達銃後の人間は一致團結してこれが後援と慰問に盡力せねばなりません。勿論私達は未だ女學生の事でありますから、大した後援も充分なる慰問も出来ません。しかし出来る限りの誠を盡すならば、天地の神も是を認めてお授けの御手を下さる事と信じて疑ひません。

遠くはあの元寇の國難、近くは日清日露の兩國難におさしても、吾が國民は一致團結し、男子は楯を片手に劍を取り、女子は内に在つてこれが激勵と慰問に誠を盡して参りました。

この一致こそ常に、大敵を破り、萬代不易の我が國體を益々堅くして居ます。

此度の滿洲事變におさしても、この團結が理想的に實現されて居ます。銃後に在る私達女子は或は慰問袋に

居られたお父様は、目覺めておつしやつた。

「幾子、今何時かい。」

「時計ですか？、今丁度九時です。」

「どうか、もういゝからおやすみ。」

でも私は手をやめなかつた。私が額を揉むたびに父の頬の方までびく／＼動く。やせた頬、尖つたあご、延びたひげ、本當にやつれたお父様。わづか十日ばかりの病氣が、あの元氣な父をかうまで變へるものかしら。私は胸苦しくなつた。

昨夜も兄と二人で枕元に坐つてゐたら、お父様の熱つぽい聲。

「お前達二人はもう大きくなつて心配はないが、まだ小さいのが……もし萬一の時には二人でよく面倒を見てやつておくれ、幾子もよく兄様のおつしやることを聞いてね。」

すると、即座に見は

「お父様何をおつしやるのですか。この位の風邪で。でももしもの時には、それは長男の私が勿論みんなよく處理しますから御心配はいりませんが……。」

私も

「本當よ、でもお父様、今からそんな事考へないで、

感謝の念を寄せ、或は千人縫に千人の眞心を縫ひ込み、時あつては神鎮ります社の社頭に武運長久をお祈りしました。

そして感謝の情のおさへきれない時には、遠く慰問使を送つて、國民九千萬の心からの辭に代へたのであります。しかしこんな事は僅に私達女子の熱誠の一部分にし過ぎません。私達の熱誠は決して言葉に表現したり、又行動に表す事の出来るものではありません。

夕陽赤く照るあの滿洲の氷の上に、力強く進むことも退かぬ忠勇無比の吾が兵士の方々に、銃後にはかくも強い力の存在する事をお知らせ致し、さうして兵士の方々に勇氣百倍、帝國の權益擁護のために力を盡し、新しい滿洲、平和の滿洲の一日も早く建設せられん事を切に希望してやみません。この建設に對して千分の一、否万分の一の力をも盡したいのは、私達帝國女子の一致した思想であり、又義務であります。

## 寢息

本三 小谷 幾子

ちん／＼／＼時計が九時を告げた。夢路を辿りつ

早くよくなつて下さい。」

どいつた。父は稍々安心さうな顔をして、又目をどちらにした。これは昨日の事。でも本當に父にもし萬一の事でもあつたら、残つた私達はどうしたらいゝかしら。たつたこれだけの事を思つただけで、もう私の心全部を悲しみがおぼつてしまつた。ほたり！。涙が父の枕の上を濡した。あわて、拭つて、父の顔をのぞいたが、矢張りすや／＼と軽い寢息。よかつた、でも馬鹿な自分だ、今からそんな事を考へてどうするのだ。そんな事のない様に自分は看病してゐるのではないか。明日の朝起きて見たら、きよろりとなほつてゐるかもしれないのに。自分からこそ元氣を出さなくちや、と思ひかへして力を入れて又探み始めた。お父様早くよくなつて下さい、元氣に笑つて下さい。私ももう寢よう。風が出たららしい、寢息にまじつて、雨戸の響が聞える。

## 墓參の宵

本三 前田 禮子

赤い眞赤な魂の様なお日様は、長い一日の果を告げて大きく／＼山の彼方に沈まうとしてゐた。冷い川風が吹

いて朝の聲が淋しげに聞えてゐた。伯母様もだまつて、私もだまつて、さうして小さい男の子達もだまつて、唯とぼ／＼と埃多い山道を歩んで行つた。

すつかり日は落ちて、今は朝の聲もいよ／＼淋しく胸にしみ入るやうだ。長く続いた山道を終へて、やうやく紫の夕靄につまられた静かな村に出た。白い夕顔の花が夕もやの中に眠つてゐた。

高い石段を一步々々とふみしめて上つて行く靴や下駄の音が、夕闇の木立の中に吸ひ込まれて行く。大きな銀杏の側の出門をくゞつて位牌堂に入る。何處からともなくまつはり寄つて来る香の中に一抹の佗しさを覚える。マツチをすつて線香を供へた。ゆらく／＼と立昇る煙、小さくしやがんで禮拜する人、此の世を遠く／＼はなされて行く様な寂しい感じだつた。

堂を出て墓地へ向つた。暗い細い道が、ちらばる様に立つてゐる白い墓石の間を、山の方へとつゞいてゐる。やがて見覚えのある墓石の前に立つた。あまりの寂しさをはらひやるすべもなく、廣い大空を見上げると、何時の間にか、お星様がちら／＼とまた／＼と始めてゐた。繁華な都のヴァルコニーから、狭い夜空の星の姿をながめられた叔父様、今この廣い／＼澄みきつた空、清い星の

光つて流れてゐるのが見えるだけだつた。静かな夜のさざはしを一足々々と降りて行く。

### 初秋の一日

本三 大岡 光子

九月二十七日

やんちや坊の治ちやんの聲、もう運動會気分て朝から大騒ぎ、私は今日は此の大騒で目がさめた。目醒まし時計はもう鳴つたあそだつた。

起床して縁側に出ればつめたい微かな風がさあつと、拂つて行く。もう秋だなど思はずには居られない。

お母様と今日は午後お寺詣りをした。道々も、もうあの白いらんニングとパンズ姿の子供はあまりに見うけない。いつも夕方美しく咲く夕顔の花。此の頃はなんだか寂しさに、さようならとでもいつたやうに、小さくしをれた白い顔、夕方ラヂオの「子供の時間」を聞くと、一緒に合唱するかの様に弟のもちつて来た猫がなき出した。初秋の夜は蟲の鳴く聲、月は雲に隠れ又出る様子、いつまでたつてもあかぬ眺。

光に守られて、静かに眠ります叔父様、天上にかゝやく星の光こそ變らねど、眺むる人のかくまでに變れるを。お線香を供へて、涙ぐましい心をそのまゝに手を合はした。立上つてから伯母様が「叔父様のお骨を見せて上げませうか」と言はれた。「え、」お別れして五年、もはや永久にお目にかゝれない叔父様、お骨にだけでもお會ひしたかつた。お墓の後をあけて取出された四角な桐の箱、「これ、でもあけるのはよしませう」。暫くして又もその様にしまはれた。墓石の角が白い月の光に照らされた。

「叔父様が生きてゐてくれたら、どうしてあんなに早く」淋しい伯母様の心の中は、唯一この言葉となつて私の耳に胸にひびいた。

墓地を下りながら何度も／＼も山の方をふり返つた。位牌堂を通りぬけて本堂の前に来た。大きい火がともされて森としてゐた。石段を降りながらもう一度ふり返つた。古い／＼山門も銀杏もみんなねむつてゐた。この石段を叔父様と賑やかに笑ひ興しながら降りて行つた幼い頃が、こんなに早く、こんなにまで悲しい思ひ出にならうとは……。

見渡す彼方には、廣い田の中に大川がうね／＼と白く

### 師走

本三 山縣 節子

お部屋のカレンダーが、一枚々々再び歸らぬ一日々々が淋しく／＼はがれ去り行く。

家々には若々しい門松を立て、すぐ向ふに見えるお正月の樂しさを期かに待つてゐる。シヨールに顔を埋め冷たさを忘れて、初春の歡びを夢みつゝ微笑みながら通つて行く人々の足も早い。暮れの濃い／＼空気が冷たく、あちこちと迷つてゐる。下駄の音も遠く／＼道を走り、風の中には、人々の傘が點々ぞ見え隠れする。

小雪が降る！

遠い山の上にかゝつてゐる斑雪を見て、今更何となくさよつととする。冷たい瞳を無難作に足下へやると、何時も前を通る毎にいじらしく聞えてゐたせゝらぎも消え、薄氷にとざされてゐた小川が目に入つた。あの小魚達も今頃は此の下で冷たい思ひをして眠つてゐるのだらう！所々冴えきつた青色の雲が顔を出した空には、一種の不氣味さでも云ふ様な物すこさが流れてゐて、昨日からの淡い／＼残月がさつさつと西へ走つてゐる。

暖いお部屋に入ると、長火鉢に乗つて、一人盛に蒸氣

を出して得意げに樂を奏し、面白さうに沸いてる鐵瓶の聲が、静けさを破つてひどく耳に入つた。走りよつて二つの手を火にかざすと、次第々々に活き／＼した赤色になつて行くのを見て一人はゑんだ。隅からは蜜柑の熟したあまいすいゝ香味が湧いて来る。

さき程より寂しい暮れの風はしきりに戸をノックする小さな水滴の白く曇らしたガラス越しに見れば、風が吹き過ぎた間に、お庭の木々の古い霜葉も落ちつくし裸木になつても、茶色に塗つた細若な枝の一つ一つに芽を出し、春のおどづれを待ちに待つ。葉と葉の間には大きく笑つた蕾が覗き、「風はいやね」とさゝやき合ふ。右の方に一本離れた枯木には、知らない鳥が来て「いゝお年をお取り」とでもいつてゐる。それと共に、カアーカーアと微な／＼哀寂の聲で鳴き行く鳥が、昨日と同じ様に暮れ行くお山へ急ぐ。風の吹くまゝに、そちらこちらと吹き落されさうに進む姿が、涙ぐましい程に目に映つた。曇りながらもほんのりと明るいお部屋で、私は何時までも／＼暮れ行くものゝ總てに見入る。時計も力なく細い聲でカチ／＼と刻み行く。

やがてお炬燵に入らうと思ふ頃には、風はだん／＼に凜いでゐた。私がい夢を見てゐる間に、木々のさゝや局はどうなるだらう。

人の幸福は祝福すべきで有ります。人の喜びは共に喜ぶべきで有ります。又人の長所はほめるがよいのです、然しさうした心の底を割つて見ると、そこには羨望と嫉妬が絶對にないとはいはれないでせう。

誰れしも苦しむ事を喜ぶ人は有りますまい、しかし其の苦しみを眞に味つてこそより大きい努力と、より大きい力が生ずるのではないでせうか。しかし苦しむといふことはつらい事です。ですけれど總べての困難！、あらゆる苦しみの境には成功其のものが暖い腕を擁げて、私共の進路に待つてゐる事でせう。さう思ふと私達は困苦に對しても楽しい微笑を持つてそれに向ふ事が出来る様に思ひます。

## 元旦の朝の感想

本三 津田貞子

霧の如き小雨の内にしどやかに聞ゆる雞聲。賤が伏屋にもなごやかな朝の訪れをもたらした、人生一步への樂

きが聞える位に静かであればいゝと思ひつゝも、何時の間にか何者かに誘はれてゐた。

明日の朝は銀世界になるかしら？

## 思ふまゝに

本三 長山菊代

不幸な境遇にゐてもそれを幸福へ／＼と導く人！。

悲しみを喜びにかへようとして行く人！、つまりは自分の運命を活かす事を知つてゐる人！、それは幸福です。運命を活かす事を知らない人、それは自分で自分を不幸にしてゐる人ではないでせうか。さう思ふ時餘りにも自分の姿は悲惨なものです。

不徹底な其の日その日、そこから又私の惱は生じ張りのない生活、空虚な生活、やはり何ものかに向つて進まなくてはなりません。しかし何時までも何日までも、何物もつかみ得ない私、只氣ばかりせき、心ばかりあせるのです。毎日々々振りかへる一日の足跡、そこには何物の影も見とめません。惱は続く、あわた／＼しく無意義にすぎ行く日がうらめしい。早や二週間の休みも終りを告げようとしてゐるのに、自分は只うつろな生活をして來

しい門出の朝。此處彼處若水を汲む手も軽く車の軋る音さか行く年そのものゝ如くほどばしり出るポンプの水音元旦の朝は暮れの忙さに引比べて雨の降るのも神々しい門松の繩、神の殿堂に住んでゐる様な氣持ちとなる。日の丸は熱烈燃ゆるが如き愛國心を現して實に力強い。人々の顔は自ら微笑み、お友達とお目出度うと云ふのも、ものはづかしい様だがうれしい。心身共に清めて希望に満ちた人々の面に接する時に、愉快ですなといひたい様だ。學校で式辭として、校長先生より本年心得べき事、勸題曉雞聲の難にかんがみて、早く起き、節約をし、廢物利用をするといはれた事をよく實行して、又一休和尚の歌はれた、

元日や冥土の旅の一里塚

たのしくもあり、たのしくもなし

と云ふ歌をよく味はつて見たいと思つた。

## 新年を迎へて

本三 三島房子

曉の鶏に夢破られて夜のとばりは開かれた。

我等の希望多き昭和七年のスタートはきられた。

今しも眠むる木々も夢から目覺めて、輝かしい大御代の世を誇いでゐるでせう、空には悠然たる鳶がなごやかな羽で舞ふ、鳥も群をなして新年の初頭の挨拶を交換し合つてゐるやうに空をかけ廻る。

庭の梅の木も春風に當つてはころび初め、かをり床しい香を放ちて鳥達を迎ふ。

水仙の麗しい花を見ても、神々しい新年を自然とお祝ひしたくなるのを感じる。

今や北滿に於ては、我々同胞の爲に幾多の犠牲者を出し、雄々しき華々しき我兵は、陣中に於て新年を迎へるではないか、今ははや國難、内には財政問題、外には北支の匪賊。

實に多難多事となつてゐる。

私共は協同一致の精神で時局に鑑み勤勉力行、節約利便、の文句を標語として、一九三二年を進みたいと望みます。

## 岸邊

本三 末武 政子

此の間の事の様に思はれる私共としての夏休の水泳場

それは幼子達の夏の樂天地ともいほうか。けれど、今はもう淋しい静寂に返つてゐる。冷い空気にふれる眞砂が足を運ぶ毎にざく／＼と音を立てる。

「冷さうなお水ね」。

じつと水を見つめてゐた春ちやんがかう叫ぶと、私の手をぐん／＼引張つて岸の水ぎはまで連れて行つた。そして足元にころ／＼してゐる石を拾つて、

「ねえちやん、アンコー（岸邊にゐる黒色又は褐色の小さい魚で、私共は之をアンコーといひます）。がゐるかも知れないよ」。

さひながら、石穴を目がけては、どぶん／＼と投げ、初めた。

「春ちやん、水が散るぢやないの」。

私の言葉に投げる手を止めた。折ふし、アンコーが穴から穴へ走つた。

「ねえちやんアンコーは寒くなつても一人で遊ぶの？」春ちやんはこつけない質問を出した。そして最後には一んと力一ツばいに石を投げた。と、一しきり大きな波紋を描いて、ゆら／＼と水底に沈んだ。静になつた水の面には、綿の様な雲がいかたまり宿つてゐた。

## 母に別れて

本三 中村 正子

母に別れて生活してゐる淋しさ。

それは母に別れて生活してゐる人だけの持つ淋しさ、おゝ母と一處に居たらと思ふことの度々ある淋しさ。

夏は夕涼みに物足りなさを知り、秋は落葉の音にその聲を思ひ出し、冬は灯の下で語つた夜を思ひ出す。

朝夕話してゐる時でさへ、母に残されてゐることがおびた／＼しく淋しいのに、まして長く別れてたゞ一人であることは悲しい。

誰が呼んでゐるのか真夜中に、あゝ母の聲がする。

でも誰もゐない。外には月の淡い光と夜霧のしめりがあふばかりである――。

それだけに尙母の思ひ出が何かにつけて有難かつた。叱られたことも、ささされたこともそのすべてが、――

去つた夏休み母が歸つて来た時のうれしさ――。晝の藪で波と砂と女とたはむれたことの楽しさと違つた意味で――

一時に内の中が明るくなつて来たやうに。

母に別れてゐる者の淋しさ。

それは母に別れてゐる人だけの持つ淋しさだ。

## 現代の女性

本四 菊屋 正子

近來時代の進歩に伴れて、女子の覺醒運動が起り、これまで家庭の内封鎖せられて居た女性が社會的に解放せられて、政治的或は經濟的又は其の他のために活動せんとして居る事は、女性のためのみならず、男性のためにも祝福すべきことだと思ふ。

一體、従來の社會は道徳や制度を、弱者殊に女性に強いた傾がある。勿論之は女性それ自身の因循であることが、今日のやうに社會制度を生んだ原因であらうが、兎に角、今日のやうに文明といふものは、多く男性が開拓し建設した結果、男女平等であるべき法律及び社會制度、道徳までが男子側に偏するやうな、傾きのあるのは、又止むなき次第と云はねばなるまい。然し今や女性は永い夢から醒め、女性自覺の一頁は既に開かれた。今後の社會は所謂男女共力の時代であらねばならぬと思ふ。又實際來るべきより善き世界、合理的な社會を建設し、文明の進歩を計るには、獨り男性の力のみではなく男女が力

を合せ一つとなつて行かねば、此の大事業は出来得るものではないと信するのである。

然し翻つて考へて見るに、時代が如何に進歩しても、文化が如何に進展しようとも、女性には依然として女性であるから、男子は男子らしくありたいのと同様に、矢張り女性は女性らしくありたいと思ふ。其處に又女性の尊さがあるのである。云ひ換へれば男が男として貴い如く女は女として貴いのである。男が女らしくなれば、人たる男の價値がなくなり、女が男らしくなれば、人たる女の價値は失はれるだらう。女性の柔和、細密な性質こそ女性の女性たる最も貴い性質である。所が世の中には男子を模倣したり、或は無暗に男子に反抗したりする女性もあるやうだが、女性の男性化は排斥すべきである。勿論現代は斯様な女性を要求してゐない。私は何時の世までも女性は優しく、美しく、良妻賢母たることを第一の幸福として望んでゐて欲しいと思ふ。猶婦人の参政權問題も叫ばるゝやうになつた今日に於ては、今迄女性として必要なる知識以外に政治、經濟問題、思想問題等の諸方面にも相當の理解を持つことが必要である。既に我が日本も男子の普選が實施される様になつた以上、何れ婦人の参政權も近き將來に於て認められる事であらう。

然してその結果婦人の人格が認められ、婦人の智的能力が増進すると共に社會的地位が向上し、そして男女が互に共力して行くならば、其處には一層合理的な國家社會より完全な文化が生れ、人類をより幸福に導くことが出来ると思ふ。然し、こゝに一つ更に附け加へたいことがある。それは婦人が職業に従事し、或は又女子の向學熱が盛になり、女子の教育が普及して女性の中より學者、藝術家など輩出し、或は又政治家が輩出して男子と共に國政を議することは誠に善い事だと思ふが、此等は決して婦人の眞の目的ではないと云ふ事である。婦人の眞實の目的は何んど云つても私は良き妻、良き母にあると思ふ。之が婦人本來の使命、天職である。即ち、婦人に取つては、職業も教育も政治も此の天職を完うせんが爲の努力、一つの手段に過ぎないのである。そこで私は女性に對しては、女性が此の天職をよく自覺し、然して眞の女性として或は妻として、母として家庭の許す限り、經濟的に、或は社會的に、或は政治的に活動されん事を望むのである。然るに若し婦人が職業の爲、教育の爲、政治の爲に、此の天職を無視し、家庭生活を否定する様な事があるならばそれは許す事は出来ない。

## 岐路に立ちて

本四 瀧野 芳 枝

元々男女は相對立して競争すべきものではない。若し婦人の中に、婦人も同じく人間であるから、男子と共に肩を並べて社會の表面に立ち、何處迄も相競ひ相對抗して行くべきものであると考へる者があるとすれば、それはいふ迄もなく大なる誤謬である。男女は和合すべきもので、決して對抗すべきものではないと信する。たとへ境遇に依つて、男子と肩を並べ、社會の表面に立つて大に活動するにしても、何處迄も和合して事に當ると云ふ事を忘れてはならぬ。勿論屈從せよと云ふのではない。婦人は立派な人格である。然し多くの若い婦人が徒らに華美放蕩な生活を求め、寄生的生活を望むやうでは、未だ婦人の社會的向上はむづかしいと思ふ。

要するに婦人が自己の使命を果し、人生の意義を完うせんとするには、それ自身の覺醒、自覺を要するのである。殊に現今の如き、社會が益々複雑となり、國際關係が愈々多岐となり、且つ内外に亘つて時局の頗る多事多難なる時代、然も國民の思想は次第に惡化し、財界は不況續き、加ふるに彼の滿洲事變の難關に直面してゐる今日我々日本女性たる者は十分に現下の狀勢を察知して、此處に特に、覺醒と奮起とを喚起すべきである。

なつかしい幾多の思ひ出をふんわりと包んだ小學校へおさらばを告げたあの日、あの日こそ私達の前に岐路が展開されてゐたのである。六年の長い年月を互に手を取り合つて、長い一條の道を歩んで来た親しい友と分れなうてはならなかつた。そして各自定められた道へと歩み出したのである。高等科に残るもの、さては家の爲に己むなく職業に就かなければならぬといふ淋しさうな友もあつたものを、私達は女學校へ進むと云ふ小さい優越觀から、「お氣毒に」とは思ひ乍ら、それ等の友を尻目にかけて揚々として本校の校門をくゞつたのであつた。楽しいまゝに無我夢中に過した一年生時代、少し氣張らなうてはとは思ひ乍ら有耶無耶の中に過した二年生時代、中堅たる三年生時代、それも間もなく過ぎて今は上級生たる四年生、その四年生時代も後僅かになつた。

「瞬間が全部であり、瞬間が永遠である。瞬間が始めであり、終りである。」といふやうな言葉を解らなくて首をひねつたものであるが、今はそれが少しわかつて来たやうな氣がする。泣いても笑つてもスクールライフは

後僅かである。

今の私達の前にも幾條の道がある。私は今岐路に立つてその中の一つの道を選ばなければならぬ。涯もなき曠野、オアシスを求めて旅するキャラバン、俄然彼等の前に若し岐路が現はれたら、死活問題たる水を求めてゐる彼等は、右へ行くであらうか？ 又は左へ折れるであらうか？ それと同じやうに今人生のオアシスを求めてゐる私はどの道を選ぼうか。岐路！ ほんとに人の心を感じずもの、オアシスはどの道に潜んでゐるか。自分の前には色々の道が横はつてゐる。一つは卒業後上級學校に進む道、即ち學びの道にいそしめよと誘つてゐる道。今一つは所謂日本のお娘さんになれよ、女は女學校位で澤山だ、裁縫の道が大切であると高唱してゐる道。さて職業は神聖なり。現今に於ての婦女子よ、須らく職業に就き、雄々しくその職に殉ぜよと絶叫する道等々。オアシスは果して如何にしてどの道を選ぶべきか。それには現在の境遇、知識、身體の健全であるか否かを顧慮しなければならぬ。上級學校へは家庭の事情として進まれぬこの身は、やはり家に歸つて父をお慰めするのが至當であらうか。思ひは千々に亂れる。心の中で入り亂れて、肯定したり否定したりする何物がある。

### 旅に生きる心

本四 黒田孝子

旅は懐しい芭蕉の一生を思ふとき、西行の生涯を考へるとき、旅に生きて旅に死んで行つた彼等の生活を尊く思はずには居られない。旅人―それは永遠に生きて言葉である。たとへ僅な旅でもよい、無理にとりたて、言ふ景色はなくともよい、自然と名のつくものがあればそれで充分だ。旅は心にある、旅すると言ふ心が尊いのだ。一度よりも、二度よりも三度といふ風に、旅はどめどめ心を引きつける。旅する前の心は昔も今も變らぬ。過ぎ去つた旅を思ふ心もうれしい。「あゝもあつた、かうもあつた……」その感情は決して悲哀でもなければ悔恨でもない、美しい追憶のしたゞりである。追ふもの總ては儂い人間の情の中に、旅を追ふ心のみはいつまでも自分を明るくしてくれる。追憶の山に、河に旅人としての自分の姿を描き出して見るとはたまらなくうれしい、なつかしい。旅は人の心を清めてくれる。そこには偉大な力が感ぜられたのであらう。そこには人間の作つた道徳も宗教もいらぬ。旅に生きるそのまゝの心があればそれでよい。無理につとめなくとも、強いて顧みなくとも

岐路！ さうだ、今こそ岐路に立つてゐるのである。

「おや、もう岐路迄来ましたね、ではお別れ致しませうか、又明日ね」。と普通ならばこの位の調子でさつさと一方の道に進んで行くのが、人生の門出の場合にはさう簡單には行かない。

黎明へと胸も震はせて旅立つ小島にも似た私達、荒けぶりの社會の槍舞臺に活動しなければならぬ私達である。たとへ命の旅は長くとも、廣い世の中のことであるから、一度別れたら何時會へるか分らないのだと思ふと友と別れたくなくなる。だがこの生存競争の激しい實社會へ、勇ましくスタートを切らなければならぬ際である。表面上潔く友と別れ、精神的に結び合ひ乍ら、最上への道へ進もう。

親や友に守られて通つて来た楽しい花うばらの道にも「さらば」を告げよう。

これから先の道には定めし荆の刺も交つてゐよう。だが私は恐れない。勇敢に突進する積である。二度と來ないであらう花うばらの道よさらば。

× × ×

旅人は人間にきながらの心を與へてくれる。旅に生きるとは、その心の影に生きる事に他ならない。そこには宗教がなくとも、道徳がなくとも、美しい人間の歩みがあるのである。芭蕉にしても西行にしても、別にかはつたことをやつたのではない。旅の心を持つて一生を終始したまゝである。

### 堪へ得る力

本四 田中君江

堪へられぬ苦痛はない!!!

さうだ、過去の苦痛、それは確かに堪へられた。

現在の苦痛、それも確かに堪へてゐる。

未來の苦痛、それは必らず堪へられる。

苦痛がませば増す程堪へ得る力が先に増す。

さうだ、何事も堪へよう、そして私は強く清く生きなければならぬ。

自分の力で來るべき明日の運命を開墾せねばならぬ。

今の私は新しい希望に充ちた春のやうである。あの淡緑色の空のやうに、今は晴れやかに來るべき艱難に堪へ



得る力を養ふべく、私は更生したのだ。  
何事も堪へよう。そして明く強るくこの世の中に生き  
なければならぬ。

### 意 氣

本四 粟屋 智恵

スポーツ界の權威たりし人見嬢の死、それは世に大き  
い衝動を與へた。若くして世界の舞臺に活躍せられた人  
見嬢は、全力をスポーツ界に投げ出して奮闘された。又  
死ぬ間際まで病魔をも打ちひしぎ意氣を持つて居られた  
我等はその意氣を尊ぶ。今後人見嬢の如くに活躍するこ  
この出来る人が出るか否かは断定し難いが、假に腕は劣  
ることも意氣だけはかくの如く有りたものである。唯ス  
ポーツのみに限らず、何人も強い心を持つて人生を送り  
たいものである。

### 幻

本四 河野 壽恵子

またねむい、しかし登校する時刻が来た。今日も胸に  
優勝を大きく描いて出た。グラウンドに強いライオンが

### 夏 休

本四 齋 藤 菊代

兄を迎へる爲ブラットホームに立つた。間もなく頭髮  
を長々と、唐大權兵衛の履くやうな下駄をつつかけ、ト  
ランクを持つて歌を歌ひながら出て来た。三人の學生が  
あつた。その中の一人を見た瞬間私は驚き「まあ兄さん」  
と聲を掛けた。兄はふりむき「やあ菊坊か變つたなハ  
さあトランクを持って」私は悲しくなつた。人を馬鹿にし  
てゐる。間もなく一臺の自動車にみんな乗込み、玉江橋  
上に来た時一同は彼方の水平線を眺めて詩吟を始めたか  
と思ふと又手を打ちながら「若き血に燃ゆる校旗」を歌  
ひ出した。私は喧しくて仕方がなかつた。勉強地に於い  
てもいつもあんなに浮か／＼してゐるのだらうか……  
それとも郷里に歸つた喜びの餘りだらうか……。

### 廻轉した世界

本四 荒 尾 綾 江

人造人間が地上を征服した。人間は地下に追ひ込まれ  
た。機械の世界だ。人間の溜息は地下に渦巻いた。

東の空の雲の切目から斜にさし込んでゐる。猛練習がつ  
のるにしたがひ、汗は運動着をじたりに征服してゐる  
疲れも痺痺してしまつて、たゞ優勝の幻に身はさらはれ  
て居る。寝ても暗い部屋にまろい眞白いボールが往來す  
る。やがて静かな夢の國に行つても、勝つたり、負けたり、  
嬉しいやら悲しいやうに、毎夜優勝の爲めに苦しむ  
ながら夏休みも過ぎ去つた。

### 海 雲 臺

本四 稻村 八重子

市内から約四十分も自動車にゆられて、やうやく着い  
た所が絶景と云はれる海雲臺で、山を背負つてはてしな  
く開いた海には人間が河童の様に泳いでゐる。所々には  
キャンプ生活をしてゐる。綺麗な砂にうづくまつて、寝  
てゐる人もある。青、赤、緑、の海水着が緑遊燃える砂  
原に躍つてゐる。松原に来て寝ころんでゐると、男の人が  
御米を御鍋に入れてあらつてゐた、静かな海邊では面  
白い光景だ。何處かで牛が鳴いてゐる。のどかな御書だ

× × ×

「青空が見たいなあ」。

ぞく／＼と坑道から送り出される青白き人間、彼等は  
彼等が地上を征服して居た時代を懐しんだ。

人間の靈魂が電子と核に分解された時、人間はその頭  
腦の明晰なのに驚歎した。しかしそれは幸だつたか、不  
幸だつたか。ロボットに靈魂が送り込まれた。電氣を補  
充しさへすればロボットは動いた。傳染病も無ければ白  
痴もない。暑い、寒い、飢しいと泣く人間は、その機械  
の前に一たまりもなく屈服させられた。人間のエゴイズ  
ムは人間自身を墓場に追ひつめた。  
沖積紀の終末だ。人間の化石をロボットはいちくりま  
はして不思議がつて居た。

### 誕生日の朝

本四 金子 夏江

りん／＼と、夕べ五時に掛けて置いた時計の音の止  
まぬ中に私は飛び起きて雨戸を繰る。朝の軟らかな光線  
と風がさーと室内一杯に入つて来る。あゝ、今日は八月  
廿九日、私の誕生日なのだ。思へば西も東も分らない赤  
ちやんだつた私が、もう十七の娘になつてしまつた。悪

戯して叱られて子が、幾分か無事にお手傳ひ出来る今の私となつたのだ。何だか不思議な気がする。でも嬉しくてお臺所に走つて行つた私、いきなり炊事して居た母に「お母さん、有難う！」を浴びせた。

「私、今日生れたのね！十七年前の」「まあ！そのお禮なの」突然な私の言葉に驚いた母は、始めてにこやかに微笑した。

## 海邊にて

本四 齋藤ふみ子

ゆゑもなく海が見たくて海に來ぬ

こゝろ傷みてたへがたき日に (啄木)

其の夜も私は一人月の明るい海邊に立つてゐた。渚に近い海の上には月の光を映して、寄つては散り亂れては散りする、美しい銀色の流を宿してゐた。仄明るい沖の彼方には、對岸の山々が煙霧に煙つてぼろーと浮んでゐる。穏かな彼が私の足許をさら／＼と洗つてゐた。暖い此の海邊寂然として人影はない。

私は此の美しい海邊で青白い月の光に打たれながら、ずつと前に聞いた事の有る懐しい歌を憶ひ出した。それ

色の鮮やかな途が、野原の彼方に消えて行く所に、小さな家の棟が無難作に並んで居る。ほか／＼と暖い小春日和の日光にきらめき乍ら……。

空はるり色に霽れて、黄金色の日光に照し出された野の景色、蝶が舞ひ、蟬の鳴かぬのが不思議な位。

しかし又はつきりと風足を見せ乍ら吹き過ぎて行く風その風は確に冬の風だ。殆んど葉をむしり取られた柿の木にぶつ／＼かゝたり、電柱を唸らせたりして彼方の竹篋を鳴らせる。

風のむきの變る度に風の唸りの音や甲高い篋笛の音などが聞えて來る。時々遙か向ふの道に青く塗つた乗合自動車光る。

蓮花咲く野もいゝ、鶯の鳴く里もいゝ、けれど私は、冬の野を通じて語りかける天地の淋しい吐息を體驗することの出來ぬ人達は不幸だと思ふ。

## 朗かな秋

實二 山根ハナ子

秋空、其の言葉を聞いただけでも、胸の中が爽かになるのを感じます。あの一片の雲もなく澄み渡つた空、天

は果無いジブリーの群を歌つたものである。私は此の曲を憶ひつゝ、果てしない平原の夜を想像した。

——美しいジブリーの娘の、一人は煌々たる月の光に誘はれて假寐の床から起上り、さら／＼と輝く夜霧を踏みしめながら、身も魂も忘れたかの様に踊り出す。悶ゆるかの如く、訴ふるかの如く、はた狂へるかの如く、傷めるかの如く、そして遂に魂を失へる者の様に倒れてしまふ。人生は淋しい、あきらめの微笑の連続である。人生が最も幸福なる瞬間にあると考へ得る時でさへも。

かうした事を思ひつゞけた私は、何かしら此の土地を去らなければならぬ様な淋しい自分自身を感じながら一もこの月見草の咲いてゐた砂丘の徑を、淡く落ちた自分の影を踏つゝ上つて行つた。

## 冬の風

實二 虎竹華枝

時折思ひ出した様に吹き過ぎて行く北風は、野原の草の頭を撫で、は消えて行く。黄色の草つ原はその度に如何にも青葉を誇り、花を飾つた春夏の思ひ出に、絶え切ぬ吐息でもつくやうな悲しい物音を立て、居る。赤茶

と地の距離の無窮である事を深く／＼感じさせるのは秋空です。高い／＼彼方に眞蒼の色を湛へて大洋に接する時の様なひろ／＼とした感じを與へます。いかにも長閑に、朗かに天地を祝福するやうに、大空に大きな圓を描く蒼の褐色な羽色、それから枝もたわ／＼になる眞紅の柿の實、それ等の眞蒼、褐色、眞紅等の鮮やかな色彩が寂寥の秋の反面の朗かな秋を現します。野に山に滿つる秋の景色は、一方から見れば皆淋しきそのもの様です。千草も枯れます、しかしそれ等の現れが皆新しい力を貯へる爲の變化だと見た時淋しさは希望に變ります。秋は希望の時です。それを思つた時秋の自然が何と朗かに見える事でせう。

## 富田の朝

實二 林ミツエ

「今起きたの」。

臺所の聲の中に裏の川崎川に出た。

二百米もあらうと思はれる程の川幅に、三尺を過ぎぬ水が、流れに任せて拵々と氣長に流れてゐる。陶器の破片すら美しく見られる清流に、家噪鳴き、處々水面に浮

出てゐる磯洲には、よそを取る子供等五六人、きやつく、とさわざながら、しきりに磯を掘つてゐる。

川上にのぞむ招魂山には、夏の氣分を失はない深緑の松が立揃び、頂上の禿所にある石碑は懐古の念を催し、富田町を支配してゐる。

下流に向つて左手には、朝霧に圍まれた徳山市を控へそれより少し南側には、青天をつらぬかんばかりの煙突がソーダ會社の中央に二本、白模糊として高く聳えてゐる。

川の右岸は、千萬頃の田を限る一帯の松林、臥龍の影を清流の水に横へ、東天紅と八面に輝き昇る曉の光を我もの顔の昏にうけてゐる。やがて松影の間より現れ出でし旭日に、今日一日の幸福を願ふ。

## 冬休の朝

實二 安田マサ子

こうんと観音様の鐘が黎明を告げた。時計の針ばかりで他に何物の音もない頃、靜かにノノ響いて来る。

かたこと、豪所の方で音がする。二度目の交睫を破られ、見し夢の名残を惜しみ乍ら、そつと床を離れた。外

に出ると冷た朝の氣が身にしむ、星が夜の名残を止めて今日の日和を豫期してゐる。

朝の用意をしてゐるとばた／＼とはたきをかける音がする、妹達が掃除を始めそのだらう。東の空は次第に白んで夜のとばりは開かれ、紫色の横雲がたなびき、紅に變り行き、豫期した如く美しい朝の光がさして、何ともいはれない清爽な感じがする。

食事の用意も出来たお掃除もすんだ、さちんと整頓せられた所で暖かい湯氣の立つ御飯をいたゞくのは本當に氣持がよい後片附をすまし机に向ふ。雀が楽しさうに軒で囀る。

## 詩

### 星

本二 小野村壽子

夜の帳は靜に垂れた  
太陽は彼方の空に沈んで了つた  
廣漠たる無限の空に

### 雨の降る夜

本二 永安淑子

ざあ／＼／＼ぼつ／＼  
雨の降る夜は寂しいな。  
蟲の音もばつたり止んだ  
雨の降る夜は寂しいな。  
こそ／＼／＼／＼どうぼが囁く様な  
雨の降る夜は寂しいな

### 山登り

本二 柏木喜美子

誰も皆一生懸命  
えつさ／＼と登ります  
もう頂上はじきですか？  
「え、もう少し」  
「さあもう少し」  
見合した目と目がつこり  
小春日和の風が頬をふいては走つて行きます

唯光のみがまたゝいてゐる  
彼方に赤く光るのは  
愛の星かしら、

眞上に輝くのは智の星か知ら  
夜の空に輝いて居るのを見れば  
いつしか力みなざる  
力の星よ！ 鋭き星よ！！

## 出征の兵士を思ふ

本二 松浦孝子

寒風吹きし嵐の滿洲で  
我が國思ふ我が兵士  
國に忠義をつくさんと  
生物凍るその中で  
寒さを忘れて唯々奉公と  
故郷のことなど忘れがち  
これを外國に誇るべき  
これで我が國いつまでも  
萬世一系にこりなき  
萬々歳々大日本帝國よ。

月夜

本二 厚東由子

ある月の夜  
夜でした、月夜です  
からころから  
琴の音がきこえます  
細く長く低く  
だれがノノひくのでせう  
どこでノノひくのでせう  
月夜です  
月の光をうけながら  
ひら／＼落葉がをどり出す  
しづかな／＼  
月夜です

たまらなくなつて

本三 有田定子

たまらなくなつて、  
足もどの小石を思ひきつて、

眞珠。  
ピンクの灯影ゆらめく中に、  
祈る乙女の眞白き指に  
ほのかに浮び出でしかほそき指に、  
つゝましく匂ふ眞珠。  
朝もやがて眞珠色にかすむ時、  
藤村の詩篇が、  
私の思ひを深くする遙にする。  
サフアイヤ。  
あの白い雲を透して、  
彼方に見えし憧れの色、  
青色！サフアイヤ！  
山茶花の静けさ、  
バラの艶々しさ、  
黄仙花の和やかさ、  
さうして彼女の美しい眸が、  
仰ぐ憧れの空よりしみ／＼とにじみ出る。  
ルビー。  
彼女は誰をもチャームする、  
勇ましいナイトーです。  
十七の乙女のふくよかな指に、

ほんどけつたの。  
地上をきつて飛んで行く。  
此の悲しいそして苦しい思ひも  
あの石の様に私の心から  
ほんどけつて出したいもの。

白が一番好き

同

赤でもない、  
緑でもない、  
では紫、  
紫は鮮かで濃厚な色。  
けれどやはり私は白が好き、  
純白——それはどんなに  
氣高く美しい——。  
少女のふさ／＼とした  
黒かみに結ばれた白リボン。  
どんなに氣高く美しい、  
やつぱり白が一番好き。

三つの珠

本三 冷泉龍子

無邪氣な色を輝かすルビーよ、  
よろこびに輝くルビーよ。  
赤く紅にかゝやきて永遠に乙女たれ、  
赤い／＼情熱の息吹をかけて。

少女

本三 末岡さか枝

千九百三十二年の我等が乙女。  
五月の若葉のやうに  
新鮮で潑刺として朗らかで、  
そして桃色の様に、美しい夢を見て、  
優しく美しく、  
純白のペールの様に、  
一點の汚れもなく、  
薔薇の花のやうに  
熱情と愛情が有つて、  
清く、優しく、強く、暖く、  
朗らかに歩めよ、  
我等が前途  
千九百三十二年の路。

火 用 心 同

まごらかな夢の世界から  
ぼーつと覺えた私。  
かーち、かち、  
暗の世界、  
悪魔でも飛び出しさうな世界。  
響いて來る火用心の聲、  
慈愛といつくしみに満ちた  
其の聲。  
私達は彼等に  
慰安と喜びと  
そして絶大なる感謝を  
捧げなくては、ならない。  
火の用心 かーち かち  
暗黒の世界を護る  
人生の唯一のナイト。

冬の配達者

本三 末武政子

そつと窓越に見た時

夢

小雲はひよと降つてゐた。  
私は思った。  
彼は冬の配達者、  
小さな穀粒程の  
冬をつげる配達者と。  
小さな私の腕時計、  
昨夜一晩ねてました。  
どんな夢を見たのでせう、  
私とおんなじ夢かしら、  
薄桃色の春の日に蝶々と舞つた夢かしら、  
それとも月の秋の夜に蟲と歌つた夢かしら。  
ほんやり私を見てゐます。

本三 朝枝郁喜子

幸福

本三 玉井喜久子

幸福がおとづれた。

我がねがひ

そつとお庭に出て見れば、  
ばらの花も、  
黄色の蝶も、  
青いお空も、  
皆生々と輝いてゐた。

本三 嶋野萬龜枝

冬の濱邊

本三 吉田泰子

木枯し吹きて秋たてば、  
賑ふ町の乙女子も、  
何處に去りしか物さびて、  
里の童はたゞみたり、  
あら風あら波寄す濱に、  
今日も歌ふか子守り歌。  
父さん、母さんこひしくて  
共に鳴き添ふ濱千鳥、  
み里に響く暮の鐘、  
千年變らず寄す波に  
今年も暮るゝ海邊の里。

我ふたゝび生れ出づる事あらば、  
我は紅葉の小さき葉とならん、  
賤が伏屋の庭隅の  
秋となりなば紅き葉を  
出して里の賤の女の  
心の中を慰めん。

本三 弘長治子

柔い青い夜です、  
きれいなすんだ月です、  
でも物淋しい光！  
柔い青い光に  
窓ガラスがぬれてゐる。  
圓い月、澄み切つた月、  
逝つた御姉様の瞳のやう。  
待つて歸らない姉だけれど、  
やつぱり月の夜に思ひ出す。

留守居

同

遠い山に雨霧の  
白く浮びて今日も又、  
静かに曇る窓ガラス、  
かすむ夕べに沖船の  
歸りを急ぐかけ渡し、  
留守居の秋の宵の寂しき。

ひなげし

本三

中村すみ子

さまよひ来れば ひなげしの  
一つ残りて 咲きにけり。  
逝きにし君の めでたまふ  
かのひなげしの 懐しく  
手折れば悲し 花散りぬ。  
あ の 夜

同

蟲なく音が澄んでゐたので、  
月の光りが冷たかつたので、

今年の豊年いゝなるなり。

秋空高く晴れ渡り、  
山の木々は紅葉に染まり  
梢々に聲高く  
鳴く鳥多き後の小山。  
收穫よろこぶ農家の民の  
笑顔をてらす夕映は。

寒さは一しほまして来る、  
雪の南天いよ／＼赤し。  
銀の世界は冬の三月、  
五尺の人も  
ちゞみであるく  
冬のあしたのこがらし寒し。

春

本三

磯野千尋子

おかむろの可愛ゆげな女の子が、  
美しい振袖を着て、

スタンドの覆が青かつたので、  
淋しい悲しい秋なので、  
桃色の夢追ふ乙女なので  
一人窓邊で泣きました、  
過ぎし十六のあゝあの夜。

四季

本三

佐伯文子

そよ風吹きてたもとはかるく、  
若葉もえ出づ  
春野のすみれ。  
蝴蝶ひらく／＼花から花へ  
とびかふ仲もむつまじく、  
春風吹きて心やはらぐ。  
炎暑の苦しみ我いはず、  
水わかかへる  
田中に立てる  
田の草取りの苦を思へ。  
蠅も手合はせむとすちに

大きい羽子板を拘へ、  
小走りに、  
宵暗のなかに吸ひこまれてゆく姿。  
なつかしい姿、  
なつかしい羽子板、  
楽しい春、  
おゝ幼な心よ、  
が今、  
私にも  
春が来たのだ、  
静かな遣音で………。

幻

本三

末岡さか枝

幻を追ふ、果敢ない夢の幻を  
消えて、なくなる幻を――  
ボーツと追つて  
何時まで続く。

幻を追ふ、はかない夢の幻を  
人魚の夢に似た幻を——  
薔薇の香の

仄かな日。

幻を追ふ、果敢ない夢の幻を  
清い心の幻を——  
蓮花のしぼんだ、

春の日に。

果敢ない幻、そして夢——  
何の事だと思つて見ても、  
やつぱり／＼なつかしい。  
夢、幻、春の日に  
實現したらごんなにか。

### かへり道

同

あの人もだまつて、  
私もだまつて、

向ふのお庭のボブラの葉が  
鉛色の空に舞上りました、  
寒さにおびえた山鳩が  
何處ともなく飛び去りました。  
田の面に残つてゐる水も  
つめたく淋しく光つて居ます。

### 路上での思索

本四 左野 政子

眞晝といふに、  
しんみりした堀内の路上、  
断破残壁に野ばらがいつばいに擴がつてゐる。  
昔の萩を語る様に。  
私は遠い古典の萩の情景を髣髴させながら、  
眼前に鬱然と茂る志都岐山に輝く初夏の光、  
反撥する變轉の威風に、  
そゞろ驚異の目を見はる。  
萩城!! 古典の武士!!  
ふと現なき女影が微かに／＼意識の底を流れる。  
只くづれた壁、

お互にちぐはぐな心を  
抱きながら、

かへりの道 田圃道。

青い／＼稲穂がさち／＼墜れる——  
此の日に限つて

何時までも——

自分ながら何だか

氣づまりな日だった。

はつと我に返つて

思はず見つめた女の顔。

暑い日、たゞれる様な日。

汗ばんだ顔に

おくれ毛が二三本、

風にゆらいで居た。

でも、だまつてしまつた私、

其の時の空の蒼かつた事。

### 初冬

本三 飛落 八千代

木枯が吹きました。

道上的野ばらのみがそゞろ昔を偲ばせる。  
私は時代の潮流を判然と意識しつゝ、  
白日の路上を歩いた。

### 松

本四 瀧野 芳枝

限られた面積の中に、  
限られた養分を吸収して、  
特別な空氣の中に育つ松よ。  
私はその技巧的なるを悪く云ふのではない。  
元旦の置物に最もふさはしいこの盆栽は、  
日本間の床には是非なくてはならないものだ。  
だが私は考へよう。  
深い自然の根本から生れ出て、  
悠久に生きんとするお前の希望と、  
限りない生に對する愛着を奪つて、  
抵抗のない温室の中で、  
自然美に飢えた人々を楽しみます爲に。  
押し縮められ引き曲られ……  
だが松よ! 忍ばなくてはならない。

山の大气にはぐくまれ、  
夜の嵐にきたへられ、  
深い自然の母體から、  
つきせぬ糧を取入れながら、  
自由な世界に成長すべく生れたお前ではあるけれども、  
もうお前の使命はそこにはないのだ。  
盆栽の土は美しいけれども豊饒ではあるまい。  
ベチカの温みは、太陽のそれには遙かに劣つてゐるだらう。  
山々に輝く太陽が戀しいだらう、  
舊の野山が懐しいだらう。  
松よ！ お前は今に枯れるだらう。  
だがお前はさうした運命を恨んではいけない。  
思ひ通りにならないのはお前ばかりではない。  
あきらめよ盆栽の松よ。

### 哀別

本四 山田廉子

君、嘆き給ふことなかれ、  
悲しきさだめ、別るゝは、

相見しものゝ常とかや。  
かくいふ我も頼傳ふ、  
湧きくる涙のごひ得ず、  
指切かはす砂丘の上。  
長き別れを惜むてふ、  
過ぎし日の追憶語らんと、  
せめて別れの名残にと、  
別れの歌、歌はんと、  
思へど砂に涙のみ。  
友は語らず我黙す、  
はや黄昏れぬ冬の海。  
遠き白帆も歸り來ぬ、  
されば今宵を限りぞと、  
二人は立ちぬ黄昏の砂丘。

### 三つの花

本四 竹下千代子

優しくも亦哀れなり  
冬の日のバラ、  
木枯の間に〜

溜息もらしつ、  
白さうなじ弱くたれて、  
傳ふは何、雨か涙か、  
華やけく亦悲し。  
由椿、

赤き血のしたゝりにも似て、  
木枯に落つ。  
手にさらば血汗つかん、  
その色の鮮かさよ、  
しごやけく亦淋し。  
水仙の花、  
頭かしげて、  
何をか思ふ。  
若き日の惱みか、  
清らけくも亦寂し。

過去の舊袋を破つて、  
身も現も、  
眞に目醒める更生の歡び、  
新しい希望の殿堂に向つて、  
學徒の血はをどる。

### 面影

同 河野菊子

一、露にぬれたコスモスが、  
朝の日に輝いた時、  
あゝ亡き人の面影が  
淋しく過ぎて行きました。  
二、涙にぬれたあの瞳  
夕の雲にたづよふを  
静かに眺めて涙ぐむ  
きれいな淋しい人でした。  
三、ほのかに浮びし夕月に、  
哀しき想をよせるやう、  
遠き昔のあの人の、  
好みし啄木の詩をくちさみます。

### 更生

本四 岩田タマ子

輝しい新明の天地に、  
強く生きんとする心の努力、



私の瞳

本四 藤田みすき

私の瞳は私の心、  
淋しい時には瞳の窓に、  
涙のカーテンがかゝるのよ。  
私の瞳は私の心、  
嬉しい時には瞳の窓は、  
憂のカーテンさらりと除けて、  
清い光がさら／＼と、  
知らない内に輝き出すの。

私の夢

本四 松浦照子

私の瞳は私の心、  
誰かゝ私の瞳の窓を、  
そつとぞいて見たならば、  
私の瞳は怒りに燃えて、  
びつたり閉めてしまふのよ。  
いつか父様に買つていたゞいた、

葦草

本四 富田敏子

あのバラソルのばらの花、  
赤、白、桃の三色で、  
地色は黒のグロ色で、  
ほんにモダンな私なの。  
いつか母様に買つていたゞいた、  
あのストックキングの肉色は、  
私の足にピッタリで、  
なんと私はエロなのよ。  
でもでもおめ／＼がさめた時、  
私は本當にをしかつた、  
も一度績が見たかつた。

淋しさ

本四 宗實ふみ子

顔へをの／＼くそのさまに、  
私は悔いて緑草に、  
再び埋めてやりました。  
一度傷いたその心は、  
深く／＼とざされて、  
憂への底に慄へます。  
麗人のはかなきさだめに似たる葦草よ。  
そつとさはつてもにじみ出る様な、  
此の頃の私の心。  
涙！ 涙！ 涙！  
にじみ出る涙よ!!!  
なぜこんな淋しいのかしら、  
初秋のすめる青空の様に、  
うつろな心。  
あぜ道の露にうるほふ野菊の如く、  
ひそかにふるれどはら／＼と散る、  
頬の白露。

野菊

本四 波多野百合子

野菊、野菊、野菊の花よ。  
かつきり晴れ渡る秋の日よ。  
黎明に光る宵の星の様に、  
愛らしく愛らしく咲き誇る花よ、  
思はず人が微笑みかける、  
私は貴女のそれが好きなのよ。  
自分でさへも分らない此の頃の私、  
なぜ淋しいんでせう？  
たれかゝ私語きました、  
秋は——、秋は——、  
淋しい時なのですつて。  
試験近く、  
黄色に淡い電燈の光、

試験勉強

實二 虎竹華枝

寄宿舎の夜は深し。

そよ風の

こころと窓打つ毎に、

流れ来る花の薫り、

オレンヂの

花の薫り、

街燈の灯が、

露に濡れた窓の硝子に、

ぼーつと光る。

眠りをむさぼる友の鼻は、

セカンドを刻む時計の

音と共に、

更けゆく夜の静けさを破る。

試験近し、

苦しくはあれど、

歸省の日は

近づきぬ。

カレンダーめくる指先は、

私は私の影をふみ、

淋しい女の只一人、

誰も知るまい胸の内、

進み兼ねたる村の道、

心の胸にむちうてば、

ふと見上ぐる大空の、

光が私を見てくれた。

仰けば貴し月の慈悲、

仰けば高し月の恩。

一汽車遅れて歸り道、

それは灯一つない、

暗い淋しい田圃道、

けれど私の明るい心、

急げどかよわき女の身、

寝ないで待つて下される、

親のめぐみの光明は、

あの灯にいやまさる。

思ひ忘れぬ親の慈悲、

思ひ忘れぬ親の恩。

夜毎喜びにおどる。

### 小春日和の光

實二 大田松江

美しき紅葉、

いつしか散り果て、

木枯身に浸む冬。

樹立の葉に降りそぐ光、

地の上にゆれる光の匂、

陽は飽くまで若く輝き、

けむりつゝきらめく小春、

燦々たる陽を思ひ、

自然の若さを詠嘆す。

人間は滅びても、

生み育てし

微妙に輝く永却の自然の光。

### 月と親

實二 阿武滋子

朝霧を破つて出づる一番汽車

凄き汽笛に山彦答へ、

### 和歌

初冬

本二 阿座上京子

よもの紅葉となりし頃はすぎ枯木交りにいたくさびけり

いてふ 同 大河戸 たけ子

ひら／＼とさもてふ／＼の舞ふやうに銀香散るなり鎮守

の森に

夜の海

同 大島光子

眞夜中に波音高く聞え來ぬ北風強く吹き出でぬらし

叱られて 同 小茅マス子

叱られて一人外面に出で行けど石をけりつゝ又歸り來る

夕暮

同 田村文子

夕暮に西の空より南へと一聲高く五位鷺のなく

友よ何處に 同 並川文江

木枯の風吹く度に思ふかな昔の友よ今は何處に

ダリア 同 森屋壽江

紅のダリアの花を眺むれば昔の友を思ひやらるゝ

母 同 山田澤子

幼子に心とらるゝ母心今日もひねもす子守するかな

起 床 同 山中松子

寒い朝こけつこつこと鳴く鶏の元氣にひかれ床を出でけ

り

母 愛 同 植村千壽子

元氣よく父と出で行く日曜に母は門邊に我を見送る

教室 同 岡崎延子

先生の足音聞きて生徒等の話聲やむ朝の教室

登校の道 同 神田幸枝

遠き道月をたよりに友達と歌うたひつゝ道を急ぎぬ

雨の日 同 小泉アイ

窓の邊の机によりて物思ふ雨の降る日の部屋の寂しき

秋の暮 同 白石幸子

枯枝に小鳥來りてさびしげに友をよびつゝ鳴く秋の暮

時雨せし庭のくぼみのたまり水氷結びて冬は來にけり

落葉 同 山本愛江

獨り居の夕暮さびし暗がりをかすか音立てころがる木の

葉

船頭 同 鈴木初子

ごろ／＼と岸に寄せ來る大波を蹴りて漁れる船頭勇まし

おくれ毛 同 藤田光子

おくれ毛の顔にふるゝを其の儘に野道を急ぐ我妹かな

號外 同 松浦孝子

星 同 河瀬シゲ子  
かしましき蛙の聲もしづまりて田の面にうつる星の影か

な

讀書 同 河邊綾子

日曜に一人楽しくふみ読める窓に眞夏の日かげ明るし

あしの葉 同

月青くすゝり泣く夜の河岸のあしの葉ゆらぐ秋のゆふぐ

れ

うちわ 同 木村喜美子

十五夜に濱邊を傳ふ人影も白きうちわを廻しをるかも

紅椿 同 齋藤富美

ふるさこの女の便りに紅椿糸につらぬき昔しのびし

妹 同

百日餘の病につかれし妹は窓にすがりて月をながめき

妹 同 品川房子

姉もやんさつき御免ね妹がお菓子を持つてほゝゑみにけ

り

支那人 同

支那人の賣れる品物まけさせてあはれむ心わきにけるか

な

夏 同 末國フサエ

りん／＼と號外の音きくたびに出征の見思ひ出さる

り

梅 同 松浦ツネ子

朝寒き窓越に見ゆる梅枝に一輪二輪花の咲そむ

七色の橋 同 本三 朝枝都喜子

夕立の晴れしみに空に美しくかけ渡したる七色の橋

姉君と海邊を散歩す 同 有田定子

海の香をなつかしみつゝ砂地をばあゆむもうれし姉君と

われ

文 同 岩本フミヨ

月のぼり蟲のコーラス聞きながらしたゝめ終る友に出す

父を迎ふ 同 岡崎玉恵

父歸る停車場まで只一人星照き夜の小路を急ぐ

アカシヤ 同 尾崎富美子

吹く風にアカシヤ散れば我が窓はあかるくなりぬ秋のき

たりて

母校の柳 同 鹿島千代

なつかしき母校の前を過ぎ行けばそよ吹く風に柳みだる

松風 同 金子チセ

松風は廣き湖ゆるやかに小波たてゝ吹き渡るかも

ちぢちぢと葉櫻でなく蟬の聲いつしか夏はおとづれにけ

り

大石 同 末武政子

若き日のまゝ事遊びに宿貸した野邊の大石いづこへか去

る

弟 同

蟬取りのわんぱく小僧の連中に我が弟のまじり居るかな

高島田 同 高崎八重子

姉君の始めて結びし高島田やうちには喜ぶの聲

寫眞ブック 同

月の夜寫眞ブックを取り出して思ひにふける過ぎし日の

こと

折にふれて 同 高松正子

こことはに流れてやまぬ谷川の清きを我の心さもがな

友達 同 高屋琴子

日本晴れテニスの音も軽やかに我が友達の見ゆるも

秋の夜 同 竹内文子

姉君のかなで給へる琴の音も湧えて更けゆく秋の夜かな

瀧 同 田邊フミ子

さう／＼と瀧落ちくれば浮草はかなたこなたにゆらめき

にけり

同 中村聖子  
やすらげき妹の寝顔見る度に逝きし従妹の思ひ出さる

同 西田清子  
蟲の聲

軒の端につりさげられし風鈴にかはりて聞こゆ蟲の聲々

同  
かまぼこ賣

あつき日に籠を片手に賣り歩くかまぼこりの聲いこほ

しき

同 西林キミ子  
百合の花

しどやかな乙女ににたりかをり持つ我があこがれの白百合の花

同  
水泳

夏休みねむの木蔭にむれ泳ぐ乙女も今は黒ずみにけり

同 野村京子  
弟

弟のおもちやをこはししかられてわびてもこらへぬ弟にくし

同 藤井弘子  
桔梗

清らかな朝の空気を皆すひて庭の桔梗は咲きそろひけり

同 藤田スエ子  
唄

兄上の唄へる節のをかしさに聲をひそめて一人は、笑む

同  
文

私の文拙けれども文字は皆胸の思ひの炎なりけり

同 石田知子  
古里の海

青い海真白な帆影ミレージとなりてあらはる古里の海

同 磯野千尋子  
途上舊友に逢ふ

行きすぎてふとふりむけば友の顔我をみかへりほゝるみにけり

同 大岡光子  
夏日友を訪ふ

眞白なる貝のまじりてうちしめる濱の砂路を踏めて行きにけり

同 賀田多美代  
ひぐらし

ひぐらしの聲きくたびに思ふかな幼き頃にあそびにし山

同 角屋シゲ子  
朝顔

さく起きて見れば朝顔庭垣にのぼりはじめぬまきていたして

同 金子牧子  
姉の手紙

朝鮮に嫁ぎし姉の文見れば昔しのばれ戀しかりけり

同 龜屋文子  
水邊柳

音たてず小川の水は流れけりしだれやなきのかげをうつして

同 木村喜久枝  
蟬の聲

妹にさそはれ出でし土手の上蟬の聲聞き暑さ増しけり

同  
祖父の命日

同 蝶

取る筆をしばし止めて窓近く飛び交ふ蝶を眺めけるかも

同 益成雅子  
釣舟

夕まぐれ沖よりこげる釣舟の渚近づく夕映の濱

同 三浦スミ  
妹

も、色の日傘さしたる妹の愛らしき顔一人微笑む

同 手紙

なつかしき友への手紙書きながら幼き時の夢をたどれる

同 三島房子  
水を求む

降りしきる雨を冒して馳せゆきぬ父君冷やす水求めに

同 三輪愛子  
ボート

人々の楽しみ乗せてあちこちとボートはすべる夏海原

同 横見園子  
柳

ゆら／＼と池の面に影さして風の吹くたび舞ふ柳かな

同 阿座上勝子  
流星

橋の上うちはつかひて仰ぎ見る空のかなたに星の流るゝ

同 石原禮子  
幼子の夢

お祭に求めし人形だきしめて幼子の夢たのしきうなり

同 泥まんちゆう

妹の庭にならべし泥まんちゆう夏真晝にひわれたりけり

命日にお経の聲をきゝをれば去りし祖父をば思ひ出しけり

同 木村代志枝  
ひぐらし

日は暮れて寂しき墓地の灯入れ時ふと耳に聞くひぐらしの聲

同 小原種子  
争の後

いさかひの後の心の淋しさにきまり悪くもあやまりて見

同 水津静江  
墓

苦むしてふりにし父のおくつきに今日もまゐりて袖をし

同 佐伯朝子  
朝顔

朝顔に水あたへつゝ数へけり明日咲く花のいくつあるか

同 末岡榮  
やめる妹

病院のベットにふして妹はにがき薬に目を過すらん

同 末岡榮  
夏の夕暮

つれ／＼に田面見渡す我目路にとんぼ行きかふ夏の夕暮

同 弱き我

思ふこと告げ得ぬ弱き我なれば心をくみてゆるし給へや

同 若空

若空

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

蒼空も我には寂し別れにし友の眸のうるほひに似て

別

何となく友の眸の淋しくて涙のじむ別れの日かな

漁夫

同 玉井喜久子

岸に立ち父呼ぶ子等をふりかへりつなごく漁夫の心いとほし

故郷の母

同 輜野万龜枝

友達と世間話にふけりしがふと思ひ出す故郷の母

秋の色

同 飛落八千代

秋の色いよ／＼深し今日も又雨しみじみ窓を打つなり

春來る

同 中村澄子

ゆきさする乙女の姿はなやかに都大路に春は來にけり

友を待つ

同

まちわびし友の訪れ今日も來すうつろ心に秋風をさく

蟲

同

すた／＼と夜露をふみて分け行けば單衣の袖に蟲のなく

友と別れて

同

ふり返り去り行く友の面影の忘れがたきに又御名を呼ぶ

撫子

同 中村正子

夏草の深きしげみに人知れず風にゆられて咲けるなでし

初詣宮居の前にぬかづけば心の奥ぞ清められける

朝顔

同 原川幸子

美しと言ひしにもはやしほみけり世のさま示す朝顔の花

人見絹枝嬢をいたむ

同 福井諍子

我々の犠牲となりて逝きたもふ人見絹枝のなつかしきかな

緊縮

同 弘長はる子

緊縮と口にはいひてすぐ後で小遣ねだる小さき姉の子

蟬聲

同 藤野文枝

朝まだき起き出で見れば谷間には早やかしましき蟬の聲

かな

同 堀初枝

夕やけの赤き空をば見て居れば淋しくうかぶすぎし日の

こと

同 前田禮子

かの事をなげきたまふか我が友の後姿のうなだれて見ゆ

黒髪に花かゝるを見て

同

ひろ前に手合すひとの黒髪に眞白き花のほろ／＼と散る

子供

同 松本禮子

日中の暑さもいとほせずみ取りに土手路走る子供達かな

蟲の聲

同 楊井竹子

こ 春月 同

小さき子のしづけき夢やまもるらん窓に入りくる春の夜の月

埃

同 長富ヨシ子

庭の内に朝の日させば桐の葉にしろき埃のたまれるが見

ゆ

同

夕ぐれのすゝきの原をはるばるとかたことかたこ車かへ

れる

同 長山菊代

入相を告ぐる御寺の白壁を夏の入口の赤く色どる

入日

同 長山菊代

唯今と言つて歸れど答なし思へば淋し秋の夕暮

秋の夕暮

同

こん／＼と湧きて流るゝ谷水に足浸したき夏の日ざかり

亡叔父の繪

同

なき叔父を見が描きし顔見れば幼き時の思ひ出さるゝ

北斗七星

同 林英子

夕涼み汽車のひゞきもかすかにて空に輝く北斗七星

初詣

同

秋草の茂みに鳴ける蟲の聲はそりていたく夜ぞふけにける

秋ふかみゆく

同

吹く月に庭の梢の葉もちりて今年の秋も深みゆくなり

筆入

同 横山アヤ子

新しき筆入かひてその中にペンとナイフを入れたうれしさ

墓前にて亡祖母をおもふ

同 吉野トシ子

ばゞさまの墓の御前にひざまづき去りし日のこと思ひ出すかな

蟲の聲

同 渡邊シヅ子

夏のくれひひとり川邊にたゞすめばあはれをそふる蟲の聲

かな

同 渡邊シヅ子

秋の夜に身をば机によせながら遠にゐます姉思ひけり

亡祖父をおもふ

同 和田榮子

途上にて老いたる人を見る毎に逝きにし祖父の思ひ出さる

わが心

同 本四天野紀子

いかにせんふとした事にも涙する我が此の頃の心弱さを

雪

同 栗屋チエ

はら／＼と梅にたはむる綿雪の地に落ちぬ間に露と消え行く

秋の野路

同

田舎路をそゞろ歩に日は沈みまねく尾花にたそがれの月

冬の月

同 阿武民子

松風の音高くして冬の月光冷くものすこく見ゆ。

友を思ひて

同 石金夏子

はるかなる人に告げたきことのあり空行く雁のうらやま  
る夜

雪降りし朝

同 伊藤敏子

名も知らぬ小鳥の一羽軒に来てちと鳴きふる雪降りし  
朝。

讀書

同 稻村とみ子

雨の目を終日机に向ひて文をひもどく心淋しき。

兄

同

受験日の迫れる兄を見る度に同じく我も受くる心地す

孤獨

同 大多和ヤス子

有りのまゝ心の中を語りたき友の近くに無きを悲しき

渡場

同 岡田元子

寝静まる川邊に立ちて渡守呼ぶ人の聲遠く聞ゆる。

兄

同 兼田靜子

じゃん／＼と火事よと叫ぶ鐘の音に驚きまれば出初式  
かな。

友の便

同 左野政子

懐しの友の便に目をやれば過ぎにし方ぞ思ひやらる。

鯛

同

背戸の木に聲澄みて鳴く鯛を聞きつゝ母と紅茶のむなり

寒菊

同 末本節子

小春日の千草枯れ果て霜しげき園に匂へるしをらしき菊

卒業を控へて

同 瀧野芳枝

南園の恵あふるゝ宿をでて大海原に漕ぎいつるかな。

いさかひ

同

夜もすがら祈りて居たし我が心かりそめよりのいさかひ

の後の

同

嫁ぎける姉より来たる小包をほごくうれしきはるみど

なる

同

新玉の年を迎へてよろづ人皆かゝやきにみち／＼にけり

隨感

同 田中喜美子

去る者は日々とうとしと世の人は散きながらも其の道を

踏む

同

新玉の年を迎へてよろづ人皆かゝやきにみち／＼にけり

踏む

同

去る者は日々とうとしと世の人は散きながらも其の道を

踏む

同

去る者は日々とうとしと世の人は散きながらも其の道を

踏む

同

去る者は日々とうとしと世の人は散きながらも其の道を

踏む

同

去る者は日々とうとしと世の人は散きながらも其の道を

踏む

同

去る者は日々とうとしと世の人は散きながらも其の道を

踏む

同

去る者は日々とうとしと世の人は散きながらも其の道を

號外の来る度毎に支那に居る兄の身上氣づかはるかな。

寂寥

同 菊屋正子

ひと頃は止み居しくせの淋しくもまたかへりたり今日も

瓜かむ

同 木村俊子

さやけくも月の照せる水の面に淡き影もつ水草の花。

思出

同 久保田ツク子

美しく花咲き居りし温室を君とながめし日のなつかしき

星

同

やるせなさいかゞせんやと窓あけばみ空のお星すつと流

れぬ

同

やうやくにひとり立ちする弟をかこみし我が家にきはひ

にけり。

同

元日の朝

前

同 厚東晴子

はの／＼と明けそめにける元朝のいともどけき神の廣

秋の夜

同 厚東光子

秋の夜に一人歌ひつ立ち居れば木の間がぐれに三日月出

でぬ

同 齋藤ミツコ

出初式

同

同 齋藤ミツコ

初詣

同

さく／＼と砂利踏む音の軽うして心嬉しき初詣かな

冬の朝

同

汲み置きし手桶にはりし凍氷棄つるに惜しき冬の朝かな

冬籠

同

大かたに枯れぬと見えし鉢の梅春を迎へて花咲きにけり

讀書

同

讀みふけて窓の戸くれば白梅の佳き香送りて闇にうかべ

便り

同

舊友の大阪辯の便り讀み一人可笑しく笑ひ居るかな

梅

同

新らしき年を迎へて白梅も香りゆかしく咲き初めにけり

見送り

同

限りなき御代の榮をこぼぎてかをりゆかしく匂ふ白梅

なりけり

同

なつかしき人をば乗せて去り行きし汽車も木間に見えず

同

同

素直なる竹のさゝ葉の白雪の重きをたへてうるはしきか

お正月

同

松田已美子

同

同

素直なる竹のさゝ葉の白雪の重きをたへてうるはしきか

同

同

素直なる竹のさゝ葉の白雪の重きをたへてうるはしきか

同

同

素直なる竹のさゝ葉の白雪の重きをたへてうるはしきか

同

同

素直なる竹のさゝ葉の白雪の重きをたへてうるはしきか

同

同

素直なる竹のさゝ葉の白雪の重きをたへてうるはしきか

同

同

素直なる竹のさゝ葉の白雪の重きをたへてうるはしきか

ほの／＼と初日の光さし出でて風静かなり元日の朝  
吹く風の冷たさしのび梅の花一輪二輪咲き出づるかな

春を迎へて

同 光 永 一 枝

硝子越し垣根の外の猫柳帽子をぬいで新春を待つ

友よりの年賀を待ちて 同 三 戸 文 子

來ぬ文を幾度か胸に待ちわびて今日も空しく暮れにける  
かな

つれ／＼に

同

つれ／＼に琴等出して弾き居れば逝きにし人の偲ばるゝ  
かな

秋の夜更に

同 箭 島 雪 子

夜半更けて窓おし見れば大空に缺たる月の影ぞ淋しき

秋の山里

同 山 縣 信 子

紅に黄に緑にとり／＼の衣をまとひし秋の山里

秋の夕ぐれ

同 山 田 廉 子

子供等の歌のみ森にこたまして邊寂しき秋の夕ぐれ

冬の曉

同 吉 屋 静 枝

三日月やむ月の朝の霜空に影淡くにぞ残りけるかな。

元日の朝

同 淺 野 綾 子

元旦の黎明遙か彼方より澄みて聞ゆる御神樂の音

鐘の音

同 荒 尾 綾 江

乙女子のはゝるみのごとあいらしく葉蔭に匂ふ紅椿かな

雨に散る山茶花

同

時雨降る庭の面にはの白く山茶花散りぬ二ひら三ひら

姉を送りて

同 大 橋 キ ョ 子

旋立ちの姉を送りて唯一人歩むも淋しおそ秋の道

除夜の鐘

同

悲しみも不平もみんな今こそは忘れてしまへと除夜の鐘  
なる

友を慕ひて

同 桂 智 佐 子

今はじき君が姿を夢見んと手を胸に置く君慕ふ我

雪降りし朝

同 金 子 夏 江

雪降りし朝のみ山の美しき陽にかまやけり銀のいろして

幼き日

同

落ち敷きし紅き椿を我一人首飾にと集めてみしかな

妹

同 河 野 菊 子

洗濯の泡立つ水にたわむるゝ妹の笑顔にしばし手を止む

若き母

同 熊 毛 屋 光 子

いとし子のねいる姿を眺めつゝ一人はゝるむ若き母かも

新年

同 小 池 清 子

新年の喜び告ぐる萬歳の聲ものごかに響き渡れり

母戀し

同

あかね引く山より出づる鐘の音ははがら／＼に町を蔽ひ

ぬ 除夜の鐘遙か聞えてこの年もなげきと悔ひに過ぎ行きし

かな

年を送る 同 石 川 光 子

つゝがなく終へし今年をよろこびて母の墓前のお花かへ

けり

父見れば白髪のかす／＼目にたちて暮れゆく年をわびし

く思ふ

逝く秋 同 伊 藤 昌 子

見つめつゝ小さき事にも思ひ入る秋ははかなし朝に夕に

うぐひす

冬すぎてけふる林に日のさせば歌へと人をさそふうぐひ

す

年の暮御詠歌を聞きて 同 稻 村 八 重 子

鐘の音につれて聞ゆる御詠歌のいとも淋しくきこえける

かな

梅 同 大 田 操

我が庭の梅ほころびてうぐひすの初音聞きけり新春の午

後

紅 椿 同 大 谷 榮 子

我が心危しき時に思ひ出す我が母ありし楽しき日をば

回 顧

同 神 野 博 江

今年はと思ひし一年早たちてまた新しき年近づけり

お正月

同

子供等の楽しさうなるさゞめきにまじりて聞ゆる追羽根の

音

燈 臺 同 齋 藤 菊 代

あざやかな光放ちて夜もすがら燈臺遙か海にてらせり

冬の夜

同 齋 藤 静 枝

寒き夜を火鉢によりて唯一人幼き頃の思ひに耽る

除夜の鐘

同 齋 藤 富 美 子

さまよへる心と身との行末を見つめよとなる除夜の鐘か

な

楽しき遠足 同 齋 岐 秋 代

樂しがる明日の遠足豫想して結びし夢もひと早くさむ

幼 子

同 鹽 見 智 子

ふくよかな乳房にたぶらふ幼子のまろき眸は結ばれにけ

り

元日の朝 同 末 次 菊 代

數しれず集り來たる年賀状つみかさねつゝ樂しかりけり

何がなし心の中に秘めがたきよろこび有りて初春は來ぬ

雨あがり 同 瀧口桃江  
雨やみて軒にさし入る日の光心明るくなりし思ひす

文机の小鉢の椀一二輪はころびそめし今日のうれしき  
夜更け 同

しん／＼と更け行く夜の静けさを破りて高し歌留多讀む  
聲 有明の月 同 竹下マツエ

明鳥群をつくりて鳴く空に名残り惜しげな有明の月  
卒業後を思ひて 同 張達子

まなび舎の窓にもたれてわれは思ふたつまき起る嵐の海  
を 深い思ひ 同

あけくれに思ひし事もふがひなく今日も一日すぎゆきに  
けり 亡き母を思ひて 同 津森文代

灯のもとにきぬさす母の亡き姿夢みる夜ぞ淋しかりける  
冬の夜半 同 寺内政

松籟も絶えて寂しく夜は更けて遠く聞ゆる拍子木の音  
あらし來て人をばのみしあら磯の波のうねりぞうらめし  
きかな

水仙の花 同 柳井良子  
母このむ花よといひて姉妹が貰つて歸れり水仙の花  
山 寺 同

山寺は荒れたるまゝに閉ぢたれど一きは目立つ寒椿かな  
雪の朝 同 山縣喜多子

雪の朝とく起きいでて戸を繰ればたが作りしか白たるま  
かな 友を思ひて 同 山縣チセ

遠き友便り致せど返事來す身の上如何にと氣に掛るなり  
須臾にて 同 吉賀君子

神無月須磨寺訪ひて我惚ぶ青葉の笛をかなでし人を  
慕 参 同 吉原正子

おくつきに君を尋ねて悲しさに涙こぼるゝ花筒の上に  
弟 同 宮崎克子

くづしては又積み上ぐる弟の積木遊びのいちらしきかな  
冬の日 同 鈴木止子

静かなる冬の一日もくれそめて賤が伏屋にけむり見えけ  
り 叔父君の來給ひたる時よめる 實二 赤川愛子

叔父君のさぶらひ給ひいろ／＼と語るうちにぞ夜はふけ

新春 同 富田敏子  
麗かに光輝く草原に遠近殘る白雪の跡  
冬の夜 同 中原シゲ子

降りつもるけはひ淋しき夜の雲に心しづかに目をつむり  
たり 追 慕 同 中村久恵

折にふれ思ひ出さるゝ過ぎし日のいまはの際の母の面影  
淋しき 同 西村紀子

淋しさに庭に出て來て行めば手にせし薔薇のあはれにも  
散る 逝く年 同 藤田ミスキ

思ひ出の多き今年も早や暮れて若にひさく除夜の鐘かな  
祈り 同 藤家美枝

祈りたき心地をばろに湧き出でぬすゝき野原の夕暮のい  
ろ 祈りても甲斐なき事と知りつゝも祈りし後の心やすけき  
黒 髪 同 溝部恭子

黒髪のもつれも悲し冬の朝は小櫛もつ手もこゝえ勝にて  
淋しき秋風 同 宗實文子

哀れなる年ふりし人のほつれ毛を掻きなでて行く秋の夕  
風 ける 歸宅 同 阿部ツユ子

學校より歸りて入れる我が部屋窓にあか／＼夕日さし  
居り 水 泳 同

今日も又裏の小川に子供等の泳ぎの聲のきこゆなりけり  
朝 同 阿部モミ子

さわやかに晴れたる朝の心地よき歌うたひつゝ山の道行  
く 朝 同 阿部モミ子

學びやの窓にすがりてしみ／＼と青葉見つめぬ静かなる  
朝 同 阿部モミ子

紫の葡萄の房の青白き月にゆらめく頃となりけり  
病める姉の針箱 同 池内ミネ

病み伏せる姉の針箱あけ見れば多くの針のさび居たりけ  
り 母校の先生 同 上田マサ子

先生笑顔胸にゑがきつゝ母校にいそぐ自動車道  
雨後の山 同 大田マツエ

雨後の山縁に晴れし其の上に眞白き雲と虹のあらはる



故郷を出づ 同 岡 恭子  
 故郷に別れを告げて出る時の心淋しき何にたどへん  
 元 且 同 篠 懸 文子  
 白々と夜は明けわたり元日の光のごかに我が窓にさす  
 春 雨 同 金子 壽子  
 ほろ／＼と椿こぼるゝ山かげの夕さみしく春雨のふる  
 母の病いえて 同 佐 伯 由枝  
 病いえやつれし母の顔みれば悲しくなりて涙流るゝ  
 友の文きたる 同 清水 万龜子  
 君は今いかにおはすと思ふ時送り来りしなつかしき文  
 母の姿 同 高杉 波奈子  
 雨あがり裏の畠を耕すは母の歟ふる姿なりけり  
 俄 雨 同 高屋 菊枝  
 俄雨あがりし後をすい／＼と赤きとんぼの飛ぶ夕かな  
 亡祖母の三回忌 同 西山 アヤ子  
 亡き祖母の三回忌とて母上は花を手にして寺へ参れる  
 散歩 同 波多野 信子  
 夏の夜の氣なぐさみとて吉田町歩くもうれし母喜べば  
 蛙 同 林 ミツエ  
 夕やみに星は輝く我がやごの裏の水田の蛙なくかも  
 幼児の念佛 同 平岡 久子

幼児の兩手合せて念佛を唱ふる聲のいちらしきかな  
 風 同 松 浦 梅子  
 湯上りに涼みがてらに出て見れば稻田の上を風わたりけり  
 夕 陽 同 森 重澄子  
 夕陽の海にうつりて繪の如くいつか習ひし文思ひ出す  
 濯ぎもの 同 安 井 貞子  
 濯ぎものせんと盥に水汲めば揺れつゝうつる椎の葉の影  
 鬼 同  
 秋近き頃となりけり鬼灯の袋は赤き色を見するも  
 白萩の露 同  
 汲みあぐる釣瓶の竿の先にふれ石にこぼるゝ白萩の露  
 母性愛 同 安田 マサ子  
 驚きて夢をさませば母上はふとんを持ちて立ち給ひけり  
 夏の月 同 山下 節子  
 夏の庭をさる歩きに子守唄打水たまり月を光れる  
 朝 顔 同 山根 ハナ子  
 咲きぬればしほむものとは知りながら餘りはかなき朝顔  
 の花  
 留守居 同 山本 祐子  
 待ちわびてうと／＼眠る耳底にふと下駄の音さくぞうれ

俳句

しき  
 白露のおける深山の草原にはほひ優しく咲ける白百合  
 同 虎 竹 華枝  
 秋の夜 本二 小野 八重子  
 静かなる夜は破らるゝ稻こぎに  
 秋の暮 同 大河戸 たけ子  
 かすり田にからす群れ鳴く秋の暮  
 同 小茅 マス子  
 同 小川 信子  
 村の夕暮 同 坂上 孝子  
 夕暮や鳥飛びかふ村の森  
 同 杉山 富子  
 秋 同  
 稻こぎの聲いさましき賤が家  
 夕 暮 同  
 夕暮に徑をいそぐ童かな  
 石段の左右の松も霽の中  
 秋の夜 同 田村 里子

牛鳴くや取入れせはし月のかげ  
 秋 同 藤井 秀  
 秋の宵さびしく軒をたゞく雨  
 病室に獨居さびし秋の暮  
 寒 椿 同 山田 英子  
 初雪に一人はゝ笑む寒椿  
 冬の夜 同  
 空晴れて月影寒き溜水  
 時 雨 同  
 風止んで時雨に襟の小寒かな  
 庭の雪 同 大和 泰子  
 初雪や眞白き庭に紅椿  
 晩 秋 同 山中 松子  
 向山どきはぎ残し落葉する  
 秋 同 吉田 早苗子  
 白菊のにはほひ氣高く空清し  
 朝 同  
 朝寝して靴はく暇も忙はし  
 冬の夜空 同 吉田 富美  
 寒空に光る小星のさみしさう  
 嵐の海 同

荒れくるふ波にたゞよふ小舟かな  
 月 同 横山 壽子  
 おぼる月松にかゝりて笑顔かな  
 晩 秋 同 山田 正子  
 目に立ちて黄にそまりたる銀杏かな  
 山の家 同  
 山茶花のしづかに咲くや山の家  
 晩秋の夜 同 久保井 島代  
 ばさ／＼と落葉をたゞく夜の雨  
 墓 参 同 齋藤 文子  
 墓詣で片手に菊をさげて行く  
 落 葉 同 田村 吉江  
 漬物の桶に散り込む落葉かな  
 落 葉 同 永安 淑子  
 赤や黄や色とり／＼の落葉かな  
 秋 同 服部 末代  
 四方の山色そまりけり紅葉して  
 落 葉 同 平島 京子  
 枯れ朽ちし落葉集むる秋の暮  
 野 路 同 三戸 キヨ子  
 白い息つき／＼急ぐ野中路

きりぎりす 同 宮野 環  
 きりぎりす鳴く聲たへて冬の空  
 月 同 和木 綾子  
 戸を明けたまゝ風呂に入る秋の月  
 満月の泣き笑ひする曇空  
 曉の雞聲 同 和田 和子  
 元且や雞の聲より明けて行く  
 ハーモニカ 本三 朝枝 都喜子  
 ハーモニカを吹く音きこゆ夏の宵  
 くつわ蟲 同 岩本 フミコ  
 長き夜を鳴きこぼしたるくつわ蟲  
 盆燈籠 同 馬屋 原範子  
 そよ風に静かにゆらく盆燈籠  
 朝 顔 同 鹿島 千代  
 朝顔はたゞ一日の命かな  
 蟬 同 金子 チセ  
 雨止めば蟬鳴きしきる夏木立  
 朝 顔 同 河邊 綾子  
 朝顔に聲をかけて見る清き朝  
 ドライヴ 同 木村 喜美子  
 ドライヴで心のとける小春かな

俄 雨  
 金魚屋の聲もにえたり俄雨  
 からすうり 同 齋藤 富美  
 からすうり一つゆらぎぬ風のとど  
 桔 梗 同 品川 房子  
 朝露にぬれた顔だす桔梗かな  
 夕 顔 同 末國 フサエ  
 夕顔に晝寝の夢を醒まさされて  
 朝 顔 同 末武 政子  
 朝顔の咲きにほひたる垣根かな  
 花ぐもり 同 高崎 八重子  
 サイレンの音もどかな花ぐもり  
 夕 立 同 高屋 琴子  
 夕立やからりと晴れて露光る  
 病 氣 同 竹内 文子  
 病 氣 同 田中 ヨシ子  
 短夜にねむりかねたる病氣かな  
 蟲の聲 同 田邊 フミ子  
 眠りから呼びかへすのか蟲の聲  
 炎 暑 同 津田 貞子  
 朝顔の萎れ切つたる暑さかな  
 夕 陽 同

浪  
 里の子の牛曳く音に夕陽かな  
 同 中村 聖子  
 ぼら一尾跳つて浪の白さかな  
 うぐひす 同 西田 清子  
 うぐひすや今日も来て鳴く梅の枝  
 別 同  
 月出で、別れ告げたり友の家  
 流 星 同  
 流れ星またくうち消えにけり  
 俄 雨 同 西林 キミ子  
 湯歸りやいきな浴衣に俄雨  
 炎 暑 同 西 林  
 繪筆をば執れども今日のあつさかな  
 南 天 同 藤井 弘子  
 南天實あらはれけり雪の際  
 西 瓜 同 藤 田 スエ子  
 妹の食べる西瓜に顔見えす  
 團 扇 同  
 遊園扇持つ手も重き疲れかな  
 化 粧 同 藤 永 芳 枝  
 化粧して水にほゑむ夏の午後

夏の海 同 益成雅子  
 ボート漕ぐ人も見えけり夏の海 同 三浦スミ  
 夕立の晴れて涼しき青葉かな 同 三島房子  
 太鼓 同 三輪愛子  
 夏日和祭の太鼓ひびきけり 同 山縣節子  
 小提灯 同 吉田泰子  
 青桐の向にゆらぐ小提灯 同 冷泉龍子  
 赤さんば 同 阿座上勝子  
 赤さんば池の波紋を追ひかける 同 石田知子  
 芙蓉 同  
 浴衣着て見れば芙蓉の花白し 同  
 舟遊 同  
 涼風や苦熱を洗ふ舟遊 同  
 星見つゝ幼くなりぬ夏の宵 同  
 名月 同  
 名月や水も地も木も皆白し 同  
 川柳 同  
 涼しさやと風にそよげる川柳 同  
 金魚賣 同

金魚屋の賣聲遠き葦下り 同 磯野千尋子  
 繪日傘 同 岡野輝子  
 繪日傘や青葉若葉の道を行く 同 賀田多美代  
 蟲の聲 同  
 足音にはたこやみけり蟲の聲 同  
 あつさ 同 角屋シゲ子  
 練習終へ川に飛びこむあつさかな 同  
 日傘 同  
 日傘さし濱邊を通る二人連 同 木村代志枝  
 春夜 同 木村喜久枝  
 沖を行くいきり火淡し春の夜 同 小原種子  
 落葉 同  
 川の面にひら／＼ちれる落葉かな 同 佐伯朝子  
 微風 同  
 夏の日の晝寝の頬に微風かな 同 水津静江  
 蟬 同  
 蜘蛛の巣にせみのかゝりて日の暮るゝ 同  
 月見草 同  
 夏の宵濱邊に匂ふ月見草 同 末岡サカヘ  
 大根干 同  
 何處見ても田舎景色や大根干 同

落葉 同  
 庭はけばまた吹きちらす落葉かな 同  
 霜の朝 同  
 ほつとつく息の白さや霜の朝 同  
 くもの巢 同  
 くもの巢に二つ松葉のかゝりけり 同 玉井喜久子  
 くちなし 同  
 口なしのほのかにほふ五月雨 同 嶋野万龜枝  
 なるこ 同  
 風吹けば雀おどろくなるこかな 同 飛落八千代  
 畑打 同  
 畑打ちに花散りかゝる微風かな 同 中村すみ子  
 夜なが 同  
 つれ／＼に和歌つくり見る夜ながかな 同  
 月 同  
 降るばかり蟲なく夜の月清し 同  
 白萩 同  
 がげぎはに白萩ゆらぐ日暮れ道 同 中村正子  
 野分 同  
 コスモスのみなたふれたる野分かな 同 長富ヨシ子  
 芭蕉の句 同

かしましき蟬のあはれや芭蕉の句 同 長山菊代  
 蟲の聲 同  
 荒野原寂しく聞ゆ蟲の聲 同 西村政子  
 ひぐらし 同  
 夏の日やひぐらし鳴きて暮れにけり 同 林英子  
 晝寝 同  
 弟のよだれたらして晝寝かな 同 原川幸子  
 母上と散歩して 同  
 母上とそごろ歩きや月の宵 同 殆長治子  
 水の音 同  
 秋ふけて水音淋し田舎道 同 藤野文江  
 にはか雨 同  
 道ぶしん煙草吸ふ間にははか雨 同 堀初枝  
 祭まるり 同  
 友待ちて月の下ゆく祭かな 同  
 水泳 同  
 水泳におもちやの犬を浮べけり 同 前田禮子  
 夕涼み 同  
 すだれ越に見ゆる青葉や夕涼み 同 光井千代子  
 夕涼み 同  
 人も見えけり青葉影 同

紅葉 同 楊井竹子  
 さくらりと流るる川に紅葉かな 横山 カヤ子  
 夜長 同  
 あくびして時計見上ぐる夜長かな 同  
 かぼちや 同  
 ごつごつと頭ならべたかぼちやかな 同  
 入日 同 吉賀澄子  
 熟れ残るぶどうをてらす人日かな 同 吉野トシ子  
 五月雨 同  
 五月雨や赤いポストが立つてゐる 同 渡邊静子  
 蟬 同  
 針持ちし手をやすめれば蟬の聲 同 渡邊佳枝  
 夏休みの宿題 同  
 明日ありと思ひてすこす夏休み 同 和田榮子  
 祖母 同  
 新盆やおちやせん祖母の影悲し 本四 安藤美江  
 冬の墓参 同  
 提げて行く手向けの水も凍りけり 同 伊藤ウサヨ  
 秋の日暮 同  
 稻刈りや山に落ち込む日の赤き 同 稲村とみ子  
 除夜 同

去る年の名残に響く除夜の鐘 同 岡田義子  
 秋の夜 同  
 秋の夜や書讀む窓に蟲の聲 同 河野スエ子  
 曉の鶉聲 同  
 若水や東天紅のさげびかな 同 厚東光子  
 冬の朝 同  
 靦水凍りし朝の寒さかな 同  
 初雪にはえて美し赤椿 同  
 年の暮 同 志賀篤子  
 不景氣といへど忙し年の暮 同  
 秋の風景 同 高洲ヨシ子  
 子守する人の子淋し秋の暮 同 竹下千代子  
 秋 同  
 秋深き有明月の寒さかな 同  
 元旦 同  
 元旦やたてたランプも今日ばかり 同 田中喜美子  
 正月 同  
 追羽根を夕闇かろく包みたり 同 時山八千枝  
 秋の風景 同  
 晴れ渡る梢に高く百舌鳥の鳴く 同 林敬子  
 歳暮 同

賣出しの旗ひるがへる年の暮 同 光永一枝  
 雪の朝 同  
 思はずも雪のけてやる白椿 同 山本武子  
 秋の野路 同  
 秋の道とろ／＼に女郎花 同 吉村常子  
 寒き朝 同  
 編物の手も凍えけり今朝の霜 同 秋田順子  
 除夜の鐘 同  
 大晦日除夜の鐘聞く床の中 同 岩田タマ子  
 元日の朝 同  
 拍手の音も尊し初日の出 同  
 春の庭 同  
 しやくやくの赤き芽出しぬ春の庭 同 大谷榮子  
 春のおも影 同  
 新春や青空高くてこのおよげり 同 金子モトエ  
 雪の朝 同  
 雪の朝マントのえりを立てて行く 同 桑原富美子  
 秋の月 同  
 亡き母の一人戀し秋の月 同 神野博江  
 新春 同  
 新春の光にはゆる松かさり 同

新年 同 末次菊代  
 黎明の戸口に賀状落ち散れり 同  
 投げこみし賀状に白む戸口かな 同 瀧口桃江  
 元旦 同  
 若水や星影うつる水の面 同  
 冬之夜 同  
 よりかゝる机つめたし冬の夜 同  
 春かすみ 同 竹下マツエ  
 鐘の音を包んでしまふ春がすみ 同  
 元旦 同 波田美代子  
 元旦や晴衣喜ぶ幼き子 同  
 山寺にて 同 溝部恭子  
 わくら葉の散るや淋しき山の鐘 同  
 歌留多會 同 渡邊安子  
 歌留多會わが前の前にまげのぞく 同  
 清水 同 實二 阿部ツユ子  
 涼しさや柳のかげに湧く清水 同  
 新開地 同 阿部モミ子  
 電柱に蟬の鳴き居る新開地 同  
 春風 同 阿武滋子  
 麥の葉にそよ／＼吹ける春の風 同

洗 髪 同 池内 ミネ  
 さらくも涼しい洗髪  
 かゞし 同 上田 マサ子  
 初時雨が少し残りし山田かな  
 夏の月 同 大田 松江  
 夏の月庭の小草につゆ光る  
 蟬の聲 同 尾方 キヨ子  
 夕立の晴れて木の間のせみの聲  
 水 同 箴懸 文子  
 つめたさや口にしみ入る氷水  
 西瓜 同 金子 壽子  
 縁側に西瓜園みし内輪かな  
 重 荷 同 佐伯 由枝  
 蟬しぐれ重荷をおろす我が家かな  
 春の旅 同 清水 万龜子  
 春風や胸のこきめく汽車の中  
 炬 燵 同 高屋 菊枝  
 やさいもをのせて取まく炬燵かな  
 春 風 同 西山 アヤ子  
 ちら／＼と櫻散るなり春の風  
 夏の月 同 林 ミツエ

緑の園

朝鮮より

朝鮮京城府和泉町鐵道官舎十一號  
 大正二年卒業(舊姓藤田) 福間 さと

昭和七年の新春を迎ふるに當りまして一言申させて頂  
 きませう。今や皇軍は零下三四十度の滿洲の曠野で寒さ  
 と苦戦に闘ひつゝ不眠不休の活動を續けつゝあります。  
 時我々帝國臣民は枕を高くして起臥する事の出来るのは  
 之偏へに我皇室の御稜威の之からしむる所であります。  
 此の有難き御恵を安閑として送る事は出来ないものであり  
 ます。各々本分を盡しませう。  
 何時も心には思ひながらついでに御無沙汰に打ち過ぎ  
 まして何とも申譯が御座いませぬ。御許し下さいませ。  
 遠く故郷を離れたる私共には年一回の會報が何よりの樂  
 しみで御座います。母校の目ざましい發展振りには遙か  
 に御悦びして居ります。「何か近況の感想なりと報せど  
 の事」、頭腦の貧弱な私には思ひのまゝを文章に表記す

我さこのこひしかりけり夏の月  
 蟬 同 平岡 久子  
 蟬の泣かぬあはれに逃しけり  
 涼 臺 同 安井 貞子  
 すさみ臺一人淋しく空仰ぐ  
 蓮の露 同 安田 マサ子  
 夏の朝ほろりと落つる蓮の露  
 ゆあみ 同 山根 ハナ子  
 一日の暑さわすれるゆあみかな  
 蟲の聲 同  
 秋の夜や寝屋まで聞ゆ蟲の聲  
 櫻 同 山本 祐子  
 春風に夕の櫻はら／＼と  
 あやめ 同 虎竹 華枝  
 五月雨や池の畔のあやめさく  
 扇 同 大岡 光子  
 夏くればちやまな扇が役に立ち  
 歌留多會 同 弘長 治子  
 歌留多會停電故に菓子が減り

川柳

る事の不可能を残念に思ひます。御許し下さいませ。  
 別に取立て、申上げる事も御座いませぬが、すでに新  
 聞號外にて報じつつある如く、皇軍は滿洲の曠野で支那  
 暴民の爲に至る所血汐に染め戦つてゐます。殊に多くの  
 名譽の戦死者を出した事を思つても、彼等匪賊の強さが  
 察しられます。嚴寒零下三四十度のチチハル、昂々溪等  
 にて我軍の戦死者及凍傷者の百四五十名にも及びし事を  
 思つても、いかに酷寒なりしか察しられます。こんな  
 事は私が申上げなくとも時の新聞が報じて居りますから  
 御存じと思ひます。零下三四十度と申しまして、御地  
 萩邊の如き暖き所の皆様には一寸想像も出来兼ねる事と  
 存じます。私共の京城にても、十二月頃から翌年三月頃  
 までに三四回。零下十四五度又は七度位になる事があり  
 ますが、三日計りしますと少し暖になります。これを三  
 寒四温といつてゐます。十四五度の時でさへ寒いといつ  
 たより、痛いと言つた方がよい位で、顔でも出して居た  
 ら何か針様の物で突く様です。又水分のある手で金物に  
 でも當ればびち／＼とつき、痛くて御話しになりません  
 況んや「滿洲の地においておや」です。其の滿洲にて  
 名譽の傷病兵の方々百二十五名、昨年十月三十日午後八  
 時五十分龍山の原隊に後送され、衛戍病院に收容されま

した。夜中にもかゝらず京城驛頭の歡迎の聲は四邊を  
壓し、立錫の餘地なく一時は電車の通行も禁じたる有様  
でした。如何に皇國の爲とはいへ、變り果たる姿にて擔  
架にて病院自動車に收容されしを目撃した時は自から袴  
を正す有様でした。主人が鐵道に勤務して居る關係上、  
昨年九月十八日支衝突以來、軍用列車の發着時間等早  
く分ります故、朝鮮部隊及内地の派遣隊通過毎に歡迎  
してゐます。

殊に龍山(京城驛より電車にて十五分以内)京城兩驛  
頭は小中學校生徒を始め、在郷軍人及各團體一般歡迎者  
で、歡呼の聲旗の波にて天地も崩れんとする有様でした。  
特に大阪師團滿洲出動部隊の車中の井上中尉殿を御見  
受けした時は、夫人を追想して感慨無量でした。

又昨年も愈々暮れんとする二十九日、第十九師團の混  
成旅團の出動部隊は軍用列車第六回に輸送されましたが  
第一回京城通過時刻午後七時五十分にて二十分停車、二  
回三回と一時間乃至二時間遅れ、最終列車は草木までも  
眠らんとする翌日午前二時過ぎなるも、熱盛なる見送人  
はホームを去らず夜の寂寞を破る有様でした。斯る歡呼  
の聲に送られ、勇氣凛々出征されてより二週間餘の間に  
朝鮮方面にて古賀騎兵聯隊は大匪賊團と衝突し、惡戦苦

闘の結果衆寡敵せず聯隊長以下多數名譽の犠牲者を出し  
全滅の有様と新聞は報してゐます。實に氣の毒に堪へま  
せん。遺族の御方には御慰めの言葉もありません。  
殊に昨年十月三日衣笠大尉以下十七勇士の遺骨の、戰  
友に守られて龍山の原隊に歸られし時は涙禁じ難く、殊  
に故大尉夫人の遺児の手を引かれ立たれる姿こそ筆紙に  
盡せません。

翌日は龍山野砲隊にて、神佛兩式にて關係者並に遺族  
の方の列席の上三百近き花輪に飾られ、盛大なる慰靈祭  
が行はれました。後一般參詣も許され、丁度この日は滿  
洲の寒さを追想する如く京城も寒氣激しく、風さへも加  
はりしが非常な參詣者でした。

武士は戰場に散るが譽とはいへ、餘りの果なきに哀惜  
の情に堪へず、慰めの言葉もありません。一日も早く平  
和の來らんことを祈る次第であります、終りに臨み益々  
母校の御發展と皆様方の御健康を御祈します。

## 朝鮮より

京畿道長端郡邑内郵便所内

大正四年卒業(舊姓阿武) 金井カメ子

新玉の年の始めの御祝、千里も同じ御事、玉椿の八千  
代を籠めて目出度申納めます。師の君様始め、園の皆様  
は、御健やかにいやまし、御發展の御事と蔭乍ら御喜び  
申上げます。

さて、私共が巢立ちましてより、早十有餘年過ぎ行く  
月日に關守なく只々驚くばかりで御座います。あの清き  
流の阿武川のはざりて在校の皆様様の學び給ふ御姿が、  
目の前にも付き昔なつかしく存じます。愚者の私は社  
會に出ましても何一つ出来もしませず、只々六人の(男  
兒)母として、教育にいそしんで居ります。只今長男は  
中學の二年生で御座います。餘り平凡な私で御座います  
故、子供によつて學ぶ事が多く御座います。よく師の君  
様が學校を卒業なされば社會と云ふ複雑なものが待つて  
居ますよ、と御話下さいました御言葉いまだに腦裡に残  
つて居ります。私も其の社會の人となり今日まで大した  
落度もなく一昨年郵便所廳舎共新築しました、實に自分  
達の努力のためもので御座います。

夕べに聞くラヂオで一日中の疲を休め時々地方民謡の  
夕べなど萩の御舟歌の放送を聞きますと、飛立つ思でな  
つかしき古里の事でも語りあかす事も度々で御ざいます  
月冴ゆる秋の夕雪の朝に思は只古里にのみ。

申上げまほしきことはなかくつきは致しませぬが、  
あまり拙文の長いもおよみづらく入らせらるゝことゝ  
存じまして、筆を止めます。終にのぞみまして御校の御  
發展と會員御一同様の御健康を神かけて御祈致します。

## 南園の皆様へ

朝鮮木浦祝町三丁目八番地

大正五年卒業 阪口たか子

鶏の曉を告ぐる聲に、又新しい春を迎へました。諸  
先生はじめ南園の皆様、益々御さえさえしくおらせられ  
ます事と、何よりお目出度お喜び申上げます。

さて、過日は數ならぬ私にも、何か通信せよとの御事  
丁度年末年始と何やら取りまされ、おくれはせにて申譯  
けも御座いません。

母校を出ましたのも、つい昨日の様に思はれますに、  
早十六年月日の流れをつくゝ感じられます。同窓の皆  
様如何御起居遊ばしますやら會報を手にして、先づ第一  
に聞くは皆様の御動靜「マアあの方は亡くなられ、あの  
方は彼處に」と、ほんどうに感慨無量で御座います。萩  
を出まして安東大連と居を變り、當地に參つて早九年、

今では土地にもなれ兄弟等の居る事は元より又親しいお近づきも出来て、何ら内地と變りません、お友達と申せば、大坪節子さんが當地にお住の様な様かゝりて會報を通じて承知いたしていつかお尋ねいたそうと存じておりましたが計らずも幼稚園入園式の當日はじめてお目にかゝり非常に嬉しく存じました。時々何かの折りにお目にかゝりますが、やはり同じ學び舎に育つた者はとり分けなつかしく存じられます。長女は本年は十歳長男は八歳二女は三歳と日毎に成長して行く子供等の事に、日夜追ひ立てられ、あはたゞしき日のみ送り迎へてゐます。子供の教育など申せど、母親自身の教育が出来てゐないのである夜など三人頭を並べたやすらかな寝顔を見る時、此の無能な母でも我子ならこそかくは慕ひ寄ると思へば、一入母としての力なきを申譯けなく、又責任の大ききを感じさせられます。此の節では宗教の婦人會が出来て、月二會開かれる事になつてゐますので、私もそのお仲間に入らせて頂いて、何かと皆様の修養談を聞かせて頂いて非常に有益に存じてゐます。家の興亡は十中七分までは女の双肩に有ります由、何か問題にブツカつた時間かして頂いた事を思ひ出しては、日夜妻として母としての道をあやまち少なき様すゝみ度いと、はげまして頂いて居ります。

ます。別に忘れてゐるわけではありません。考へて見ると私が卒業してもう一昔以上です。年を経ると母校とも縁遠くなる様に一寸考へられますが、決してそんなものではない事をつくづく考へます。唯歸國した時なんか學校に自分達が教つた先生方のお少い事を淋しいとは思ひま

す。同じ學校を卒業したと云つても、學校により気持ちも違つて來ると云ふ事を考へます。幸か不幸か私の卒業した時代は丁度過渡期で専門學校入學資格がありませんので上京して私立の女學校の五年に編入しましたので、二つの女學校を卒業したわけになります。勿論教育を受けた期間の問題もありますが、なつかしみが大變に違ひます。一寸申しますと眞實の母と繼母と云つた感じでございます。いまして、此方の女學校は近くにありまして同窓會、運動會、卒業式と一々御通知を戴きながらつい失禮してゐますが、南園會の方だと學年が違つて少しも存じ上げない方でも同窓と聞くと姉妹の様に思はれお世話になつた先生方でお近くにお住居なれば女學校時代と同じ様な氣持で御相談に伺はせて戴いてゐます様なわけで、先日東京支部が開かれましたのに生憎重病人があり、出られなくて泣き出しさうになりました。これは一例であります。

ます。

滿家の天地は今尙幾多の危機を含んでゐます、國を擧げて此の難に當るの秋、私共の責任も亦輕くない事と思ひます。家集まりての國なれば一家を完全に修める事が私共の大切な務と存じます。

まわらぬ筆にて取りとめのない事のみ書きつゞけました、平素筆不精な私が、貴重な紙上で皆様へのお便りをさして頂いた事を、感謝いたすと同時に、南の園に培われた一本の草にも似た私にも、皆様の力強い指導を下さらん事を切に御願ひいたします。ではなつかしい皆様のおやましにお榮えあらん事を、祈りて筆を止めます。

## 東京市より

東京市外世田ヶ谷町若林一三四

大正九年卒業(舊姓水津) 山 根 サ ト

なんでも書いてくれと會報部からの御命令、いくら考へても人に見せられる様な歌にも詩にもなりませんから日頃から考へてゐる事を一寸書かせて戴きます。

女學校時代から作文の嫌ひな私は卒業してからも筆を執る事がおつくうで、いつも母校へ御無沙汰いたしてゐすがどうしてこんなにも遠ふかと考へる事がございすがやつぱり在校中に受ける精神的感化の相違だと思ひます。一般に都會の學校は専門學校は尙更中等學校に於てすら學問を賣る所と云ふ感じを多少なりとも抱かせます。勿論都會の學校には優れた先生が澤山おられますが、かうした精神的弊害は都會の一般的なものだと考へます。往々地方の方の中には都會の學校を大變いゝ様に考へてゐられる方がありますが、私の様な體験者から見れば感じ易い少女時代の三年を都會嗅のない眞實な教育を受けた事を非常に幸福だと考へてゐます。

## 撫順より

滿洲撫順南臺町一丁目七番地の七

大正十年卒業 河村千代子

御なつかしい南園の皆様を御様子を一丁目の會報で拜見致し母校の發展を喜んでをります。

昭和六年もあと二度眠つたら永遠に左様ならです。世界も、日本も、滿洲も多事多端な年でした。私達が渡滿いたしたのは足掛五年前でした。丁度濟南事變の揚句で御座いましたので、随分恐怖心を抱いてこちらに参

つたものです。しかし案外満洲の天地は平和で、拍子抜けがしたやうな譯です。内地に居りました時想像したやうな物騒な事件は一つも経験せず、二年三年四年と平安のうち昭和六年になりました。

ところが突然今秋九月十八日の日支衝突が引き起されました。この事件に關しては皆さま新聞や雑誌でよく御存じのこと、存じます。急轉直下の日支關係の悪化に、私達満洲人の平和な夢は破れ、不安の數日が続きました。一時は私、つくづく植民地に住むもの、生命の危険を思ひ、意氣地ないことまで聯想した位です。しかし元來主人の支那研究を目的としてこちらに参つたやうな次第でございますし、おぼろげながら所謂日本の生命線の第一線にある身だと云ふ自負心も手傳ひまして、却つて緊張した氣持になりました。私達にはよくわかりませんが、その後この事件も國際聯盟理事會で一段落ついて日本の要求通りになつたやうだし、私たちが心配したほどのこともなく有利に解決されさうに思はれます。只今ではあの廣い日本の四倍もある満洲が、支那本部から離れて日本に都合のいい獨立國の建設にまつしぐらに進みつつあるやうです。さうなつたら、私達幼稚な頭にも將來の日本の發展にどれだけの利益があるかと思はれます。狭い

日本、人口の多すぎる日本が亞細亞大陸に發展するので御座いますもの。それにしてもお氣の毒なのは今度の戦争で戦死された方、負傷された兵隊さん達です。國家のために犠牲になつて下さつた軍人さん達にどんなに感謝しても足りないと思つて存じます。満洲は昨今零下二十度内外で随分寒い寒さで御座います。それに匪賊がこゝかしこに出沒して良民を苦しめてゐます。三百五百と群をなして襲ふ匪賊の征伐に兵隊さんは悩まされてをられます。堂々と陣を敷いて決戦するのでしたら、我軍の勝利は定つてゐますが、バルチザン式戦法には全く閉口してをられるやうです。早く鎮定して三千萬人の人民が平和の夢を結ぶことが出来るやうになることをお祈りしてをります。

時局柄私達も小さい婦人會を組織しまして何か婦人の社會奉仕でも出来たらと、皆様と協議いたし一同揃つて撫順守備隊に慰問に出かけたり、奉天衛戍病院に傷病兵の御見舞に行つたり、國防費献金を集めたり、陣中文庫に不用の本を寄附したりして満洲の兵隊さん方をお慰めし、小さい奉仕ながら自慰して居ります。

今年五つになる私の子供がニューヤ(おまへ)、グヤウ(いりません)、ブーシ(いけない)など片言の支那語を

操つてをります。將來は日本語、支那語のチャンボンになつたやうな言葉が満洲で用ゐられる日が来るのではないでせうか? つまり今の日本民族が過去において高天原民族と朝鮮系民族と支那系民族とが融合して出来上つたやうに、將來の満洲にも現在の日本民族、漢民族、朝鮮民族が打つて一丸となつて、新しい民族が出来るのではないでせうか? 主人などもさうならねばならないと思つてゐます。

今度の満洲事件で内地の人々に今迄あまり知られてゐなかつた満洲の事情がかなり詳しく新聞、雑誌などで紹介されたこと、存じます。満洲と云へば匪賊極寒と云ふことを聯想され、到底日本人の住む所ではないやうに考へられてきましたが、決してそんな所ではなく、むしろ内地の都會以上に文化設備が行き届いてをります。水道、瓦斯、電気スチーム等内地の方の想像にも及ばぬ位便利に出来てをりまして、一家の主婦の勞力を省くことはお話しにならないほどでございます。それに冬期は零下二十三十度になる寒さもありますが、三寒四温と申しまして三日寒ければ四日温かと云ふ風に氣候の自然的調節がありまして、思つたほど凌ぎにくくもありません。それと一般に濕氣が少なく毎日の如く晴れ渡つた天氣なので氣持

は暗々致します。今頃は氷滑りの時期で大人も小供も冬もさかんに滑つてゐます。満洲の冬の戶外運動としては唯一のものなのです。見て居ると私達も練習したい欲望が起ります。

ありし日の學び合時代を思ひつゝ、つたないペンを執りました。

皆さまの御健やかを祈りつゝ、ペンを擱めます。

### 臺北市より

臺北市泉町一ノ七  
大正十年卒業(舊姓野田) 山内 喜代

御なつかしい諸先生始め、南園の皆様には、御機嫌麗はしく、初春を御迎へなされました御事、此上も無き御幸福と、遙かに御悦び申上げます。私も御蔭様にて、恙なく年浪の流れを越え、専心家事にいそしみ居りますから、何卒御心安く思召し下さいませ。

眞心こめてつけた床の若松に、爽やかな新春の日ざしが、硝子窓を通して、明るく映じ、一人線鮮やかに晴々しく、元旦の朝から、近頃には珍らしい、よいお天氣が続いて、ちやうど内地で、櫻花の咲き初める頃の様



氣候で御座います。扱、會報部の方より、締切が切迫して居るから、早く何か投稿を、この事で御座いました。があまりの御無沙汰に面目もなく、ペンを取りましたものゝ何から申し上げて宜しきやら、平凡な頭では急には、まごまつた考へも浮びませんので、年頭に當つての、愚感でも述べさせて預いて、御許し下さる様願ひ上げます

反省したい、改善したい、と思ふ事の種々ある中で、最も最近で私共女子の氣にする、服装の事であるが、世の中が時々刻々と、遷り變つて行くに従ひ、女子の衣服の、變化して來た事も亦、驚く程である。近代目立つて洋装も流行して來たけれど、それは別として、和服の點では、一般に華美過る様に成つた氣がする。時代の表彰だからといつて、明るく、華やかなのもよいけれど、餘りに奇抜で物好きな、色合や柄物を、年齢も反り見ないで連れて居る子供より華に裝ひ、平然と人の中に出る等は、少し考へ物だと思ふ。そんな人は若く見せ度いからか、華にせねば恥位に考へての事かも知れないが、寧ろ、年より地味に、あまり人目に立たぬ様、落着ある裝ひは、却つて其人が優美で、床しさが忍ばれはせぬでせう？乃木婦人の質素であつた事は、誰も知る處であるが、あ

の一生は春の海を行く様に、其閑な日ばかりはなく、思はぬ嵐に逢遇して、荒浪と戦ひつゝ、或は漂ひ、或は流され、所謂臥薪嘗膽、而して始めて彼岸に達するさへ言ふ。されば平素から、油断なく注意し、道境に處し得る覺悟だけはなし置かねばと切に想ふ。曾ての日の願ひも、望みも、大かたは机上の空論に終る事もあつて、世の中は、なかく理想と現實とは一致し難いから、徒らに過去の幻影を追はず、現在に満足して、各自の本分を眞面目に盡し、意義ある日常生活をなすのが最も肝要であるを念じて止まないのである。

拙い文の書流しで、何のまごまりも付きませぬが、所感中一つ二つの赤裸々な告白で御座いますから、其點は御諒察下さいまして、如何様にも宜しき様、御訂正の程願はれますならば、嬉しく存じます。では皆様御身大切に御奮勵なさつて下さい。かしこ

## 東京市より

東京市深川區東町二二

大正十年卒業(舊姓井木) 中村かつ子

の方の様な眞似をするには、なかくの修養を要し、出來難い事であるが、それに近い迄の事は、心掛け一つで誰でも出來ない事はないと思ふ。時局も考へず、自分がたゞへ高價な物を持つて居たとて、所も時も選ばず粉飾するは殊に見苦しい。親しかるべき學友をちよつと訪れるにも、下から上迄絹布を纏つた盛裝で、是見よと言はぬばかりに訪問するといふ事は、なつかしきまゝに心から訪れるのか、或は見せつけ様といふ風なのか、其人の心理状態が判じ難い場合もある。また一家の主婦が身嗜み以上の厚化粧し、用事も無いのに暇さへあれば外に立ち、近所の人と無駄話したり、お金の顔さへ見れば身邊を飾る事に腐心し、自ら市場の買ひ出しにも行かず、時には間に合ぬからとて、料理屋から取り寄るといふ様な人もよくあるが、そんな人に限つて、肌襦袢も不潔、臺所の掃除も不行届、便所の手洗場には水が有るか無いかといふ有様であるこの話を聞かれるが、そんな事で吾氣に平凡に、一生が算盤通りに行けば良いけれ共、不幸にして、良人に早く先立たれたり、杖柱と頼む我子に夭折されたり、又失職したり、思ひ懸けない病魔に襲はれ等した場合に、さあ大變と、如何に狼狽し取亂したとて、眞に同情し力と成つて呉れる人が幾人あるでせう？、人

母校を出てより十一年餘になります。其の間御便りもせず、御無沙汰ばかりして居りましたと申すも御座いませぬが、決して母校及び皆様の御事を忘れた日とては御座いませぬ。北風にななく胡馬の心、南枝に巢喚ふ越鳥の情、人ならずとも故郷は戀しきものを。ましてや母校を想ふ友を想ふの切實なる情は遠く異郷にある身は、年流るれば流るゝ程神秘に通ひ、私の心を母校愛へ導きまします。想ひ出す毎に、せめて在京の皆様は御會ひする事が出來ればと常に思つて居りました折、馬淵先生始め五六人の諸姉様の盡力にて、十一月十三日に日出度く、南園會東京支部創立が生まれましたのは、美學の發露で御座います。其の日廿七人の御出席がありまして、諸姉様等の御厚意に接し、盛大に創立發會式が舉行されました。會則も設定されました。この日の事は詳しく別に會の方より御報告ありました事と存じますので略しますが、私はこの記念すべき日が本當に大きな喜びをもたらした事を神に御禮を申して居ります。

それは長い間私の姉が常に御噂して、戀慕つて探し求めて居た姉の親友、繼文字様に妹の私が偶然御會ひ出來ましたのは、神の攝理とでも申しませうか………。

久しく探し求めた實姉にでも廻り會つた様な、なつかしさと、悦びとで盡きぬ話に時の過ぎ行くを忘れ、昔日の想ひに返りました。此の事を繼縁よりも姉に御便りがありましたので、遠く離れて淋しく暮す姉も我が思ひの叶つた懐しさに狂喜して呉れました。之が御縁で、繼縁と、姉との切實なる情愛が、何十年振りかに女學校時代に廻りました事は、妹の私迄も幾重も南國會支部へ感謝して止みません。

この意義深き十一月十三日は、一生忘れる事の出来ない記念すべき日です。

今後は春秋二回總會が有りますので、又どんな物語りを得る事かと、悦びを胸に畫いて、其の日の来るを楽しみに待ち續けて居ります。

母校を出でより、餘りペンを持たぬ身は、心せくばかりで、思ひの萬分の一も表現出来ないのを残念に存じます。末筆乍ら母校の御發展と皆様の御健康を遙に御祈り致します。(一九三二、一、六日夜)

x  
x  
x  
x

先輩の方々、在學の皆様心を一に致しまして此の國難に際しまして女の道を勤み努めてまゐりませう。終りに皆様方の御幸福と御健康を祈り上げます。

## 悲想の巻

阿武郡紫福村

昭和六年卒業 岩武 哉

南園の皆様は、清い阿武川の岸邊に咲く數々の花よりも尙美しく健やかに御成長下さる事と、私存じてゐます。惜て過日會報部よりの御便り拜見致しましたが、ついノ、忙しきにかまけ、こんなに遅くなつて、「悲想の巻」と題して、左に私の拙い雑感——それは全く蚯蚓の寝言にも劣つてゐます。どうぞ御笑ひ下さいませ。

人生の裏を行く我々が常に尻目に見て通る下水道の如きは。人生の表を行く、それは春、櫻挿頭して酔ふが如くBを送る人々ではあるまいか。

人家の狭き裏の細道を、とぼ／＼行く哀れな乞食よ！彼等は何を目的に、かくも裏の細道をとぼ／＼行くのでせう。人々よ！此の哀れな姿の乞食をどう思ふ。

嘗て私は聞いた事があつた。それは或肌寒い秋の暮、

## 新春を迎へますに

### 就きまして皆様へ

神奈川縣川崎市旭町二ノ三七五

昭和二年卒業 堀 よし子

國內に國外に惱み多い、昭和六年の年も、後三日許りで愈々新春を迎へますかと思ひますと、萬感交々悲喜とどりで御座います。全國津々浦々に至ります迄、愛國心の進りは我が南園の皆様方には殊の外深甚に在りました事と、唯々感激の涙より外何物も御座いませぬ。朝な夕な新聞紙上で、幾多のうるはしい涙無しでは讀まれぬ私共同性の雄々しき慰めの言葉に、定めし酷寒の滿洲に雪や、氷に起き伏し遊ばす我が忠勇なる軍人の方々に、暴戾なる支那兵も物かは、尙一層の御奮勵をして頂ける事とひた／＼嬉しく存じ居ります。此の上は唯私共女性には戦線に立つて御國の爲に命を投げ出して迄働いて居て下さる兵士の方々に對しましても、無駄を省いて少しなりとも慰問の金とし、又北國の俄と戦つて居られる方々へ救ひの手の延びん様、只管只管祈り居ります後二日致しますと昭和七年の曉がまゐります。どうぞ御

四十五六とも見える男で、ぼろ／＼の着物を着た人、その男は何の容捨もなく、無言の儘私の家の豪所へ、のか／＼這入つて來た。そして彼の言ふ様、「お上さんわしは昨日から一つも飯を食はねえから飯を食はせて下さい。腹が減つちや歩けねえ」と。彼の言葉を聞き終るや思遣りの淺からぬ母はどう思つてか、立つて行つて、御櫃と茶碗と箸とお數と、そして薬罐とを整へて來て、彼の前に出し、「まあゆつくり食べてお行き」と又立ち去られた。後で見たら、今夜三人が食べる丈の御飯が、御櫃に入れてあつたのに、御飯の後方もなく食べてゐたさうな。そして歸る時、「お上さんSと云ふ家は何處だつたけねえ」と訪ねたので、母は出て行つて行く道を委しく話してやられた。すると彼は、御飯の禮も云はず、又元通りのか／＼と、かのS家を指してか行つて仕舞つたさうである。以上は昭和五年私の母の實驗した失敗談である。

次は、彼の無遠慮の乞食が來たその年の冬——北風寒き二月の或朝の事、人々は脹らした柔い綿入りの着物を着て、暖い炬燵に朝夕もぐり込むその頃——身を切る様な風に吹かれながら、何處をあてどもなく、流浪の旅を續けて來た、一人の若い男性が我が玄關に來て、ぶる／＼

振へながら、何か哀れを乞ふ言葉の折々、チリン／＼、又チリン／＼と、その音は北風に送られて遠く幽かに何處ともなく消え去つたであらう！ その時、我が父は何と思つたものか、つか／＼と歩み来て「お前年は幾つか？」と、彼はおど／＼しながら「はい、取つて三十になります」。父は暫く彼の様子を、ちつと見詰めてゐたが聽て「そんな若い年をして何故働かぬか、働け」と言つた儘自分の室に歸つて来た。でも哀れな彼は、「有難うございます、働きます」と言つて、どこをあてにか歸つて行つたさうである。

もし彼が働かぬ時——人々よ！ 人生の果無きは此處にあるのだ。悲想の巷がそこにあるのだ。人々よ働け、働かず懶けて遊び暮す者が、此の人生の悲想の巷に放り出されるのだ。

かの若き男女が、失戀の結果死の道を選ぶのは何故か？、「若人よ！失戀する勿れ」とは神は許しても人生が許さぬであらう。それ故、失戀した者は人生の死を選ぶのだらうか、否、裏切られた若人よ！ されば如何にすべきか、それは散り行く花を追はず、新に出づる蕾を待たさすれば急いであの道を選ばずとも済むであらう。人々よ！ いざ働け、働くものは永久に此の悲想の巷をさ迷

たいや？ お前の父はそんな事をとてもさせてはくれぬやい……」私はこの時、母の言葉を淋しく聞いてゐたが、私の心の中は明るい決心の炎が仄かに燃えてゐた。今尙判然と覺えてゐる。それは自分はとても世の哀れな子供を引き受けて立派に育てる事は出来まい。それでせめて私が大きくなつたら、小兒院を訪れて其處の子供達に、お菓子と果物を夫々一袋づゝ分與へて、彼等の無邪氣に微笑む顔を一人々々見て廻りたい。そして此の可哀想なる子供の養育費として、自分に儲けた幾らかのお金を寄附してやらうと決心したのである。

私の未來の夫たる人は、私の父の様にひどい人ではない筈だ。屹度私の其の行を許してくれるに違ひない。萬一許してくれなくとも、わたしが自分で儲けたお金故、私が使ふのは一つも悪い事ではあるまい、私の父の様に妻には一つもお金を持たせぬ様な男は私は嫌だ。さうだ父の悪い事を云はなくともよかつた、又乞食の事も。私が悪かつた。例へ自分の悪をさらけ出して他人の悪は隠すのが、私達の人情と思ふ。

借て以上のべた愚感を纏めて見るならば、神の御恵と皇室の御愛撫の御力で育つた私達は、これ等總て天地の大御恩に報ゆる爲に、第二の國民として役立つ迄の日

はずとも済む。併し悪を働くのではない。人必ずしもその性悪ならずによつて悪を働くのは間違ひだ。

善道即ち正道に待して、動かす直線を進んで行けば幸福が待つてゐる。もし此の一筋の正道に枝を生じて、その枝に登れば必ず此の枝は折れて、悲想の巷に落ち、落ちて歎く事だらう。歎けば未だまい、が併し、兎角斯うなつたからにはもう總てが遅い。尊い一生を人生の裏へ送つて、そこで一生を終らねばならぬ。かく人生の裏を行く人の如何に多い事か！ それ誰の罪ぞ、神の罪か？ 人生の罪か？ 否、唯々悪を働く人のみ持つ悪それ自身

が罪だ。人は不満ある時にのみ始めて進歩する。榮耀榮華の生活は聽ては悲しい闇の辻をさ迷ふであらう。

母は何時か私にしみ／＼と語つてくれた事があつた。「わたしは何時死ぬるか分らないが、せめて死ぬ迄に何か旗上げして死にたいものだ。お前の父がもつと優しい人で、わたしの相談相手になれる人なら、相談して世の哀れな人を救ひたいのだけれど………親もなく頼る人もない子さか、棄子とかをみんな取り寄せて、一寸した家を立て、その家で育てたいものを。わたしの自由になるものならあの可哀想な小兒院の人々を、救うてやり

の本の國民たる私達の選ぶべき道——即ち完全な身體を築き上げる事と、確實なる精神を養生する事と、今一つ諸々の修養の爲に、前後を辨へて働く事にある。

### 漫 歩

下關市裏町四〇ノ一松田方  
大正十四年卒業 松岡綾子

道  
瀬を深み岩にせかれて立つ波の遠なりかぞへつゆける山  
松原に海の遠鳴聞きながら淋しく眺むありあけの月  
北に伸ぶ山脈の上の黒雲に雪となるらし寒き朝かも  
うた心よせ集めつゝ疎林をゆけばうすく残れるひるの月  
かな  
八ツ手葉のおく初雪に日は映えて水珠となりて落ちそめ  
にけり

### 旅

萩町新川  
大正十五年卒業 大谷ハツ

いくそたびわたりにけるも關門の波のくだちにごろろは  
ちさる

夏の宵大人のみにとに集ひ來て雨夜の汽車を窓先に見ぬ  
雨の日の有馬の街ゆけふりてとつ國人のだんまりて行  
く

雨の日は須磨の濱邊にたちいでしのがなきける頃のい  
とほし

山寺に青葉がくしの風むせて咲きのこりたる木連の花  
白藤を客のみ僧にさげもち臺にながしの投げ入れの宵  
夕まけばあそびたらひて歸りゆくとしはのゆかぬ子の如  
き我

東風の日は入江の波の青すみて切れ藻よりきぬ湯のはん  
かげり

大鏡倒せし如く海風きて馬の鞍峰に糸たる人

残照のきらゝな原の草にねて秋空高くに笛をふく

別れといふ明日を控へて小夜更けに街をいそぎてしるこ  
やに入る

秋の晝友の家にて栗の櫛櫛タドにくれば思ひ出の燃ゆ  
櫛櫛の香しみにらに吾のいとけなき頃思はれて焔にかげの  
ゆらぐ

窓先にいちちはやく吾秋を感ず櫛の一葉のくるくると落ち

行くなべや水引草の花咲きて秋の山路いと静かなり

あはれ我黒髪いたく細り行きふる里に早や秋は深みぬ  
子供等と遊びし野邊も枯れさびて夕べ悲しくこほろぎの  
なく

静やかに湯浴み居つゝこの日頃我の手いたくあれにける  
かな

打仰ぐ丘の柿の木今はしも一葉だになく空しくそびゆ  
もろくの思ひをのせて暮れて行く哀れ十九の秋は佗し  
さ

この夕べ真心を持てしみるゝと語らふ友のほしと思ひぬ  
相見なば昔の想ひ出語らはん人も遠し淋しくもある  
暮れて行く夕べの庭に我立てば何の涙ぞ頬を流るる  
別れては何時か相見むすこやかに幸多くませ一人いのる  
空の色はた海の色なべてみな悲しと見ゆる君と別れて  
夕暮はなにか悲しき遠空に隔く星も物想へどや  
あゝ同し我夕べの庭に立ちほるかに速き人をし想ふ  
終日をしくくなくとや春の雨終日降りて心忙しき

### ねむれぬまゝに

朝鮮にて

福井 諍子

雨の音こゝろもなげにきく居ればはつしとむる思ひ出  
のあり

めづらしく今年の夏をやまざるもぬけ毛多きは私のうれ  
ひかも

雨やめと雨氣はればまなかひの山も青田も吾もうるみ  
ぬ

まさらしに唄をうたへどつかれたり野草ふとんにねてみ  
たきかな

庭つくりせんこみ僧の鉢されば下婢はうたひて土をはこ  
べり

### 雑詠

阿武郡紫福村

昭和二年卒業 岩 武 正 子

ふとしたる事にも涙流れ來ぬ何時かく弱き女となりけむ  
友と我離れんゝの心持て語れる時のその味氣なさよ

道すがら友の心と我心いたく離れしを淋しみにけり  
淋しけれどすこやかにしてふる里に早三年目の秋を迎ふ  
る

はの甘き香り漂ひ木犀の花眞盛りの君が家かな

師を思ひ友を思ひて其の後に學びや思ひ涙流しき

姉君の御姿胸に描きてはすぎし頃をばなつかしむなり

何時も天の定めと語らめて強く生まんと決心せりき

去り行きし乙女は泣きぬ淋しさに學びや思ひ心ゆくまで

### 冬の夜の點景

東京市外淀橋町柏木三五三

昭和五年卒業 境 千代

けむりが  
ビルディングの屋根で風になる

無氣味に鳴るのは

風か愚音か

この寒さに堪へかねて

その儘土に歸る人々の葬ひの鏡であらうか

三尺上の空では

大賣出しののぼりがチャルメラを吹いてゐる

ひねもすべエヴメントの片隅に坐つて

行き交ふ人の脚のみ眺めて暮す人々の

眞黒い手、その帽子に

聲もなく酸酸する哀愁と恐怖  
だが不思議にも  
彼等の臆は涙を知らない

GO、STOP

泳ぐ様な人波、渦巻く自動車、目を奪ふネオンサイン  
焦燥の四つ辻に  
お巡りさんの手袋のよこれ  
救世軍の慈善鍋は  
風に吹き飛ばされさうに軽い

### 亡き祖母の御霊よ何處に

萩町椿東字椎原

昭和六年卒業 内 山 恭 子

我が西も東も知らぬより  
父母の代りにつき添はれ  
只我が成長を楽しみに  
己が歳とり弱るのを  
空吹く風のその様に  
星霜十餘重ね来て

いまや頭の白髪にも  
まがれる腰にも氣附かれけん  
目に見え目に増し弱られて  
あゝいかに思へどすべもなし  
六十四歳を一期とし  
我を後に旅立れ  
四大いまや空に歸し  
御霊は何處に迷ふらん  
極樂浄土に咲く花の  
一つはちすに我が母と  
共に語りひおはしませ  
我も此の世をに後にせし  
その後にも一度御二人の  
腕の中に抱かれしん

#### 昭憲皇太后御歌

むつまじき中洲にあそぶみきこすらおのづから  
なる道はありけり  
月に日にひらけゆく世の人こころむかほむ方を  
まつ定めてよ

## 學校記事

### 學校日誌抄

昭和六年一月

- 一 日(木)午前九時より講堂に於て拜賀式を舉行す。
- 八 日(木)午前九時より講堂に於て始業式を舉行す。
- 十二日(月)中野教諭は本日より向ふ一週間學事視察のため東京市に出張。
- 十五日(木)本三、四及實二生徒は本日より向ふ一週間午前六時半より八時まで薙刀寒稽古を行ふ。
- 二十一日(水)午前八時より寒稽古納會を行ふ。
- 二十二日(木)第六時限に和田校醫より第一學年生徒に對し感冒豫防に關する講話ありたり。
- 二十六日(月)中野教諭は明日日中縣下女子中等學校教務主任會議に出席のため宇部市に出張。
- 二十九日(木)晝食後直ちに講堂に於て自治會報告會を開く。
- 三十一日(土)午前八時五十分より講堂に於て御眞影奉還

二月

- 五 日(木)筒井校長は今日日中市市に出張。
- 七 日(土)職員生徒一同萩驛前にて新に拜戴せる御眞影の御迎をなす。引續き講堂に於て拜戴式を舉行す。
- 九 日(月)縣廳より會計検査官來校、本校の會計検査を行ふ。
- 十日(火)筒井校長山口市に出張。
- 十一日(水)午前九時より講堂に於て紀元節の拜賀式を行ふ。
- 十六日(月)放課後圖書室に於て教員修養會を行ふ。
- 十八日(水)午後〇時三十分より本四、實二、生徒は中野、伊藤、繩田、七俵、四教諭引率の下に秩區裁判所に於ける公判を見學す。
- 十九日(木)第二部文科乙の教授法研究會あり。
  - 第一時限 本三菊 修身 池上 教諭
  - 第二時限 本一梅 英語 今城 教諭
  - 第四時限 本一菊 地理 藤田 教諭

第五時限に圖書室に於て右の批評會を開く

二十日(金)朝會の際服装検査を行ふ。

二十四日(火)京都より河合寫眞館の技師來り職員及學級別生徒の寫眞を撮る。

中野教諭は女子師範二部及養成所志願者を引率し山口市に出張。

二十六日(木)玉置教諭は今日中學事視察のため厚狹山口方面に出張。

二十七日(金)午後一時より講堂に於て來る三月六日に施行される雛祭母姉招待會の談話及音樂の豫行演習を行ふ。

### 三月

五日(木)筒井校長山口市に出張、午後は明日の雛祭母姉招待會の準備をなす。

六日(金)午前九時より講堂に於て地久節の拜賀式を舉行す。式後各級毎に雛壇を作り母姉來校者に觀覽せしめ午後二時より講堂に於て談話並音樂會を開催す。

九日(月)本日より四日間學期末考査を施行す。  
十日(火)午後一時より講堂に於て長岡少將閣下より陸軍紀念日に關する講演ありたり。

式後田淵先生の告別式土屋先生の就任式を行ふ。

九日(木)午後一時より第一學年生徒の入學式を舉行す。

十五日(水)午後一時より職員生徒一同志都岐山神社に參拜す。有田書記は山口縣廳に於ける會計主任會議に出席のため山口市に出張。

二十日(月)土屋教諭は山口、宇部方面に學事視察のため出張。

二十一日(火)午後一時より實二、本一、二年の順序にて校醫の身體検査あり。

二十二日(水)午後一時より本三、四及職員の身體検査あり。

二十三日(木)家政科校内教授法研會を行ふ。

第一時限 家事科 本四梅 岡田教諭

第二時限 家事科 實二 玉置教諭

第三時限 裁縫科 本四梅 北野教諭

第五時限 裁縫科 本一菊 原田教諭

午後二時半より右の批評會を開く。

二十四日(金)晝食後南園會豫算會議を開く。第六時限に自治會報告會並談話練習會を開催す。

十四日(土)放課後職員並本四、實二生徒の紀念撮復をなす。

十七日(火)午後一時より講堂に於て自治會報告會を開催す。其後生徒の有志は公會堂に於ける賀川豐彦氏の講演を聴講す。

十八日(水)午後一時より圖書室に於て成績會議を開く。

十九日(木)第三時限より明日の卒業式の準備を行ふ。

二十日(金)午前八時半より修業式を舉行引續き九時半より卒業式を舉行す。午後一時より在校生より卒業生の送別會を開く。

二十一日(土)午前十一時より謝恩會を開催。午後二時半より同窓會の新入會員の歡迎會あり。

二十六日(木)入學考査準備のため全職員出勤執務す。

二十七日(金)今日中入學考査を施行す。

### 四月

五日(日)再入學考査準備のため全職員出勤執務す。

六日(月)今日中再入學考査を施行す。

七日(火)午前十時より新學年度に關する職員會を開く。

八日(水)午前九時より講堂に於て始業式を舉行す。

二十五日(土)職員生徒一同三見方面に終日遠足をなす。

二十七日(月)結核豫防に關するテストを行ふ。午後一時より公會堂に於ける文部省推選映畫を觀覽す。

二十九日(水)午前九時より天長節の拜賀式を舉行す。

三十日(木)午後一時二十分より萩町招魂祭に參拜す。

五月

八日(金)室積女子師範學校本科第四學年生徒は友近北島兩教諭引率の下に南園館見學に來る。

九日(土)筒井校長、中野教諭は關西、北陸の師範學校長の萩史蹟案内のため出張。

十三日(水)山口縣師範學校訓導上田其助氏引率同校附屬小學校生徒南園館の見學に來る。

十四日(木)豐浦郡神田尋常高等小學校長現哲三郎氏引率同校生徒南園館の見學に來る。

十五日(金)本三生徒は土屋、吉原、玉置教諭引率の下に防府、岩國方面に、本二生徒は秋山、今城、七俵、河合教諭有田書記引率の下に秋芳洞に、本一生徒は池上、神田、河内、藤田教諭引率の下に深川方面に何れも修學旅行を行ふ。

十六日(土)本科第三學年生徒は修學旅行中。

宇部高等女學校本科第三學年生徒は高野教諭外二名に引率され本校内南園館の見學に來る。

十八日(月)本四、實二及研究科生徒は下關梅光女學院講師川上氏のクリーニングに關する講演を聞く。

十九日(火)午後一時半より講堂に於て自治會報告會並學藝會の豫行演習を行ふ。

二十日(水)美育科の校内教授法研究會あり。

第一時限 習字 本四菊組 池上教諭

第二時限 圖畫 本二菊組 秋山教諭

第四時限 音楽 本二梅組 河合教諭

第六時限に右の批評會を開く。

二十三日(土)午前八時より校庭に於て本校創立紀念式を舉行す、引續き十時より學藝會を開催す。

父兄保證人の來校者多數あり、次で川上氏の毛織物の手入法に關する講演あり、午後一時半より校長、教頭より保證人に對する講話あり、次いで本校後援會の議事に移り、教監と生徒保證人との懇談をなし散會す。

二十五日(月)午後一時より職員生徒一同松陰神社に參拜す。本日縣下高等女學校校長會議を本校作法室に於て行ふ。

二十六日(火)午後一時より校内排球大會を開催す。

二十七日(水)本日は海軍紀念日に相當するを以て午前八時より講堂に於て土井海軍機關大佐の講話を聞く。

二十八日(水)午後一時半より校内陸上競技大會を開催す

三十日(土)本四、實二生徒百十三名は中野、繩田、藤田、岡田、四教諭引率の下に午前七時二分萩驛發京阪地方修學旅行の途に就く。

### 六月

一日(月)本日より夏服を着用す。尙本日より三日間第一學期三年以下の中間考査を施行す。

三日(水)午前十一時十分より講堂に於て筒井校長より齋齋豫防に關する講話あり。

四日(木)本二、三及研究科生徒は香川先生の臨地講話を聞きつゝ龍藏寺、松陰神社、東光寺を経て笠山方面へ遠足をなす。本科第一學年生徒は池上、北野、神田、河内、藤田好教諭今道書記引率の下に深川方面へ修學旅行

をなす。

五日(金)京阪地方修學旅行團は午後四時七分無事萩驛着。午後六時半頃山口高女生百三十餘名來城南園館を參観す。

七日(日)本校校庭に於て近郡小學校尋常科生徒の體育大會を開催す。

九日(火)本日第一、二時限講堂に於て希望者專務講師東京市社會教育講師糸井女史の講演あり

たり。筒井校長は全國高等女學校長會議に出席のため東京市に出張。

十日(水)中野教諭より時の紀念日に關する講話あり

十三日(土)本日より三日間本四、實二の中間考査を施行す。放課後二年對一年の陸上競技會あり

十九日(金)放課後一年對全校の陸上競技大會を開催す

二十日(土)午後一時より第一回腸チブスの豫防注射を行ふ。

二十六日(金)生徒學用品及携帶品の検査を行ふ。

二十七日(土)午後一時半より第二回腸チブスの豫防注射を行ふ。

二十九日(月)文科乙の教授法研究會を開く。

三十日(火)午後三時半より圖書室に於て教員修養會を開催す。

秋山教諭 圖案に就きて

繩田教諭 京阪地方修學旅行の雜感

岡田教諭 同

### 七月

四日(土)第一學期末考査を本日より四日間施行す。

九日(木)本日より八日間菊ヶ濱にて本校の水泳を實施す。

十七日(金)藤田好男教諭は文部省主催農業教育大會に出席のため廣島市に出張。

十八日(土)午後零時半より第一學期の成績會議を行ふ

二十日 午前八時より第一學期終業式を舉行、引續き自治會報告會を開催す。

### 九月

一日(火)午前八時より講堂に於て第二學期の始業式を舉行す。

七日(月)筒井校長は今明日中山口市に出張。  
十一日(金)縣廳より田中、山下兩氏會計検査のため來校。

十二日(土)乃木大將夫妻紀念談話練習會並に自治會報告會を開く。

十五日(火)筒井校長は今明日中山口市に出張  
十七日(木)中野、神田、河内、三教諭は山口高女にて開催さるる國語科實地授業研究會に出席のため山口市に出張。

十九日(土)本校各部選手は土屋、繩田、七俣、藤田四教諭引率の下に明日長府町に於て開催さるる縣下西部女子中等學校體育聯盟主催の體育大會に出場のため午前九時二十七分玉江驛發の列車にて長府町に向ふ。

二十日(日)各部選手は長府町に於ける體育大會に出場す。

二十三日(水)午後一時二十分選手一行は土屋、繩田、七俣、藤田四教諭引率の下に明日防府町にて開催さるる山口縣女子中等學校體育大會に

三時限より明日の體育大會の準備をなす。  
十一日(日)本校第十五回體育大會を舉行す。  
十五日(木)午後一時二十分校庭に集合職員生徒一同志都岐山神社に參拜す。  
十九日(月)筒井校長は今明日中事務打合のため山口市に出張。  
二十四日(土)中野、北野、原田、三教諭は山口高女に於けるバザーの視察のため山口市に出張。  
二十五日(日)第十八回同窓會總會を開催す。  
二十六日(月)清水谷學務部長來校視察さる。  
二十七日(火)第六時限後講堂に於て吉田松陰先生御事蹟發表會並自治會報告會を開催す。  
二十九日(木)午後三時より圖書室に於て玉置教諭の送別茶話會を開く。  
三十日(金)第一時限に於て教育勸語讀本奉讀式舉行、戊申詔書及精神作興詔書の奉讀式も併せ行ふ。  
三十一日(土)玉置教諭の告別式を行ふ、玉置教諭は午後二時三十八分驛發の列車にて赴任さるるに就き職員、生徒は驛に見送をなす。

出場のため自動車にて本校を出發防府町に向ふ。  
二十四日(木)本校各部選手は防府町に於ける山口縣女子中等學校體育大會に出場す。  
二十九日(火)校內理科實地授業研究會を開催す。  
第一時限 本四梅 幾何 繩田教諭  
第二時限 本一梅 博物 繩田教諭  
第三時限 本三菊 化學 伊藤教諭  
第四時限 本一菊 算術 吉原教諭  
午後二時より圖書室にて右の批評會を開く  
十月  
二十日(金)土屋教諭は今明日中福岡市にて開催される體操講習會に出席のため福岡市に出張。  
六日(火)午後一時二十分より職員、生徒一同春日神社に參拜す。  
七日(水)午前十一時半より體育大會の豫行演習を行ふ。  
八日(木)午後零時三十分より昨日の豫行演習の残りを行ふ。  
十日(土)筒井校長より視力保存に關する講話ありたり、本日は第二時限迄にて授業を打切り第

十一月  
三日(火)午前八時二十分より講堂に於て明治節の拜賀式を舉行、式後校內競技大會を開催す。  
六日(金)本日より四日間第二學期の中間考査を行ふ伊藤教諭は今明日中理化研究會に出席のため防府町に出張。  
七日(土)女子成人講座あり。  
七日(月)池内教諭新任の挨拶のため來校。  
女子成人講座あり。  
十日(火)池内教諭の就任式を行ふ。  
女子成人講座あり。  
十二日(木)女子成人講座あり。  
十三日(金)朝會後服裝検査あり。  
十四日(土)女子成人講座あり。  
十六日(月)阿武郡小學校校長集合を今明日中本校講堂に於て開催す。  
十八日(水)職員生徒一同大日比方面に遠足をなす。  
十九日(木)第四時限終了後講堂に於て昨秋岡山市に於て舉行されたる御親閲の紀念會を行ふ。  
中野教諭より當時の様様につき講話ありたり



二十日(金)午後一時より静養室に於て校醫のトラホー

ムの検診あり。

二十一日(土)午後零時十分校庭に集合松陰神社に参拜す

二十六日(木)本四梅組生徒の母姉會を作法室に於て開催

す。

二十七日(金)本四菊組生徒の母姉會を開催す。

二十八日(土)實二生徒の母姉會を開催す。

三十日(月)自治會報告會並談話練習會を開催す。

十二月

四日(金)熊本縣視察團五名本校に來校視察さる。

五日(土)午後一時より講堂に於て國立癩療養所長光

田氏の講演を聞く。

七日(月)中野教諭は本日より一週間島根、兵庫、岡

山方面に學事視察のため出張。

十日(木)土屋教諭は本日より三日間廣島、岡山方面

に出張。

十一日(金)本日より四日間第二學期末考査を施行す。

十五日(火)本日は全國の克己日に相當するを以て筒井

校長より講話ありたり。

二十二日(火)放課後講堂に於て自治會報告會並に談話練

習會を開催す。

二十三日(水)午後一時より圖書室に於て第二學期の成績

會議あり。

二十四日(木)午前八時五十分より終業式を舉行す。

卒業證書授與式

昭和六年三月二十日午前九時三十分より第十九回卒業證

書授與式を舉行す。

學式次第左の如し。

一、生徒、卒業生、職員入場

二、保證人入場

三、來賓入場

四、學式の挨拶

五、唱歌 君が代 (一同起立)

六、勅語奉讀 (一同起立)

七、唱歌 勅語奉答(一同起立)

八、學事報告

九、證書、賞品、賞狀授與

一〇、學校長告辭 (卒業生起立)

一一、來賓祝辭 (卒業生起立)

深い感謝の意を表す御禮を仰つて頂きたいのであります

愈々これ御別れかと思へば萬感交々起り感慨無量で

御別れの言葉も出ない有様ですが眞の一言を述べて饒げ

と致します。

誰れか女子を小なるものと云ふ、其の爲す所一家の榮

枯一國の盛衰に大なる關係があります。

西洋の諺にも「孫籃を動かす手はやがて世界を動かす手

なり」と申して居ります。母としての女子の業績には到底

男子の及ばぬ偉大なるものがあります。又誰れか女子

を力なきものと云ふ。其の力は社會風教の興廢に大なる

關係を有して居ります。

諺に「事件の背後に必ず女性あり」と申して居ります

通り花々しく活躍して居る男子も直接間接女性の操る糸

の動きに従つて居る事が多いのであります。即ち女性の

力は水の如く眼に見えない所に浸潤して偉大なる働きを

なして居るのであります。此邊に付いて十分自覺して頂

いて女子本來の使命は飽くまでも妻となり、母となつて

社會表面に立たない所にあることを味つて頂きたいので

あります。

最後に諸子今後の處世の方針に付いて一言附け加へて

置きたいのであります。人の一生は運命に支配せらるる

一二、生徒總代送辭 (卒業生在校生起立)

一三、卒業生總代答辭(卒業生起立)

一四、保證人總代挨拶(職員起立)

一五、唱歌、祝歌 (在校生卒業生起立)

一六、唱歌 仰げば尊し(卒業生起立)

一七、閉會の挨拶

一八、來賓、卒業生、保證人退場

一九、職員、生徒退場

告 辭

卒業生諸子

諸子、多年努力の效空しからず本日茲に目出度卒業せ

らることとなつた。諸子の喜びは申すまでもなく御兩

親御一家も擧つて喜んで下さることと思ひます。此處に

並んで居らるる諸先生方も私も亦非常に嬉しいのであり

ます。

此の諸子に取つて非常に目出度い嬉しい日を迎ふるに

當つても十分に考へて頂きたいことが御座ります。諸子

の今日あるは御兩親御一家の方々の御蔭であります。今

日御家に歸られたなれば何を携へても此等の方々に深い

感謝の意を表す御禮を仰つて頂きたいのであります

愈々これ御別れかと思へば萬感交々起り感慨無量で

ことあるは事實であります。併しこれは半面の事實に過ぎない、否眞の一小部分の事實に過ぎない。

吾等の日常生活に於て起る事項の大部分は偶然の運命に因るのではなく必ず由つて来る原因あり因果の理法に支配せられて居るのであります。

されば常に正しい信念を持ち修養を怠らず、苟くも虚榮や迷信に陥るを戒め「明く清く直き誠の心」を以て進まれ平素事なき時にも注意深く社會を觀察し、人生を思ひ、假令不幸一時逆境に陥ることあるも、強き決心と固き信念とを以て最善を盡せば必ず前途に光明を認むることが出来ること云ふことを忘れない様にして頂きたいのであります。

彼の不幸と云ひ、不運と云つて居る人々の大半は此の信念、此の勇氣、此の用意がなく徒らに悲觀して居る入が多いのであります。殊に女性の不幸の原因は虚榮、迷信、薄志、不用意等が多いことを思へば今後諸子は正しい信仰を求め愈々信念を固め高い人格の人たらんことを御勧めしたのであります。

尚々言ふべきことも少くありませんが大抵平素も申して居りましたことであるから今は之で止めて置きます。さらば行け、身體を大切に、健かに。

今や、姉君方は遠大の希望と、高潔なる理想を抱いて南園を巣立ち去つておいでになります。光明は燦々として美しさ前途に輝いて居ります。それはどんなに限りないお喜びで御座いませう。

あゝ、けれど明日より姉君方のお進みになります道には、山あり、河あり、谷ありて、行路難と屢々聞かされ居ります。

併し、日頃の御慈愛深きみ教に基き、険しい山道、逆巻く大河、烈しい風雨をも押切つて、何處までも強く正しく、さうしてやさしく進ませられ、うるはしい家庭を作り、恐しい思想などの渦巻く社會を淨化遊ばす事と、堅く信ずるので御座います。

終りに臨みまして、姉君方の御健康でいらせられますことを御祈り致します。

在校生一同に代りまして、拙き言の葉をつらねて、謹んでお送りの言葉と致します。

昭和六年三月二十日

在校生總代 菊屋 正子

答 辭

昭和六年三月二十日

山口縣立萩高等女學校長 筒井拾次郎

送 辭

暖い春風は、吹くともなく漂ひ、白雲は悠々として、瑠璃色の空に浮び、輝しい希望の春は訪れて参りました。この吉き日に、瑩雪の功空しからず、多數貴賓の御來臨の御前で、御卒業の榮譽を得させ給ふ姉君方の御胸の中は、今どんなに幸福に希望に、又有難きに、ふるへていらつしやいますこと御座いませう。

まして、明暮御慈愛を以て、導き給ひし師の君の御満足、又御兩親の御喜びは如何ばかりでございませう。

思へば、姉君方が此の南園の學びやに、私共のおやさしき姉君として、又正しき指導者として、お立ち下さいまして、多くの日月は廻りました。共に學び、共に遊びましたことを憶へば、お名残は盡きないのでございませう。然し、會ふは別れの始とて、徒らに別れを惜むは、詮のないことで御座います。私共は姉君方の、残されしました美しい校風を堅く守り、以て姉君方の御恩の萬分の一に報います覺悟で御座います。

春風に若草萌え、希望に満ちる三月二十日、數多の貴賓の御臨場を忝うし、私共の爲にかくも盛大な式を挙げさせられ、尚限りない御惠のこもつた尊い御諭を賜りましたのは、光榮の至で感激に堪へない所でございませう。

願ひますれば、私共は有難い御代に生れ、喜びと希望とを抱いて、この學びやに入學致しましてより、多くの年月も過ぎ、その間雨の日も風の日も、常に兩親の慈愛にもまさる御教を垂れられました校長先生を始め、諸先生の御洪恩は永却に忘れる事は出来ない所でありませう。入學當時は、智識も浅く、ものゝ道理も辨へぬ極めて幼稚なものでありましたが、私共のあぶない足許に愛と教との瞳を注いで下さいました結果、しつかりと動かぬ心の礎を築きあげる事が出来ました。然し私共の来し方は平坦で何時も春の陽氣さが漂ひ、南園に暖くはぐ、まれに居ましたが、今日を限り御慈愛深い先生方のお側を離れ、住み馴れた南園の學びやを巣立つ事を考へますと、不安と歡喜とがからまつてまゐるのでございませう。たとひ行手の大空に如何なる嵐が吹きまきませうとも、長き勅語の御旨と、日頃の御教と、今日の御諭とを羅針盤として、決して世の惡風に迷はされず鐵石不動の精神を以て、正しく、明るく、而も優しく進んで行き、將來は

良妻とも、賢母ともなり、平和と愛により家庭を淨化し、以て必ず目的の境地に達する覺悟であります。

又長い年月、ふつゝかなる私共を友達とも、姉とも、思はれ、何時も變らぬ友情を以て、お助け下さいました。在校生の方々の御情は、若き日の追憶として、私共の胸裏に永遠に浮び出づるでございませう。

在校生の皆様、今日以後も先生方の御教をよく守られ學問に運動に益々よく勵まれ、本校に更に光輝を添へられまことを希望します。拙い御挨拶でございませうが、卒業生一同に代りて謹んで答辭と致します。

昭和六年三月二十日

本科第十一回實科第十九回卒業生總代

小野智枝子

卒業生一覽 (昭和六年三月二十日)

本科卒業生 (第十一回) (五十音順)

上利光子 浅野愛枝 安藤フジエ  
阿武トシ子 阿武マツ子 池上ミキ子  
石原英子 石光幾代 伊東昌子  
岩崎タミ子 岩武哉 井町ハル

岩木林子 岩本當子 上田昌子  
内山貞子 内山泰子 大島秀子  
岡崎文枝 岡村喜久枝 岡村孝子  
岡村フキ 尾崎登茂恵 小野智枝子  
加藤富子 金子恭 金子光代  
川上幸子 河野タケ子 河村壽江  
官野壽子 黒瀬千鶴子 幸崎シズエ  
厚東蕙子 齋藤信子 齋藤雪子  
齋藤義子 坂本展子 佐久間千代子  
末武美都子 柴田君代 末岡益子  
杉山美枝 高杉愛子 田北ミネ子  
竹田眞子 竹原フサ子 田坂チヅコ  
田中密子 玉井節子 富田千恵子  
長井友子 長岡由貴子 長谷喜代子  
中野タキ子 中原隆子 中村静枝  
長谷川マスエ 波多野トヨ子 服部富喜子  
深井チエ 藤田正子 藤田幸子  
藤田實子 堀田文子 松浦元子  
藤村多喜 堀田文子 松浦元子

受賞者氏名

學業成績優等者  
本科 竹田 貞子 小野智枝子 岡村 フキ  
伊東 昌子 玉井 節子 田北ミネ子  
石原 英子 齋藤 雪子 堀田 文子  
内山 泰子 波多野トヨ子 官野 壽子  
西村 正子 佐々木初代 弘津 静子  
吉岡トキコ 田村トキエ

實科  
金子 光代 岩本 林子 川上 幸子  
中原 隆子 末岡ミサエ

實科  
須山マサコ 阿部 スミ

健康増進顯著者  
本科 岡村 孝子

在學中皆勤者  
本科 安藤フジエ 内山 泰子 田坂チヅコ  
三好カツ子 (以上四ヶ年)  
實科 佐々木初代 都築 松代 吉田 千代  
(以上二ヶ年)  
在學中精勤者  
本科 上利 光子 岩武 哉 岡崎 文枝

松浦富枝 三戸喜代子 宮内信子  
三好カツ子 空谷キヨ子 本永松恵  
森川秀子 守田律子 山縣貞子  
山本イチ 山本ツル子 山本禎子  
山本美智 横木貞子 横山壽美子  
吉田花子  
實科卒業生 (第十九回) (五十音順)  
阿部 スミ 井川竹子 伊勢島 キヨ子  
植村春子 大由玉代 大由富代  
大田タミ子 大田ヒサ子 小野村 清子  
金子信子 金子芳子 岸 千代子  
態野實枝 香原キクエ 佐々木 初代  
須山マサコ 田中照子 田中敏子  
田村高子 田村トキエ 都築 松代  
寺戸ハルノ 東野幸子 永田常子  
中原 操 中村セツノ 西村 正子  
東 佐喜子 弘津静子 藤井 タマ子  
藤村静代 藤田菊枝 藤田ヒサ子  
福永徳榮 三浦竭子 三浦 富美子  
三隅田 眞子 矢次清子 山本照子  
吉岡トキヨ 吉岡久子 吉田千代



- 六、談話 血液について 本三菊 中村 正子
- 七、音楽、合唱 上下の白 實二十
- 八、音楽、獨唱 四つ葉のクロロパー 本三梅 井上 玉江
- 九、談話 夜が來ぬ國、晝が來ぬ國 本三梅 齋藤 富美
- 十、音樂(ピアノ) 萬歳 本二菊 和田 和子
- 十一、ダンス ダンススカイダー 本二梅 三 名

- 一二、音楽、獨唱 花のかけ、繪日傘 本二梅 上田 民子

- 一三、談話及實驗 溶液の化學的性質 本四梅 厚東 晴子

休憩 (十分間)

- 一四、音樂 獨唱 付合唱 ほととぎす 本三 三十名
- 一五、ダンス 獎健體操 本一八 名
- 一六、談話 儂らない姿 本二梅 末光 文子
- 一七、音樂、獨唱 蛙の學者、おねんね時 本一菊 吉見 清子
- 一八、ダンス 君が代マーチ 本二菊 四 名

- 一九、談話 三つ見の魂 實二 林 ミツエ
- 二〇、音楽、獨唱 きつゝき 本一梅 河野 定子
- 二一、談話 料理法に精通せる婦人は家の寶なり 本四菊 大谷 榮子
- 二二、音楽、合唱 雲雀の歌 本四 五十名
- 二三、音楽、合唱 校歌 本二、本三、實二、四十名

休憩

番外講話 毛織物の手入法について 下關市梅光女學院講師 川上 先生

二四、閉會の辭

三、乃木大將記念談話會  
昭和六年九月十三日、乃木大將記念日は日曜日なるに  
より、其の前日に於て、記念談話會を開き、各學級より  
一名宛を出して、乃木大將及び同夫人の高徳に關する話  
をなされしめた。出来ば宜しく聴者をして感動せしめ  
ました。其の順序左記の通り。

- 一、開會の辭 本四梅 厚東 晴子
- 二、三越店員を驚かせた乃木夫人 本一松 松浦 八重
- 三、乃木大將の一生 本一梅 柿山瑞璃子
- 四、光を包む綿服夫人 本一菊 厚東智恵子
- 五、乃木將軍の優しい心 本二梅 境 綾子

- 六、乃木大將の悲壯な覺悟 本二菊 井町 文子
- 七、乃木大將を懷願して 本三梅 吉田 泰子
- 八、乃木大將の母堂 本三菊 金子 牧子
- 九、乃木夫人の主婦振 實二 佐伯 文子
- 一〇、永遠の供奉 本四梅 瀧野 芳枝
- 一一、母としての乃木夫人の活躍 本四菊 吉原 正子
- 一二、閉會の辭 本四梅 山縣 信子

四、松陰先生事蹟發表會

松陰先生が死刑にあはれた日は、太陰曆で十月二十七日である。それで先生を記念するため、昭和六年十月二十七日に於て、先生の事蹟發表會を開き、各學級より一名宛出演せしめた。其の順序は左の通りであります。

- 一、開會の辭 實二 鹿竹 華枝
- 二、松陰先生の最後 本一松 中山ふじ子
- 三、松陰先生の美しき大和魂 本一梅 勝部實美子
- 四、松陰先生の美しき最後 本一菊 綿津 和枝
- 五、松陰先生の御母堂 本二梅 作間 淑子
- 六、松陰先生言行の一部 本二菊 小野村壽子
- 七、松陰先生人格の片影 本三梅 尾崎富美子
- 八、松陰先生の友情 本三菊 佐伯 朝子
- 九、松下村塾と其の門下生 實二 上田 政子

南園婦人文庫だより

我南園婦人文庫は昭和四年十一月新築成り、開館せしより逐年内容充實し來り、外観の美と共に本校特色の一となりつゝあり。  
左に昭和六年一月以降の講入圖書を擧ぐれば、

書名

陸上競技規則  
園藝植物圖譜  
數學教育各論  
戦ふまで  
苦心の學友  
父母の態度  
曾我兄弟  
新版日本仇討  
各國國旗の由來と國際日  
時代と風俗  
風俗史の研究  
家事衣類整理綱要  
國民思想叢書  
支那事變と我國民の覺悟  
旅で見た動物の生活  
旅で見た自然界の不思議  
短歌入門  
手藝教材染色藝術  
文學論 攻  
我が子の惡徳

著者冊數

陸上競技聯盟 一  
石井 勇義 一  
佐藤良一郎 一  
人見 絹枝 一  
佐々木 邦 一  
松本亦太郎 一  
小林 鶯里 一  
千葉 龜雄 一  
内藤 堯 一  
櫻井 秀 一  
櫻井 秀 一  
菱山 衛平 一  
加藤熊一郎 一  
大谷 光瑞 一  
宮下 正美 一  
宮下 正美 一  
佐々木信綱 一  
新坂 紫冊 一  
本間 久雄 一  
田制佐重澤 一  
九條武子夫人書簡集  
偉人 群像  
暴風雨の薔薇  
國民思想叢書  
通俗教育叢書古今名婦錄  
同 古今孝子錄  
秩父宮殿下と勢津子姫  
凡人非凡人  
人乃木將軍  
學校園の設計と造園法  
フロイド精神分析大系  
法 然  
海に立つ虹  
人及び人の力  
少年石田三成と關ヶ原役  
近世文藝志  
高等教育音樂通論  
標準學藝會  
國史讀本、吉野朝時代記  
世界名畫物語  
遺稿隨感錄

佐々木信綱

新渡戸稻造 一  
吉屋 信子 一  
加藤熊一郎 一  
通俗教育普及會 一  
同 一  
同 一  
澤田 謙 一  
櫻井 忠温 一  
上原 敏二 一  
安田徳太郎 一  
中里 介山 一  
加藤 武雄 一  
永井 潜 一  
春藤與一郎 一  
笹川 種郎 一  
眞篠 俊雄 一  
内海繁太郎 一  
春藤與市郎 一  
山田 邦祐 一  
濱口富士子 一

運動部だより

陸上競技女子レコード表 (昭和六年度)

種目	場所	世界レコード	日本レコード	縣體レコード	西部女子中體聯盟	本校
500米	米	6秒4 メゼリコフ(ソ)	6秒4 人見(大毎)	7秒	7秒4 長山(萩)	7秒4 長山木下藤井
1000米	米	12秒2 人見(日本)	12秒2 人見(大毎)	13秒2	14秒4 岩根(阿部)	14秒3 矢次(萩)
2000米	米	24秒7 人見(日本)	24秒7 人見(大毎)	28秒4	4米34 力石(山口)	4米45 木下(萩)
走幅跳	米	6米07 人見(日本)	6米07 人見(大毎)	4米757		4米45 木下

打倒日本  
ナボレオン  
デンマーク體操  
英譯日本小學讀本、エフェル  
曉の子  
代數學の數系統  
英語唱歌集  
豫約書  
括弧内は全冊數、其の下は既着の分  
佛教信仰實話集 (二〇)

保々 隆矣 一  
鶴見 祐輔 一  
柳田 亨 一  
南石福二郎 一  
細貝 貞子 一  
鍋島信太郎 一  
外山 國彦 一  
世界地理風俗大系(一八)  
明治大正文學全集(五四)  
現代醫學大辭典(二六)  
國文學講座(二五)  
世界家庭文學全集(一五)  
月刊雜誌  
子供の科學。少女畫報。少女俱樂部。ABCウイクリ。  
心の花。一年の英語。二年の英語。家事研究。國際寫  
眞情報。乃木式。精神。朝日スポーツ。歌。アララギ。  
ホトトギス。パンフレット。

三冊  
六冊  
一冊  
五冊  
一冊

種別	身長	体重	胸圍
三段跳	11米625 人見(日本) 1米608	9米81	9米50 力石(山口) 1米27
走高走	11米625 人見(大阪) 1米46	1米40	永久(山口) 21米35
球投	廣橋(羽咋女)	24米75	岩本(山口)
			9米98 木下(歳) 1米20A
			藤原(山口) 18米21
			吉本(F脚)
			9米98 木下 1米25
			F 玉井 楊井 23米 村

身體検査に於いて

昭和六年四月實施の本校生徒身體検査の内身長、體重、胸圍を文部省統計の全國女子の身體検査統計と比較すれば下記の如し。

(文部省統計は明治三十三年より昭和四年に至るまでの平均値、大正十年度を省く)

年齢	種別	身長	体重	胸圍
13歳	文部省本校 107人	136.2 cm (140.4)	31.6kg (33.6)	69.0 cm (64.9)
14歳	文部省本校 91	141.4 (146.8)	36.1 (39.9)	68.3 (70.2)
15歳	文部省本校 97	146.0 (147.9)	40.5 (44.2)	71.7 (75.5)
16歳	文部省本校 103	148.3 (150.7)	43.8 (44.3)	74.2 (74.3)
17歳	文部省本校 22	149.2 (148.9)	46.0 (45.2)	75.9 (75.0)
18歳	文部省本校 3	149.5 (147.2)	47.5 (48.9)	77.2 (75.7)

西部女子中等學校

體育大會に於いて

三段跳に木下タカ子嬢縣レコードを破り、下學年陸上競技に優勝。  
總得點八點を獲得して第二位。  
庭球は第三位。  
籃球及上學年陸上競技は第四位。

待ちに待ちたる西部女子中等學校體育聯盟主催の第一回體育大會は来た。

一九三一年九月二十一日、絶好のコンディションに恵まれ、體育大會は長府グラウンドに於て華々しく舉行された。

此の日觀覽席より送る數千の拍手、感激と母校の名譽を双肩になつて立て、八百の選手の躍動は、終日感激の大ドラマであつた。

大會の前日、本校選手は筒井校長先生より御懇篤なる御教訓を給はり、土屋先生よりの大會出場上の諸注意を守り、土屋、繩田、七俣、藤田の諸先生の元に引率されて母校を出發し、必勝を期して長府グラウンドへ急いだ。

やがて軽いオウミングアップをしつゝ、競技場を一巡し、直ちに長府高女寄宿舎へ旅装を解き一夜を夢の間に明した。

明くれば二十二日、初秋の冷風を身にうけ、雲の片影なく、微風と薄陽に包まれ、絶好のコンディションであつた。

燃えるが如き眞紅の優勝旗を始め、七個の大小トロフィー、多くの賞品は會場をして一層緊張せしめ、若き選手の血を湧かしめた。

休暇以來日曜なしで猛練習を続けた本校四〇の各部選手は、血湧き、肉躍り、敵を呑むの勢である。

陸上競技、排球、籃球は長府グラウンドに於て、庭球は長府高女コートに於て、何れも午前九時より六時に至る終日、我々選手は奮闘を續け、日頃鍛へし、フライング、スプリットとフアーブレのスポーツ精神を發揮し、遂に陸上競技(下學年)は断然他校選手を壓迫して優勝し、庭球は第三位、籃球及陸上競技(上學年)は第四位にして、總得點に於て第二位の好成績を得。

尙當日特筆すべきは下學年の三段跳決勝に於て一年木下タカ子嬢が九米九八を跳び、縣レコード九米九一を破り、一躍縣下に於ける三段跳のチャンパーンとなりしこ

ここである。次に本校選手芳名を挙げれば、

陸上競技	庭球	籃球
四年	四年	四年
津森 文代	中村ヒサエ	寺本 文子
山本 武子	神野 博江	木下タカ子
長山 菊代	藤田みすき	小野村壽子
並川 文江	岡田 元子(補)堀	並川 文江
小茅マズ子	箭島 雪子	小野村壽子
長尾 光子(補)栢木喜美子	初江	長尾 光子(補)栢木喜美子
矢次 文子		矢次 文子
藤井 壽子		藤井 壽子
大橋キヨ子 室谷 豊乃		
伊藤 敏子(補)木村 俊子		
三四年 (河野壽恵子 實田多美代)		

陸上競技

五十米(下學年) 第一豫選

五十米(上學年) 第一豫選

五十米(上學年)	五十米(下學年)
A組	A組
1、齋藤 6 <sup>6</sup> / <sub>10</sub> 秒 山口	1、岡野 9 <sup>9</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關
2、長尾 萩	2、厨川 7 <sup>7</sup> / <sub>10</sub> 秒 山口
B組	B組
1、吉田 9 <sup>9</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關	1、磯部 8 <sup>8</sup> / <sub>10</sub> 秒 宇部
2、佐藤 阿部	2、増矢 阿部
C組	C組
1、藤本 8F秒 下關	1、保積 6 <sup>6</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關
2、吉兼 山口	2、西岡 厚狭
D組	D組
1、藤井 5 <sup>5</sup> / <sub>10</sub> 秒 萩	1、長山 6 <sup>6</sup> / <sub>10</sub> 秒 萩
2、山本 阿部	2、岩根 阿部
長尾、藤井兩名出場して全部入賞パス。	

五十米(上學年)	五十米(下學年)
A組	A組
1、松 8 <sup>8</sup> / <sub>10</sub> 秒 阿部	1、原田 2 <sup>2</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關
2、松田 16 <sup>16</sup> / <sub>10</sub> 秒 阿部	2、林 16 <sup>16</sup> / <sub>10</sub> 秒 長府
B組	B組
1、森田 1 <sup>1</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關	1、島屋 1 <sup>1</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關
2、弘中 長府	2、勝鳥 16 <sup>16</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關
C組	C組
1、梅田 16F秒 阿部	1、山村 7 <sup>7</sup> / <sub>10</sub> 秒 萩
	2、吉永 15 <sup>15</sup> / <sub>10</sub> 秒 長府
	D組
	1、吉元 5 <sup>5</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關
	2、田子 15 <sup>15</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關
	E組
	1、向山 3 <sup>3</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關
	2、熊谷 16 <sup>16</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關

百(上學年)	百(下學年)
A組	A組
1、徳万 4 <sup>4</sup> / <sub>10</sub> 秒 山口	1、並川 15F秒 萩
2、村井 15 <sup>15</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關	2、岩尾 山口
B組	B組
1、長山 6 <sup>6</sup> / <sub>10</sub> 秒 萩	1、吉村 1 <sup>1</sup> / <sub>10</sub> 秒 萩
2、岩根 阿部	2、吉田 15 <sup>15</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關
C組	C組
1、岡野 2 <sup>2</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關	1、矢次 4 <sup>4</sup> / <sub>10</sub> 秒 萩
2、百衣 3 <sup>3</sup> / <sub>10</sub> 秒 阿部	2、佐々木 厚狭
	D組
	1、藤本 6 <sup>6</sup> / <sub>10</sub> 秒 下關
	2、佐藤 阿部
	並川、矢次兩名出場、二人共樂に入賞パス。



四百米リレー(下學年)

第一豫選

A組 1、萩チーム

(一分一秒六)

2、田部チーム

B組 1、下關チーム

(一分二秒三)

C組 1、山口チーム (一分〇秒三)

2、阿部チーム

四百米リレー(上學年)

第一豫選

A組 1、長府チーム

(一分三秒二)

2、香川チーム

B組 1、山口チーム

(一分〇秒二)

C組 1、宇部チーム (一分二秒)

2、厚狹チーム

五十米(下學年)

2、弘中 長府 2、松田 阿部

百米(下學年)

第二豫選

A組

1、吉村 8<sup>10</sup>秒 田部

2、並川 14<sup>10</sup>秒 萩

並川、矢次決勝戦へ残る。

B組

1、矢次 14<sup>F</sup>秒 萩

2、佐々木 厚狹

五十米決勝(下學年)

1、齋藤 4<sup>10</sup>秒 山口

2、藤井 萩

3、長尾 萩

下關1

スタート揃ひ、二十米邊より齋藤、藤井僅かにトップを切り、長尾、半米後れ、齋藤、藤井殆んど同着、其のまゝゴールへ入る。

五十米決勝(上學年)

1、長山 7<sup>10</sup>秒 萩

2、岩根 阿部

第二豫選

A組

1、齋藤 6<sup>10</sup>秒 山口

2、長尾 萩

長尾、藤井バス決勝戦へ残る。

B組

1、藤井 5<sup>10</sup>秒 萩

2、藤本 下關

五十米(上學年)

A組

1、長山 5<sup>10</sup>秒 萩

2、岩根 阿部

B組

1、保積 5<sup>10</sup>秒 下關

2、西岡 厚狹

オープン百米(下學年)

第二豫選

A組

1、山村 9<sup>10</sup>秒 萩

2、田子 14<sup>10</sup>秒 下關

B組

1、鳥屋 5<sup>10</sup>秒 下關

2、原田 15<sup>10</sup>秒 下關

C組

1、森田 8<sup>10</sup>秒 下關

D組

1、梅田 15<sup>F</sup>秒 阿部

3、保積 下關

4、西岡 厚狹

得點 萩4、阿部3、下關2、厚狹1  
本校長山スタート好く、二十米達からピッチをかけ、半米の差でゴールへ入る。

百米決勝(下學年)

1、矢次 3<sup>10</sup>秒 萩

2、吉村 14<sup>10</sup>秒 田部

3、並川 萩

4、佐々木 厚狹

得點 萩6、田部3、厚狹1

吉村スタート好く、五十米達までトップにあつたが矢次、並川力走し、矢次猛烈に吉村へせまり、八十米あたりで之を抜き、一米の差でゴールへ入る。

オープン百米(下學年)

1、山村 8<sup>10</sup>秒 萩

2、島屋 14<sup>10</sup>秒 下關

3、田子 下關

4、向山 下關

山村断然トップを切り、十米の差でゴールへ入る。  
 四百米リレー(下學年)  
 第二豫選

- A組  
 1、下關チーム(一分三秒) 1、萩チーム(五十九秒六)  
 2、厚狭チーム 2、山口チーム
- B組  
 1、萩チーム(五九秒二)  
 2、山口チーム

四百米リレー決勝(下學年)  
 1、萩チーム(五九秒二)  
 2、山口チーム  
 3、下關チーム  
 4、田部チーム

得點 萩4、山口3、下關2、田部1

本校藤井スタート好く、山口と第一コーナーを並んで走り、タツチよく、並川二米位引きはなし、矢次三米を引きはなす。ラストの木下十二米の差でゴールへ入る。

走幅跳決勝(下學年)  
 1、木下(四米四五)(萩)

2、吉村(四米二二)(田部)  
 3、河野(四米一五)(山口)  
 4、吉兼(山口)

得點 萩4、田部3、山口3  
 木下縣レコードを破ると思つて期待して居たがベストに入つてかたくなり、第五回目より次回の競技に出場のため棄權す。

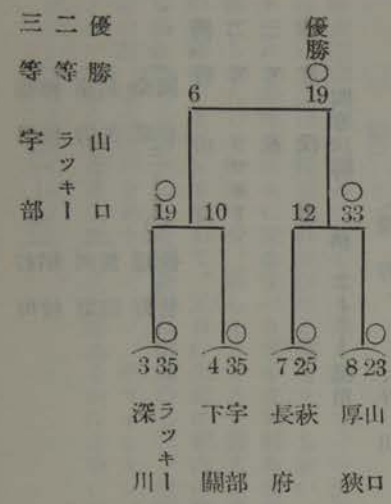
- 籃球投決勝(下學年)  
 1、吉本(十八米二二)(下關)  
 2、寺本(十八米一八)(萩)  
 3、永山(十七米八二)(厚狭)  
 4、岡本(山口)
- 得點 下關4、萩3、厚狭2、山口1

三段跳決勝(下學年)  
 1、木下(九米九八)(萩)  
 2、藤本(九米〇二)(下關)  
 3、竹田(八米九六)(山口)  
 4、矢次(萩)

矢次トラツク出場のためベストを棄權す。木下三回目に縣レコードを破る。ベストに入るや固くなつて六回

目は棄權す。  
 陸上競技順位

- △上學年  
 一等 山口(三十四點) 二等 阿部(十二點)  
 三等 下關(十二點) 四等 萩(八點)
- △下學年  
 一等 萩(二十七點) 二等 山口(十九點)  
 三等 下關(十點) 四等 厚狭(七點)



優勝 山口  
 二等 ラッキ  
 三等 字部

四等 萩  
 三四等決勝 ○813 萩字部

庭球

- 第一回戰 萩 2 --- 1 長府
- 第二回戰 萩 2 --- 1 宇部
- 第三回戰 萩 2 --- 1 宇部
- 準決勝 ラッキ 2 --- 1 萩
- 河野 三 --- 二 甲斐原  
 佐野 二 --- 三 國山  
 石川 三 --- 二 竹田  
 野田 三 --- 一 西野  
 野田 三 --- 一 泉村  
 野田 三 --- 一 泉村

優勝	藤田 二―三	石村
一等	原田 三―二	河野
二等	桑原 三―〇	嶺野
三等	山口	
四等	深川	

三四等決勝	萩	二―一	深川
-------	---	-----	----

(嶺)	佐野 一―三	好中	尾川
(河)	賀野 三―一	上坂	田本
(石)	稻川 三―一	野村	山

各校總得點表	山部 四〇	宇香 〇〇	狭厚 〇〇	田部 〇〇	長府 〇〇	阿部 〇〇	關下 〇〇	梅光 〇〇	深川 〇〇	萩 〇〇
--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------

籃球	四	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一
下學年	三	〇	〇	〇	一	〇	一	二	〇	〇
陸上競技	四	〇	〇	〇	〇	三	二	〇	〇	一
陸上競技	四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一
合計	一九	五	二	〇	一	一	四	四	六	一八

第十五回體育大會の記

【一】

(一)、十月十一日は我等の體育大會よ。  
會長席き、來賓席も、終日餅づめ満員だ。  
綺麗に列んだ胡蝶さん、エログロ樂隊貫き去りて、  
清き正しき音楽に、クラスの秩序を正しませう。  
(二)、今日は楽しい我等の體育大會よ。  
黄、青、緑の三色に、桃の花飾こぎませて、  
四つの鉢巻巻きしめて、五〇〇の乙女が一齊に、  
ラチオの體操やるときは、無言の世界と言ひませう。  
(三)、十月十一日は我等の體育大會よ、  
日頃鍛へし此の身體、肱の力試すには、  
強き信念打込んで、駈けて轉んで、又起きて、  
倒れるまでも目的を達する心が必要でせう。

(四)、今日は楽しい我等の體育大會よ、  
一年二年三年と、最後の四年の四組が、終日グラフの  
上げ下に、興味の一葉集まった。努力の腕巡り來て、  
ラストのリレーに躍り立ち、遂に二年が勝ちました。  
(五)、十月十一日は我等の體育大會よ、  
おしるこ、おすし、果物と、白い乙女のエアブロン、  
一夜作りの食堂に、疲れた身體を引ずりて、  
楽しく一日送りませう。

(T生)

【二】	本四	荒尾	綾江
-----	----	----	----

昨夜燦然と輝いてゐた星の光も消え失せて、今やたけ  
なはの秋の空は、暗雲亂れ飛び吹く風ももうすら寒い、十  
月十一日、我等の永久に記念すべき第十五回體育大會は  
開催せられた。七時四十分、折しもとゞろく煙火に學年  
別の色鉢巻をきり、と締め、五百の生徒は純白の運動  
服に溢れ出づる力を包んで運動場に勢揃ひした。敬禮、  
開會の辭、東方遙拜を終り、ピアノ、ヴァイオリン、ク  
ラリネット等の吹奏裡に君が代を聲高らかに合唱して開  
會式はいとも莊嚴に進行した。

八時、いよゝ演技は開始された。第一回五十米、今  
年は殆んどすべてが學年對抗で、五十米の個人競争も得  
點に入る事となつてゐる。全級が選手である。協力と各  
人の努力とが全級の運命を支配する。そして等級に入つ  
た者は、例年の通り記録簿で記録してもらひ、賞品係か  
ら賞品券を頂く。賞品券は一等青、二等赤、三等黄と色  
別けしてあり、後日賞品と交換して頂く事となつてゐる  
又記録係は直ちに×年×等と採點係に通知する。すると  
採點係は學年別に色別けした旗を竿頭高く掲げて一般に  
知らせるし、又一方では學年別に點數を記入してこれを  
グラフで表し、得點の経過が一目で分る様にせられてゐ  
る。始めから二年と三年は優勢だが、一年と四年は一向  
にふるはない。しかし總ての係の緊張と協力と迅速なる  
行動とにより、プログラムは超スピードをもつてめくら  
れて行く。  
五回のセンターボールは始めての試らしいが、一年先  
の澄潮とした元氣がこれを難なく片付けてしまつた。  
六回のパン食ひ競争では、ぶら／＼するパンを見事口  
に入れたもの、なか／＼入らないといつて口惜がるもの  
決勝點に入つて居るもの、實に微笑ましかつた。  
三百米は三年四年の棄權により、二年の三人と、一年

の二人都合五人だけだった。こんな競技にも少し出場して頂きたい様に思つた。殊に上級の方に。八回はメチンボール、一直線に揃うたピラミッド形の足の下をボールは氣持ちよく轉がつて二年生の勝となつた。十二回の猿廻しリレーと十六回の子守リレーは共に一方が目隠しをするので、突き當つて轉ぶかど前へば方向違ひをして、どんでもない方に行く。引き戻されたり、一つ所をぐる／＼廻つたり、目明きは泣き出しさうな顔である。十七回は職員對選手の排球、次が紅白のリボンを胡蝶と瓢す幼稚園兒の可愛い遊戯だった。文字の表象その儘の天真爛漫たる小さき天使、幸福に輝く彼等の顔を見ると誰しも今一度あの時代に立ちかへりたいと願はずには居られない。優勝旗返還、尋常科は椿東校、高等科は西市校であつたが西市は未だ来て居なかつた。四年の直線のダンス、終ると小學校リレー豫選が開始さる。一校の運命をたゞこの一戦にかけた彼等が悲壯なる顔、飽くまでも自重した動作、底深い何ものにか觸れた様な氣がしてその眞剣さに頭が下つた。それが済むと中食と落ち付く。

〔午後〕

あれ程陰鬱だった空も、いつしか空裂けて秋の降る様な日光はまぶしい程輝々と我等の頭上に降り注ぐ。観覧

も、軽快な音楽も、一年生らしくごごもしくりと調和して居た。小學校リレーの決勝もついた。深川校が尋常科も高等科も優勝した。千三百米リレーも四年の選手でテープが切られた。戦は終つたのだ。

卒業生の籠玉、來賓競争や先生方の樽轉しは、この體育會の空氣にふれて若かりしその昔に返つた様に、哄笑しつゝ僅かの勝負に熱中された。生徒は生徒で師弟の垣を超越して、思ひ／＼に聲限り應援につとめる。

時恰も四時、すべてが終了した。見よ！戦の後を、二年が断然一位で、三年、四年、一年の順位である。一同集合、校長先生の御訓示、各々の顔はほのかな疲勞に、愉快だった感激を交へて満足さうに輝いてゐる。負けた者も勝つたものも奮闘したもののみ味ふ朗かさで校歌を高く／＼合唱した。涙ぐむ様な淋しさが紙屑の白さに漂ひ始めた。

閉會の辭、萬歳三唱、何人も聴け、若き血に燃ゆる我等乙女の嬉び叫ぶ聲を……。ドーン、上つた／＼煙火が中空に響け、萬里の外までも永久に消ゆる事なく響け。

【三】プログラム

順番 演 技 名 出場者 回数 豫定時間  
1 保 健 體 操 全校生徒 一 午前八、〇〇

20	排 球	職員對選手	一	六	一一、〇〇
19	小學校リレー第一豫選	小學校選手	一	六	一一、〇〇
18	君が代 マーチ	四年生	一	八	一〇、三〇
17	優勝旗返還 (高)西市校	小學校選手 (尋)椿東校	一	八	一〇、〇〇
16	子守リレー	學年對抗	一	一	九、三〇
15	足切リレー	學年對抗	一	一	九、〇〇
14	五 十 米	學年對抗	一	一	九、〇〇
13	猿廻し	リレー 學年對抗	一	一	九、三〇
12	百 五 十 米	學年對抗	一	三	九、〇〇
11	幼 稚 園	學年對抗	一	一	九、〇〇
10	蛇行リレー	學年對抗	一	一	九、〇〇
9	三 百 米	學年對抗	一	一	九、〇〇
8	メジンボール	學年對抗	一	一	九、〇〇
7	パン食ひ競争	二年生	一	五	八、三〇
6	二人三脚	學年對抗	一	五	八、三〇
5	センターボール	一年生有志	一	一	八、三〇
4	暗 號 競 争	三年生	一	五	八、三〇
3	二人三脚	學年對抗	一	五	八、三〇
2	五 十 米	學年對抗	一	一〇	八、三〇

席も人を以て埋つてしまつた。整列すると同時に起つた流暢な軽快な樂の音に合せて全校生徒の行進が始まる。動くものは交錯する手と足とそれのみ、肅々と全く入場式の様な涙ぐましいばかりの莊嚴で終り、民衆體操が始まる。百足競争は二年と四年が群を抜いてゐた。決勝で僅かの差で四年が勝つた。

廿三回小學校リレー第二豫選、次は二年生の複雑美的な輝しいダンスだった。ドリブルリレーはさすが練習の功により上級が良かった。次が問題だった社會競争だった。四年、實科全部出場で、スタートしてより二十米前方のボール紙に、「××先生を連れていらつしやい」。

「観客の中折帽を借りて來なさい」。「四歳の男子を連れていらつしやい」。等々、拾ひあげて先づ當惑するもの、可笑しさを隠しつゝ、會長席へ校長先生を呼びに行くと、運動場へ連れ出された子供が場馴れないで泣き出さしてしまつて立往生する人等、笑聲の爆發で一しきり體育大會の華やかさが漂ふ。しんみりとした落ち付き、一分の隙もない三年生のダンス。日は漸く西に傾きプログラムは終りに近くなる。一年生のカマリヤンスカイヤーは百五十人なので、簡単な動作が明暗をはつきりさせ、すつきりとした無邪氣さがよかつた。鉢巻の桃色

21	民衆體操(其ノ二)	全校生徒	午後〇、三〇
22	百足リレー	學年對抗	一
23	小學校リレー第二豫選	小學校選手	一、〇〇
24	ダンス(二年自作)	二年生	一
25	ドリブルリレー	學年對抗	一
26	社會競爭	四年實二	九
27	ダンス(三年自作)	三年生	一
28	障礙物リレー	學年對抗	一
29	一人一脚リレー	學年對抗	一
30	カマリヤンスカイヤー	一年生	一
31	五十米	學年對抗	四
32	民衆體操(其二)	四年生	一
33	百五十米	學年對抗	四
34	小學校リレー決勝	小學校選手	二
35	千三百米リレー	學年對抗	一
36	卒業生競爭		三、〇〇
37	來賓競爭		三、〇〇
38	職員轉リレー		三、〇〇
39	閉會式		四、〇〇
40	解散		四、〇〇

【四】當日一等入賞者

(1)、五十米(第一回)			
一組	二年	小野村	壽子(七、九秒)
二組	二年	白石	幸子(八、一秒)
三組	二年	柏木	喜美子(八、一秒)
四組	二年	岩城	文子(八、八秒)
五組	二年	山本	愛江(八、四秒)
六組	二年	長尾	光子(八、〇秒)
七組	三年	楊井	竹子(八、一秒)
八組	三年	阿座上	勝子(八、一秒)
九組	二年	小茅	マス子(七、九秒)
十組	三年	水津	靜江(八、二秒)
(2)、暗號競爭(三年)			
一組	二年	吉田	早苗子
二組	一年	尾崎	横見
三組	一年	光井	渡邊
四組	二年	島屋	松本
(3)、二人三脚			
一組	二年	吉田	早苗子
二組	一年	矢次	文子(二七、〇秒)
三組	一年	伊藤	俊子(二八、五秒)
(9)、猿廻しリレー			
一組	四年	中村	ヒサエ(二三、七四米)
(10)、籃球投			
一組	四年	富田	敏子(八、四秒)
二組	三年	木村	喜美子(八、五秒)
三組	三年	尾崎	富美(八、二秒)
四組	四年	菊屋	正子(七、九秒)
五組	一年	木下	タカ子(七、七秒)
六組	三年	磯野	千尋子(七、八秒)
七組	四年	金子	モトエ(八、四秒)
八組	二年	並川	文江(七、七秒)
(12)、足切リレー			
一組	二年	岡村	公子
二組	二年	長山	菊代
三組	三年	長山	菊代
四組	四年、實二	岡村	公子
(13)、子守リレー			
一組	三年	木村	喜美子(三〇、七秒)
二組	二年	並川	文江(五四、五秒)
三組	二年	上田	民子
四組	二年	藤田	光子
五組	二年	岩城	文子
六組	二年	正木	陽子
七組	二年	並川	文江(五四、五秒)
八組	二年	並川	文江(五四、五秒)
九組	二年	並川	文江(五四、五秒)
十組	二年	並川	文江(五四、五秒)
十一組	二年	並川	文江(五四、五秒)
十二組	二年	並川	文江(五四、五秒)
十三組	二年	並川	文江(五四、五秒)
十四組	二年	並川	文江(五四、五秒)
十五組	二年	並川	文江(五四、五秒)
十六組	二年	並川	文江(五四、五秒)
十七組	二年	並川	文江(五四、五秒)
十八組	二年	並川	文江(五四、五秒)
十九組	二年	並川	文江(五四、五秒)
二十組	二年	並川	文江(五四、五秒)

(14)、一人一脚リレー

四、賞二年

(15)、五十米(第三回)

- 一組 一年 村木幸子(七、六秒)
- 二組 一年 矢次文子(七、六秒)
- 三組 一年 篠原トシ子(七、九秒)
- 四組 二年 大橋タカ子(八、五秒)
- 五組 二年 山村富士子(七、八秒)
- 六組 三年 長山菊代(七、五秒)
- 七組 二年 岡村公子(八、三秒)
- 八組 三年 小田多都子(八、〇秒)

(16)、百五十米(第二回)

- 一組 二年 小茅マズ子(二七、九秒)
- 二組 四年 津森文代(二九、〇秒)
- 三組 四年 中村ヒサエ(三〇、五秒)
- 四組 三年 楊井竹子(二八、〇秒)

(17)、一三〇〇リレー

一年

(18)、百足競争

四年

(19)、ドリダグリレー

定するに至る。リレーに於て一年トップを切り約一米リードするも、全校第四コーナーにてインターフェアーし一年おくれ再競技をなす。全校ラストにて僅か胸一つにて優勝す。

排球及籃球

研究科、梅組、實科を合せて梅組系統に、菊組一年は菊組系統とす。他に職員組加入し、合せて三系統にてゲームを行ふ。

排球は遂に菊組系統優勝、籃球は職員組優勝す。

職員對生徒のゲーム、生徒組河野、賀田組最後までよく奮闘するも遂に原田、七依先生組にたふされ、職員組優勝す。

### 第一回戦



(20)、障碍物

- 一組 四年 山縣チセ
- 二組 二年 小茅マズ子
- 三組 三年 木村代志枝
- 四組 二年 大橋タカ子
- 五組 二年 山村富士子

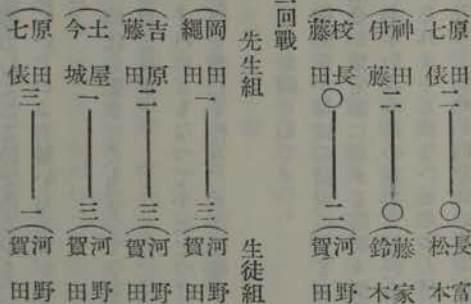
### 秋季競技大會

十一月三日の菊薫る明治節の佳辰に校内秋季競技大會を舉行す。式後(九時一〇分)運動開始。各部選手何れも火の出る様な接戦を演じ、午後零時十分豫定のプログラムにより盛會裡に無事終了す。

各部の戦況を述べれば、陸上競技

陸上競技方法は第一學期同様、一年對全校の第二回の経績戦である。何れも縣體共の他の大會に於て活躍した選手揃ひのレース丈あつて終始接戦を演じ、遂に全校三十六點二分一、一年三十八點二分一のスコア、ポイントにて大接戦を演じ、最後のリレーにて優勝を決す。

### 第二回戦



### 第十八回同窓會總會の記

菊花笑む十月廿五日(日曜)、我が第十八回同窓會總會は母校講堂に於て開催せられた。幸に好天氣で出席者は百三十名の多數であつた。各自多様な身にもかはらず、母校のそれなればこそ何はあいてもお出で下さるのが何より喜ばしい。會つて同じクラスの者が開會前の短時間を此處彼處に

集ひ、めい／＼、楽しかつた昔を追想し思ひ出すまゝを語り合つた。

どうかして同窓會をより以上盛んにしたいといふ校長先生を始め諸先生方のなみ／＼ならぬ御骨折によつて、今年には餘興に新しい試みとして教育映畫をお見せ下さる事になつた。

午前十一時開會、午前中のプログラムは左の通りである。

- 一、會員 入場
- 二、會長 入場
- 三、開會 の 辭
- 四、君ヶ代合唱
- 五、會務 報告
- 六、會長 訓辭
- 七、校歌 合唱
- 八、閉會 の 辭
- 九、會長以下順次退場

#### 會務報告

同窓會員は現在千八百七十七名で、その中卒業の際、町に本籍のあつた者が千百三十名、現在在に居る者が七百五十名。その外基本金の事や、バザー及びその純益金

からどうしようかと迷ふ人に大いに志願をすゝめる事等であつた。そして最後に、来る三十日より始まる女子成人講座についてのお話があつた。

閉會後直に一同南園館中門に行き、そこで記念寫眞を撮影した。

正午食堂に行き、嬉しい晝食をする。こんな大勢でしかも懐しいお友達と御一緒なのでその美味しかつた事。

午後一時から餘興の活動寫眞が始まる。

映畫の梗概は左の如くである。

- 一、教訓映畫 奥様ごらん、二卷 五二六米  
御主人を下僕と心得て居る奥様と、この奥様を限りなく愛して居る御主人があつた。今日しも奥様が無理難題に御主人を困らしてゐた時、近所のヒステリーの奥様がそれを穿き違へて問題を起し、そして遇然の機會で我儘奥様が今までの自分の非行を恥ぢ、改心すると云ふ素晴らしいナンセンス喜劇。
- 二、教材映畫 大氷海、一巻 三〇七米  
砕氷船に便乗し、氷點下三十度の嚴寒の北海に出で砕氷作業の實況を併せて樺太内地に於ける土人の生活等を撮影した實寫もの。
- 三、漫畫 ちよん切れ蛇、一巻 二九四米

は窮民救助のため、寄附された事、同窓會には各自誘ひ合して多數出席する事等のお話があつた。

#### 會長訓辭

どうかして同窓會が盛んになるやうに、又多數の來會者がある様に學校では種々考へた揚句、本年は何か目新しいものをと思つて趣味と實益とを兼ね備へた映畫をする事になり、わざ／＼縣教育會の方に來ていたゞいたりして色々盡力してゐるのであるから、その苦心は十分に察して欲しいといふ有難いお言葉があり、新らしく發展した事に、

(1)、時代の要求にともなつて今年より實科を廢し、本科を増員した事。

(2)、それにともなつて不足をつげて來た教室、並に雨天體操場を新しく作り、且運動場を廣める事等のお話があり、

更に會長のお願として

(1)、同窓生が母校の發展につとめること。(例へば會の寄附金が豫定額に達する迄種々便宜を計る等)

(2)、本年から本科の募集人員が多くなつたが、若し應募者がそれよりも少ないと募集人員を少くしなければならなくなり、折角の同窓會の事業が蹶跌する事になる

裏庭の片隅の小石をもち上げて、一匹の鯛の切れた烏蛇が穴から這出す。鯛の切目からひよつこり飛出した蛙が、蛇の鯛の切れる事に同情した事から大騒ぎが始まつて、最後に蛇は自身の穴陥は矢張り自分で救はねばならぬことを知つたといふ可笑の内に教へをこめた面白いもの。

四、ザンバ 一巻

東アフリカ探險の實寫もの。珍獸、奇獸、獅子狩等

五、輝く人生

社會、家庭教訓劇、椎名龍徳氏原作

活動の間に三年生のダンス及び一年生の獨唱があつたダンスは幸ひに晴空を利用し、五色の照明を行つて大へん綺麗だつた。

最後の輝く人生は一貧困者の涙ぐましい家庭を如實にうつし出したもので、その母の子を思ふ心の偉大さには見る人をしてそぞろに熱い涙を絞らしめました。

先の奥様ごらんどいひ、後の輝く人生といひ、共に私達にある貴い何ものかを放へてくれました。

思へば愉快な又何ものにもかへ難い貴い一日でした。久しく會ひ得なかつた者達が同じなつかしの學び舎に集ひ、貴い一日を愉快に又有益に過ごすことは本當に意義

深いものではないでせうか。  
願はくは

同窓會が今後益々盛會であるやうに。

(田北三年子記)

### 南園會東京支部發會式に就て

東京府下荻窪二ノ一〇三  
大正四年卒業 小笠原嘉子

かねての私共の願ひが叶ひ、久原令夫人、前田豊作氏、厚東令夫人、馬淵先生御列席のもとに會員二十七名參集致し美しい菊花の園で南園會東京支部發會式を擧げることが出来ました、皆、喜びと感謝でいっぱいです。同じ學びの園より生れ出でし私共、この地に於て一致協力骨肉の情誼を以て秋の馨り床しく咲かむことを念じてをります。

かつて五六年以前にこのことを計畫し、馬淵先生のお宅に十餘名の者が集ひをなし、引きつゞき之を守り立て、行く筈なりしも、事故のため中止し残念に思つて居りましたのが、又本年九月頃より是非々々支部會を開きた

れ、つゞいて順序書により座長選舉に移る。座長は司會者に一任すとの動議出でしため繼氏は馬淵先生を推薦、これ同一賛成可決。馬淵先生座長席に着席。

座長は日本來賓として御列席の前田、厚東兩氏を只今より東京支部の名譽會員に御推薦申し度しと謀れば満場舉手をもつて賛成、御二方とも快く受諾せらる。次いで次の項目に移る。

(一)支部會則に就て 支部會則を各位に配り小笠原氏之を説明す。

(別紙規則書)第一條より第八條の内第七條會費一ケ年金五拾錢とすを金壹圓に訂正承諾を了へ。協議事項(A)本會事業に就ては講習、講演、會員相互の親睦をはかる爲め子供等をつれ遠足も可との希望も出す。(B)母校との連絡、(C)次會打合、(D)會の維持方法等總べて理事に一任す。

(二)役員選舉に就て 支部長を馬淵先生に願ひたしと中村氏勸議、米澤氏の賛成ありて満場一致拍手をもつて推薦、受諾さる。尙理事は各年度より一名づゝ選出、その中より書記會計をあげることもなりしも、これは支部長に一任のこととなり午前の部を終る。

晝食はお手製の萩壽司の御馳走をうけて楽しく語り合

いどの切なる希望が會員の内に起き、先づ第三回より第十回までの方々十名の者が新宿中村屋に於て下相談をなし、いよいよ十一月に舉行の計劃をしが在京者九十餘名の方々に案内状を出しました。幸ひ前田豊作氏厚東磯子氏母堂仙子氏等の温かき御盡力により總てのことを滞りなく運んでまいることができました。

### 發會式の記

昭和六年十一月十三日、今日は支部の發會式、朝まだき喜びを胸にたゞへて十條驛に下車すれば、最早や準備されし前田邸に至る道しるべの建札が所々に立つ。かねて菊に御造詣深き御主人の御丹精なる菊花は今や眞盛りにて、會場はその花の中に設けられ皆様を待ちうける。朱のボンボリをもちこちに一人の風情を添ふ。輝かしき笑を湛えて受付より卒業年度姓名記入の白リボンを胸に皆様ボツ／＼入場。

定刻十時半になりたれば司會者繼文字子氏開會を宣す。馬淵先生開會の辭を述べられ、後一同校歌を合唱す。なつかしき南園の香會場に満つ。

「トウケウシブノハツカイナシユクス、ハギコウジョドウツウカイチヨウ」の祝電の披露にて會場いよ／＼活氣づく。前田、厚東兩氏満腔の祝意を發會式の上に表さ

ふ。

一時過ぎ久原令夫人を迎へて一同庭園にて記念撮影の後、午後の部に移る。司會者肝付澄江氏。

故久原文子刀自追悼會  
會場に故刀自の寫眞掲載、天上に凱旋されし刀自の殘されしお徳をしのびて、小笠原嘉子氏追悼の辭を申上ぐれば、久原夫人は立ちて御挨拶の中に、本日ははからずも亡き母の命日にて、この集ひを母は如何ばかり喜びをることならむと申される。

終りて一同茶菓をいたゞきつゝ、順次に、學校卒業以來の自己紹介に花が咲き未だ名残りつきざるも、遠く横濱鎌倉あたりより見えし方々もありて四時すぎ長崎チエ子氏の閉會の辭をもつて惜しき袂を別つ。

### 南園會支部會則

- 第一條 本會ヲ南園會支部ト稱シ事務所ヲ書記宅ニ置ク
- 第二條 本會ハ東京及ソノ近郊在住ノ南園會員及准會員ヲ以テ組織ス。
- 第三條 本會ハ會員相互ノ親睦ヲ厚ウシ智徳ヲ養ヒ母校ノ發展ヲ助長スルヲ目的トス
- 第四條 本會ニ左ノ役員ヲ置キノ任期ヲ二ケ年トス但



補缺ノ場合ハ前任者ノ殘任期間トス

第五條 本會ノ役員ハ支部長一名、書記一名、會計一名、理事若干名トス

第六條 本會ハ毎年春秋二季ニ定期總會ヲ開キ必要ニ應ジテ役員會ヲ開ク

第七條 本會ノ經費ハ會費及有志ノ寄附金ヲ以テ之ニ充ツ但會費ハ一ヶ年金壹圓トス

第八條 本會期ハ總會ニ於テ出席員三分ノ二以上ノ同意アルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

當日出席者

特別名譽會員 久原 清子氏

來賓 前田 豊作氏 原東 仙子氏

特別會員 馬淵 かね氏

會員(實三)松岡 花子氏 長崎チエ子氏 中村すみ子氏

(實四)繼 文子氏 福本テル子氏

(實五)松尾 キク氏 肝付 澄江氏

(實六)熊谷フサコ氏 秋本 綾子氏

(實七)小塚 静子氏 來島まさ代氏 内田 文子氏

厚東 磯子氏 羽島とし子氏

(實八)小田 チヨ氏

實五 松尾 キク 市外世田ヶ谷代田六三五ノ一〇

實六 熊谷フサコ 横濱市子安町一八六五

實七 小塚 静子 府下淀橋柏木八七〇

實八 小田 チヨ 市外高田町雜司ヶ谷金山三三九馬淵方

實九 中村 捷子 深川區東町二二

實十 幸坂とみ子 市外中野町天神四

實十一 堀 ヨシ子 府下蒲田町北蒲田五ノ八

實十五 三好チトセ 本郷區眞砂町一六

本二 原 いせ子 府下南品川苗木原一二四四

本四 若松楠緒子 府下荻窪二ノ九三

本五 小川ナツ子 府下松江隣保館

本六 白井 律子 小石川區關口臺町二六(河村)

本七 甲谷壽美枝 芝區高輪南町二七

本八 山根 勝子 横須賀市深田町九(佐野友吉方)

本九 杉原みつ代 市外小松川町三ノ五(中山宇作方)

本十 藤田喜多子 麴町區平河町六ノ二四

本十一 伊藤 昌子 牛込區河田町女子醫專寄宿舍

○各卒業年度毎に順次理事(年長順)になつていたゞくごに定めまして今後よろしくお願ひ致します。

(實九)中村 捷子氏 河村 雪江氏

(實十)大山 秋子氏

(實十一)堀 よし子氏

(本二)原 いせ子氏

(本四)若松楠緒子氏

(本八)本永 芳恵氏

(本十一)岩本 林子氏 安藤フジエ氏

(以上三十一名)

附記 當日御出席の方々より本年度會費として金壹圓を受く。尙殘念ながら御列席頂けませんでした方々も今後御加入御盡力下さいますやう願ひます。本年度會費金壹圓御送附願へば幸と存じます。

支部長 馬淵 かね

會計 繼 文子

新役員の決定まで會計繼文子、書記小笠原嘉子責任を持つことになりました。事務所は現書記宅府下荻窪二ノ一

○三 小笠原嘉子方にて通信はこゝへ願ひます。

南園會東京支部第一回理事氏名住所

實三 松岡 花子 府下大井町出石五一六八

實四 繼 富美 府下杉並町馬橋一〇

昭和六年度萩高等女學校南園會歳入歳出豫算書

歳入之部

金參千圓 會費收入

金貳百拾五圓四拾七錢 財産收入

金九拾五圓 雑收入

金貳百圓 繰越金

歳入合計金參千五百拾圓四拾七錢

歳出之部

金五百參拾圓 總務部費

金貳百拾五圓 學藝部費

金六百八拾圓 運動部費

金四百貳拾貳圓 會報部費

金五百七拾圓 圖書部費

金四百圓 園藝部費

金參拾八圓四拾七錢 補助部費

經常費合計金貳千九百五圓四拾七錢

臨時費

豫備費

金參拾圓  
 金貳百貳拾五圓  
 金百圓  
 金貳百圓  
 金五拾圓  
 臨時費合計六百五圓  
 歳出總計金參千五百拾圓四拾七錢  
 總務部費 金貳百參拾四圓拾錢  
 運動部費 金八百七拾九圓六拾壹錢  
 園藝部費 金參百九拾七圓八拾錢  
 二十周年記念事業積立金 金五百八拾壹圓四拾錢  
 特別費 金四拾壹圓七拾九錢  
 金貳百參圓參拾錢  
 計金貳千八百七拾貳圓九拾錢  
 臨時費 金五拾九圓四拾七錢  
 金百參圓七拾參錢  
 金貳百圓  
 學藝部費 金貳百參拾四圓拾錢  
 運動部費 金八百七拾九圓六拾壹錢  
 會報部費 金參百九拾七圓八拾錢  
 圖書部費 金五百八拾壹圓四拾錢  
 園藝部費 金四拾壹圓七拾九錢  
 補助部費 金貳百參圓參拾錢  
 運動部費 金八百七拾九圓六拾壹錢  
 園藝部費 金參百九拾七圓八拾錢  
 特別部費 金五百八拾壹圓四拾錢

昭和五年度南園會  
歳入歳出決算書

歳入之部  
 前年度繰越金 金參圓七拾錢  
 職員會費 金百參拾七圓  
 生徒會費 金貳千九百七拾七圓五拾錢  
 財産收入 金百八拾參圓五拾八錢  
 雑收入 金貳百九拾壹圓參拾參錢  
 合計金參千五百九拾參圓拾壹錢  
 歳出之部  
 經常費 金五百參拾四圓九拾錢  
 臨時費 金貳百參拾四圓拾錢  
 總務部費 金八百七拾九圓六拾壹錢  
 運動部費 金參百九拾七圓八拾錢  
 園藝部費 金五百八拾壹圓四拾錢  
 特別部費 金四拾壹圓七拾九錢  
 臨時費 金五拾九圓四拾七錢  
 金百參圓七拾參錢  
 總計金參千貳百參拾六圓拾錢  
 右差引殘金參百五拾七圓壹錢  
 前年度繰越金 金貳百參拾四圓拾錢  
 職員會費 金百參拾七圓  
 生徒會費 金貳千九百七拾七圓五拾錢  
 財産收入 金百八拾參圓五拾八錢  
 雑收入 金貳百九拾壹圓參拾參錢  
 合計金參千五百九拾參圓拾壹錢  
 歳出之部  
 經常費 金五百參拾四圓九拾錢  
 臨時費 金貳百參拾四圓拾錢  
 總務部費 金八百七拾九圓六拾壹錢  
 運動部費 金參百九拾七圓八拾錢  
 園藝部費 金五百八拾壹圓四拾錢  
 特別部費 金四拾壹圓七拾九錢  
 臨時費 金五拾九圓四拾七錢  
 金百參圓七拾參錢  
 總計金參千貳百參拾六圓拾錢  
 右差引殘金參百五拾七圓壹錢

篤志者芳名

昭和六年一月三十一日 朝鮮(舊瀧口) 迫間芳宜 江  
 金百圓  
 昭和六年二月五日 日本毛織三十年史一部 神戸市兵庫 日本毛織株式會社  
 昭和六年十月五日 博物館本壹、地歴標本貳、  
 萩町堀内 村田帶雲  
 昭和六年十月三十日 島根縣濱田町大字黒川一、〇五二  
 金百六圓九拾貳錢 玉置 文  
 昭和六年十二月十日 東京市麴町區飯田町一丁目二  
 大英和辭典壹部 富山房社長 坂本嘉治馬

昭和六年三月二十三日 櫻樹苗 萩町樽屋町 齋藤 將人  
 昭和六年三月二十六日 書籍十三冊 萩町南古萩 常川光治郎  
 昭和六年三月三十日 金五拾圓 萩町 筒井拾次郎  
 昭和六年六月二十二日 航海圖壹軸 大阪市北區宗是町一番地 大阪商船株式會社  
 昭和六年九月二十九日 海圖區域一覽圖外二種 築地 水路 部

明月や池をめぐりて夜もすがら 芭蕉  
 旅に病んで夢は枯野をかけめぐり 其角  
 日の春をさすがに鶴のあゆみかな 蕉村  
 鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春 蕉村  
 五月雨や大河を前に家二軒 蕉村  
 寝せつけし子の洗濯や夏の月 蕉村

## 會 告

一、表題變更について。

「南園會報」は本號より「南園會誌」と表題を改め、毎年七月發行する「南園だより」を「南園會報」と改めます。

一、會員の通信について。  
 學校又は南園會宛の通信若くは職員宛の書狀(年賀狀の如きも)は卒業生約二千名もあることなれば、必ず卒業の年、現住所、氏名(改姓せられた方は舊姓も)を明記して下さい。

一、會員名簿について。  
 會員名簿は相當苦心して作つたものですが、何分多數のことにつき、不備の點がありましたら、御自分のことでも、御友達のことでも、御遠慮なく至急御通知下さい。御助力によつて、なるべく會員名簿を完全なものにしたいと思ひます。

一、會員身分異動について。  
 會員の方にして、轉居、改姓、其の外身分につき、異動を生じた時は、其の都度至急御通知を願ひます。萬一御通知なき時は會誌や會報を添附することが出来ぬのみならず、學校よりのすべての通信もむつかしくなり、何かと不便を生ずるのであります。

一、縁の圖投稿について。

南園會報 第二號  
 昭和六年七月二十日發行  
 編集者 南園會報編輯部  
 印刷所 東京印刷局  
 代印所 東京印刷局  
 代售所 東京印刷局  
 訂價 表紙一枚 二角  
 裏紙一枚 一角  
 全年十枚 二元  
 半年五枚 一元  
 三個月三枚 六角  
 一ヶ月一枚 二角  
 郵費在內  
 東京印刷局 印刷  
 東京印刷局 代印  
 東京印刷局 代售  
 東京印刷局 訂價  
 東京印刷局 郵費  
 東京印刷局 全年  
 東京印刷局 半年  
 東京印刷局 三個月  
 東京印刷局 一ヶ月

校外會員の通信は、讀者に非常なる感興を起さしめるものであります故、一言半句の葉書文でもよろしいから多數の御投稿を御願ひします。

一、會報發送について。

會誌代前納の方にして、會誌を御受取りにならぬ時は何かの行違ひにつき御遠慮なく至急、會報部宛御照會を願ひます。

一、會誌代について。

會誌代は一冊金參拾五錢につき至急前納して下さい。右代金を前納せられぬ方には七月發行する南國會報（従來の南園だより）を送附するだけです。それ故南國會誌御入用の方は、現住所、氏名（舊姓も併記のこと）並に卒業の年を明記して、豫め申込んで下さい（別紙振替用紙御使用のこと）但し在校會員は毎月南國會費を出して居ますから、別に納入するに及びません。

校外會員の方はなるべく南國會誌を御購讀になります様に願ひます。

## 會 員 名 簿

（昭和七年一月十五日現在）

○印……南國會基金完納者

十印……補習科及研究科修了者

●印……死亡者



舊特別會員

- 阿武郡佐々並村(死亡)  
吉敷郡小郡町
- 南滿洲撫順南臺町一ノ一  
東京市麹町區平河町五ノ一〇  
廣島縣立英高等女學校
- 動靜不明
- 長崎縣師範學校
- 阿武郡萩町土原
- 同 梅雜式町
- 阿武郡德佐村
- 京都府宇治町宇治火藥製造所官舎
- 名古屋私立東海中學校
- 阿武郡萩町平安古
- 靜岡縣立靜岡高等女學校
- 神奈川縣小田原高等女學校
- 東京府下大森新井宿一〇四九
- 都濃郡福川町(死亡)  
阿武郡萩町河添
- 熊本市池田町宇岩立七〇一
- 吉敷郡嘉川村(死亡)

- 埼玉縣北埼玉郡中條村字今井
- 下關市長崎町上條二二五四
- 和歌山縣有田郡廣
- 福井市實永中町二五
- 阿武郡萩町堀内(死亡)  
阿武郡萩町平安古
- 東京市外高田町雜司ヶ谷金山三三九
- 佐波郡出雲村
- 阿武郡萩町濱崎(死亡)  
同 江向(死亡)
- 同 東田町
- 長崎縣立諫早中學校
- 下關市丸山町
- 吉敷郡陶村
- 阿武郡三見村
- 大阪市此花區西島町北港住宅一ノ二ノ二
- 下關市大久保町
- 阿武郡萩町今古萩
- 同 新堀(死亡)
- 千葉縣千葉市千葉淑徳高等女學校
- 廣島市外牛田村枝倉
- 名古屋市東區白壁町二ノ二 齋藤本邸内
- 吉敷郡大鏡村

校外會員

實科第一回

- 廣島縣立英高等女學校
- 動靜不明
- 山口縣立岩國高等女學校
- 吳市大正中學校
- 廣島縣立庄原實業學校
- 大阪市大手前高等女學校
- 神戸市立第一高等女學校
- 神戸市立第一高等女學校
- 東京市外東鴨町二丁目三十五
- 阿武郡萩町江向
- 大分縣大分市春日町
- 天津郡仙崎町
- 朝鮮忠清南道公洲高等普通學校
- 阿武郡萩町平安古
- 熊毛郡藤間村
- 都濃郡福川町
- 長野縣立中野高等女學校
- 京城府黃金町二丁目五一
- 阿武郡萩町小橋筋(死亡)  
山口市後河原
- 朝鮮元山春日町
- 長野縣長野市
- 大津郡三洲村
- 福島縣石城平第一尋常高等小學校
- 都濃郡花園村
- 阿武郡萩町平安古
- 島根縣濱田女子師範學校

- 大正二年三月卒業(年齢順)
- | 氏名     | 舊姓 | 本籍 | 現住所   |
|--------|----|----|-------|
| 野田 葉月  |    |    | 野田    |
| 原田 梅子  |    |    | 原田    |
| 上利 テイ  |    |    | 上利    |
| 柳原 良助  |    |    | 野田ヨシコ |
| 藤原 八重  |    |    | 藤井 俊治 |
| 藤井 俊治  |    |    | 安永 スエ |
| 佐々木 ヒデ |    |    | 山本 勉彌 |
| 山本 勉彌  |    |    | 堀江ウタコ |
| 堀江ウタコ  |    |    | 齋木 ミツ |
| 富谷 寛一  |    |    | 安野 章  |
| 安野 章   |    |    | 守田 茂作 |
| 守田 茂作  |    |    | 片山 幹子 |
| 片山 幹子  |    |    | 俵野 信  |
| 俵野 信   |    |    | 吉田 勝郎 |
| 吉田 勝郎  |    |    | 長濱 次雄 |
| 長濱 次雄  |    |    | 齋藤 彦一 |
| 齋藤 彦一  |    |    | 赤川 正三 |
| 赤川 正三  |    |    | 布村 ミサ |
| 布村 ミサ  |    |    | 宇野 ヒサ |
| 宇野 ヒサ  |    |    | 入江好太郎 |
| 入江好太郎  |    |    | 松村 百子 |
| 松村 百子  |    |    | 田淵 武彦 |
| 田淵 武彦  |    |    | 玉置 文  |

+○永井 ミヅ(村田)阿 萩橋東 大阪中河内堅下村安堂  
 +○佐々木 マジコ 同 三見村 朝鮮成設北道明川郡東面  
 ○金子 ハツ 同 大井村 明瀧公立普通學校校長宿舎  
 ○福岡 サト(藤田)同 福川村 京城和泉町鐵道官舎十一  
 +○長谷川 サダ(野上)同 萩土原 福賀村福田小學校  
 +○倉田 靜子(倉田)同 同西田町 西田町  
 ●○水木 チヨ(倉田)同 同今魚棚町(死亡)  
 ○藤井 キク 同 徳佐村  
 ○大崎 トシコ(平田)同 萩熊谷町 下關岬之町大崎保太商店  
 +○馬庭 タマコ(金子)同 福川村 萩濱崎町  
 +○松井 チヨ(河上)同 萩橋本 臺北西門町二ノ一七  
 津田 桃代(金子)同 同橋東 朝鮮全南靈光郡法聖浦川  
 崎社宅

實科第二回

大正三年三月卒業(年齢順)

安澤 マサ(大岩)阿 萩新堀 住所不明  
 ○時藤 シナ(松村)同 同江向 松村榮方  
 ○岡 レン(大崎)大 三隅村 萩町小橋筋  
 桂 シズエ(國司)阿 萩橋 神戸市平野神田町二五  
 +○有田 ミサ(阿部)同 同江向 臺灣臺北東門町一〇六  
 +○桑木 マツ(多田)同 同橋東 福岡縣嘉穂郡上穂波村字  
 原田 トミ(上田)同 同河添 長埴嘉穂株式會社嘉穂館

○石津喜與子(中村)同 同東田町 大阪府下中河内郡高井田  
 ○溝端 フジ(章刈)同 同河添 旅順市忠海町二五  
 ○上田 信子 同 明木村  
 ○三浦 君子(神代)同 萩河添 朝鮮成設北道羅南本町廳  
 官舎  
 ○玉木 チヨ(大賀)同 同磯屋町 岡山縣津山市  
 十三宅 節 美 大嶺村 住所不明  
 +○玉木 ハツヨ(難波)阿 萩米屋町 下關市岬之町大通リ九五  
 +○吉田 チヨ(原)同 同土原 住所不明  
 +○大野 アキ(森重)同 大井村 住所不明  
 ○木原 雷(伊藤)同 萩堀内 在東京  
 ●○島田 壽美 同 同橋町 (死亡)  
 +○内藤 千代(堀)同 同濱崎 (死亡)  
 ○上田 正子 同 同橋津原 住所不明  
 ●○高橋 恭(小野)同 奈古村 (死亡)  
 +○難家 キシコ(長見)同 萩鹽屋町 住所不明  
 +○桂 ユキ(中原)同 同橋東 大阪府西成區玉出町十本  
 通五丁目七  
 ●○島 ハナ(安達)同 同 萩 (死亡)  
 +○岡藤 ミヨコ(藤本)同 同御許町 香川縣今治市段巳通り  
 十大田 キク(原)同 同平安古 大連市周水子小野田セメ  
 ント社宅  
 ○藤谷 千代(中原)同 同橋本 朝鮮釜山府大倉町四丁目

村田 イシ(今地)同 同上村 同  
 西岡 マサヨ(倉重)同 萩橋東 下關市相生武久町一二五  
 +○小野 キク(松村)同 同江向 西岡方  
 小倉市外足立村三萩野萩  
 +○坂本 タカ(岡)同 小川村 須佐町本町  
 ○山縣 於松(伊藤)同 大井村 神戸市須磨大手宮ノ西九  
 宮本 タカ 同 大井村 萩町新堀  
 ○横地 幸(河野)同 萩江向 住所不明  
 ●○田邊 カメ(山下)同 同橋東 (死亡)  
 ●○河村 タミ子 同 同熊谷 (死亡)  
 +○兒玉美智子(三宅)同 同江向 住所不明  
 澄田 ハツ 同 同堀内 福岡縣田川郡神田村字金  
 田東橋  
 吉本 ヨシ(神村)同 同米屋町 朝鮮京城府本町三ノ三八  
 阿部 スマ 同 同片河 大津郡深川村正明市  
 ○坪倉 シゲヨ(岡部)同 須佐町 大津郡三隅村  
 住所不明  
 +○岡田 英子(山根)同 萩河添 住所不明  
 ○河村 貞子(三好)同 同西田町 姫路市字五軒邸 藤田秀  
 ○藤山 豊子(末成)同 同平安古 八方 熊毛郡島田村原  
 +○三浦 テイ(大中)同 淺江村 熊毛郡島田村原

實科第三回

大正四年三月卒業(年齢順)

○阿武タケヨ 阿 彌富村

○加藤 雪(翠屋)下關市田中新町一丁目  
 +○藤田 愛子(箭島)阿 吉部村 津大郡三隅村  
 +○島田 ウメコ(山本)同 萩濱崎 下關市入江町海岸通り  
 ○藤村 マツ 同 同上村  
 ○松岡 花子(松野)同 萩土原 東京府大井町出石五三六  
 三浦 チセ 同 同濱崎 住所不明  
 ○瀬戸 由子(河北)同 同濱崎 京都府下綾部町本町五丁  
 目キリスト教會  
 ●○河野 ミツ子 同 萩今古萩(死亡)  
 ○山口屋 シナ(山下)同 同山田  
 島本 チヨ(大森)同 同濱崎  
 ○伊藤 ミチ(村上)同 同東田町 青森備井陸軍官舎  
 +○笹村 嘉子(椿)同 同橋東 朝鮮全北鎮南  
 ○長崎 チエ子(三上)同 同山田 東京本郷區本郷五ノ一四  
 ○玉木 ヨシ(西山)同 同川島 萩町金谷  
 ○大橋 トメ(國弘)同 同 山口市木町  
 ○下瀬 清子(林)同 同平安古 朝鮮大邱八重山町  
 ●○尾坂喜與子(君谷)同 小川村 (死亡)  
 ○野村 ツルヨ(田中)同 萩橋東 朝鮮全羅南道羅川郡野谷  
 面駐在所 野村庄一方  
 ○中村 操(田村)同 同橋 東京府花原郡平塚町大字  
 戸城三六四  
 +○山下 壽美(吉田)同 同川島 香川津(死亡)  
 ●○植村 フミコ(田中)同 同橋東  
 +○齋藤 マス 同 大井村

○三好アヤコ(秋枝)同 福貴村 萩町香川津  
 十〇厚東 佐世 同 同梅東  
 ○原 フミ(長井)同 川土村 神戸市須磨松風町六丁目  
 二十四ノ一  
 ○南方 京 同 萩林東 山口市今市七七  
 ○植村チチヨ(山本)同 三見村 山口市今道二三  
 ○三原 幸子(山中)同 萩橋本 山口市今道二三  
 ○福永 フサ(伊藤)同 川上村 山口市今道二三  
 十〇倉増千代子 同 高俣村 (死亡)  
 十〇林 シズ(河田)同 米川村 大阪市西區長堀北通二丁目  
 一番地 米元幸重内 (死亡)  
 十〇赤司 寧子(倉田)同 吉田町 朝鮮京城道長湍郡慈内 (死亡)  
 十〇井上キミヨ(黒瀬)同 同山田 (死亡)  
 十〇山下 サト 同 同山田 吉賀幸助方  
 十〇吉賀 クリ(三村)同 同濱崎 朝鮮釜山本町一丁目  
 十〇小宮 トヲ(中原)同 同土原 厚狭郡船木町  
 十〇藤野 トシ(吉賀)同 同無谷町 萩町土原 永田恒一  
 十〇藤井 菊代(鹽見)同 同格 豊浦郡西市町  
 十〇津守 フキ(重枝)同 同橋本町 東京府下松澤村上北澤文  
 化村内一七〇  
 十〇中村 スミ(大山)同 同格 同米屋町 (死亡)  
 十〇松原 ツル 同 同土原 下關市丸山町八九〇  
 十〇久保田ヨシ(大田)同 同土原

十村本 秀子 同 同堀内 美於福小學校  
 十〇能美滿壽子 同 同江向 同梅東 福岡縣若松市堺町四丁目  
 十〇馬屋原孝子 同 同江向 佐々並小學校  
 十〇内藤ヨシヨ 同 同江向 住所不明  
 十〇佐藤 シズ(金子)同 同平安古 萩町堀内  
 十〇渡邊 テツ(村田)同 同江向 美禰郡赤郷村  
 十〇宮原 千世(河野)同 同土原 東京府下萩道二ノ一〇三  
 小笠原嘉子(三好)同 同濱崎 大阪府天王寺區細工谷町  
 一〇八番  
 十〇能美 ヨシ(片山)同 同梅東 山口市西白石  
 十〇池田マツヨ(井上)同 同川村 阿 小川村  
 十〇長嶺 芳子 同 徳佐村 愛知縣寶飯郡國府町大字  
 久保  
 十〇小河ハナエ(岩倉)同 萩江向  
 十〇白井 ハナ(平木)同 同格  
 十〇三浦 ヨシ 同 同江向 (死亡)  
 十〇金子 トミ 同 同梅東 住所不明  
 十〇三浦サマ(阿座上)同 同江向 朝鮮忠清北道清州本町五  
 二  
 十〇岡野 千代(長谷)同 同津守町 臺灣臺北  
 十〇田原千代子(石井)同 同田町 橫濱市上反町五〇〇吉田  
 泰司方  
 十〇伊藤 喜代(古橋)同 同川島  
 十〇野村 フジ 同 同米屋町 大阪府天王寺區眞法院町  
 二番地  
 十〇田村 清(金子)同 字田郷村

十〇萩原マサミ 阿 萩堀内 (死亡)  
 十〇大谷フタコ(堀永)同 同東田町 大分市荷揚町  
 十〇秋里シヅコ(松岡)同 同梅東 美禰郡長登  
 十〇浅野ミサヲ(伊藤)同 同江向 東京府下高井戸町中高井  
 戸六七  
 十〇阿武 タリ(寺田)同 同梅東 萩町橋本町  
 十〇松崎 チヨ(阿部)同 同古萩 萩町江向徳隣寺裏川筋  
 十〇土田 チヨ(松尾)同 同東田町 同東田町梅月亭右  
 十〇岡村シゲコ 同 同平安古  
 十〇松井 松江(山本)同 同江向 阿 彌富村  
 十〇三上 文子(松井)同 同川島 大阪府東成區大宮町七ノ  
 一〇二  
 十〇藤原 キク(三村)同 同梅東 萩町椎原  
 十〇原 ハル(溝部)同 同 (死亡)  
 十〇小野フミヨ 同 同奈古村 阿 奈古小學校  
 十〇藤井 政(大賀)同 萩江向 (死亡)  
 十〇加藤 春(竹重)同 同 福井縣福井市浪花中町二  
 十一番地加藤七三郎氏  
 十〇黒瀬 ヒサ(宮原)同 同山田  
 十〇十佐村 ヨシ(安田)同 同川村 (死亡)  
 十〇荒木ハツメ(米原)同 無本市外黒妻村 大分縣宇佐郡四日市町  
 寺山  
 十〇堀 壽子(鈴木)同 萩西田町 横濱市青木町澤渡谷三三〇  
 十〇村岡ミドリ(堀江)同 同江向 江向八丁  
 十〇村田 コト 同 同無谷町 朝鮮咸北會寧五洞四四  
 十〇植松 須恵(村田)同 同江向 朝鮮咸北會寧五洞四四

十〇林 保子(渡邊)同 同平安古 山口市八幡馬場  
 十〇吉田 トキ(遠藤)同 同古萩 吉敷郡小郡町堀井田  
 十〇永松 靜子(國重)同 同梅東 朝鮮黃海道海州城産銀行  
 宅  
 十〇佐伯千代子 同 同川村  
 十〇松井 豊子(河村)同 同橋本 (死亡)  
 十〇米澤 秀子(和田)同 防府町三田尻 東京四ツ谷六番町四八  
 十〇山川 文子(阿武)同 同福川村  
**資料第四回**  
 大正五年三月卒業(年齢順)  
 十〇吉武 壽 佐 中ノ國町住所不明  
 十〇富塚 タネ(大田)同 萩津守町住所不明  
 十〇堀永クリコ(狩野)同 同濱崎 住所不明  
 十〇堀部 ヒセ(原田)同 同山田 福岡縣戸畑市戸畑物會  
 社宅内  
 十〇兄玉 豊子(山根)同 嘉年村 群馬縣吾妻郡端野村吉妻  
 川電力株式會社今井發電  
 所社宅  
 十〇高木 梅代 同 萩濱崎  
 十〇藤原 久枝 同 同梅東 (死亡)  
 十〇山根マタコ(山下)同 同平安古 (死亡)  
 十〇北村 龜子(井本)同 須佐町 阿 小川村原中  
 十〇伊藤 光子(北村)同 萩江向 (死亡)  
 十〇前田トミヨ 同 同地福村 (死亡)  
 十〇江原キク(能美)同 同萩土原



○佐須 菊野(世良)神戸  
 ○津原ミヨ(浮里)阿 三見村 (死亡)  
 ○鈴木 菊枝(猪口)兵庫縣三原郡松帆村 東京府下南葛飾郡 金町一六二八  
 ○細 富美(工藤)阿 萩南古萩 東京府下杉並町馬橋十  
 + ○中隈 千代 鳥根縣濱田 大津郡深川町  
 ○水岡フサコ(佐々木)阿 生雲村 萩町倉江  
 ○白井アキコ(吉山)同 萩山田  
 ○長谷川トシコ 同 養生村  
 ○岡村 ツル(横山)同 萩河添 東京府外瀬ノ川町瀬ノ川 北谷端二二九六  
 ○野村 マツ 同 同梅東 (死亡)  
 ○大田 スミ(井町)同 三見村 長野縣埴科郡屋代町  
 ○江山タキコ 同 萩椿糺式町  
 ○中村 絹子(岡)同 同川島 萩五間町 岡本直分内  
 ○岡本 秀子(田原)同 同山田 滿洲奉天松島町二〇 柏村商會内  
 ○柏村 ヨシ(中村)同 同川島 (死亡)  
 ○秋山 キク(齋藤)同 御許町  
 ○澄川 トヲ(桂木)同 小川村 四洗線 洮南縣城康樂衛國 際運輸株式會社 洮南 營業所  
 + ○阿武 ミト(河村)同 萩梅東 東京府下向島寺島町三八  
 ○藤本 豊子(岩田)字部市祝返 萩梅東中ノ倉  
 ○折藤 喜美(伊佐)阿 萩橋本 東京府下向島寺島町三八  
 + ○安部 善子(原川)同 同土原

○黒瀬ヒデ(久保田)同 同梅東 住所不明  
 + ○長見マサコ 同 萩買村 住所不明  
 ○下間 静子 同 萩吉田町  
 ○高橋ヨシコ 同 同山田玉江浦 住所不明  
 + ○中鉢フチノ(藤原)臺灣高州屏東四八九  
 ○井上ふみ子 阿 萩江向 住所不明  
 ○藤井 文子(竹内)佐 島地村 東京府外濹谷金玉一二  
 + ○野上 壽恵 阿 萩土原  
 ○萩村 茂子(石光)同 同下五間町 京都府下新舞鶴町三條 海岸三井物産  
 ○堀 綾子 同 同上五間町(死亡)  
 ○吉村 キク 同 同梅東 萩町中ノ倉  
 ○内山 ノブ(中村)同 同川島 臺北市外奉府町四丁目三  
 ○瀧田 高子(安田)同 同河添 岩手縣沼宮内營林署  
 ○齋藤ヤス子 同 同梅大谷(死亡)  
 ○末武 滿子 同 同梅東 阿武郡築福村  
 ○玉井 芳江 同 同江向  
 ○伊藤 君代(堀)同 同河添 (死亡)  
 + ○大草チヨコ(山本)同 同平安古 神戸市再度筋三一ノ一八  
 ○藤山ユクセ 同 築福村 京都市木屋町御池下ル  
 + ○藤伊アキコ(難波)同 萩米屋町 北海道小樽市東雲町七八  
 ○宮川 八重(國司)同 同梅東 東京府外大井町鮫洲一三〇  
 ○宗榮シゲコ 同 同橋本

○坂口タカコ(高橋)同 同江向 朝鮮本浦府寧町三丁目八  
 ○領家 マス(村上)同 同東田町 大連市薩摩町關東館口號  
 + ○兼近 雪子(植村)同 同梅東 朝鮮京城尙旭町一ノ七十  
 ○阿武ミユキ 同 同 (死亡)  
 ○石川 文子 同 同 下關市本町四丁目六〇三  
 ○水津フミ子(村木)同 同 廣島市白島九軒町一七八  
 谷井 雪子(横)同 同江向 千葉縣銚子町榮町  
 ○花村 秀子 同 同堀内 名古屋市女子商業學校  
 + ○岡本 ミチ 同 同吉田町 住所不明  
 ○堀 壽子 同 同東田町(死亡)  
 ○藤山 末(原)同 同平安古 小量田町段  
 + ○白石 マス(山下)同 同山田 朝鮮辦尙南道統營大和町 一八三  
 ○柴田タケヨ(吉岡)同 高俣村 (死亡)  
 石井 壽万 同 萩土原  
 ○石津 光子(白根)同 同濱崎 住所不明  
 ○上田 ツル 同 同御許町(死亡)  
 ○久保 春枝(阿武)同 同濱崎 萩東田町  
 ○今地 マツ 同 同上村 萩町江向  
 + ○吉田ヨシコ 同 萩濱崎 (死亡)  
 + ○吉光野俊子(中原)同 同橋本  
 ○小笠原マス 同 同堀内 住所不明  
 ○藤村 文子(野村)同 同御許町(死亡)

○松本 アサ(後藤)同 同今古萩 門司市丸山町二丁目  
 ○渡邊 八百 同 同江向八丁  
 ○村田 照子(山中)同 同橋本  
 ○永田 操(植村)同 同梅東 (死亡)  
 ○河村 千代 同 同新如 (死亡)  
 ○松谷トラコ(重枝)同 同橋本 朝鮮仁川府濱町  
 ○藤井 良子 同 同米屋町  
 ○福本 照子(齋藤)同 同濱崎 東京市小石川區武島町十 一番地  
 實科第五回  
 大正六年三月卒業(年齢順)  
 ○志道 百重(宮原)美 赤郷村 岡山縣倉敷町倉敷紡績會 社々宅  
 ○高橋 タミ(茂住)阿 萩堀内  
 ○三島 コウ 同 三見村 (死亡)  
 + ○都築ニキコ 同 生雲村  
 ○久村 トキ(小林)同 奈古村 住所不明  
 ○後藤 フミ 同 萩御許町  
 ○松村 キク(中村)同 同唐橋町 山口市後河原  
 + ○倉富 イチ 都 鹿野村  
 ○福根フサコ(富士見) 玖岩園町 都濃郡徳山町字新町  
 ○神田 雲江(伊藤)阿 大井村 朝鮮釜山辨天町三ノ二九  
 ○永吉 芳子(伊藤)同 同 下關市竹崎町  
 ○田原 ヨシ(伊藤)同 萩梅小畑 神戸市西灘河原三八四

神代 政子(村上)同 同土原 兵庫縣武庫郡打出字三反田二二

○萩原千代子(河村)同 三見村 萩町八丁筋七九五

○大谷 壽(松尾)同 萩村東 萩町鹽屋町

○片山 キク(小河)同 小川村 島根縣美濃郡吉田村

○藏賀 ツル 同 生雲村 山口市飯田町 宮村竹藏

伊藤トミコ 同 萩村東 線方 萩町椿

○大津 アサ(椋木)大 三隅村 阿 萩町椿

山崎 サチ(河井)阿 萩川島 名古屋市東區新田來町一丁目

○平田 陸子(伊藤)同 大井村 北海道十州郡永山村農事試驗場官舎

厚東 英子(福原)同 萩村東 住所不明

○飯田 靜江(岸)同 同格 福岡市島飼五三五

○長井 トミ 同 川上村 萩町土原

十石川ハルコ 同 萩村東 萩町椿沖原

○師井 アイ 同 萩熊谷町(死亡)

十岡田八重子(松本)同 同 東京市赤坂區一ツ木町六(死亡)

○玉井 ヨシ(厚東)同 同山田 朝鮮新義州守備隊官舎内

○田村 良子(近藤)同 同椿東 神戸市蓮宮通二丁目三七

○河崎 好子(竹内)同 同古萩 倉増 太代 同 高俣村

十池田 京子 同 萩熊谷町(死亡)

十岸森 京 同 同江向 生雲小學校

○藤本 芳江 阿 萩御許町 神戸市東尾池一丁目一五

○村田喜代子(金子)同 同川島 四ノ三九 朝鮮咸鏡北吉州郡吉川邑

○須田 アヤ(武田)同 同山田 福岡縣直方町山部

○川口 信子(河村)同 同江向 北海道旭川市宮下通三丁目鐵道官舎

十田上ヨシ子 同 同椿東 兵庫縣明石市戎町當津古川榮吉方

十西島キヨコ(田中)同 同椿 豊浦郡宇賀村本郷

○小柳サヨ子(並川)同 同河添 臺北市築地町三丁目番地

十吉田 フミ(厚東)同 同椿東 萩町松本新道

十中嶋ヨシ子 同 同土原 (死亡)

○大谷チヨコ(武林)同 同平安古 朝鮮羅南本町陸軍官舎

○榎原 静子(松本)同 同東田町 大阪市北區善源寺町六ノ

○松尾 キク(中原)同 同椿東 東京市外世田ヶ谷町代田

十宮川 ツル 同 同濱崎 住所不明

○西山キクヨ(田中)同 同椿東 大阪府三島郡吹田町田中

十齋木 ミツ(齋藤)同 同八丁 大津郡仙崎町

○井上 三枝(藤井)同 同江向 神戸市熊野町四丁目六一

十田中 静子 同 同椿町 (死亡)

十長屋チヨノ 同 同山田木間

十柴田 キク 同 同江向 大津郡通村

○白石 則子(中原)同 同川村 神戸市平野矢部町二二二

松本喜久子

十渡邊 嘉子 阿 萩古萩 住所不明

十久保アヤ子 同 同江向 明倫小學校

○武田 静枝(木村)島根縣邑智郡田所村(死亡)

○杉村 サヨ 阿 萩山田 (死亡)

十佐伯マツ子(小島)同 同椿東 萩町川島

○増野 ユリ(土田)島根縣益田町イ三三三

松谷 ウメ(松浦)阿 萩橋本 大阪市港區田中町三丁目七〇四

十吉田 貞子 同 同椿東 住所不明

十齋藤 雪枝 同 同新堀 萩町小畑

台田 康子 同 同椿東 萩町小畑

○長田千代子(松浦)阿 岩國郡島吉敷郡小郡町長田敷房方

○占部 竹子(桂)阿 萩土原 若松市外二島白米社宅

○松本 サキ(神野)同 同江向 朝鮮論山郡馬九坪

十奥 幾子(山根)厚 小野田 東京

十中野 チカ(白井)阿 萩椿 東小學校

十末岡ハルコ 美 於福村 住所不明

○渡邊 ヨシ 阿 萩椿濁淵

十末永 ハル(吉屋)同 同油屋町 萩町橋本町

○辻野ハナコ(溝部)同 同椿東 (死亡)

○藤村 峰子(多田)同 同椿東 神戸市平野桶谷町二六二

○大瀧 政子(草刈)同 萩河添 (死亡)

十小野 サキ 同 同椿青海

○山内ハツエ(乃美) 吉敷郡秋穂村山内唯五郎方

十肝付 澄江(瀧口) 東京府下西葛町堀ノ内

○天野 ミツ(田坂) 佐波郡春田村

○森脇美智子(黒瀬)阿 萩山田 山口市下立小路

○藤田ハツセ 同 同椿 (死亡)

○秋山ウメノ(増山)同 (死亡)

十村上 貞子(新庄)同 萩熊谷町 萩町江向

○増山 静子 同 同橋本

資料第六回

大正七年三月卒(業年齢順)

三好 シゲ 阿 萩濱崎 大牟田市曙町一四 号号

高四郎方

●栗田 鹿子 同 吉部村 相島尋常小學校

種子 綾(岩武)同 榮福村 (死亡)

岩田フミエ 同 篠生村

○山田マサコ 同 萩山田

○佐々木ツチ(竹重)同 吉部村

○小野 静子 同 奈古村 青島明水路二號

●堀永 ツタ 同 三見村 (死亡)

○玉木シゲコ(富田)同 萩土原 土原富田内

○小川 良子(藤田)同 同椿 萩町濁淵

○守重 志都(羽鳥)同 同椿東 鹿兒島市若本願寺別院

○田中 スミ(平田)同 同形 大阪市北區東野田町五丁目八五

○品川 マツヨ 同 福賀村

○木村 清子(堀)同 宇田郷村 山口市大野大路

○藤井 静子(田中)同 萩椿 門司市田浦南町四五七

○藤井 美代(高州)同 萩椿 壺淵臺中市高砂町七番國製糖會社々宅

○金子 徳 同 宇田郷村

+○田中 静(桂)同 萩川島 福島市船場町三十一

○内藤 ツルコ 同 同江向

○名倉 ナヲコ(今田)同 同五間町 岡山縣那波郡倉敷町榮町六〇〇ノ二

○山中 松子 同 同平安古 高知市江ノ口東鹽田一五八 山内伍六内

○神田 サトセ(服部)同 三見村石丸

○有吉 トミコ 同 萩西田町

+○關屋 千代 同 同瓦町

○甲賀 露子 同 下關市上新地 甲賀内

○吉澤 文子(大谷)同 萩唐櫃町

○中村 貞子 同 同梅東 (死亡)

○岡 朝子 同 同濱崎 東京市淺草區榮久町一〇 松本方

○福田 文(林)同 同河添 名古屋市中區西塚町一七

○熊谷 フサコ(藤田)同 同格 横濱市市安字溝下二五四

+○末成 清子 同 同平安古 (死亡)

○波多野 ナツ 同 同新堀 (死亡)

○後藤 通子 同 同格東 神奈川縣箱根小涌谷

○鳥屋 ツナ(河野)同 奈古村 萩町熊谷町

○小田 エイ(中村)同 同

+○阿部 照子(早川)同 萩堀内 阿武郡篠生村持坂

○村上 ウメ 同 同東田町 (死亡)

○飯塚 ヨシ(堀上)同 同新堀 下關市丸山町一八九三

+○大庭 ヨシ子 同 同西田町 (死亡)

○横山 朝子(岡本)同 同末屋町 豊橋市札子町八千代製藥株式會社 横山三郎方

○陶村 園子(陶村)同 同平安古 大阪市東區區森小路八丁目六四〇

○松本 ヨシコ 同 同新堀 神戸市外原田二四八關西學院前東門

○秋本 綾子(吉崎)同 室津村 東京市麻布區仲ノ町四

○尾崎 ヨシ子(西郷)同 萩椿東 萩町濱崎

○田北 治子(松尾)同 同江向 萩町吉田町

○綾木 貞子(藤田)同 福川村 奈良縣吉野郡下北山村下池原字治川電氣會社々宅

○藤田 トミ(池田)同 萩椿東 山口市野田官舎内

○竹内 麗(杉山)同 同惠美須町

+○小池 ヒサ子(河村)同 同川崎 壺淵臺中市木ノ下町一

○仲子 菊子(吉賀)同 同濱崎

○金田 千代子(齋藤)同 大井村

○松村 糸妣(吉村)同 萩五間町

○岡本 シゲ(藤田)同 同格 吉敷郡小郡町

秋山 操(黒瀬)同 住所不明

秋本 ミツコ 同 同

○田總 イセコ 同 同平安古 (死亡)

+○倉塚 登志恵(杉)同 高俣村

○岡 ッチヨ 同 福川村

○松尾 ヒサ(山内)同 上海華德路八七東華紡績會社々宅

○安井 フユ 同 川上村 東京市外青山原宿七二

村上 スエ 同 萩東田町

○香川 マサ 同 同土原

○杉山 梅尾(大島)同 同濱崎 門司市谷町一丁目

○杉山 愛子 同 同川島 白水小學校

+○三輪 芳子(小島)同 同格東 萩町沼田ヶ原

○日高 ノブコ(香吉)同 同濱崎 吳市倉通通り門丁目番地

○可原 シカ(小河)同 小川村 神戸市平野津川町三五三

+○末永 梅尾(石川)同 福川村 廣南酒川郡邑内平和洞六

○野尻 幸代(渡邊)同 萩江向

○白石 壽子 同 同東田町 (死亡)

○笹尾 知世子(屬)同 同江向 神戸市外原田字大井出八八ノ五

○齋藤 文(田坂)同 同河添 大津郡深川村河原

○磯村 トミ(田村)同 同河添 朝鮮仁川町一丁目

○内藤 テヨコ(藤川)同 同西田町 東京市外高田町高田三二五

○末武 愛子 同 同格東越ヶ濱

○伊藤 花子 同 同江向 (死亡)

○佐方 敏子(阿座上)同 川上村 阿武郡地福村

○中山 壽子 同 萩 (死亡)

○原 千代 同 同

伊藤 ヒデコ(岡)同 同 下關伊崎町利慶寺伊藤廣太郎方

+長島 藤之(瀬戸)同 勝間村 下關市後田一一

實科第七回 大正八年三月卒業(年齢順)

○山縣 ユミ(藏重)同 大田町 千葉縣成田町藏重康美方

○山縣 ヤス 同 萩平安古

○中村 ユキヨ(伊達)同 同格 朝鮮全羅南道長城

○堀 貞(金子)同 宇田郷村 高根縣鹿足郡畑追村

○小塚 静子(遠崎)同 萩濱崎 東京府下澁橋村木八七二

○平田 春江 同 小川村

+○田中 繁 同 萩濱崎 (死亡)

○下瀬 ミツ(内藤)同 同川島 東京府下長崎村大和田二一四六

○井町 ヒサコ 同 同濱崎 (死亡)

○伊藤 チヨ 同 川上村

○中野 フミオ(阿武)同 萩西田町

○澄川 スミ子(池田)同 須佐町 阿 奈古村

○岡村 テフ(後藤)同 萩濱崎 朝鮮咸興雲興里高等普通學校正門前 岡村龍藏方

○横山ヒナ子(三島)同 三見村 朝鮮江原道洪川郡洪川  
 ○福田 和子(瀧口)都 福川町  
 ○小松 サダ(木村)同 萩惠美須町 愛媛縣宇摩郡小富士村  
 ○井原喜勢子(金子)同 同格東 東京市外世田ヶ谷下町七  
 ○松浦キミ子 同 同濱崎 (死亡)  
 ○安野ヤエ子(中村)同 同江向 臺北州七星郡北投庄北投  
 ○笠井 咲子(笠井)同 同格 長崎縣藤戸工業所淺浦社  
 ○松井須磨子 美 赤郷村  
 ○竹内 マツ 阿 萩惠美須 東京府北豊島郡長崎町一  
 ○大賀 花子(中村)同 同平安古 (死亡) 和田元二 井原眞治氏方  
 ○永田ツジエ(植村)同 同格東 住所不明  
 ○安田 清子 同 同河添  
 ○阿武ヤエ子(山川)同 同格東 阿 福川村二保谷  
 ○梁屋 操(久保)同 同土原 株中高砂町一 帝國製糖  
 ○佐藤 壽子(上井)同 福川村 臺灣基隆市瑞芳庄四脚亭  
 ○今地タミ子(三戸)同 萩江向 第十坑社宅内  
 ○吉田 静江(加藤)東京府下西葛場ノ内 五十松西御方  
 ○片岡 紗子(鈴木)吉 東波波村 吉敷郡東波波村  
 ○山田ユキ子 阿 萩山田 東京府下和田堀町字堀之  
 ○来島マサヨ(原)同 紫福村 内二五 臺灣高雄州東港郡溪州東  
 ○岡 安子(兼重)同 萩川島 港製糖株式会社宅

○長野 雲子(神代)同 同山田 東京市芝區松本町四四  
 ○中務 敏子(落合)同 同吳服町 厚狭郡万倉村  
 ○岩田 文子(植村)同 同格東 朝鮮黃海道海河郡上町一  
 ○福地 竹子(阿武)同 同濱崎 六六 朝鮮釜山富平町  
 ○秋枝イト(阿座上)同 福賀村 大津郡深川町  
 ○安田 安子(市原)同 嘉年村 嘉年村  
 ○原 スミ 同 紫福村 阿武郡紫福村  
 ○大賀 ヒデ 同 萩鹽屋町 (死亡)  
 ○三好 ウラ 同 淺江村  
 ○横山ヨシ子 阿 川上村 大島郡森野村字森  
 ○木原 ヨシ 同 萩格東 阿越ヶ濱小學校  
 ○杉山アサ子(久保)同 同濱崎  
 ○宮原 千代 同 同土原  
 ○田中 マサ 美 共和村  
 ○藤田 貞子(林)阿 萩平安古 朝鮮咸鏡南道新興郡東上  
 ○内田 文子(堀)同 同川島 而道安朝鮮水電株式會社  
 ○澄川 千里 同 小川村 東京市外阿佐ヶ谷一六四  
 ○今地 ヒデ 同 川上村 (死亡) 八  
 ○山崎 貞(和田)大阪府豊能郡箕面村大字牧落百樂莊神  
 ○阿川 榮子 社前 阿地福村  
 ○田中 セキ(兒玉)同 萩格東 都濃郡徳山町順庵町 田  
 中修一

●厚東 美恵 同 同 (死亡)  
 ○宮木 信子 同 福賀村 (死亡)  
 岡村 由枝 同 福川村 島根縣鹿足郡津和野町  
 田中 基礎(植村)同 萩格東 山口市石橋側三八  
 ○松永 カツ 大 向津具村 萩町江向  
 ○吉津 ツキ 同 萩格東 東京市小石川區雜司ヶ谷  
 ○細川 淑子(竹内)同 同平安古 二六村田  
 ○厚東 磯子(前田)同 同山田 山形市新築四通官舎  
 ○小島クマ(三隅田)同 同平安古 東京府下大森入新井町新  
 ○有田 シヅ(来島)同 同格 尼ヶ島市外小田村字杭瀬  
 ○藤田 トヨ 同 同格 松下三五 萩町瀧瀬  
 +津田サダ子 同 同江向  
 +中村 キヨ(山下)同 同山田 須佐町中津  
 +森田ミチ子 同 福川村 (死亡)  
 ○岩武 綾子(藤田)同 紫福村 六島村相島小學校  
 ○島田トメ子 同 川上村 東京府下阿佐ヶ谷五四七  
 ○河村 清子 同 同 樹山徳義方  
 +佐田 初枝 美 大嶺村 (死亡)  
 ○大野美智子(大野)同 同土原 郡馬縣利根郡片品村下指  
 ○角 喜久代(倉田) 同 同 大飯能太郎方  
 田醫院内 大阪市外守口町一六八倉

○濱田 ハナ(中村)同 同土原 京都市上京區下長者町衣  
 ○末益 マス 同 奈古村 都東入九  
 ○波多野芳子 同 三見村  
 ○山本 静子 同 萩吳服町 住所不明  
 ○佐久間文子(田坂)同 同江向 島根縣美濃郡都茂村大字  
 ○海部ウメ子 同 同橋本 九茂 (死亡)  
 ○羽鳥トシ子(田中)同 同格 東京市外大井町水神下二  
 ○半井 嘉子 同 同吉田町 (死亡)  
 ○大田 泰代 同 吉部村  
 ○伊佐トミコ 同 萩橋本 下關埴浦中尾崎邸内  
 ○徳田 英子(前田)同 地福村 廣島市千田町二丁目四三  
 ○中村トミ子(羽仁)同 萩平安古 福岡縣戸畑市猪ノ坂町五  
 +伊藤 桃代 同 同格東 丁目六號  
 +立野彌壽子 同 田方崎村  
 ○内藤 静子(大谷)同 萩濱崎 長崎縣對馬郡知高濱陸軍  
 ○桶谷ハナコ(齊藤)同 同 萩町東田町 官舎  
 ○森 松枝 同 川上村 萩町東田町  
 ○落合 愛子 同 川上村 東京市小石川區久堅町七四

●實科第八回  
 大正九年三月卒業(イロハ順)  
 ○五峰ヨシコ 阿 萩濱崎 (死亡)

大谷 渡子(石光)同 阿 生雲村大谷橋一内  
 ○飯田 テイ 東京本郷駒込追分三空園市泉町九  
 ●林 春枝 阿 萩川島 (死亡)  
 ○岩本 静子(林)同 同平安古三重縣鈴鹿郡野登村尾  
 ○工藤 敏子(原)同 同堀福村 京都市田中上柳町二二  
 ●十仁尾 玉 高知縣高岡郡(死亡)  
 ○堀江トミコ 阿 萩江向  
 ○村田 ナミ 同 同川島 宇部市西區上町二丁目  
 ○堀内 トメ 同 同堀内  
 ○豊田喜代子 同 同河添 朝鮮永登浦  
 ○領家 文子 同 宇田郷村 萩町西田町  
 ○岡本 昭子(大津)同 萩濱崎 萩町西田町  
 + ○大谷 キク 同 同橋瀨淵  
 ○渡邊 初子 同 同濱崎  
 ○桑原シヅコ(加藤)同 同米屋町 大連市天神町七八  
 ○浴野テルコ(金國)同 同水車筋 大津郡日置村長行  
 ●○河野ユキヨ 同 同濱崎 (死亡)  
 + ○坪井ヨシコ(金子)同 同江向 朝鮮慶南河東郡靈梁津  
 + ○中津江三知子(片山)同 同濱崎 (死亡)  
 + ○下瀬ミチコ(横山)同 同河添 (死亡)  
 ●○倉田ミネエ(高村)同 同橋 大阪市外千里山二〇七  
 ●○高洲ナヲコ 同 同土原 (死亡)  
 若松 キサ(田中)同 同橋東 萩東田町

●○富田 恒子(竹内)阿 萩濱崎 (死亡)  
 ●村谷 キク(高橋)同 同唐橋 (死亡)  
 ○田村マサコ 同 同山田  
 ●○田坂アヤ子 都 徳山町 (死亡)  
 同 シゲ子(坪倉)阿 萩石屋町 大津郡三隅村市岡光藏方  
 ○佐伯美代子(根来)美 秋吉村 神戸市湊川町五丁目六ノ四  
 ○岡江 登(有田)阿 萩江向  
 ○永田 シヅ 同 同橋東  
 + 青木 勝子(村田)同 同江向 朝鮮平安南道龍岡郡龍岡  
 ○若林 ウメ(井町)同 同濱崎沖 細縣那覇市大門前通  
 岡崎 壽子(信常)同 同平安古 島根縣美濃郡中西村  
 ○神原 幸(野村)同 同橋東 萩町石田古物店隣  
 ○小田 チヨ 同 同山田 東京市外高田町雜司ヶ谷  
 ○小津 ハツ 同 同平安古 金山三三九馬淵方  
 大阪市東區北清水町九三四  
 + ○小野 君子 同 田方崎村  
 ○小野 静子 同 萩橋  
 ○口羽 朝子 同 篠生村  
 ○國重 淑子 同 萩橋東 山口市下野小路字松下  
 ○桑原イトコ(山本)同 同橋東 住所不明  
 ○杉本サカ(矢島)同 高俣村 住所不明  
 + ○田中 ミツ(山田)同 奈古村 住所不明

○古谷 昭子(山中)同 下園市柳ノ町古谷茂治方  
 ●○河上屋房子(八木)同 萩濱崎 (死亡)  
 ○松浦マツ子 同 同橋本  
 ○村田 和子(松林)同 同橋東 明倫小學校  
 松本 恒子 同 同東田町  
 ○大庭 クラ(松浦)同 奈古村 幸福村  
 ○佐々木仁子(福島)同 萩橋東 福岡縣八女郡福島町稻富  
 四六一ノ一  
 ○西尾 末子(古川)同 田方崎村  
 ○兒玉 章子 同 明木村  
 笹井フサ子(兒玉)同 萩堀内 明倫小學校  
 + ○後藤カツヨ 同 同御許町  
 ○須郷 ツチ(小河)同 小川村 横濱市西戸部町堀ノ谷一  
 六九〇  
 ○矢次美智慧(小島)同 萩春若町 大阪府三島郡千里村片山云  
 + ○西村 繁子(小島)同 同橋東 山口市後河原  
 ○遠藤千代子 吉 小郡町柳井田 千葉縣蘇我町馬加二  
 二二  
 ○内藤 豊子(寺山)阿 堀福村 福岡市吉塚七丁目六九九  
 + ○阿武 菊枝 同 川上村  
 + ○秋山 住重 同 萩町 双葉幼稚園  
 田村 壽子(阿武)東京府在原郡池上村雲ヶ谷四〇  
 ○佐竹 昌子(佐竹)美 岩永村 東京市本郷區元町二ノ六  
 ○佐久間ユキ 阿 嘉年村 三明華科醫學學校  
 ○杉山キヨ子(木村)同 萩深園寺 朝鮮黃海道海州北旭町

●北野ツネ子 阿 萩平安古(死亡)  
 + ○岸 綠 同 同橋 都濃郡下松町字殿ヶ谷五  
 五九九  
 ○豊田 ヨシ(行本)同 同河添 宇部市琴芝  
 ○辻 元妃(溝部)同 萩橋東 朝鮮馬山府陸軍官舎  
 西岡 爲子(光國)福岡市庄三五  
 ○青木 アヤ(三浦)阿 萩濱崎 大阪市東區清水谷東之町  
 四六一  
 ○板垣 キヨ(三戸)同 同山田 岡山市門田屋敷一五九  
 ●○宮本マズエ 同 同片河 (死亡)  
 + ○重岡 キヨ 同 同 (死亡)  
 白井 サダ 同 同橋 東京市小石川區老松町ブ  
 ラツクマ1ホム内  
 + ○有田 秀進藤同 香川縣 高松市四番町一ノ一  
 + ○黒田 愛江(境見)阿 萩土原 上海寶樂安路求安里一〇  
 三號  
 ●○末成ウメヨ(平田)同 萩福村 萩町役場  
 ○宗像 俊子(森永)美 眞長田村 友那上海上海紡織株式會  
 社本部  
 ○秋山 孝子(俊川)阿 萩 社本部  
 ○須子美登里 同 小川村 東京市外世田ヶ谷町若林  
 ○山根 サト(水津)同 大井村 一三四  
 ○鈴木ヒサコ 同 萩山田 營口旭街十四號ノ一

資料第九回

大正十年三月卒業(五十音順)  
 久永ツチコ(赤木)阿 朝鮮黃海道長嶺郡邑内

○中村 捷子(井木)阿 東京市深川區東町二二  
○森重 久子(砂)同 萩原内  
○山本 タネ(上田)同 同徳谷 鹿見島市京幸田町四八  
+上野 マサ(植村)同 同橋東 大津郡日置村黄波戸 上  
野和吉方  
○上野ユキ子 同 同平安古(死亡)  
○寺山マ子(江山)同 同福村 吳市古川町三〇ノ六  
○古川 時代(小野)同 奈古村 廣島市皆賀町市營住宅  
○小林ヨシコ(大島)同 萩濱崎 萩町米屋町  
○光野 毅子(河村)同 同橋本 大坂市北區澤上江町七丁  
日七番地  
柴田 一子(河崎)同 同堀内 吳市東二河通五丁目五番  
地  
今田 マシ(來島) 同  
○小崎ヒサコ 阿 萩山田木間 木間小學校  
○石橋 キミ(齋藤)同 同橋東 朝鮮京畿道水源郡發安石  
橋武大方  
○戸田ヨシ子(島本)同 同濱崎 朝鮮釜山南濱町二丁目山  
本方  
○池田 ヒデ(水津)同 奈古村 福岡縣大牟田市三井三池  
鐵業所醫院内  
○河田ヨシ子(宗榮)同 萩橋本 福岡縣若松市三番町四丁  
日祝關官舎内  
○藤田 俊子(田中)同 同川島 福岡縣若松市三番町四丁  
日祝關官舎内  
○村上 清子(田中)同 同北片河 函館市東濱町三九村上駐  
一方  
+○岩本クリ(田坂)同 同橋東松本 阿武郡地福村  
田中フミ子(高木)同 同橋東松本 阿武郡地福村

○河村 雪江(山口)同 同橋 東京市牛込區市ヶ谷谷町  
六八  
○河上ヨシ子(田村)同 同橋河内 臺灣淡水郡淡水街烽火屯  
○角木 稔子(野山)同 同山田 大津郡三隅村  
○小川 トシ(時山)同 同山田中渡 南滿洲五房山申街昭  
和寺内  
茂刈 フユ(刀鍋)同 同東田町 三重縣渡會郡小保町下之  
町七  
○元澤 ヨシ(富川)同 同徳谷町 釜山本町三丁目  
○中村ツル子(中村)同 同福村  
○中村フサ子(中村)同 同濱崎 神戸市相生町四ノ二二七  
高橋吉八方  
○中村 ヨシ 同 同今魚棚 山口市下宇野令一一二一  
釜井方  
○山之内喜代(野田)同 同南古萩 釜井市泉町一丁目七番地  
以下號  
大和屋靜子 同 同橋東  
○波多野トミ子 同 同西田町(死亡)  
○長谷川久子 同 同濱崎 朝鮮水登浦堂山里林雄輔  
會社  
○林 靜子(弘兼)同 同橋東 同山田玉江中渡 朝鮮平壤府外西川  
面仁興里朝鮮無煙炭株式  
會社  
○井野場コト(堀)同 同山田 同山田泉玉江(死亡)  
○川上喜久子(増山)同 同米屋町 關東金州島海町七五ノ六  
會社  
○町田 松子 同 同橋 大分縣長州町木村方  
○林 ヒサ子(松浦)同 同濱崎 萩町新川二〇  
○三上ヨシ子 同 同山田泉玉江(死亡)  
○徳重 萬(松尾)同 同大井村 阿武郡養生村淺川

○御手洗隆子 同 川上村立野(死亡)  
○竹内 チエ(茂刈)同 宇田郷村字惣郷 臺灣臺北州海山郡  
三坑大約三井社宅  
○中原 ヨシ(吉田)同 萩平安古 萩町橋町

實科第十回

大正十一年三月卒業(五十音順)

○竹内千代子(井上)阿 福川村福川 住所不明  
+○白井ムネノ(岩崎)同 萩山田小原  
○柴田サヨ子(岩崎)同 同東田町 朝鮮京城樓井町一ノ〇七  
○植村 親 同 同橋東 (死亡)  
○藤田イセコ(岡)同 萩町青海 都濃郡向道村  
+○掛森 千歳(岡)同 同紫福村 都濃郡向道村  
○高藤 久代(大谷)同 田方崎村 東京市牛込區市ヶ谷臺町  
十二番地  
○谷村 綾江(河村)同 三見村 吳市八幡通一丁目八ノ三  
東京府下阿佐ヶ谷五四七  
○河村 操子 同 同堀内 東京府下上大崎七六七最  
上寺内  
○松井志都子(神田)同 同堀内  
○河村スミ子 同 同橋  
○新田ミツエ(桐山)同 同平安古 朝鮮咸鏡北城郵便局官舎  
内  
○小川ヨシ子(深田)大 菱海村 朝鮮慶尙北道軍威郡邑内  
○黒瀬シズ子 阿 萩江向 滿津撫曲山城町四丁目三  
ノ四  
○村尾 米子(國重)同 同橋東  
○品川 政子 同 同徳谷町

○石田 利子(林成)同 同平安古 廣島市下水主町一ノ三  
○堀 スエ子(杉本)同 同 大坂府北泉郡尾小西万  
喜子方  
○榎屋 菊子 同 同江向 都濃郡徳山町代々小路柿  
並方  
○田村富貴子 同 同橋東 東京市小石川區小山御殿  
町一〇六  
○坂本 文江(田中)阿 萩橋東  
○中村シズコ 同 同橋本  
○大坪節子(中津井)玖 川越村 朝鮮水登浦大和町一丁目  
四番地  
○藤田百合子(中村)阿 萩橋 住所不明  
○宇野 キク(野村)同 同濱崎  
○金湯 菊香(林)無 藤岡村呼坂 東京市芝區白金志田町  
○年光 キヨ(長谷)阿 萩徳谷町 福岡縣戸畑市埴物會社々  
宅  
○大西 房子(林)同 同平安古 長野縣小諸町耳取町三七  
二三番地  
○廣 トミ子 同 同濱崎 東京市外中野町打越二〇  
八幡市東通町一丁目横山  
美虎方  
○平田タキ子 同 同橋 美虎方  
○平野 花子 同 同平安古 朝鮮大立東雲町平野與三  
方  
+○末武千代子(藤田)同 同橋東 萩町越ヶ濱  
○藤本トシ子(藤田)同 同橋 大津郡三隅村字宗頭  
○藤原 靜子 同 同笠屋 (死亡)  
○堀 幹子 同 同橋東 松江市北堀前ノ丁  
○松本 ヒナ 同 三見村 住所不明



○關屋キヨコ 同 同五町 三見小學校  
 ○井上 キタ(田村)同 同椿 萩町真玉江  
 ○岩崎ハナコ(田村)同 同河添 朝鮮咸北清津府相生町三丁目  
 ○平岡 芳子(田村)美 大田町 支那上海楊樹浦路裕豊紗廠社宅  
 ○田村フミコ 大 菱海村 阿 萩町越ヶ濱  
 ○友永ヒナコ 美 大田町  
 ○石津 敏子(内藤)阿 福川村 大連市沙河口白金町二番地  
 ○中原シズコ 同 福川村  
 ○村上 初代(中本)同 田万崎村 愛媛縣宇和島市宇史窪  
 ○梅地 キサ(中村)同 大井村  
 ○村岡アキ子(西山)同 萩川島  
 ○原田 テル 同 同江向 京城岡崎町五〇ノ五  
 ○守永フチ子(林) 同 同川島 同下五間町 神奈川縣河崎中幸町二二  
 ○阿川アキコ(林) 同 同 一二  
 ○波田野フミ 同 三見村  
 ○福永 ミツ 同 萩堀内 天津郡菱海村伊上浦  
 ○中谷ミチ子(福住)大 菱海村 福岡縣枝光大川社宅  
 ○三浦ミサコ(藤田)阿 萩土原 福岡縣京都郡行橋町渡邊君正方  
 ○堀本トキ子 同 同堀内 朝鮮京城明治町二丁目  
 ○松浦タケ子 同 同橋本町 萩町越ヶ濱  
 ○松原 ムメ 同 奈古村

實科第十三回

大正十四年三月卒業(五十音順)

○野田 和子(三輪)阿 萩椿東 廣島縣佐伯郡八幡村中地  
 ○水島ヒサヨ 大 菱海村  
 ○村田シズ子 阿 萩濱崎  
 ●武藏屋梅子 同 同 (死亡)  
 ○森田富士枝 同 三見村  
 ○吉屋 タケ 同 大井村 南滿洲奉天紅梅町一二番地二ノ六  
 ○石原フジ子(渡邊)福岡縣鞍手郡新入村 福岡縣鞍手郡宮田町大浦五坑 貝島舊宅内

○伊藤シヅコ 阿 萩前小畑  
 ○伊藤 コト 同 同濱崎 朝鮮慶尚北道浦項米曲組合内 永田孝直様方  
 ○池田 キミ 同 奈古村  
 ○井上 清子 同 小野村  
 ○井町フク子 阿 萩濱崎  
 ○津野マス子 大 菱海村  
 ○上田 ヒナ(岡田)同 深川町港  
 ●大草 操 阿 須佐町 (死亡)  
 ○小田 文子 同 奈古村  
 ○小田 マツ子 同 同村  
 ○片山 政子 同 大井村 住所不明  
 ○河崎 イト 同 萩濱式町 大飯市西淀川區十三西ノ町二九 金子方

●佐藤ヤス子 同 生雲村 (死亡)  
 ○佐々木トキ子 同 吉部村 萩小橋助長濱醫院内  
 ○末武キクノ 同 萩越ヶ濱  
 ○小島クマコ(田中)同 奈古村 神戸市菊水町七丁目二三  
 ○田中 末子 同 大井村  
 ○谷村スミ子 大 菱海村  
 ○高洲 リヨ 阿 萩金谷  
 ○遠重 イツ 同 篠生村  
 ○安野 貞子(水田)同 大井村 紫福村字小西見  
 ○深田字多子 大 菱海村  
 ○藤原サチコ 阿 萩大谷 臺灣臺中壽町一ノ八西坂宅三方  
 ○堀尾シズエ 同 同堀内 岡山縣兒島郡琴浦町村下駒一方  
 ○杉浦 チヨ 同 大井村 朝鮮京城三坂通り六〇ノ二  
 ○藤村ヨシノ(町田)同 萩江向  
 ○三浦 文子 同 同濱崎  
 ○山崎ヨシ子 同 同熊谷町  
 ○久保田菊子(八木)同 同西田町 朝鮮京城本町二丁目十五  
 ○吉永 久子 美 萩木村金樂  
 ○松本 操(吉村)阿 萩青海 萩町東濱崎  
 ○阿武トシロ 同 同川島 山口市道場門前二八

實科第十四回

大正十五年三月卒業(五十音順)

○砂 君子 阿 萩堀内  
 ○岩本 雪代 同 同木村  
 ○原田シキブ 同 萩山田  
 ○波多野照代 同 同濱崎  
 ○堀野 文子 同 田万崎村  
 ○高杉キヨ子(大野)美 大田町  
 ○小田カメユ 阿 奈古村  
 ○天田キシロ 同 田万崎村 三見小學校内  
 ○小野千代子 同 奈古村  
 ○岡 和子(大田)同 萩川島ニツ森 明倫小學校  
 ○足利スミ子(渡邊)同 同濱崎 臺灣臺中壽町二丁目  
 ○金子 ツル 同 福川村  
 ●河村美登里 同 萩椿東無田口(死亡)  
 ○吉屋 晴子 同 同木村  
 ○田村モミ子 同 同濱崎  
 ○立野ハルヨ 同 同濱崎  
 ○津田 幸子 同 須佐町  
 ○都野幾久子 同 萩江向 朝鮮大邱府東雲町六六  
 中村 君子 同 同椿東松本  
 ○森重智恵子 同 六島村大島 萩町津守町  
 ○栗田 菊司 同 吉部村 萩町堀内  
 ○山田モモヨ 同 萩椿東松本 住所不明  
 ○山本 絹子 同 同東濱崎



- 松浦 愛子 同 大井村
- 藤原キタノ 同 福川村
- 安藤 ツル 同 萩椿香川津
- 君谷 藤子 同 吉部村 小川尋常高等小學校
- 三好富貴子 同 萩吉田町
- 末成 佳子(下瀬)同 笠福村 阿武郡吉部村
- 窪田 祥子(品川)東京府下世田ヶ谷町太子堂四八
- 茂刈 菊代 阿 宇田郷村
- 吉村 満子(末永)同 笠福村 阿武郡高俣村岸高

實科第十五回

昭和二年三月卒業(五十音順)

- 池田スエノ 阿 笠福村
- 三好チトセ(井上)美 秋吉村 東京市本郷區眞砂町一六三好俊行方
- 波多野愛子 山口市八幡馬場 萩町江向
- 林 富子 阿 萩平安古
- 藤田トミユ(大山)同 同 萩 椿海
- 小野村満子 同 同 萩 萩町後小畑
- 河内山照子 同 同 萩 萩町西田町
- 花村ハツ子(横山)同 同 萩 東京市外在原郡目黒町下目黒六四一 植村方
- 田中ヤスエ(上村)同 同 萩 同 萩 同 萩 同 萩
- 中村 節子 同 同 萩

實科第十六回

昭和三年三月卒業(五十音順)

- 上野キヨ子 同 同 平安古
- 宇野 英子 同 同 川島
- 山村八重子 同 同 吉部村
- 山村 イシ 同 萩椿東 新川
- 富田トシヨ(山本)大 荻海村 大津郡三隅村宗頭小學校
- 藤田ヤスコ 阿 萩椿青海
- 吉屋キミエ(寺戸)同 同 萩椿東 大連市錦町
- 矢田ヨシノ(上利)大 荻海村大字伊上
- 有吉フサ子 阿 萩西田町
- 齋藤 豊子 同 同 萩東田町
- 三村キタ子 同 同 福川村
- 品川 和子 同 同 北海道示志郡乙部村東京市外豊多摩郡代々幡町大字代々木初臺六三時永方
- 平川 フジ 阿 萩平安古 見嶋村駐在所
- 森田 キミ 同 同 田方崎村
- 森川ハツ子 同 同 萩土原
- 末成タケ子 同 同 吉部村
- 井上 幾代 同 同 岡山縣上房郡高梁町 萩町椿東
- 伊藤 芳子 同 同 川上村
- 岩崎フジ子 同 同 萩東田町 東京市小石川區下富坂町二〇小野女塾

- 原川 芳子 阿 萩 柳井町 萩町土原
- 林 孝子 阿 萩北古萩
- 長谷川明子 廣島縣廣品郡羅家村 京都帝大醫學部附屬醫院中宿舎
- 細川サト子 阿 川上村 萩町江向
- 大塚 調子 同 須佐町
- 大田 美子 同 大井村
- 渡邊キクコ 同 萩濱崎 門司市宗利町一丁目野坂一方
- 河村千代子 同 同 椿東
- 河村トミ子 同 同 明木村 宇部市琴芝町温谷芳子方
- 横山 清子 同 川上村字熊谷 京都市外山科町音羽
- 田中 芳子 同 萩濱崎 萩町渡り口
- 中澤イセ子 大 荻海村
- 中村富美子 阿 萩江向
- 中原タカ子 同 萩御許町
- 山中 瀧榮 同 同 平安古 東京市外瀧野川中里三七五錦華寮
- 山田フジノ 同 宇田郷村
- 堀 貞子(松永)大 日置村 萩町雜式町
- 松岡マズ子 阿 萩北古萩
- 松浦 篤子 同 大井村
- 増井 孝 東京市芝區高輪町 熊本縣球磨郡人吉町南町
- 藤田アサコ 阿 萩青海
- 阿武マツ子 同 三見村 三見村中山

實科第十七回

昭和四年三月卒業(いろは順)

- 阿部 嘉子 同 萩川島
- 佐藤百合子 美 綾木村 神戸市灘區河原三八四
- 齋藤 豊子 朝鮮京畿道土城 臺灣花蓮港 電氣株式會社住宅サバト
- 惠美須屋マス(岸)阿 萩椿町 萩町玉江
- 北村喜代子 同 萩江向
- 御手洗菊枝 同 川上村 川上村立野
- 三輪 美子 同 紫福村 萩町御許町
- 柴田キヨ子 同 三見村 三見村浦
- 森田マツ子 同 同 宇田郷村 三見村河内
- 茂刈 文子 同 同 宇田郷村
- 井川志末子 大 三隅村
- 石津スミ子 阿 明木村 萩町川島
- 林 トミ子 同 萩川島
- 林 宣子 同 同 平安古
- 西尾 祥子 同 田方崎村 徳佐村魚山小學校
- 西村 正恵 高知縣土佐郡下知町 吳市東二河通り二丁目六ノ五阿部方
- 堀江 靖子 阿 萩江向
- 岡崎 政子 同 川上村高瀬
- 岡崎 壽子 同 同 萩濱崎
- 河内山千壽江 同 萩濱崎 東京市本郷區西片町一〇若山要二内



○藤村 静代 同 同熊谷町  
 ○藤田 菊枝 同 同南片河町  
 ○藤田 ヒサ子 同 同椿西  
 ○福永 徳榮 同 同東田町  
 ○三浦 鳩子 同 同河添  
 ○三浦富美子 同 同北古萩  
 ○三隅田貞子 同 同平安古  
 ○矢次 清子 同 同  
 ○山本 照子 同 同熊谷町  
 ○吉岡トキヨ 同 同  
 ○吉崎 久子 同 同  
 ○吉田 千代 同 同  
 大正十年三月卒業(五十音順)  
 ○平岡ハルヲ(池田)阿 萩土原 新義州府殖産銀行社宅  
 ○荒地 久子(石川)同 同 萩町津原  
 ○横山 龍子(坂垣)同 同東田町 住所不明  
 ○山本静子(宇多田)同 同椿東 大阪市東淀川區三國本丁  
 ○伊藤千代子(大山)同 同椿西 大津郡三隅村中尾  
 ○綿貫ユウ子(小田)同 奈古村  
 ○三井チヨ(小野村)同 萩山田 萩町新川  
 ○竹村タキ子(岡本)同 同春若町 朝鮮慶南金海郡進禮面

本科第一回

○小島 基(大深)同 同 萩町中小畑  
 ○大本カヅノ 同 同 佐賀村 熊 佐賀小學校  
 ○泉原 壽子(桂)阿 同 長府町松原  
 ○賀屋ヒデ子 同 同土原  
 ○笠原キタコ(河村)同 同 門司市大久保越  
 ○國重タツ子 同 同東田町 廣島市吉島町  
 ○有馬 淑子(國弘)同 同 萩雜式町  
 ○栗田シゲヨ 同 同 嘉年村  
 ○倉重フミコ 同 同 萩椿東  
 ○小池キヨコ 同 同 生雲村 (死亡)  
 ○小嶋 貞子 同 同 萩椿東 (死亡)  
 ○河村千代子(小枝)同 同 同演崎 滿洲撫順南臺町二丁目七  
 ○佐伯 清子 同 同 福川村 香地ノ七  
 ○神崎シズコ(坂本)同 同 明木村  
 ○佐久間ユキ 同 同 嘉年村 東京市本郷區元町二ノ六  
 ○山ミサ子 大 同 向津具村 三 明華商科醫學校  
 ○瀨川 愛子 阿 同 生雲村 大連市大江町六 吉屋貞  
 ○山村トラコ(谷川)同 同 三見村 萩玉江浦  
 ○椿 マスコ 同 同 佐々並村  
 ○兒島ノブ子(坪野)同 同 萩濱崎 下關市豊前田町兒島林吉  
 ○中村サカエ 同 同 同江向 朝鮮全羅南道康津郡公立  
 普通學校

○森 テルコ(中村)同 同八丁 臺北市大正町九條通り三  
 ○阿武ツチヨ(能美)同 同 川上村 丁目三十二 中村方  
 ○原 ユキヨ 同 同 住所不明  
 ○原田 光子 同 同 共和村  
 ○村岡ミツ子(藤村)阿 同 同 萩熊谷町 東京府下世田ヶ谷下町六  
 ○藤山於兔子 同 同 同川島  
 ○守永フミコ(堀)同 同 同演崎  
 ○有富ミサヲ(松浦)同 同 同山田 福岡縣田川郡後藤寺町平  
 ○兼田 勝子(溝部)同 同 同河添 松 椿西小學校  
 ○三浦アサヲ 同 同 同 島根縣簸川郡西濱崎 住所不明  
 ○三好 マツ 同 同 萩香川津  
 ○椋木 里 同 同 三隅村  
 ○守永 節子 同 同 生雲村  
 ○大藤 キク(山本)同 同 同山田 住所不明  
 ○山根 静子 同 同 大井村 (死亡)  
 ○兒玉 キヨ(吉村)同 同 同椿 朝鮮平安北道泰川郡院西  
 ○白井 サダ 同 同 同椿東 東京市小石川關口臺町二  
 ○有吉ノブ子 同 同 同西田町 六  
 ○岡村 マス(有吉)同 同 同北古萩

本科第二回

大正十一年三月卒業(五十音順)  
 ○原いせ子(阿武菊子)阿 同 同 住所不明

○阿武 重子 同 同 福川村  
 ○堀 可子(石津)同 同 萩堀内 奉天瑠葉町一五  
 ○若林 敏子(板谷)同 同 同山田 上海吳淞路三三號  
 ○宇佐川都子 同 同 同堀内 千葉縣成田町花咲町  
 ○高田 花子(小田)同 同 同熊谷町 下關市西細江町  
 ○仁保 克子(大田)同 同 同 阿武郡須佐町  
 ○大田 キク 同 同 萩椿東 (死亡)  
 ○中村 アイ(大藤)大 同 同 向津具村 山口市錢湯小路  
 ○金子シズコ 阿 同 同 萩椿東 小倉市古船場一  
 ○兼重 龜子 同 同 同十日市筋  
 ○牛尾千代子(河村)同 同 同西田町 (死亡)  
 ○木村テルコ(河村)同 同 同 明木村 東京市外中野町内越二〇  
 ○安達 壽子(木村)同 同 同 萩北古萩 佐渡郡防府町三田尻青木  
 ○口羽 龜古 同 同 同 篠生村 町 南米ブラジル  
 ○黒瀬チヨ(久保田)同 同 同 萩椿東 東京府豊多摩郡野方町上  
 ○百合野花子(久保田) 同 同 同 下關市外彦島町江浦區百合野真一方  
 ○兒玉 貞(兒玉)阿 同 同 田万崎村 沼袋八二番地  
 ○吉原 ヒナ(笹井)熊 同 同 同 同 萩  
 ○佐々木民子 大 同 同 三隅村  
 ○齋藤 貞子(齋藤)同 同 同 小倉市米町二二三ア一 齋藤正敬方  
 ○杉 愛子(齋藤)阿 同 同 同 田万崎村 徳佐村  
 ○末岡 良子 同 同 同 紫福村 住所不明

- 能美フサ子(鈴木)同 萩山田 川上村字山田
- 吉本ヒナ子(鈴木)同 須佐村 小倉市米町九丁目
- +○末若ヨシコ 同 奈古村 奈古小學校
- 金子 静江(瀬口)同 明木村 (死亡)
- 永田 能生 同 大井村 住所不明
- 渡邊 春江(中原)同 萩椿東 住所不明
- 中村 静子 同 同萩町 住所不明
- 中村八千代(中村)同 同江向 東京府杉並町高圓寺六〇
- +○岸 ヨシコ(上野)同 同椿 三
- 安藤八重子(蓮池)同 福賀村 高俣村
- 服部 貞子 同 萩土原 明倫小學校
- 大野チエ子(平田)同 同江向 住所不明
- +○笹田 朝子(福富) 鮮馬縣北甘樂郡下仁田町
- 松浦 コウ(松浦)阿 大井村 東京市外岩淵町稻村一〇
- 信常己知子(松田)同 萩椿東 二四
- 荒地ニキ子(前田)同 同後小畑 大阪府三島郡茨木町上中
- 安藤ヒサ子(三隅)同 同五間町 萩町雜賀下リ
- 畑 ヨシ子(坂本)大 三隅村 神奈川縣川崎市旭町二丁目四三七
- 村上 コト 阿 萩東田町(死亡)
- 岡島ミサヲ(矢島)同 高俣村 住所不明
- 藤井 カツ(山縣)同 六島村 豊洲郡豊田下村
- 中村 直子(大和)同 萩雜式町(死亡)

本科第三回

大正十二年三月卒業(五十音順)

- 吉村 ヒナ(吉賀)同 同濱崎 萩東田町
- 角 シヅコ(吉田)同 同平安古 住所不明
- 中村 オス(吉村)同 同熊谷町 朝鮮仁川府新町三六
- +○秋山 京子 阿 萩南古萩
- 安藤 クリ 同 同椿東
- 阿武 米子 同 同川島 (死亡)
- 大谷 キタ(池上)吉 秋穂二島村 梅西小學校
- 山根 フサ(石井)阿 萩椿東 (死亡)
- 石川 ツル 同 同濱崎 大津郡正明市
- 藤原 存子(石津)同 同河添 朝鮮平壤東町陸軍官舎乙區第六號
- 伊藤 菊子 同 大井村 紫福小學校
- 橋 ミツ子(井上)同 萩河添 横須賀市
- 小谷ミツ子(小川)同 宇田郷村 大分縣龜川町新川
- 小野 フサ 同 奈古村
- +○河内山織子 同 萩平安古 萩町江向
- +○柏木 晴子(柏木)同 同東田町 三田尻
- 波多野壽満子(片山)同 東京市半込區市ヶ谷木村町一五
- 森田マツコ(兼田)同 朝鮮慶尙南道蔚山錦町一丁目
- 北野フジヨ 同 萩平安古 大坂市西成區粉濱中之町二丁目二五

- 佐古 花子(木原)同 同川島 (死亡)
- 桑原 小春 島根縣鹿足郡津和野 阿 萩平安古
- +○桑原 サヨ 阿 萩平安古 (死亡)
- 桑原 節子 同 田万崎村 田万崎村多摩尋常高等小學校在職
- 宮井 マキ(小茅)同 萩濱崎 朝鮮東萊郡東萊城内宮井春一方
- 三元 信子(新庄)同 同新堀
- 郡 美代子(鈴木)同 同椿東 熊本市春日町七七九
- 助石アサ子 同 同平安古
- 圃田 テル 埼玉縣秩父郡影森村
- 田坂 幸子 阿 萩江向
- 田總 ユキ 同 同平安古
- 大賀 静子(中村)同 同 朝鮮
- 永安 静枝 同 同椿東
- 中村 春子 同 同椿 北海道空知郡沼貝村美唄炭坑社宅稻村馬太方
- 中村 君代 同 同御許町
- 濱田 豊子(中原)同 福川村 萩町江向
- 長嶺 光子(永留)同 萩玉江浦
- 正司 静子(野村)同 同下五間町 朝鮮慶尙北道邑内
- 久保田素子(羽仁)同 同山田 朝鮮元山府外勝湖里小野田セメント川内支社宅
- 林 アサ 同 同江向
- 河村 梅子(福永)同 同橋本町 金北全州面高砂町五七

本科第四回

大正十三年三月卒業(五十音順)

- 藤田 カツ 同 同 臺灣臺北景町一ノ四
- 波多野トキ子(堀)同 同川島 萩町唐柳町
- 三浦 テル 同 同濱崎
- 木村大久子(三島)同 同 臺北市大正町三丁目三
- 海部キクエ 同 同椿東
- 三好 敏子 同 同東田町
- 三村ミサヲ 同 福川村 神戸市千鳥町二ノ三九
- 松屋 義子(三輪)同 萩御許町 萩濱崎
- +○椋木百合子 同 同松屋町
- +○森田 ヤス(村本)同 萩町 廣島縣安藝郡熊野町森田原光方(死亡)
- 村橋 元子 同 同唐柳町
- 伊藤 壽子(森田)同 三見村 萩町大字山田區小原(死亡)
- 安間アヤコ 同 福川村 (死亡)
- 山縣アサ子 同 萩平安古
- +○津田トキコ(山中)同 蕙美須町 東京市外日黒町九ノ五
- 西永 ひさ(矢野)熊本市六品寺町三丁目五〇〇 住所不明
- 白石 キク(赤崎)阿 萩堀内 萩土原
- 田中 俊子(伊東)同 佐々並村 神戸市池田廣町一八九
- 伊藤壽美子 同 萩土原
- 長嶺ハツ子(池永)同 同山田 萩新橋

○金子千壽子(岩武)同 磐福村 高知市小高坂越前町八〇  
 ○佐藤スミ子(井町)同 萩濱崎 釜山富平町一丁目  
 ○惠美須屋ツル 同 同山田區玉江都 鹿野實業補習學校  
 ○高原ハルノ(桶谷)大 三陽村 住所不明  
 ○大田 貞子 阿 萩山田  
 ○大田 ユク 同 同無谷町  
 ○重友 滿枝(岡田)同 同平安古 旅順市常盛町一番地  
 ○村田 清子(神崎)同 川上村 萩町川島村田方  
 ○野北 トヨ(香川)同 萩濱崎 朝鮮城南興南朝鮮醫藥師  
 科修式會社住宅第一區八  
 十八號  
 ○鈴木 佳子(金田)同 福川村 朝鮮黃海道海州中町  
 ○河村 信子 同 萩西田町  
 ○河村 エキ子 同 同御許町  
 ○國光フキ子 同 同 住所不明  
 ○中丸 元子(猪藤)同 同 大津郡仙崎町  
 ○品川 光子 同 同 彌富村  
 ○杉山 綾子 同 同 萩土原 大島郡蒲野村(註)蒲野小學  
 校內三浦實業補習學校內  
 ○須子 和子 同 同 小川村 吳市草里町五四番地三好  
 桃太郎內  
 ○松倉サト子(高州)同 萩土原  
 ○田村ヒサヨ 同 須佐町  
 ○刀彌 琴子 同 萩東田町  
 ○小倉ハル子(富田)同 同土原 福岡西公園內

○岩本 樟子(永田)同 同 横濱市中區下町アパード  
 二號館一〇二號  
 ○永野 文子 同 同 同橋本  
 ○佐伯 照子(中村)同 同川島 朝鮮龍山野砲官舎云號  
 ○中村 政子 同 同 吉部村  
 ○鈴木トメ子(野北)同 萩河添  
 ○林 菊枝 同 須佐町 住所不明  
 ○弘 ヒサ子 同 萩津守町  
 ○室 ナエ子(藤井)同 三見村 大坂市西淀川區浦江町七  
 四七  
 ○窪井 藤江(藤井)同 萩江向 大 菱海村  
 ○阿座上マサコ(藤本)同 同川島 朝鮮全羅南道光州西光山  
 町  
 ○井原トモ子(藤原)同 同梅東 朝鮮黃海道瑞興郡細坪而  
 芝山里  
 ○古川 愛子 同 田万崎村 島根縣鹿足郡日原村左邊  
 營林署官舎內  
 ○若松楠緒子(藤田)同 萩土原 兵衛縣武庫郡本山村森若  
 松八郎方  
 ○堀 テフ 同 同東濱崎 松八郎方  
 ○堀 マサコ(松浦)同 同濱崎 朝鮮仁川府本町二丁目二  
 十二番地  
 ○島山 榮子(三好)同 同東田町 福岡縣若松市大島  
 ○元山 初子 同 德島市安三島村(死亡)  
 ○濱中 光子(森)同 萩町江向 京都市岡崎區勝寺九一  
 ○河瀬 春子(森屋)同 同米屋町 萩町油屋町河瀬方  
 ○山田 富子 同 大通村  
 ○山根千代子 同 大井村 岩國町偏見森木

本科第五回  
 大正十四年三月卒業(梅組)(五十音順)

○三村スエ子(山藤)同 萩山田 三見村河內  
 ○吉村 コト 同 同熊谷町  
 ○守永 房江(渡邊)同 朝鮮京城府旭町一丁目市場  
 ○吉田初江(波多野)島根縣阿井村都 祝島  
 ○梶森 秀子(村上)愛媛縣今治市 住所不明  
 ○岩國 芳枝(有吉)阿 萩川島  
 ○阿武 スミ 同 福川村黒川  
 ○伊東 將子(阿武)同 川上村  
 ○石津 和子 同 萩河添  
 ○江川 利子 同 同山田 (死亡)  
 ○大岡 高子 同 須佐町  
 ○大田 温子 大坂市天王寺區東上町三八 中川育子方  
 ○岡 トヨ 阿 萩熊谷町 東京市麴町區下二番町老  
 ○佐々木アサ子(大山)同 同梅町 吉部小學校  
 ○河村タキエ 同 同  
 ○川上富貴子 同 同御許町 福岡縣嘉穂郡飯塚  
 ○河村登美子 同 同川島 京城府御成町一五〇河村  
 清治方  
 ○神代 照子 同 同八丁  
 ○河野ウメ子 同 同橋本町 山口市飯田町高尾方  
 ○金川 露子 同 同土原

○市川美壽子(木谷)同 同堀內 (死亡)  
 ○久志アヤ子 同 佐波郡防府町宮市 臺灣加茂郡便局  
 ○熊野ヒサ子 同 萩土原 山口市湯田一本松安武方  
 ○熊谷 愛子 同 同今魚店町  
 ○大崎ミヨ子(後藤)同 二ツ森大崎  
 ○岩武 尚子(佐伯)同 福川村 (死亡)  
 ○齋藤 貞子 同 萩梅東 山口市天華雲谷庵下  
 ○篠原 光 同 島根縣美濃郡小野村  
 ○尾崎婦美子(鈴木)阿 萩梅東 大津郡深川村藤木  
 ○中野キクヨ(末成)同 吉部村 臺南嘉義街北門外三三五  
 ○武居 榮子 同 下松町 萩町平安古  
 ○竹下ハナ子 同 萩梅東 京都市六角油小路西入森  
 田鶴鶴方  
 ○高橋ミチ子 同 同唐福町 神戸市天野町天王谷 田  
 村方  
 ○内藤 静江 同 同木村  
 ○中村トヨ子 同 萩梅東松本  
 ○中村 信子 同 同 結婚  
 ○井町イト(奈古屋)同 同米屋町  
 ○西山 文子 同 同山田  
 ○能美 ナヨ(香沼)同 同中津江 中津江  
 ○原田シヅコ 同 同土原 滿洲大石橋大正街一ノ三  
 ○大坂 宣子(原田)同 同江向 岐阜縣岐阜市春日町二丁  
 目北組

○福水ヒサ子 同 同橋本 安奈線草河口河上春亮方  
 ○堀 俊子 同 同江向 横濱市神奈川區青木町澤  
 ○傾野シヅ子(松浦) 同 萩村東香川津 波谷一六〇〇  
 ○三好 民子 同 萩村東香川津 萩平安古  
 ○光井 泰子 同 同濱崎  
 ○村上フサ子 同 三見村  
 ○村谷チヨコ 同 萩山田  
 ○森田 繁子(本水)同 同堀内 臺北市米廣町五ノ十  
 ○森尾シゲ子 同 同御許町 山口市大附町森尾虎太郎  
 ○依 文子(山田)同 同平安古 島根縣濱田町蛭子町  
 ○山本 房江 同 川上村 高瀬長井内  
 ○井本 義子 同 須佐町  
 ○横山ミサヲ 同 川上村 熊毛郡三丘村  
 ○坂本ミサヲ(松田)同 萩川島 山口市大殿小路三吉方  
 ○長井アヤ子 同 川上村

本科第五回

大正十四年三月卒業(菊組)五十音順

○藤田千代子(秋山)阿 萩五間町 (死亡)  
 ○石川ナツ子 同 同橋西 (死亡)  
 ○内田 恭子 同 吉部村  
 ○岡本トシエ 同 萩村 (死亡)

○昭田 カツ 同 同橋東香川津  
 ○師井 勝子(小野)同 奈古村 萩町熊谷町  
 ○岡村與志子(岡村)同 萩濱崎 萩町雁島  
 ○小川テツ子 同 同橋東松本 東京府下松江隣保館  
 ○柳 時子(河邊)大 三隅村 山口市清水  
 ○金子 ヤハ 同 萩江向 住所不明  
 ○木原 キヨ 同 同橋東小畑  
 ○窪田智恵子 大 菱海村  
 ○國重 節子 同 萩村東松本  
 ○齋藤 春子 同 同土原 福川高等小學校  
 ○綿谷山久代(曠見)同 同橋西 樺太豊原町東三條南一丁目陸軍官舎第一號  
 ○鈴木百合子 同 同山田 住所不明 朝鮮  
 ○清水富美子 玉野同 同橋東 住所不明 朝鮮  
 ○高橋クニ子 同 同  
 ○藤田 芳子(竹内)同 同濱崎 靜岡市水落町一丁目二九  
 ○田中 花子 同 同五間町 (死亡)  
 ○種子千代子 同 吉部村 高俣小學校在職  
 ○梅 シズ子 同 萩村東 萩町土原新道  
 ○飛田 久子 同 田万崎村  
 ○岡村 芳子(中村)同 萩土原 大阪市港區泉尾北村町二丁目八八  
 ○長井 龜代 同 同橋西 (死亡)  
 ○長村 ウメ 同 同 (死亡)

本科第六回

大正十五年三月卒業(梅組)いろは順

○原 シゲコ 同 同御許町 白水小學校横  
 ○林 吉子 同 同橋西 (死亡)  
 ○林 露子 同 川上村 福川村  
 ○平井キミコ 同 萩熊谷町 朝鮮永登浦京町村田  
 ○福谷 政子 同 同津守町 萩町西田町  
 ○藤屋 泰子 同 同東田町  
 ○福山 壽 同 同橋 奈古小學校  
 ○松林 英子 同 同橋東松本  
 ○松岡アヤ子 同 同北古萩 下關市裏町三ノ三松田方  
 ○末國富士枝(馬來)同 同堀内 横須賀市外大津宿一二八  
 ○三戸 歌子 同 同山田  
 ○宮内マツ子 同 同熊谷町  
 ○清部ミドリ 同 同橋東目代  
 ○野村ツル子(宮内)長春敷島通り五ノ八  
 ○村上キヨ子 同 萩五間町 南滿洲瓦房店大和街十七番地ノ一號  
 ○原 良子(柳田)同 同橋 南滿洲瓦房店大和街十七番地ノ一號  
 ○山根 キク 同 同吉田町  
 ○山根 芳子 同 大連市外周水子 小野田セメント會社々宅齋加方  
 ○山田 ヤハ 同 萩村東無田原 住所不明  
 ○山本 繁子 同 同御許町 吳市今西通り七丁目九ノ一  
 ○山本 貞子 同 同濱崎  
 ○山本フユコ 同 同橋東松本

○芳野 和子 同 同平安古  
 ○渡邊キヨ子 同 同山田  
 ○清水 久子 同 同福川村黒川  
 ○石川サザ子 同 萩濱崎  
 ○今津シヅコ 同 同橋區濁淵  
 ○井上 綾子 同 福川村 東京市外馬込町三六六九丁目八八  
 ○井町 梅子 同 生雲村 木村方  
 ○服部クマ子 同 同橋西 (死亡)  
 ○長谷川マサ 同 廣島縣豊田郡東野村 萩町新川  
 ○赤木千代子(波多野)阿 萩濱崎 朝鮮成南交用郡川巾里  
 ○林 諒子 同 同御許町 神戸市東須磨鐵道官舎廿四ノ四  
 ○原田ミツコ 同 同山田 東京市赤坂區米川町五二  
 ○原 テイ子 同 美 赤郷村 堀野三郎方  
 ○堀永サトリ(小野村)阿 萩村東 山口縣小野田町小島七郎  
 ○大谷 ハツ 同 同 萩新川  
 ○岡村 セツ 同 同土原 撫順東三條通樂天地西村  
 ○岡 里子 同 同山田 萩東小學校  
 ○渡邊 愛子 同 同川島 宇部市西區上町二丁目四番方

- 金子 荻野 同 三見村 荻明倫小學校
- 鍵村シズ子 同 荻江向 大連市八幡町二六下野方
- 河野マツ子 同 奈古村 (死亡)
- 河野チエ子 同 共和村
- 吉賀ヨシ子 同 荻橋東 小畑(阿武郡大井小學校)
- 山根不二子(吉見)同 同河添 厚狭郡厚南村沖日、眞鍋氏方
- 中村トミ子(田村)同 同格 廣島縣賀茂郡廣村海軍官舎丙五號
- 田村千代子 同 同羅式町 大津郡仙崎町今浦町
- 桑田 末子 同 同格東 大津郡日笠村
- 波多野トシ(武田)同 同山田 富山縣伏木町古府
- 池田 芳子(高橋)同 同土原 東京府下尾久町字上尾久
- 中原 光子 同 同江向 一六二六-一佐々木龍一方
- 繩田千代子(宗實)同 同惠美須町 東京府外杉並町高圓寺七-一〇
- 村岡チヨコ 同 同格區瀨瀨
- 村田 幸子 同 同唐穂町
- 百濟 荻江 同 同格東 朝鮮釜山府榮町一丁目五
- 濱崎ミヤ子(久保)同 同濱崎 荻町江向(死亡)
- 山本 照 同 同川島 大阪府豊能郡庄内村字三
- 山本 静子 同 同古萩 大八四
- 土井喜美子(丸尾)下關市西細江町 荻町勤王町
- 藤井ヲツギ 同 荻山田 朝鮮新義州常盤町七丁目 岩本矢衛門方

- 吉山登喜江(小松)同 同格 荻町上五間町
- 青木アサコ(寺田)同 同格東小畑 山口縣小野田セメント會社々宅
- 伊藤 トヨ(有吉)同 同古萩 厚狭町
- 有吉 八枝 同 同川島
- 坂本 於積 同 同熊谷町 神戸市平野町天主谷田村
- 齋藤 政子 同 同濱崎 方
- 木村フジヨ 同 同川上村
- 三輪 恒子 同 荻御許町 山口市新道赤井榮助方
- 柴田シヅコ 同 同川上村 (死亡)
- 神保富美子 同 荻橋東 大阪府住吉區天王寺町三
- 澄川 トク 同 同土原 生雲村藏日喜小學校

本科第六回

大正十五年三月卒業(菊組)いろは順)

- 伊佐 貞子 同 荻本町 東京小金井關野新田四四
- 井町アツコ 同 三見村 一倫豊助方
- 松本 織代(岩崎)同 荻橋東 明倫豊高等小學校
- 橋本 貞子 同 同格東 朝鮮京城府明治町二丁目六十九番地
- 松本 壽子(羽鳥)同 同格 荻町熊谷町
- 土井千鶴子 同 同格東
- 寺田マツ子(岡崎)同 同 荻山田 臺灣臺北州七星郡湖庄内 三井寺田進治方

- 窪田スミ子(金子)阿 大井村 大津郡日置村
- 河野 厚子 同 荻橋東
- 桂 松子 同 同土原 荻町江向
- 和屋トミ子 同 同魚店 姫路市京口町五五三宮永
- 上田 道子(河野)同 同橋本 岩一方
- 吉山シヅ子 同 同山田 大坂市西成區松通リ五丁目
- 松井ウメ子(吉屋)同 同油屋町 住所不明
- 永岡ミサコ(高洲)同 同土原 荻町八丁川島
- 多田 照子 同 同格東 東京市牛込區通寺町二二
- 追問芳宜江(瀧口)同 同木村 朝鮮釜山府瀧州町六十二
- 澤 正子(田中)同 荻濱崎 名古屋市外鳴海町なるみ 莊一三五
- 竹重壽美子 同 同江向 山口市東白石二二〇二
- 山本 保子(津守)同 同木村 木間
- 中村タチ子 同 荻山田
- 中島 壽子 同 同川島
- 村上 玉子 同 東京府下豊多摩郡澁谷町
- 竹内 イシ(植木)阿 荻山田 阿 明木村字借吹
- 村田 筆子(梅幸)熊 光井村 茨城縣水戸市市元山町
- 井上 文子(植田)阿 荻橋東 五六三五横須賀支之松方
- 柳井 君子 同 同格東 阿武郡小川村本郷
- 小倉 敏子(山根)同 大井村
- 山本 節子 同 荻渡リ口 住所不明

本科第七回

昭和二年三月卒業(梅組)いろは順)

- 安田百合子 同 荻橋東 明木尋常高等小學校
- 益富 貞子 同 吉嘉川村 住所不明
- 中野キクノ(杉本)阿 荻山田 山口市西白石 中野嘉次
- 眞本アツコ(藤田)同 同格 東京市芝區南佐久間町二丁目九
- 飯田 靖子(福島)同 同格東 東京府外西區鳴鳴池袋一〇九六(死亡)
- 小池 幸子 同 同堀内 神奈川縣箱根小涌谷
- 後藤 文子 同 同格東 下關市字後田京町二丁目一八
- 伊藤ヨシ子(阿武)同 同 荻町土原
- 大藤 恒子(阿武)同 同川上村 荻町土原
- 齋藤 節子 同 荻上五間町 臺灣基隆市鼻仔頭七二
- 清須 イト 同 同格沖原 林崎三方
- 三原 貞江 同 同格沖原 荻町南片河
- 白井 律子 同 荻江向 鳥根縣成川郡西濱村
- 森重 貞子 同 大 三郎村 東京四ツ谷區慶應義塾大
- 末永 貞子 同 荻橋本町 同村宗頭小學校在職
- 羽生美壽子(杉山)同 同川島 江向竹田波町
- 有光壽美子(鈴木)同 同格東 朝鮮咸鏡南道甲山郡惠山 鶴陸軍官舎
- 杉山 春子(居田)同 同堀内 字部市市役所裏通り

○石津 里子 阿 萩椿東 萩町梅西  
 ○伊藤 智子 同 奈古村 大阪市外守口女子薬學專門學校  
 ○河内 若代(叔垣)無 呼坂村 小倉市砂津豊泉町二丁目  
 ○小野美代子(岩田)阿 萩奥玉江 同前小畑 福川村半田小學校  
 ○岩本 禮子 同 同江向 同前小畑 福川村半田小學校  
 ○波多野ヒサコ 同 同前小畑 福川村半田小學校  
 ○西林富美子(長谷)同 同津守町 秋田市上中城町  
 ○林 光子 同 同椿東中ノ倉  
 ○原 文子 同 明木村 兵庫縣揖保郡立野町 萩町淨原  
 ○原田 満恵 同 萩青海 三見小學校  
 ○堀 ヨシ子 阿 萩青海 三見小學校  
 ○大橋トミ子 同 同川島 長府町松尾内  
 ○大田ミサ子 同 同土原 山形市香澄町庚申室  
 ○大島スエ子 同 同濱崎 八和田準介方  
 ○岡本 芳江 同 同大谷 神戸市熊内町四丁目一〇  
 ○和田 久 同 田掛村 八和田準介方  
 ○渡邊美和恵 阿 萩大谷  
 ○鹿島イツコ 美 共和村  
 ○金山 治子 阿 萩下五間町  
 ○河野 夏子 同 同橋本町  
 ○柁山 通子 同 同川島  
 ○山藤ヤエ子(竹内)同 同渡リ口 萩町吉田町

○田總 ヨシ 同 同平安古  
 ○神崎 松代(津藤)同 同 東京市外森谷町字上智門  
 ○中村 夏子 同 同 門司市大里町御所町三丁目青木徳義方  
 ○仲子 キク 同 同西田町  
 ○内山 愛子 都 久米村 美禰郡大田町  
 ○岡 美智子(口羽)阿 萩堀内 下關市丸山町五ノ四ノ四  
 ○山根 秋 同 同吉田町  
 ○村不由喜子(山中)同 三見村 萩鶴江  
 ○山中リヨエ 同 萩惠美須町  
 ○山本 千代 同 同御許町 江向  
 ○山中 淑子(山本)同 同土原 神戸市太田町四丁目七〇  
 ○別府 年子(松田)同 朝鮮京城府蛤洞二八  
 ○福永 ウメ 同 同堀内 東京市芝區白金三光町根本貫吉方  
 ○厚東 閑子 同 同松本  
 ○安達ヨシコ 同 同金谷 東京市外世田ヶ谷町下北  
 ○厚東 英子(阿武)同 同土原 同前市  
 ○佐方キミ子 同 同倉江 同前市  
 ○北田イクエ 奈良市井上町 大阪市西成區松通リ六丁目七七八下城安徳内  
 ○木村 壽子 阿 萩御弓町 萩町江向  
 ○末岡ハナ子 同 同今魚淵 美福寺前  
 ○杉山 文子 同 同川島  
 ○杉山ナツ子 美 共和村

本科第七回

昭和二年三月卒業(菊組)いろは順

○池内 巴 阿 萩惠美須町  
 ○伊藤 基美 美 於福村 萩町唐櫛 村田樫内  
 ○伊東 浪子 阿 萩橋本  
 ○林 喜代子 同 同平安古  
 ○一山 賀代(堀)同 同川島 大阪市東淀川區國次町三八三  
 ○堀 靜子 同 同椿東中ノ倉 住所不明  
 ○堀上 重 同 同江向  
 ○大谷 テユ 同 同椿東中ノ倉 阿 福井村市  
 ○奥村 露子 同 同橋本 門司市日之出町稻荷座前 藤井方  
 ○岡 キヨコ 同 同椿東後小畑  
 ○上田 靜子(岡田)同 同椿東鶴江 吉敷郡小郡新町  
 ○小野キミコ 同 同橋町 神戸市外西灘村原田六〇 二田上方  
 ○若松ツルコ 同 同東田町 朝鮮京城漢江通十六番地  
 ○西山 豊子(渡邊)同 萩椿町  
 ○河村 繁子 同 同熊谷町(死亡)  
 ○川村 清子 同 同前小畑 山口高等女學校  
 ○兼田 ミネ 同 同川上村  
 ○横山 藤枝 同 萩江向 萩町熊谷町  
 ○池田 房子(横木)同 同下五間町 東京市外入新井町不入  
 ○藤井ハル子(竹谷)同 同下五間町 東京市外入新井町不入 斗一三一八

○竹中 富恵 同 同椿東松本 防府町松崎小學校  
 ○津田智恵子 同 同東田町  
 ○中村フジ子 美 共和村 青島市場一路二九大正洋行内  
 ○中尾ハル子 阿 萩濱崎 萩町新川  
 ○村上 信子 同 同東田町  
 ○上田ヨシノ 同 同山田  
 ○植村ヨシコ 大 日置村  
 ○能美ハル子 阿 同倉江 (死亡)  
 ○山下 並子 同 同土原 東京市牛込區南櫻町三五  
 ○山田 ミチ 同 同椿 大阪府此花區吉野町一丁目二〇春海寛方  
 ○山本 ハナ 同 同大谷  
 ○山本 禮子 同 同倉江  
 ○三輪トミ(松村)同 同堀内 東京市芝區高輪南町二七番地  
 ○甲谷壽美枝(馬來)同 同堀内 東京市芝區高輪南町二七番地  
 ○藤田 郁子 同 土原  
 ○藤井マナ子 大 菱海村  
 ○赤川 織子 阿 萩土原 佐賀市神野町東神野一一二六地  
 ○行本 貞子 同 同橋本  
 ○宮原千代子 同 同堀内 北海禮札觀市南九條西十五  
 ○下井 美子 美 大田町 萩御許町



○平野タミ子(清水)阿 萩上五間町 下關市赤間町二九  
○水津 芳子(品川)同 同渡谷町 阿武郡福賀村水津方  
○廣 文子 同 住所不明

### 本科第八回

昭和三年三月卒業(梅組)(いろは順)

○岩武 正子 阿 齋福村第七千六百三番地  
○花田 鏡子 同 萩城西 大坂市外中河内郡八尾町  
○西村 政子 同 奈古村第四百三十番屋敷 佐の川琴指南所方  
○仁保 キク 同 萩土原 京都市同志社女專  
○時山 文子 同 同山田  
○富田 文子 同 同橋本  
○大野 イネ 同 奈古村 山口市西白石八木宗十郎  
+○大津シン子 同 萩松本 方  
○小田 ミツ 同 奈古村  
○金子 敏子 同 萩大谷  
○金山ツエ子 同 同御弓町  
+○三元 孝(河名)同 同橋西 三見村市色香寺内  
○柏木 敏子 同 同東田町  
○吉村多喜子 同 同川島 南滿洲鞍山北四條二〇七  
○横山 稔子 同 同唐柳町  
○竹内 静子 同 同惠美須町 大連市外南關嶺貯炭所  
○岡崎 敦子(瀧野)同 同神原 神奈川縣平塚町

+○江藤 文子(高村)同 同江向 靜岡縣女子師範學校前  
○澁谷美智子(高橋)同 同瀨谷中市堀町六一  
○津森 茂子 同 同渡谷町  
+○中村 貞子 同 同平安古 小野田山手セメント會社  
+○中村登美子 同 同新堀 大賀泰助方  
+○梅下マツ子 同 同濱崎  
○兒玉 重子(植田)同 同津東 德島縣富岡町仲町米塔樓  
+○倉重千代子 同 同津東 (死亡)  
○武田 親枝(安光)同 同津東 萩町堀内  
○山縣 ヲメ 同 同河内 東京市本郷區南坂八二常  
+○山根 勝子 同 同濱崎 盤館内 深田町九番地佐  
+○山田 道子 同 同平安古 野友吉方  
○櫻井 静(松田)同 同川島 東京市外天沼一七五  
○松野 君子 同 大田町  
+○藤田 フミ 同 萩南片河 長府町切通原田方  
○小原美代子 同 島根縣鏡川郡西濱村 萩町田町  
○鬼村ユキ子(小林)阿 同津江 東京市外世田ヶ谷大字堂  
○佐伯 文子 同 德佐村 萩町川島  
○北村 敏子 同 美大田町 美禰郡赤郷村桂園尋常高  
+○三隅 フサ 同 萩五間町 等小學校  
○光國 榮 同 同米屋町 萩町新川  
○宮内千代子 同 同渡谷町 下關市西ノ端恒成芳藏方

### 本科第八回

昭和三年三月卒業(菊組)(いろは順)

○靜間 芳子 同 須佐町 臺灣基隆哨船  
+○弘中 静 同 萩川島  
+○本永 芳恵 同 同平安古  
○森福サダ子 大 三隅村 同村宗頭小學校在職  
○須子 安子 阿 萩江向八丁 東京市國華ダンスホー  
○助石フキ子 同 同平安古  
○井上ヒサヨ 阿 萩江向 萩町唐樋町横山病院内  
+○石井八重子 同 同小畑  
○市川 フミ 同 同川島 大坂市西成區國出町七丁  
○原田 照子 兵庫縣揖保郡龍野町萩登谷 日九番地  
○原 マツ代 阿 齋福村 萩町雁島  
○波田 幸世 同 萩橋東  
○原 ミサヲ 美 赤郷村 神奈川縣川崎市南河原六  
+○西山 初枝 阿 萩川島 七二齋藤チエ氏内  
○錢谷トシ子(堀本)同 同堀内 大坂市西區南堀江五丁目  
○友永マサコ 美 大田町 宇部市上宇部錢谷賢次方  
○藤田 梅代(土井)阿 萩橋東 美禰郡秋吉小學校  
○小田 文子 同 同御許町 萩町青海  
○大谷 ウメ 同 同後小畑 須佐町育英尋常高等小學  
校

○小田 綾子 同 奈古村  
○大田 好子 同 萩渡谷町 山口市湯田町大正通三輪  
○山根 好子(大谷)同 同中ノ倉 萩町江向八丁  
○落合八重子 同 川上村 萩町土原  
+○佐々木マス子 大 三隅村 厚、厚狭町  
○珂村 ユク 阿 萩橋西  
○須子 淑子(桂)同 同川島 萩町江向  
+○笠井 清子 同 同橋西 萩町雜式町  
○高橋イネ子 同 同上五間町 下關市西大坪町了四寺  
○長岡シズ子 同 同紫福村 上二三一今泉よしの方  
○村田 貞子 同 同唐柳町  
○中原ユキ子 同 同土原  
○永安ハナ子 同 同川島  
○中野カヲル 大 日置村 萩町江向  
+○村上 照子 阿 萩東田町  
○能美ミツヨ 同 同中津江  
○黒瀬田鶴子 同 同橋西  
○桑原 ヨシ 同 同新堀  
○阿武 鷹子(山田)大 同村 萩町濱崎町  
+○山村 梅子 阿 萩濱崎  
+○阿武 ハナ(松村)同 同上五間町 萩町川島  
○大谷伊楚子(小橋)同 同今魚淵 名古屋市東區下飯田町宮  
前二六

○江舟二美子 同 川上村  
 ●○佐伯 増榮 同 萩江向 (死亡)  
 十○菊屋喜美子 同 同吳服町  
 十○木下美恵子 同 同進谷町  
 十○陽 洪子 同 同梅  
 ○薄部百合子 同 同松本  
 ○薄部ウメ子 同 同梅東 廣島縣因ノ島土生町  
 ○三浦 綾子 同 同御弓町 瀧濱北區三宅亮作方  
 ○島本サダ子 同 同濱崎  
 ○河野智得子(下田)大 同 仙崎町 下關市入江町四八  
 ○西村 文子 同 宇田郷村 萩町青海  
 ○最上 綾子 同 萩西田町  
 ○守田トミ子 同 藤間村 萩町江向  
 ○鈴木 絶子 同 萩梅東

本科第九回

昭和四年三月卒業(梅組)(いろは順)

○石丸 文子 同 阿 明木村明木市  
 ○石光 静子 同 萩下五間町  
 ○國崎 峯子(生駒)同 同梅  
 ○波多野照子 同 三見村  
 ○波多 静江 同 萩梅東  
 ○仁保 正子 同 同土原 東京府西萩郡東京女子大

○細田マツコ 同 同東濱崎  
 ○堀本シヅエ 同 同堀内 或 萩里布岩園人組合社  
 ○堀野 公子 同 同万崎村 萩町松本  
 ○土井 幸子 同 同梅東  
 ○大庭キタエ 同 同五町  
 ○大石ヒサ子 同 同堀内  
 ○小野 清子 同 同濱崎  
 ○藤村ツタエ(河村)同 同三見村 萩町奥玉江  
 十○田中 清子 同 同萩平安古  
 ○竹内 櫻子 同 同平安古  
 ○竹内 茂 同 同古萩  
 十○田中 雪子 同 同梅  
 ○高洲 キヨ 同 同梅  
 ○中谷 幸子 同 同明木村 萩町川島  
 ○中村富美子 同 同萩春若町 同堀内  
 十○馬屋原海満 同 同同山田  
 ○上田ミドリ 同 同同梅東  
 ○百濟 万喜 同 同同北古萩  
 十○山田 徳子 同 同同東田町  
 ○八木 正枝 同 同大井村  
 ○山根 アヤ 同 同萩山田  
 ○山縣 スミ 同 同赤郷村  
 ○松井 節子 同 同 東京府下世田ヶ谷町下北  
 澤九〇二

○藤田 昭代 廣島市竹原町 萩町今古萩  
 十○岸 常勢(藤山)阿 紫福村 萩町玉江  
 ○藤井 繁子 同 萩土原 萩町川島  
 ○小林八重子 同 同堀内  
 ○浅海千代子 同 同梅東 京都市  
 ○赤崎 ヒナ 同 同堀内 萩町梅東小畑  
 十○阿武 敦子 同 同梅東  
 ○有田 澁子 同 同堀内  
 ○大藤 和子(有田)同 同江向 東京市外濠谷櫻谷六  
 十○内藤ナミ子 同 同梅 阿 奈古村末若一男方  
 ●○山根フジエ(齋藤)同 大井村 坂本  
 ●○佐伯千代賀 同 萩濱崎新丁(死亡)  
 ○三坂ハルエ 同 同梅東 川上村茂場小学校  
 十○三戸 正子 同 同江向  
 十○河村 隆子(三輪)同 同梅東 門司市東本町二丁目  
 ○三好クメ子 同 同同  
 ○柴田キヨ子 同 同同  
 ○弘 ユキ子 同 同津守町  
 ○水津 福子 同 同梅  
 ○田村 朝子 同 同東田町 萩町登谷

本科第九回

昭和四年三月卒業(菊組)(いろは順)

○伊藤 静枝 山口市 厚狭郡船木町宮本  
 十○石津 夏子 同 同萩堀内  
 ○西山 正子 同 同同山田  
 ○刀瀬 カメ 同 同同東濱崎 東京市麹町區飯田町五ノ  
 ○大永千代子 同 同日置村 三〇機寮内  
 ○宗實 元子 同 同萩惠美須町  
 ○村木 宣子(岡田)同 同朝鮮羅南東本町三八  
 ○大島 敏子 同 同萩濱崎 大連市秀月臺一七八  
 ○河村フジエ 同 同同江向 門司市東本町二丁目  
 ○川島佐芽子 同 同須佐町 東京府下洗足田園都市東  
 十○吉田富美子 同 同萩吉田町 臺一二〇  
 ○吉見 武子 同 同同東田町  
 ○田中美譽子 同 同同同  
 ○田中富佐子 同 同同吳服町  
 ○田中シズエ 同 同同梅東 福岡市馬出寺中一一二四  
 十○田村フサ子 同 同同平安古 萩町梅 二並木方  
 ○竹内 隆子 同 同同河添 神戸市榮町四丁目四森  
 ○永安イタコ 同 同同梅東  
 ○長村フジエ 同 同同梅  
 ○中原 豊子 同 同同梅東  
 ○中村 艶子 同 同同御許町  
 ○中村 千枝 同 同同 東京市本所區向島町萩玉江

○中村 芳子 阿 萩東田町  
 ○中本智恵子 同 田万崎村  
 ○上田 静子 同 萩西田町  
 ○口羽千重子 同 同堀内  
 ○倉重トミ子 同 同堀内  
 ○久保田恵美子 同 小川村 萩御許町  
 ○矢次登美子 同 萩橋本町  
 ○山根キク子 同 同山田木間 萩町小畑 山根政二内  
 ○松本ハル子 同 同同  
 ○松屋千代子 同 同濱崎  
 ○深井 貞子 同 同山田  
 ○藤田 富枝 同 同福川村  
 ○阿武 淑子 同 萩橋東  
 ○秋山 敏子 同 同東京市麹町區中六番町 林芳樹方  
 ○岡 美子(阿字雄) 同大井村 阿武郡紫福村  
 ○佐伯 花子 同 萩東田町  
 ○木原 雪子 同 同橋東  
 ○下井智恵子 同 同厚方倉村 萩御許町  
 ○柴田シヅ子 同 同福川村  
 ○守田富美子 同 萩御許町(死亡)  
 ○森屋滿壽子 同 同同五町  
 ○杉原ミツ代 同 同大井村 東京市外小松川町三ノ五  
 ○末岡 静子 同 萩魚御町

○荒地千鶴子 阿 萩橋西 岡山縣玉島町上本町三〇  
 ○美野 芳江 同 無平生 萩町堀内公會堂内  
**本科第十回**  
 昭和五年三月卒業(梅組)(いろは順)  
 ○伊藤 里子 阿 萩橋東 神戸市西灘河原三八四田  
 ○石九 都 同 同堀 原吉良方  
 ○波多野靖子 同 同堀 兵庫縣西宮市外今津町今  
 ○羽仁喜久江 同 同堀 津字山中五五〇藤田方  
 ○林 善子 同 同堀 山口市八幡馬場 萩町江向  
 ○兒玉登美代(堀) 同 同堀 阿 萩平安古 廣島市女子專門學校  
 ○岡 久子 同 同堀 島根縣瀨原郡五十猛村 萩町川島  
 ○小原 正代 同 同堀 阿 萩川島 臺北市外樹林酒工場官舎  
 ○大野サダ子 同 同堀 同 紫福村 阿 田万崎村多磨小學校  
 ○小田 君江 同 同堀 同 三見村 島根縣萩川郡西濱村大地 萩町吉田町  
 ○若松 梅子 同 同堀 同 萩橋東 東京市牛込區女子醫學專  
 ○和田 安子 同 同堀 同 同東田町 門學校  
 ○河野喜福子 同 同堀 同 同大井村 萩町江向 朝鮮開城滿月町八七七ノ  
 ○吉井 延子 同 同堀 同 同萩江向 小田正藏方  
 ○高田 美子 同 同堀 同 同萩江向 福岡縣三池郡驛馬 京都同志社專門部英  
 ○田中喜美子 同 同堀 同 同萩五町 萩町渡り口

○竹内 義子 同 同川島 同平安古石屋町  
 ○中村千代子 同 同土原 朝鮮京城府漢江通三ノ九  
 ○長野 光枝 同 同山口市四政寺(死亡)  
 ○長嶺マサコ 同 同美 岩永村岩永下郷  
 ○村上アサエ 同 同萩東田町  
 ○野田 緩子 同 同篠生村 萩町米屋町  
 ○二宮 菊子(久保) 同 同萩東濱崎 朝鮮釜山富平町  
 ○久津内貞子 同 同須佐町 萩町今古萩  
 ○柳井 文子 同 同萩山田  
 ○山縣 照子 同 同同橋東 萩町土原  
 ○安田マサコ 同 同同  
 ○松浦 光子 同 同濱崎  
 ○藤田 トミ 同 同同橋  
 ○藤屋ツル子 同 同同東田町  
 ○藤山ヨメ子 同 同同橋東  
 ○厚東 静子 同 同同  
 ○栗屋喜美子 同 同同土原 萩町江向  
 ○有田 幸子 同 同吉部村吉部上  
 ○坂 佳子 同 同萩橋東  
 ○佐々木千鶴子 同 同同古萩 萩町大谷  
 ○三好 孝子 同 同同東田町  
 ○水野 信子 同 同同五町  
 ○弘兼 文子 同 同同橋東

○井關 節子(平島) 同 同御許町  
 ○森 艶子 同 同川上村  
 ○本永 隆子 同 同萩堀内  
 ○森中 美代 同 同須佐町 萩町江向  
 ○居田百合子 同 同嘉年村嘉年下 萩町堀内  
 ○杉山 昌 同 同萩北古萩  
 ○金子喜江子(澄川) 同 同同東濱崎 萩町五間町  
 ○鈴木志計子 同 同同橋東  
 ○重藤美知子 同 同福岡縣田川郡金川村 萩町濱崎  
**本科第十回**  
 昭和五年三月卒業(菊組)(いろは順)  
 ○伊藤ハツ子 阿 同大井村 室積師範學校  
 ○井上 忠子 同 同福川村 山口市西白石 池田方  
 ○石津 麻子 同 同萩橋町  
 ○石丸喜久枝 同 同同堀  
 ○中所 富子 同 同同川島  
 ○西村ヤエ子 同 同同堀  
 ○同野 芳子 同 同萩町倉江 東京市外垂谷町當番松實  
 ○小田喜久子 同 同同堀  
 ○渡邊 時子 同 同同堀  
 ○河邊不二子 同 同大 三堀村  
 ○川村 利子 同 同萩橋谷町

●香川 ミチ  
 ○金子 初代  
 ●吉村フミ子  
 ●田中 夏子  
 ○竹岡 文子  
 ○竹岡 直子  
 ○竹重 國子  
 ○瀧野 琴  
 ○内藤ヨシ子  
 ○長田ミツ子  
 ○長澄富美枝  
 ○草刈 貞子  
 ○國司壽恵子  
 +○矢次 純代  
 +○安田クニコ  
 ○松尾 愛子  
 ○松田フミ子  
 ○藤田喜多子  
 ○藤井シズエ  
 ○福田 静枝  
 ○栗屋 淑子  
 ○有吉 久子  
 ○有馬キヨ子

同 同濱崎新町(死亡)  
 同 同江向  
 同 同熊谷町(死亡)  
 同 同椿町(死亡)  
 同 同西田町  
 同 福賀村福田下 萩町堀内  
 同 同江向  
 同 同椿東 萩町椿沖原  
 同 福川村福井下 萩町椿東  
 同 萩椿東  
 同 三見村  
 同 萩細工町  
 大 日笠村日置下  
 同 萩平安古 萩町椿屋町  
 同 同河添  
 同 三見村  
 同 同椿東  
 同 德佐村 東京女子職業學校  
 大 向津具村向津具下 萩町西田町  
 阿 萩町  
 同 同江向 萩町平安古  
 同 同川島  
 同 同濱崎

○淺野 綾子  
 ○安野志都子  
 ○天野レイコ  
 +○澤本 乙女  
 ○境 千代  
 ○光國 茂子  
 ○柴田 信子  
 ○重本千鶴子  
 ○廣 當子  
 ○廣田 綾子  
 ○關屋ヨシコ  
 ○助石マツコ  
 +○國司 濶子  
 ○伊東 昌子

同 同椿東  
 同 同富村彌富下 萩町平安古  
 美 伊佐町 濱島縣山縣郡安野村正登寺内  
 阿 萩東田町 萩町土原新道  
 同 同江向 東京市外淀橋町柏木三三  
 同 同米屋町  
 同 同吳服町  
 玖 麻里布町室木 萩町瀧淵  
 同 同土原 萩町椿東 大坂市西區新町四丁目二番地齋藤和服裁縫所内  
 同 同瓦町  
 同 同平安古  
 同 同土原  
 阿 萩江向  
 同 平安古  
 吉 秋穂二島村 室積女子師範學校教員養成所  
 東京府下大久保百人町 東京市牛込區女子醫學專門學校内

本科第十一回

昭和六年三月卒業(梅組)(五十音順)

○井町 ハル  
 ○岩本 林子  
 ○岩本 當子  
 ○内山 貞子  
 ○内山 泰子  
 ○岡村 フキ  
 ○小野智枝子  
 ○加藤 富子  
 ○金子 恭  
 ○金子 光代  
 ○川上 幸子  
 ○河野タケ子  
 ○官野 壽子  
 ○黒瀬千鶴子  
 ○厚東 萬子  
 ○佐久間千代子  
 ○佐々木美都子  
 ○柴田 君代  
 ○田中 操  
 ○玉井 節子  
 ○富田千恵子  
 ○中野 友子

阿 萩越ヶ濱  
 同 同南古萩 萩町南片河  
 同 須佐町  
 美 大田町 室積女子師範學校教員養成所  
 阿 萩上野 萩町松本  
 同 同土原  
 同 同奈古村土  
 同 同萩西田町 萩町瓦町  
 同 同福川村 萩町江向  
 同 同萩江向  
 同 三見村  
 同 同奈古村濱崎  
 同 同萩古萩  
 同 同金谷  
 同 同前小畑  
 同 須佐町  
 同 紫福村京佛 大井村萩町濱崎町伊勢島方  
 同 同福川村  
 同 同萩川島 萩町平安古  
 同 同南古萩  
 同 同橋本町  
 同 須佐町

○中原 隆子  
 ○中村タギ子  
 ○長井 密子  
 ○長谷喜代子  
 ○長谷川マスエ  
 ○波多野トヨ子  
 ○深井 チエ  
 ○藤田 幸子  
 ○藤田 實子  
 ○藤田 文子  
 ○藤田 元子  
 ○藤村 多喜  
 ○室谷キヨ子  
 ○本永 松恵  
 ○森川 秀子  
 ○山本 禎子  
 ○横木 貞子  
 ○吉田 花子  
 ○長岡由貴子

同 萩松本舟津川端  
 同 同椿町  
 同 川上村宇高瀬 萩町土原  
 同 萩御許町  
 同 同椿東  
 同 同濱崎  
 同 同倉江  
 同 同椿東松本 萩町椿東前小畑  
 同 同土原  
 同 同土原  
 同 同八丁川島  
 同 同田万崎村江崎  
 同 萩平安古  
 同 同小川村 萩町南古萩  
 同 同萩倉江  
 同 同江向  
 同 同平安古  
 同 同紫福村 萩町土原十日市筋

本科第十一回

昭和六年三月卒業(菊組)(五十音順)

○上利 光子  
阿 萩吳服町

在校會員

本科第四學年

菊組 (五十音順)

秋田 順子 阿 萩惠美須町  
 淺野アヤコ 同 同吳服町  
 荒尾 紗江 吉 小郡町 萩濁淵  
 石川 光子 阿 萩 萩濱崎  
 伊藤 昌子 同 萩土原  
 稻村 八重 豊 長府町 萩江向  
 岩田タマコ 福岡縣若松市修多羅 萩平安古  
 上田テルコ 阿 萩山田  
 大田 操 同 同濱崎  
 大谷 榮子 同 同格東 萩越ヶ濱  
 大橋キヨ子 同 同川島  
 桂 智佐子 同 同上五間町 萩下五間町  
 金子 夏江 同 同格東  
 金子モトエ 同 大井村市場  
 河野 菊子 同 萩橋本 萩御許町  
 熊毛屋光子 同 同格 萩椿町  
 萩原富美子 同 同西田町  
 小池 清子 同 同堀内

神野 博江 同 彌富村字彌富下 吳服町  
 齋藤 菊代 同 萩東田町  
 齋藤 靜枝 同 大井村坂本  
 齋藤富美子 同 萩濱崎  
 讃岐 秋代 同 同古萩  
 鹽見 智子 同 同格  
 末次 菊代 美 伊佐 萩越ヶ濱  
 瀧口 桃江 阿 明木村 萩河添  
 竹下マツエ 同 萩椿  
 張 達子 同 同土原  
 津森 文代 同 同堀内  
 寺内 敏子 同 同平安古 萩越ヶ濱  
 富田 敏子 同 同越ヶ濱  
 中原シゲ子 同 同格東  
 中村ヒサエ 同 同橋本  
 西村 紀子 同 同堀内 萩川島  
 波田美代子 同 同格東  
 波多野百合子 同 同川島 萩濁淵  
 藤家 美枝 同 佐々並村久年 萩町河添  
 藤田メイキ 廣島縣賀茂郡竹原町 萩今古萩  
 松浦 照子 阿 奈古村  
 溝部 恭子 同 萩河添 萩川島  
 宗實 文子 同 同堀内

○阿武トシ子 同 同川島  
 ○阿武マツ子 同 同格東  
 ○石原 英子 同 同 廣島市女子専門學校内  
 ○石光 幾代 同 同平安古  
 ○岩崎タミ子 同 同東田町  
 ○岩武 哉 同 同 萩福村  
 ○上田 昌子 同 萩西田町  
 ○大嶋 秀子 同 萩西田町  
 ○岡崎 文枝 大 仙崎町 横濱市中正久保町三三七  
 ○岡村喜久枝 美 秋吉村 安部多津子内  
 ○岡村 孝子 阿 萩濱崎本町 萩町江向  
 ○尾崎念茂恵 同 同御弓町  
 ○河村 壽江 阿 萩新堀 神戶市灘區赤坂通五丁目  
 ○幸崎シズエ 同 同格  
 ○齋藤 信子 同 同御許町  
 ○齋藤 雪子 同 同吉田町 東京市牛込區女子醫學寮  
 ○坂本 展子 同 奈古村  
 ○坂本 益子 同 萩熊谷町 萩町御許町  
 ○末岡 眞代 同 福川村 萩町土原  
 ○末岡ミサエ 同 萩堀内  
 ○末光紀代子 同 同平安古 萩町熊谷町  
 下關市

○杉山 美枝 阿 萩川島  
 ○高杉 愛子 同 同御許町 萩町雜式町  
 ○田北ミネ子 同 同東田町  
 ○竹田 貞子 同 同 廣島市女子専門學校  
 ○竹原フサ子 同 同西田町  
 ○田坂チヅ子 同 同格  
 ○中村 靜枝 同 萩川島  
 ○能美タミ子 同 同川上村 萩町松本  
 ○能美ユキ子 同 萩濱崎  
 ○服部富美子 同 同 萩福村  
 ○福間 正子 同 萩濱崎  
 ○堀田 文子 同 同江向 室積女子師範學校教員養  
 ○松浦キク子 同 同東濱崎 成所  
 ○松浦 富枝 同 同濱崎  
 ○三戸喜代子 同 同吳服町 佐賀縣鹿島町大手通り鹿  
 ○宮内 信子 同 同熊谷町 島菰織女學院  
 ○三好カツ子 同 同川島  
 ○守田 律子 同 同 熊勝間村 萩町江向  
 ○山縣 貞子 阿 萩平安古  
 ○山本 イチ 同 同御許町 萩町江向  
 ○山本 ツル子 同 同倉江 同江向  
 ○山本 美智 同 同川島 同江向  
 ○横山壽美子 大 日置村 同唐樋

本科第四學年

梅組 (五十音順)

柳井 良子	同 同山田
山縣喜多子	同 同山上村 本校寄宿舎
山縣 テセ	同 萩山田
吉賀キミ子	同 同濱崎
吉原 正子	同 同上五間町
渡邊ヤスコ	同 同北古萩
宮崎 克子	美 岩水村岩水下郷 萩町土原
鈴子 止子	大 深川町 萩町吳服町
阿部 光子	阿 三見村
天野 紀子	同 萩東田町 萩吳服町
有吉喜久子	同 同西田町
栗屋 チエ	同 同平安古
安藤 美江	同 同 同
阿武タミ子	同 大井村
石金 夏子	同 萩土原 萩町古萩新橋
伊藤ウサヨ	同 福川村黒川
伊藤 敏子	同 萩椿區大谷
伊藤みつ子	同 福川村黒川 萩町椿東二瀬川
稲村さみ子	同 福川村黒川 萩町椿東二瀬川
大多和ヤス子	阿 萩椿區
小田多都子	同 同椿東鶴江
賀田多美代	同 同江向
角屋シゲ子	同 同南片河
金子 牧子	同 同今古萩 萩堀内
龜屋 文子	同 同吳服町
木村喜久枝	同 三見村
木村代志枝	同 萩香川津
小原 種子	同 同川島
佐伯 朝子	同 同松本
佐々木一枝	同 同前小畑
島屋 光子	同 大井村
水津 露江	同 見島村 萩熊谷町中村方
末岡サカエ	同 萩河添
玉井喜久子	同 名田島村 萩町堀内
嶮野萬龜枝	同 萩土原
飛落八千代	同 同椿區
中村 鈴子	同 同椿東鶴江
中村 澄子	同 同濱崎新町
中村 正子	同 同椿町
長富ヨシ子	同 同山田
長山 菊代	同 同山田區奥玉江
西山 政子	同 同堀内
林 英子	大 日置村 萩町江向

本科第三學年

菊組 (五十音順)

林 敬子	愛媛縣松山市二番町二二 萩町江向
福田喜久子	阿 同椿區青海
藤永 初枝	美 眞長田村眞名 本校寄宿舎
松田己美子	阿 萩椿東松本
光永 一枝	同 明木村 本校寄宿舎
三戸 文子	同 萩江向
宍谷 豊乃	同 田万崎村 萩町椿町山根方
箭島 雪子	同 吉部村 萩町平安古
山縣 信子	同 萩椿東
山田 藤子	大 通村 萩町東田町久保方
山本 武子	阿 萩椿東後小畑
吉村 常子	同 同河添
吉屋 靜枝	同 川上村 本校寄宿舎
阿座上藤子	阿 萩江向 萩町川島
石田 知子	同 同江向
石原 禮子	同 同椿東 萩町土原
石光 壽子	同 同濱崎
磯野千尋子	同 同北町
大岡 光子	同 同西田町
岡野 輝子	同 同唐櫃 萩町山田
小田多都子	同 同熊谷町
賀田多美代	同 大井村
角屋シゲ子	同 萩古萩
金子 牧子	同 萩 萩町川島
龜屋 文子	同 同椿東
木村喜久枝	同 同川島
木村代志枝	同 佐々並村 萩町吉田町
小原 種子	同 島根縣鏡川郡西濱村 萩町西田町
佐伯 朝子	美 別府村下蓋万 本校寄宿舎
佐々木一枝	廣島縣高田郡横田村 萩町鹽屋町
島屋 光子	阿 萩 萩町濱崎
水津 露江	同 福川村福井下 萩町松本
末岡サカエ	同 萩椿東
玉井喜久子	同 同南古萩
嶮野萬龜枝	同 同椿東
飛落八千代	同 吉部村吉部下 本校寄宿舎
中村 鈴子	同 萩 萩町松本
中村 澄子	同 同椿 萩町唐櫃
中村 正子	同 同唐櫃
長富ヨシ子	同 同土原
長山 菊代	同 奈古村
西山 政子	同 榮福村 萩町瓦町
林 英子	同 萩川島 萩町平安古

本科第三學年

梅組 (五十音順)

原川 幸子	秋 御井町御井津 萩町土原
弘長 治子	阿 見島村本村 萩町惠美須町
藤野 文枝	同 萩山田
瀧 初枝	同 同濱崎
前田 禮子	同 同椿東
松本 禮子	同 同江向 萩町河添
光井千代子	同 同濱崎新町
守水千鶴子	同 同濱崎
楊井 竹子	同 同江向
山本 光子	同 同椿東
横山かや子	同 同東田町 萩町土原
吉賀 澄子	同 大井村坂本
吉野トシ子	同 萩堀内
渡邊 靜子	同 同川上村相原 本校寄宿舎
渡邊 佳枝	同 萩椿
和田 榮子	豊 田耕村 萩町江向
朝枝都喜子	大 三隅村 萩吉田町
有田 定子	阿 萩堀内
阿武 勝子	同 同川島 同江向
井町マサコ	同 萩椿東

岩崎 幸子	同 同江向
岩本フミヨ	同 須佐町 本校寄宿舎
馬屋原純子	同 萩江向
岡崎 玉恵	美 萩吉村 萩江向
尾崎富美子	熊 室積町 同濱崎
鹿島 千代	美 共和村 本校寄宿舎
金子 テモ	阿 福川村 萩川島
河瀬シゲ子	同 萩惠美須町
河邊 綾子	大 三隅村 同川島
木村喜美子	阿 萩北古萩
小谷 幾子	山 山口市 同南片河
齋藤 富美	大 向津具村 同御許町
品川 房子	阿 萩熊谷町
末國フサエ	同 萩 萩平安古
末武 政子	同 同椿東
高崎八重子	秋 高森町 萩吉田町
高松 正子	阿 紫福村 同吳服町
高屋 琴子	同 同川上村 同土原
竹内 文子	同 萩古萩
田中百合子	同 同椿東 同平安古
田中ロシコ	同 同椿東
田邊フミ子	同 同惠通町 萩倉江
津田 貞子	同 同東田町

本科第二學年

菊組 (五十音順)

中川 清子	同 同江向
中村 聖子	同 同椿東
西田 清子	同 同北古萩
西林キミ子	同 同古萩
野村 京子	美 大嶺村 本校寄宿舎
藤井 弘子	阿 萩米屋町
藤田スエコ	同 同椿
益成 雅子	同 同堀内
三浦 スミ	美 別府村 本校寄宿舎
三島 房子	阿 萩北古萩
三輪 愛子	同 同
山縣 節子	同 同平安古
横見 園子	同 同土原
吉田 泰子	同 須佐町 本校寄宿舎
冷泉 龍子	同 同川島
伊勢島政子	阿 萩濱崎
井町 文子	同 同濱崎
植村千壽子	同 三見村
大谷 和子	同 萩江向 萩町堀内
岡 喜美子	同 同濱崎

岡村 公子	同 同北古萩
岡崎 延子	同 同川上村高瀬 萩町土原
小野 智恵	同 奈古村 本校寄宿舎
小野村壽子	同 萩椿東後小畑
神田 幸枝	同 三見村
柏木喜美子	同 萩東田町
河田 功	北海道札幌市北四條町西六丁目二 萩町川島ニツ森
木下 房子	阿 萩熊谷町
久保井島代	廣 賀茂郡東志和村 萩町東田町小泉方
小泉 アイ	埼 秩父郡横瀬村 同右
厚東 由子	阿 萩御許町 萩町濱崎
齋藤 文子	同 同土原
齋藤 光子	同 同椋屋町 萩町吉田町
佐伯 曉美	同 同東田町
佐竹ヨシエ	同 同河添
品川ナミエ	同 同堀内
白石 幸子	同 同東田町
水津 サヨ	同 大井村
鈴木 繁子	同 萩椿東
鈴木ハツ子	同 福川村福井下 萩町土原
田中 朝子	同 奈古村大字木與 萩町吳服町
田中 サン	同 六島村大字大島 萩町濱崎
田村 吉江	同 萩椿東

田村 米子 同 同濱崎  
 安永 淑子 同 同橋東  
 服部 末代 同 紫福村 本校寄宿舎  
 平島 京子 同 萩御許町  
 福島 成子 同 同橋東  
 藤田 静江 同 同橋 萩町江向八丁  
 藤田 光子 同 福川村 本校寄宿舎  
 正木 陽子 同 萩江向  
 松浦 孝子 同 同濱崎新町  
 松浦ツネ子 同 大井村  
 三戸キヨコ 同 萩橋東  
 宮野 環 大 俵山村湯町 本校寄宿舎  
 山村富士子 阿 萩濱崎  
 山本 延枝 同 大井村  
 山本 愛江 同 萩橋  
 和木 綾子 同 同東濱崎 萩町橋本  
 和田 和子 同 田耕村宇朝生 萩町江向  
 平野 晴代 阿 川上村立野 本校寄宿舎

本科第二學年

梅組 (五十音順)

阿 紫福村 萩町堀内  
 千葉縣長生郡二宮本郷本 萩町江向

高崎千壽子 政 高森町 萩町吉田町  
 田村 里子 阿 萩濱崎 萩町鶯谷  
 田村 文子 同 同河内  
 中谷 光枝 同 同橋町  
 長尾 光子 同 同濁淵  
 並川 文江 同 同河添  
 名和 洽子 朝鮮慶尙南道密陽 萩町奥玉江  
 藤村 貞枝 山口市後河原 萩町米屋町  
 藤井 秀 阿 萩江向  
 堀 タマ 同 同江向 萩町川島  
 松尾 悦子 同 三見村  
 三島 良子 同 萩東田町  
 室谷 敦子 同 田万崎村江崎 萩町金谷  
 守重 京子 同 萩今古萩  
 森屋 壽江 同 同瓦町  
 山田 英子 大 通村同町 本校寄宿舎  
 山田 快子 阿 萩松本権原  
 大和 泰子 同 福川村 萩町雜式町  
 山中 松子 同 三見村明石 本校寄宿舎  
 吉田早苗子 同 萩吉田町  
 吉田 フミ 同 同川島二ツ森  
 横山キミ子 同 川上村字瓜作 萩町濁淵  
 横山 壽子 同 三見村

石津ヒサヲ 阿 明木村字管蓋 萩町川島  
 出羽 幸恵 同 萩後小畑  
 伊藤 道子 同 田耕村上大田 萩町南古萩  
 岩城フミ子 阿 萩吉田町  
 岩本 百枝 同 下關市木船町 萩町新川  
 上田 民子 阿 萩渡り口 萩町川島  
 阿 二三子 同 同倉江  
 阿 満 同 紫福村 萩町川島小橋筋  
 小野八重子 同 同奈古村字土  
 大河戸タケ子 同 同島地村 天津郡三隅村豊原  
 大島 光子 阿 萩濱崎  
 大橋タカ子 同 同川島  
 賀田ノブヨ 同 大井村字坂本  
 熊毛屋文子 同 萩橋町  
 小茅マス子 同 同濱崎  
 小川 信子 同 同雜式町  
 齊藤マサ子 同 大井  
 境 綾子 同 萩平安古字石屋町  
 坂上 孝子 同 同堀内 萩町鶯谷  
 作間 淑子 同 須佐町 本校寄宿舎  
 末岡美枝子 同 福川村黒川 萩町土原  
 末光 文子 同 萩橋 萩町鶯谷  
 杉山 富子 同 同川島

本科第一學年

菊組 (五十音順)

山田 正子 同 萩北古萩  
 宮永 博子 廣島縣比婆郡敷信村 萩町南古萩六番地  
 赤間アキ子 大 深川町遊木 本校寄宿舎  
 阿川 雪江 阿 萩濱崎  
 有田 孝子 同 須佐町松原 本校寄宿舎  
 岩崎 芳子 同 萩東田町  
 伊藤登美代 同 同濱崎  
 伊東ひさ子 同 佐々並村 萩町河添並川方  
 岩本 壽子 同 萩西田町  
 上田 静江 同 同川島  
 上田 光子 同 同御許町  
 大深 芳枝 同 同奈古村  
 小田 セツ 同 同 本校寄宿舎  
 加藤 道子 同 萩山田 萩橋區金谷黒瀬方  
 川津 淑子 同 大井村 萩五間町  
 河村タカ子 同 萩中津江  
 木村 範子 同 同北古萩  
 熊谷キヨ子 同 同突服町  
 藤田 八穂 同 同江向  
 厚東智恵子 同 同前小畑



齊藤ツル子 同 吉部村 萩江向  
 齊藤 幸子 同 明木村 同川島十日市筋原田方  
 重枝 幸子 大 菱海村 同今古萩  
 水津キミエ 阿 奈古村木與  
 末光 且子 下關市後地 同熊谷町  
 埴 松子 阿 萩平安古  
 瀧野 和子 同 同格區沖原  
 田中 浪子 同 同格東 同平安古林榮次方  
 田村富美枝 同 同古萩 同玉江觀音院  
 津森 靜代 同 同堀内  
 寺本 文子 同 同春若町 同江向  
 長岡壽枝子 同 紫福村 同土原十日市筋  
 永田キクノ 同 明木村 同八丁川島  
 中村 泰子 同 平安古  
 西崎 照代 廣島縣高田郡井原村 同河添梅地方  
 野坂みづ子 阿 萩堀内  
 廣 吉子 同 同濱崎  
 藤野 和子 同 同吉田町  
 藤道谷惠麦 同 同濱崎新町  
 埴山スエ子 同 同米屋町  
 松浦 政子 同 大井村  
 松谷 咲子 同 萩山田區玉江  
 馬鹿アキ子 同 同堀内

本科第一學年

梅組 (五十音順)  
 池田百合子 同 同川島  
 石丸 智子 同 紫福村 同北古萩  
 伊藤 俊子 同 川下村 三見村油  
 井上 君惠 同 萩堀内  
 井上ミサヲ 同 同格東香川津  
 井町タマコ 同 同東田町  
 岩武 知子 同 同東田町  
 梅下美津子 同 同東田町  
 梅屋 靜枝 同 小川村 宇田郷村  
 岡田 公子 同 同濱崎新町  
 大庭 清子 同 同濱崎新町

佐 右田村佐野 萩町椿大谷九五三渡邊  
 阿 萩川島一九三  
 同 大井村上坂本  
 同 綾木村植竹 萩町椿東二、五四四  
 大 三隅村三隅中 本校寄宿舎  
 阿 萩町越ヶ濱  
 同 紫福村七六〇三 本校寄宿舎  
 同 萩町濱崎新町  
 同 萩町土原  
 同 萩町椿東小畑  
 同 萩町椿東香川津  
 同 萩町椿東香川津

岡 安子 同 萩町奥玉江  
 岡村キミ子 同 萩町北古萩  
 鬼村千代子 同 福川村福井下 萩町芝渡邊ヨシ方  
 河野 定子 同 大井村 本校寄宿舎  
 梯山瑠璃子 同 萩町椿東 椿町金谷古岡内  
 鹿島 靜 美 共和村嘉万 本校寄宿舎  
 片山タマキ 阿 萩町椿東中ノ倉  
 勝部貴美子 同 萩町川島 三見村  
 金子ノリ子 同 萩町山田村木間 萩町熊島山根内  
 河村 富子 同 萩町西田町  
 木村 隆子 同 三見村萩本  
 佐伯 イホ 大 三隅村三隅中  
 佐伯喜美子 阿 萩町椿東湯  
 齊藤 篤 同 萩町吳服町 川島  
 柴田 シナ 同 萩町椿東小畑  
 柴田 鶴子 同 福川村福井上 萩町江向伊東孝子内  
 島本 清子 同 萩町濱崎  
 末岡美代子 同 萩町椿東中ノ倉  
 世良 安子 同 萩町江向 鹽屋町  
 田中マコト 同 大井村字馬場  
 土屋富美子 同 萩町椿東榎原  
 中野 愛子 大阪府河内郡松原字新堂 萩町河添鮎川  
 西村 満子 阿 萩町今古萩 春若町

本科第一學年

松組 (五十音順)  
 橋本 雪江 同 萩町濱崎  
 波多野馨子 同 萩町唐樋町 椿東香川津  
 波多野千鶴子 同 萩町江向  
 林 ヒサ 同 萩町江向  
 福本ツル子 同 奈古村字野地  
 藤田美昭子 大 三隅村三隅上  
 藤田美津江 阿 萩町椿青海  
 藤田 リツ 同 大井村 本校寄宿舎  
 松田壽美子 同 萩町椿東  
 馬屋原三枝子 同 萩町江向  
 宮野 靜江 同 萩町南片河 萩跡前  
 村田 鶴子 同 佐々並村 本校寄宿舎  
 山一 光香 大 三隅村三隅上  
 山口屋都子 阿 萩町熊谷町  
 横山 幸子 大 日置村 萩町唐樋  
 横山トシ子 阿 萩町濱崎

青山阿彌子 大 三隅下  
 上利 愛子 阿 萩山田  
 井關八重子 同 同御許町  
 内田 安子 同 川上立野 萩町橋本津森方

小田カヅコ 同 奈古村  
 小田 和子 同 萩熊谷町  
 加藤アサエ 長崎市櫻町二 萩八丁川島三三六  
 金子タツエ 阿 萩上五間町  
 河野 幸子 同 大井村 本校寄宿舎  
 木下タカ子 同 萩細工町  
 木原ヤエ子 同 同弘法寺浮島町  
 小池 勝子 同 同堀内  
 小川 菊江 同 同河添  
 兒玉八重子 吉 井園村 萩江向  
 榎 織枝 豊 彦島町 同  
 佐々木利枝 廣 廣島市竹屋町 同武本方  
 重藤 静子 福 田川郡金川村橋 同濱崎  
 篠原 敏子 阿 萩江向  
 神野 高子 同 同江向  
 末永 嘉子 福 若松市修多羅 萩西田町  
 宗樂 方子 阿 萩橋本  
 高洲ツヤ子 同 同土原  
 田中アサ子 同 同奈古村  
 田中 玉江 山口市八幡馬場 萩奥服町  
 中山ふじ子 阿 宇田郷村 本校寄宿舎  
 長谷ヒサ子 同 萩御許町  
 萩谷ハナ子 同 大通村 同

花田きの子 阿 奈古村 萩南古萩  
 林 光子 同 萩北古萩  
 繪垣ツユコ 同 同椿車指原臺 萩平安古  
 平野 文子 同 同土原前町  
 福田 満恵 同 同東田町  
 福長恵美子 玖 川下村 大津郡深川町正明市  
 藤田 住江 阿 萩東田町齋藤方  
 藤田トミ子 同 萩土原  
 藤原 俊子 愛 越智郡宮浦村 萩椿東  
 淵 ムキ子 大 遠見郡石垣村 同香川津  
 藤井 壽子 阿 萩土原 同川島二森  
 藤井 文子 大 三隅村東方  
 藤家 敏子 阿 佐々並村 萩河添上田方  
 古屋 梅子 同 萩平安古  
 古屋 嘉江 吉 小野村 阿武郡奈古村  
 杉浦 八重 阿 萩土原  
 宮本 隆子 同 同東田町 椿東濱崎  
 六尾サエコ 同 同奈古村  
 村木 幸子 同 萩鶴江  
 村益フジ子 玖 由宇町寺迫 同川島十日市助  
 本永 幾代 阿 萩平安古  
 矢次 文子 同 福川村 萩川島海部方  
 吉原 智江 玖 高森町 同平安古

實科第二學年 (五十音順)

赤川 慶子 朝鮮邊南河東郡 萩町川島  
 阿部ツユ子 阿 明木村 萩町濱崎  
 阿部モミ子 同 同 萩町濱崎  
 阿武 滋子 同 大井村  
 池内 ミネ 同 萩恵美須町  
 上田 政子 同 明木村 本校寄宿舎  
 大田 松江 同 萩土原  
 岡 恭子 同 福川村 萩町土原  
 尾方キヨ子 同 三見村 萩町平安古  
 藤懸 文子 美 赤郷村 萩町江向  
 小山田サナヘ 同 大嶺村 阿 大井村  
 金子 壽子 阿 三見村  
 久芳 禮子 同 萩土原 萩町江向  
 佐伯 文子 美 別府村 萩町香川津  
 佐伯 由枝 阿 大井村 萩町玉江  
 清水万龜子 廣島縣尾道市 萩町鹽屋町  
 高杉波奈子 阿 萩御許町 阿 大井村  
 高屋 菊枝 同 同濁淵

田中 文江 大 日置村 本校寄宿舎  
 西村フジ子 同 同 萩町奥玉江  
 西山アヤ子 阿 萩十日市  
 波多野信子 同 同西田町  
 林 ミツエ 同 三見村  
 原田田紀子 兵原縣揖保郡能野町 萩町沖原  
 平岡 久子 大 向津具村 本校寄宿舎  
 藤田ミツコ 阿 萩椿區青海  
 藤村 静子 山口市後河原 萩町米屋町  
 松浦 梅子 阿 大井村  
 森重 澄子 同 六島村大島 萩町米屋町  
 安井 貞子 同 川上村椿瀬  
 安田マサ子 玖 川下村 阿 三見村  
 山下 節子 阿 三見村中山 萩町平安古  
 山田千代子 大 通村 萩町北古萩  
 山根タツコ 阿 萩吉田町  
 山根ハナ子 同 川上村 萩町橋本  
 山本 裕子 同 萩平安古  
 山本マサ子 同 明木村 萩町青海  
 虎竹 華枝 同 宇田郷村 本校寄宿舎

昭和七年三月十日印刷  
昭和七年三月十五日發行

山口縣立萩高等女學校內

發行兼編輯人

神田信明

印刷人

山口縣山口市道場門前百十番地ノ十

平佐國介

印刷所

山口縣山口市道場門前百十番地ノ十

大同印刷舍

發行所

山口縣阿武郡萩町

山口縣立萩高等女學校南園會

御 詫

本誌は弊舎の不都合より納期を非常に遅延致します  
し其の上誤植等も譯山ありまして誠に申譯がありま  
せぬ茲に謹みて御詫申上げます

三月十日

大同印刷舎

正 誤 表

頁	段	行	誤	正
一四	下	一四	前田令夫人	厚東令夫人
一五	上	一六	おほしたこし	おほしたてし
一九	下	一四	電燈がきらく	電燈がきらく
二一	上	一四	待ちに	待ちに
二二	下	一四	瓜々の聲	瓜々の聲
二二	上	一五	窮屈なのさ	窮屈なのさ
二二	下	一七	河の	河の
二二	上	一三	「嗚呼忠臣捕子之墓」	「嗚呼忠臣捕子之墓」
二五	下	九	響入	響入
二六	上	三	又誰さや英竹、皮竹も名のみで	又誰さ(は)名のみで河竹はあり
三四	下	一〇	魚舟か	魚舟か
三四	上	一〇	柏木喜美子	柏木喜美子
四四	下	見田	白が一番好き	白が一番好き
六四	上	三	ぼーっと覚めた私。	ぼーっと覚めた私。
六六	下	朝枝都喜子	朝枝都喜子	
六六	上	三	大きい羽子板を抱へ	大きい羽子板を抱へ
六九	下	一	過ぎの	過ぎの
七三	下	一	よもの紅葉	よもの山紅葉
七七	下	初冬	山田快子	山田快子
七七	上	母	水にたはわる	水にたはわる
八七	下	妹	岩本フミヨ	岩本フミヨ
九二	下	くつわ虫	本三大岡光子	本三大岡光子
九八	下	屑	萩史蹟案内	萩史蹟案内
一〇七	下	一	藤田敦諭	藤田敦諭
一二〇	下	六	永劫	永劫
一二五	下	九	會長席も	會長席も
一四二	下	八	會長席も	會長席も

頁	段	行	課	正
三	上	二一	朝鮮元山春日町 赤川 正三	朝鮮元山春日町 赤川 正三
三	下	一四	○河崎 スエ(中島) 厚狭郡船木町字小野	○河崎 スエ(中島) 同御許町 厚狭郡船木町字小野
四	上	一五	○長谷川サダ(野上) 同萩土原	○長谷川サダ(野上) 同萩土原
六	下	一	+ 村木 秀子 同同堀内	+ 村木 秀子 同同堀内
六	下	一	+ 内藤ヨシコ 同同堀内	+ 内藤ヨシコ 同同堀内
七	上	一三	○小野フミコ 同奈古村	○小野フミコ 同奈古村
七	下	一三	○堀永タリコ(増野) 同濱崎	○堀永タリコ(増野) 同濱崎
八	下	一八	○内山 ノブ(中村) 同同川島	○内山 ノブ(中村) 同同川島
八	下	一九	+ 大草チヨコ(山本) 同同平安古	+ 大草チヨコ(山本) 同同平安古(死亡)
八	下	二〇	○藤山ユクセ 同同福村	○藤山ユクセ 同同福村
一〇	上	二一	+ 岸森 京 同同江向	+ 岸森 京 同同江向
一〇	上	二一	+ 中野 チカ(白井) 阿萩村	+ 中野 チカ(白井) 阿萩村
一一	下	二二	+ 肝付 澄江(瀧口) 同同堀内	+ 肝付 澄江(瀧口) 同同堀内
一一	下	二二	○種子 綾(岩武) 同同福村	○種子 綾(岩武) 同同福村
一一	下	二二	○村岡 愛子 同同川島	○村岡 愛子 同同川島
一一	下	二二	○山中 繁 同同濱崎(死亡)	○山中 繁 同同濱崎(死亡)
一三	上	一五	○岩武 綾子(藤田) 同同福村	○岩武 綾子(藤田) 同同福村
一五	上	一五	+ 羽鳥トシ子(田中) 同同村	+ 羽鳥トシ子(田中) 同同村
一七	上	一四	○村田 和子(松林) 同同村	○村田 和子(松林) 同同村

頁	段	行	課	正
一七	下	一四	○宗俣 俊子(森永) 美良長田村萩町役場	○宗俣 俊子(森永) 美良長田村
一八	上	一二	○小崎ヒサコ 阿萩山田末間小學校	○小崎ヒサコ 阿萩山田末間
二〇	上	三	○藤岡 歌子(松永) 同同津具村大津郡荻海村	○藤岡 歌子(松永) 同同津具村
二一	下	二	○池内登美子 同同堀内	○池内登美子 同同堀内
二一	下	二	○河村ミドリ 同同越ヶ濱	○河村ミドリ 同同越ヶ濱
二二	上	三	○岩崎ハナコ(田村) 同同河添	○岩崎ハナコ(田村) 同同河添
二二	上	三	○福永 ミツ 同同堀内	○福永 ミツ 同同堀内
二三	下	八	○大田キシコ 同同方崎村	○大田キシコ 同同方崎村
二四	上	四	○君谷 藤子 同同吉部村	○君谷 藤子 同同吉部村
二五	上	一五	○山中 瀧榮 同同平安古	○山中 瀧榮 同同平安古
二六	上	九	○松本ツルヨ 同同	○松本ツルヨ 同同
二六	上	九	○増野 組代 阿福川村	○増野 組代 阿福川村
二八	下	二	○大本カヅノ 熊佐賀村	○大本カヅノ 熊佐賀村
二九	上	九	○森 テルコ(中村) 同同八丁	○森 テルコ(中村) 同同八丁
二九	上	九	+ 倉田 勝子(溝部) 同同河添	+ 倉田 勝子(溝部) 同同河添
三〇	上	一七	○白井サダ同 同同村	○白井サダ同 同同村
三一	下	一	+ 末若ヨシコ 同同村	+ 末若ヨシコ 同同村

三一	下	九	十〇榎木百合子	同同榎屋町	大島郡浦野村三浦 小学校内三浦實業 補習学校内
三二	上	一六	〇杉山 綾子	同萩土原	
三三	上	一六	〇佐々木アサ子(大山)	同同榎町	吉部小学校
三四	下	一	〇岡田 カツ	同同榎東香川津	
三四	下	一七	〇種子千代子	同吉部村	高役小学校
三六	上	一	〇金子 萩野	同三見村	萩明倫小学校
三六	下	一五	〇井町アツコ	同三見村	倫常高等小学校
三七	下	一四	〇白井 律子	阿萩江向	東京小石川關口臺町 二六河村方
三八	上	二	〇伊藤 智子	同奈古村	大阪市外守口女子 薬学専門学校
三八	上	二	〇波多野ヒサコ	同同前小畑	福川小学校
三八	下	二	〇神崎 松代(津森)	同	東京市外谷町字 上智四一
三九	上	一九	〇兼田ミネ	同同前小畑	山口高等女学校
四一	上	四	〇森福サダ子	大三隅村	同村宗頭小学校在職
四三	下	三	〇西山 正子	同同山田	
四四	上	一七	〇木原 雪子	同同榎東	
五八	上	二三	〇萩谷ハナ子	大通村	同

三二	上	一六	〇杉山 綾子	同萩土原	
三三	上	一六	〇佐々木アサ子(大山)	同同榎町	吉部小学校
三四	下	一	〇岡田 カツ	同同榎東香川津山	口縣立萩高等女学校
三四	下	一七	〇種子千代子	同吉部村	萩明倫小学校
三六	上	一	〇末光 萩野(金子)	同三見村	萩明倫小学校
三六	下	一五	〇井町アツコ	同三見村	
三七	下	一四	〇白井 律子	阿萩江向	東京小石川關口臺町 二六河村方
三八	上	二	〇伊藤 智子	同奈古村	
三八	上	二	〇波多野ヒサコ	同同前小畑	福川小学校
三八	下	二	〇神崎 松代(津森)	同同前小畑	東京市外谷町字 上智四一
三九	上	一九	〇兼田ミネ	同同前小畑	宝積女子師範学校専 攻科
四一	上	四	〇森福サダ子	大三隅村	
四三	下	三	〇西山 正子	同同山田	白水小学校
四四	上	一七	〇木原 雪子	同同榎東	大井小学校
五八	上	二三	〇萩谷ハナ子	大通村	本校寄宿舎

